顧問　井上通泰先生
　　　山田孝雄先生
　　　新村出先生

正宗敦夫　編纂
　　　　　校訂

古名録

自四十八卷
至六十一卷

合資會社
日本古典全集刊行會壽梓

古名錄蟲部卷第四十八目錄

羽蟲類

通計四十二種

古名錄蟲部卷第四十八

紀藩　源　伴存撰

羽蟲類

漢名　蜻蛉 本草　**今名**　トンボウ

奧儀抄曰、あきつはかげろふといふ虫の名之○本草綱目曰、蜻蛉、大頭露目短頸長腰軃尾翼薄如ㇾ紗食ニ蚊蝱一ヲ。古今注曰、蜻蛉、色青而大者是也。品字箋曰、蜻蜓、頭如ニ瑠璃一身有ニ數節一六足四翼之飛蟲。戰國策曰、王獨不ㇾ見ニ夫蜻蛉一乎、六足四翼飛ニ翔乎天地之間一俛啄ニ蚊蝱一而食

一名　婀枳豆（アキツ） 日本書紀　婀岐豆 日本書紀　加介呂布 倭名類聚鈔曰、蜻蛉。和名加介呂布。萬葉集第二曰、珠蜻 髣髴谷裳。同卷第八曰、玉蜻蜓、髣髴見而別去者。同卷第十曰、戀乎吾爲、玉ヶ蜻ヲ云 云。同卷第十二曰、朝影爾、吾身者成奴、玉蜻、髣髴所見而、往之兒故爾。仙覺萬葉集註釋卷第十曰、かげろふとは、春に成ぬれば、日のうららかにちりたるに、ほのほのもゆるやうに見ゆる也。いとゆふなど云もおなじ事なり。藻塩草曰、かげろふと云物は、あるとも無ともさだかに見えぬ物なれば、かく云りと云々。又云、かげろふの事、

全書本のイ本「て」とあり「て」よかるべし

爾字諸本ナシ

人ハ木

歌にも詞にもさま〴〵に云り。一すぢならず。或は遊糸をも云、天外遊糸有無と作り。又云、春夏の木下にかげろふ虫とも云り、されど其は蚊と云〻。八雲御説は蜻蛉と云〻。源平盛衰記卷第十五曰、明禪八、脇カキタリケル褐ノ帷(カタビラ)ニ、白大口ニ洗革ノ腹卷ニ射向ノ袖ヲゾ付タリケル。各長刀脇ニ挾デシコロヲ傾テ、又行桁ヲ渡リケルヲ、平家ノ軍兵矢衾ヲ作テ射ケレバ、射スクメラレテ渡リエザリケルニ、長刀ヲ振上テ水車ヲ廻シケレバ、雨ノ降如クニ射ケレドモ、長刀ニタヽカレテ、箭四方ニチル。春ノ野ニ蜻蜓ノ飛散ガ如ナリ。源氏物語かげろふ曰、あやしくつらかりける契共を、つく〴〵とおもひつゞけながめ給ふ夕暮、かげろふの物はかなげにとびちがふを、ありとみえて手にはとられず見れば又行ゑもしらずきえしかげろふ。あるかなきかと、れゐのひとりごち給ふ

秋津 萬葉集卷第三曰、秋津羽之、袖振妹乎。同卷第六曰、養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時、笠朝臣金村作歌一首幷短歌。云云三芳野之、蜻蛉乃宮者、神柄香云云。或本反歌曰、三吉野之、秋津之川之、萬世爾云云。同卷第七曰、蜻野(アキツノ)叫、人之懸者云云。秋津野爾、朝居(ル)雲之云云。同卷第十曰、蜻野(アキツノ)之云云。同卷第十三曰、蜻島、倭之國者神柄跡。同卷第十二曰、留(リ)西、人乎念爾、蜓(アキツ)野爾云云。三吉野之、蜻(アキツ)乃小野爾、刈草(カルカヤ)之。同卷第一曰、蜻島八間跡能國者云云。吉野乃國之、花散相(チラフ)、秋津乃野邊爾、宮柱云云。同卷第四曰、秋津野爾、多奈引雲能云云。言塵集曰、あきつ羽とはとんばうの羽と云〻。又曰、秋津は蜻蛉也。あきつはとは、蜻蛉の羽也。うすき事に云へり

加太千 醫心方曰、蜻蛉。和名加太千。又加介呂布。異本本草類編曰、蜻蛉。加太千。又曰、加太子。藻塩草曰、かたちの小野。大和、わきもこがかたちのをのゝをみなべし。一め見しかたちの小野にかる草、これあき人のを

活本モカ、レドつノ誤カ

のもおなじ所か。蜻とかきて、かたち共てんし、又あきつ共讀り。袖中抄曰、かたちの小野、みよし野ゝ蜻の小野に云々。顯昭云、蜻をはあきつと讀之。此哥をばあきつの小野とよむべし。かたちの小野は旁そのいはれなし。あきつとは蜻(とんばう)也。ゑむはなり。あきつばの袖なども讀り

ゑむは 見上註

安吉豆 萬葉集第二十曰、安吉豆之萬、夜萬登能久爾乃

阿耆豆 日本書紀仁徳記曰、阿耆豆羅莽、椰莽等能區珥々

阿岐豆 古事記曰、訓蜻蛉云阿岐豆

阿支豆 新撰字鏡曰、蛚。阿支豆。正字通曰、蜻。盧呂切、音計、蟲名。方言、江南呼蚱蜢爲蚝

止ム波宇 本草類編 蛚、一曰蟲飛

加計呂宇 同上

加岐呂布 本草和名曰、蜻蛉。和名加岐呂布

ゑんば 仙覺萬葉集註釋卷第十曰、秋津とは蜻蛉なり。あきつといふは、あづまことばにえばといふなり

とんはう 言塵集曰、日本國はとんばうと云虫の、東に向て居たる形なりと云云。塵添壒嚢抄曰、今秋津嶋共云云 蜻蛉ヲバ俗ニトンバウト云虫也。又カケロウトモ讀ナリ。又蜻蛉共書ク、同虫也。此國ノ形チ此トンバウノ姿ニ似タル故ノ名也。釋日本書紀曰、蜻蛉(アキツ)之臀(トナメセ)呫。師說曰、西者頷方也 東者腹方也。南北者兩羽也。仍日本ノ國東西ハ長、南北狹之間 似ニ彼ノ虫ノ形ニ。臀、髀類云、尻也。呫、嘗也

集註 本草類編曰、蜻蛉。和止ム波宇。又云、加計呂宇。夏採之乾。日本書紀曰、雄略天皇四年秋八月辛卯朔戊申、行ニ幸吉野宮ニ。庚午、幸ニ于河上小野ニ、命ニ虞人ニ駈ㇾ獸、欲ニ躬射ニ而待、虻疾飛來嗒ニ天皇臂ヲ。於ㇾ是蜻蛉忽來、齧ㇾ虻將去。天皇嘉ニ厥有ㇾ心、詔ニ羣臣ニ曰、爲ㇾ朕讚ニ蜻蛉ニ歌賦之。羣臣莫ニ能敢賦者ニ。天皇乃口號曰、

云云曾能阿武鳴、婀枳豆波野倶臂、波賦武志謀、飯哀枳瀰儞擠都羅符、儺我柯陀播於柯武、婀岐豆斯麻野麻登。古事記曰、即幸ニ阿岐豆野一而、御獵之時、天皇坐ニ御呉床一、尒䖝咋ニ御腕一、即蜻蛉來、咋ニ其䖝一而飛、於レ是作ニ御歌一。其歌曰、云云曾能阿牟袁、阿岐豆波夜具比云云、蘇良美都、夜麻登能久尒袁、阿岐豆志麻登布。故自ニ其時一、号ニ其野一謂ニ阿岐豆野一也 【形狀】 仙覺萬葉集註釋卷第三曰、あきつばとは、とんばうの羽え。うすき物にたとふるなり

木惠無泥（キエムハ） 倭名類聚鈔 【漢名】 胡黎 本草 【今名】 セウレウトンボ キトンボウ

古今注曰、小而黃者曰胡黎、一曰胡離○倭名鈔曰、胡黎。古今注云、蜻蛉之小而黃也。和名木惠無波 【形狀】 ○本草啓蒙曰、胡黎。此品形靑卒（トンボウ）ヨリ小ニメ紅黃色、七月多ク出飛ブ

阿加惠無波（アカエムハ） 倭名類聚鈔 【漢名】 赤卒 本草 【今名】 アカトンバウ

古今注曰、小而赤者曰赤卒、一名絳騶、一名赤衣使者○倭名鈔曰、赤卒。古今注云、蜻蛉之小而赤也。和名阿加惠無波 【形狀】 仙覺萬葉集注釋卷第十曰、和語の心によらば、あきつとはあきは黃（き）也。津は赤（あかき）也。黃赤（くわうせき）のいろなるむしと聞えたり。えばとは、えは赤（あかき）なり。赤羽（あかは）といへるなり。さればあきつばににほへるころもといへる、あけの衣なるべし○本草啓蒙曰、赤卒アカトンボ、此品春日出ル者ハ形大

ニメ、秋日出ル者ハ形小ナリ。又甚小ニメ五分許ナルモノアリ。皆身翅共ニ朱色ナリ

かげろふ　仙覺萬葉集註與ニ蜻蛉ニ同名也　今名　コトンボ

形狀　仙覺萬葉集註釋卷第十曰、かけろふ云〻虫のなかに蜻(えば)のちいさきやうなるをかげろふと云ことあれども、それは別のものなり。按ニ據レ此則かげろふは蜻蛉ニ似テ極テ細小ナル者也。水邊ニ多シ。本草啓蒙ニ、又一種身甚瘦小ク、長一寸許ニメ綠色、夏秋ノ間草菜上ニ飛ブモノアリ。小トンボト云。一名カゲロウト云。大和本草ニ、又甚小ナルトンボウアリ。大ニナラズ、小ニメヲハルト云、此也

仙覚萬葉集註釋所載
かけろふ之圖



阿牟（アム）古事記　【漢名】蚉 本草　【今名】アブ 總名也

證類本草曰、唐本注云、蚉有二數種一並能噉レ血　【一名】阿武 日本書紀曰、曾能阿武鳴。古事記曰、多古牟良尒、阿牟加岐都岐、曾能阿牟袁　阿夫 倭名類聚鈔曰、蚉。和名阿夫　【集註】日本書紀曰、虻疾飛來嗒二天皇臂一。宇治拾遺物語曰、蝱（あぶ）一ふめきて、かほのめぐりにあるを、うるさければ、木のえだをおりて、はらひすつれども、猶たゞおなじやうにうるさくふめきければ、とらへて、こしをこのわらすぢにてひきくゝりて、枝のさきにつけてもたりければ、腰をくゝられてほかへえいかでふめき飛まはりけるを云云（宇治拾遺卷七）。本草綱目曰、蚉以レ翼鳴、其聲蚉蚉、故名

古阿布（コアブ）本草和名　【漢名】蜚蚉 本草　【今名】アヲアブ

本草綱目、蜚蚉。集解、宗奭曰、蜚蚉今人多用レ之、大如二蜜蜂一腹凹褊微黃綠色雄　【一名】己安不 本草類編○本草和名曰、蜚䖟和名古阿布　【集註】本草類編曰、蜚蚉。和己安不、五月採之陰乾　【形狀】續日本後紀卷第十五曰、承和十二年五月乙卯、山城國言、綴喜相樂兩郡ノ境内、始レ自二去ル三月上旬一、蝱虫殊多、身赤首黑ソ、大サ如二蜜蜂一、好テ咬二牛馬一、咬處即腫ル。相樂郡牛斃盡テ無レ餘。綴喜郡病死相尋、郡司百姓求二之龜筮一、就二于佛神一隨レ分ニ秡攘ヘト、曾テ無二止息一。移染ノ之氣、于レ今ニ比行者、令ルニ卜ニ其由ヲ。綴喜ノ郡樺井ノ社及ヒ道路ノ鬼更ニ爲ストレ祟ヲ。即遣シテ使ヲ祈ニ謝セ

草ハ享和本章ニ作ル

之ヲ、乗テ賜下治スル牛疫ニ方幷祭料物ヲ上。接身赤脊黒大如ニ蜜蜂一ト云ハ、蜚蝱也

於保阿不 本草和名

[漢名] 木蝱 本草　[今名] オホウシバイ　[一名] 於々安不 本草類編○本草和名曰、木蝱。和名於保阿布

證類本草曰、木蝱。唐本注云、汀嶺間大有ニ木蝱一、長大綠色殆如ニ次蟬一、噉ニ牛馬一、或至ニ頓仆一。圖經曰、木蝱最大而綠色幾若ニ蜩蟬一

[集註] 本草類編曰、木蝱。和於々安不、五月採陰干、形狀ウシハイニ似テ大也

波知 倭名類聚鈔

[漢名] 蜂 本草　[今名] ハチ

沙石集卷第五曰、蜂ノ八ツミヱシヲアル人ニ、八アレバコソハチトイフラメ。是ヲツク。サヰハ、タオモニテソ有ルベキニ。新撰字鏡曰、蜂。餘章反、平。蠭蜂波知。螽蜂。二作疋凶反、波知。倭名鈔曰、蜂。和名波知。國郡部曰、和泉國大鳥郡蜂田、波知多

[集註] 三代實錄卷第二十六曰、或爲ニ小蜂ニ所ニ刺殺一。吾妻鏡卷第二曰、治承五年十月云云去月云云又件甲可レ被ニ奉納一事。同月十六日、於ニ京都一有ニ御沙汰。當ニ于其日一、本宮正殿棟木ニ、蜂作レ巢、雀小虵生レ子。帝王編年記曰、天慶三年又於ニ東大寺羂索院執金剛神前一、七大寺ノ諸僧集會、祈ニ請將門調伏之由。然間、數万蜂滿ニ堂中一、迅風俄來、吹ニ折執金剛神髻糸一、數万

江刊本ナシ

蜂相ニ從ヒ糸ニ、向レ東穿レ雲飛去 扶桑略記文相同 明月記曰、天福元年九月廿二日、此兩三日有殘暑之氣、陽景晙而蜂多飛。僧延慶カ家傳下曰、於是因按行、至ニ坂田郡ニ寓ニ目山川ニ曰、吾欲レ上ニ伊福山頂ニ瞻望ス。土人曰、入ニ此山ニ、疾風雷雨、雲霧晦暝、羣蜂飛螫 【形狀】 吾妻鏡卷第五十二曰、文永三年六月廿六日、近江國御家人如レ蜂蟻集、余レ居滿レ巷云云

○波知乃古 新撰字鏡 【漢名】 蜂子 本草 【今名】 ハチノコ 醫心方曰、蜂子。波知乃古。字鏡曰、蟺。波知乃古。字典曰、蟺。徒案切、土蠭名○本草綱目、土蜂。集解曰、土蜂子、江東人亦啖レ之、又有ニ木蜂ニ似ニ土蜂ニ、人亦食ニ其子ヲ、然則蜜蜂土蜂木蜂黃蜂子俱可レ食

○はちのす 赤染衛門集 【漢名】 小蜂房 證類本草 【今名】 アカバチノス 按ニ、赤染集ノはちのすハ木蜂(アカハチ)ノ窠也。木蜂ハ人家庭際ニ多シ、庭間竹木枝及ビ簷下ニ窠ヲナス、大サ蓮房ノ如シ。本草啓蒙曰、アカバチハ翅黃赤、身ハ細腰ニシテ黑ト黃赤ト斑ヲナス 【一名】 己波知乃須 本草類編曰、蜂子。和己波知乃須、不拘時採之 【集註】 赤染衛門集曰、きたりんにありしひじりの、たけの枝にはちのすくいたるをゝこせて云云

美知波知 倭名類聚鈔 【漢名】 蜜蜂 本草 【今名】 ミツバチ

而刊本ナシ

五雜組曰、蜜蜂蟄人、若入人肉不可復出、蜂亦尋死。倭名鈔曰、蜜蜂。和名美知波知〇山窗往來曰、蜂王之一兩等、如形化儀深分纏頭、仍併意遺恨候。天工開物曰、蜂造之蜜出山岩土穴者十居其八、而人家招蜂造釀、而割取者十居其二也。凡蜜無定色、或青或白、或黃或褐、皆隨方土花性而變。如棗花蜜禾花蜜之類、百千其名不止也。凡蜂不論于家于野、皆有蜂王、王之所居造一臺、如桃大。王之子世爲王、王生而不採花、每日群蜂輪值分班採花供王、王每日出遊兩度、遊則八蜂輪值以侍衞蜂王、自至孔隙口、四蜂以頭頂腹、四蜂傍翼飛翔、而去遊數刻而返、翼頂如前。

集註 日本書紀曰、皇極天皇二年、是歲、百濟太子餘豐以蜜蜂房四枚、放養於三輪山、而終不蕃息。

〇美知 倭名類聚鈔

漢名 蜂蜜 本草

今名 ハチミツ 紫桃軒又綴曰、蜜者密也精也秘也固也、草木得天澤土膏抽其精英以爲花蘤、而花中浮艶如紛如珠、又其精之精者、蜂掠取之入窟穴醞釀成蜜、其所處不容人窺其王出入、潑成毬團何秘如之〇倭名鈔曰、蜜。俗云美知。天文写本和名鈔曰、蜜。此間美知

集註 續日本紀卷第十三曰、聖武天皇天平十一年十二月戊辰、渤海使已珍蒙等拜朝、上其王啓并方物、其詞曰、云云并附云云蜜三斛、進上云云。同卷第廿二曰、廢帝天平寶字四年夏四月丁亥、仁正皇太后遣使於五大寺、每寺施雜藥二櫃、蜜缶一口、以皇太后寢膳乖和也。三代實錄卷第二十一曰、清和天皇貞觀十四年五月十八日丁亥、勅遣左近衛中將從四位下兼行備中權守源朝臣舒、向鴻臚館、撿領渤海國王啓及信物、云云其信物云云、蜜五斛。延喜式卷第十五曰、內藏寮。蜜蘇諸國所進蜜甲斐國一

捻群　活本及　寫本捻　遍同　適　古群　活本及　寫本イ　石

升、相摸國一升、信濃國二升、能登國一升五合、越中國一升五合、備中國一升、備後國二升。山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣献御乳付雑具云云、蜜兼日自藏人所遣召蜜御園、所進非眞蜜、仍定成朝臣賜藏（於イ）人所儲、差副祭官一人、於仕人、遣御園所取進眞蜜也

製法　類聚雑要抄曰、煎蜜ノ法。以蜜入器、埋火居之、常捻°器頭遍°寒温、微々煎、銅古鍋同用ル、盖ニハ綿ヲ入ル、塵入マジ、堅覆之

○波知乃加須（ハチノカス）本草類編

漢名　蜜蠟 本草

今名　ハチロウ

天工開物曰、凡割脾取蜜、蜂子多死其中、其底則為黄蠟。凡蜜脾一斤、煉取十二兩○本草類編曰、蜜蠟。和波知乃加須

由須留波知（ユスルバチ）倭名類聚鈔

漢名　土蜂 本草

今名　ツチバチ

一名　由須流波知　天文写本和名鈔○倭名鈔曰、土蜂。爾雅注云、大蜂之在地中作房者也。和名由須留波知

美加羽知（ミカバチ）釋日本紀

漢名　胡蜂 本草

今名　クマバチ　ヤマバチ

一名　美加波知　倭名鈔曰、爾雅集註云、木蜂。似土蜂而小、在樹上作房者也。和名美加波知。釋日本紀曰、私記曰、今俗大蜂為美加羽知

集註　行状集記曰、

東大寺數出大蜂、長五六寸許也。螫寺僧被螫殺僧侶數及六人、時寺衆大歎云、此蜂如是常出現害衆人不可敢住、寺中是寺大魔也。十訓抄曰、岩のもとにて蜘と云もの、いをかけたりけるに、大なる蜂のかゝりたりけるに、いをくりかけて、まきころさむとしける云〻晝の蜘の網にからまれつる蜂は、をのれに侍ると云〻此後山に、蜂のす四五千ばかりあり云〻其朝にほの〴〵と明はなるゝほどに、山のおくのかたより、大なる蜂一二百、二三百うちむれて、いくら共なく入集るさま、いと氣むつかしく見けり云〻蜂ども假屋より雲霞のごとくわき出、敵の人ごとに二三十、四五十取つかぬはなし。目鼻ともなくはたらく所ごとにさし損じけるほどに、物もおほえず打ころせ共、五六こそしぬれ、いかにも〳〵する力なくて、弓箭の行衛もしらず。まづ貝をふさぎさはぎけるほどに云〻死たる蜂少〻ありければ、笠置のうしろの山に埋て、堂をたてなどして、年ごとに蜂の忌日とて恩を報じけり

【形狀】○本草啓蒙曰、一種形最大ニ〆色黒ク、腰ノ色黄赤ナルハ胡蜂ナリ

久末波知 本草類編 【漢名】大黄蜂 本草 【今名】ヤマバチ

本草類編曰、石蜜和久末波知乃須与利木留○按石蜜氷糖ト同名。正字通曰、生巖石者名石蜜又蔗汁煎而暴之凝結作餅塊如石體甚輕亦名石蜜

【形狀】形狀木蜂ニ似テ大也樹木ノ間人家堂舍ノ軒ニ西瓜ノ大サノ窠ヲ作ル。啓蒙ニマルバチトス非也。マルバチハ山堂肆考ノ穿木蜂也

○波知乃須 本草類編 【漢名】露蜂房 本草 【今名】

ハチノス

證類本草曰、露蜂房唐本注云、此蜂房用下樹上懸得二風露一者上、其蜂黑色長寸許、螫二馬牛人一乃至レ欲レ死者用レ之皆有レ效、非二人家屋下ノ小小蜂房一也、圖經曰、露蜂房此木上大黃蜂窠也。大者如レ甕、小者如レ桶、其蜂黑色長寸許、螫二牛馬及人一乃至レ欲レ死者、按ニ露蜂房ハ山バチノ窠也。クマバチハ螫ニ人牛馬ニテ至レ死者ナシ

一名　於保波知乃須

本草和名曰、露蜂房。和名於保波知乃須

集註　本草類編曰、露蜂房。和波知乃須、七月七日採之。又十一二月採之。中右記曰、太神宮蜂房作恠。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國蜂房七兩、伊勢國蜂房一斤十二兩

佐曾利（サソリ）

本草和名與蝸同名也

漢名　蠮螉　本草

今名　ジガバチ

一名　佐曾里

倭名類聚鈔曰、蠮螉。和名佐曾里。本草和名曰、蠮螉。和名佐曾利。新撰字鏡曰、蛘。佐曾利、螫　舒赤反、佐須。又佐曾利、虰蛵、佐曾利。蜾、佐曾利〇字典曰、爾雅、虰蛵負勞註卽蜻蛉也

一名　須我屢

日本書紀曰、爰命蜾蠃、蜾蠃、此云須我屢。萬葉集卷第九曰、腰細之、須輕娘子之（スガルヲトメガ）、其ノ姿（カホ）之。同卷第十六曰、爲輕如來（スガルノゴトキ）、腰細丹云云。同卷第十曰、春之在者、酢輕成野之（スガルナスノノ）、霍公鳥（ホトトギス）。名物攷曰、捫蝨新語云、索細腰曰蒲盧匏類也。故細腰土蜂亦謂之蒲盧。楊升庵云、古人名物多取其形色、之似匏之細腰者曰蒲盧、故蜂之細腰者亦名蒲盧。中庸云、政也者蒲盧也。卽蜾蠃也。天祿識餘曰、劉禹錫踏

歌行爲二是襄王故宮地一、至今猶自細腰多。墨子云、楚靈王好細腰、故其臣皆以一飯爲節脅息然後帶緣墻然後起、韓非子云、楚莊王好細腰、一國皆饑色細腰事凡兩見不聞襄王之癖劉誤記。奧儀抄曰、さゝそりといふむしをすがる

と云 サヽリ蜂 塵添壒囊抄曰、サソリトハサヽリ蜂ト云モノナリ。子ヲマジナフコトニ云ヘル也。サヽリトハアヤマリナリ。本躰ハサソリト云ベキナリ。常陸國ニハカソリト云トカヤ。カノ國ニ賀蘇理岡ト云フ岡アリ。昔シ此ノ岡ニサヽリ蜂多アリケリ、是ニ依テサソリノヲカト云ベキヲ土俗カソリノヲカト云ニヤ。袖中抄曰、今案蠍、さそり、さゝり、すがる。或人の關東へくだりて侍しは、あづまには蜂をすがると申とぞ。さゝり蜂と申せば、はちさゝりは同物也

カソリ 壒囊抄

似我似我 同上 似我似我ハ只蜂ノ類也

波閉 倭名類聚鈔

漢名 蠅 本草

今名 ハイ

正字通曰、蠅類不一、腹大足喜交、好逐羶臭聲扗翼、喜暖畏寒、遇氷側翅遠去。五雜組曰、蠅ハ最モ癡頑ニシテ無ニ毒牙利嘴一、而其攪レ人ヲ尤甚、至下于無ニ處トシテ可レ避、無ニ物トシテ可上レ辟、且變ニ芳馨ヲ爲ニ臭腐ト、汚ニ淨素ヲ爲ニ緇穢ト、驅而復來リ、死而復生、比ニ之ヲ讒人ニ不ニ亦宜ニ乎。又曰、蠅雌ノル者ハ循行ノ求レ食、雄者ハ常ニ立テ不レ移レ足。品字箋曰、蠅。蒼蠅。逐臭之飛蟲也。尤嗜酒。雖沉溺不顧溺且死。置灰上復活。此時好以兩足相搓。陸佃謂之絞繩又好搖

羽自扇

一名 波戸 新撰字鏡曰、蛉蠕蠕蝭、四字同蠅也。蟆也。波戸又桑虫ノ蛉。字典曰、蛉ニ玉篇、蜻蛉、又螟蛉ノ蠕。字典曰、與レ蛉通。說文、螟蠕桑蟲也。日本書紀允恭

一ノ上刊本下字アリ

萬葉六蠅取附トセルハ誤也繩取附ニテ此處ニ引クベキニアラズ

基肄郡ハ神埼郡ノ誤

天皇曰、蠅散。倭名鈔曰、蠅。和名波閉 本朝無題詩曰、暁鷄告夏聽蒼蠅

魔陪

日本書紀曰、五月蠅。此云ニ左魔陪ニ。古事記曰、惡神之音如ニ狹蠅ニ。又曰、於是万神之聲者狹蠅那須。萬葉集卷第五曰、五月蠅奈周、佐和久兒等遠云云。同卷第三曰、五月蠅成、騷騷舍人者云云。延喜式卷第八曰、出雲國造神賀詞、豊葦原乃水穗國波、晝波如ニ五月蠅ニ水沸支。奧儀抄曰、さばへなす云云たとへば夏のはへのちりみだれたるやうに云云さばへとは、ちいさきはへにや。さと云事物にしたがひてせばくもちいさくもおほくもあるものを云也。釋日本紀曰、案ニ一書文ニ如ニ五月蠅ニ而沸騰、五月蠅三字之訓、サハヘト讀レ之。今此蠅聲同點也。言葦原中國惡神充滿、如ニ五月之蠅ニ、衆多之意也〇萬葉集卷第四曰、左手蠅師子之。同卷第六曰、蠅取附テ、肉自物。源平盛衰記卷第四十四曰、十握劍云云又ハ蠅斬ノ劍ト云。此劍利劍也。其双ノ上ニ居ル蠅ノ不ニ自斬ニト云事ナケレバ也。釋日本紀曰、天ノ蠅斫之劍。私記曰、問蠅斫ノ之号、其ノ義如何。答、師說此ノ劍尤モ利劍也。若居ニ其ノ双上ニ者、即其蠅自斫ル。此鋭鋒ノ之甚也

波へ

字鏡曰、蟟、波へ。品字箋曰、繩。說文从蠅省聲、埤雅蠅好交ニ其前足ニ有ニ絞繩之象ニ、故繩字从蠅省

集註

日本書紀曰、推古天皇三十五年夏五月、有レ蠅聚集 其凝累十丈之、浮レ虛以越ニ信濃坂ニ鳴音如レ雷、則東至ニ上野國ニ而自散。又曰、齊明天皇六年十二月云云、科野國言、蠅群向レ西飛ニ踰巨坂ニ、大十圍計、高至ニ蒼天ニ。南方記傳曰、細川頼之一首の詩をつくり云云滿室蒼蠅拂難盡。平家物語曰、をよそ平家の陣には蠅だにもかけりいはずと申。肥前國風土記曰、基肄郡、蒲田郷。同天皇行幸之時、御ニ宿此郷西ニ。薦ニ御膳ニ時、蠅甚多鳴、其聲大囂ニ天皇勅云、蠅聲甚囂。因曰ニ囂郷ニ。今謂ニ蒲田郷ニ訛也。明月記曰、嘉祿二年十月十九日、近日蠅多於夏。十一

疑ノ上刊本可字アリ

月六日、蠅成群如盛夏　**形狀**　小夜のねざめ日、はいといふ虫の、ぬり物などに、はこを白くしかけ、白き物には、はこをくろくしかけ侍る。枕草紙曰、はへこそにくきもののうちにいれつべけれ。あいぎやうなく、にくき物は、人々しふかきいづべき物のやうにあらねど、よろづの物に居、かほなどにぬれたるあししてゐたるなどよ、人の名につきたるは、必かたし。塵添壒嚢抄曰、蠅能ク飛共數歩ノ間ヲ不レ過キ

附録　明月記曰、寛喜二年八月廿八日、心寂房來、相逢語云、去夜事、脚氣所爲歟。疑近日蠅漸弱而落入飲食、自然不知入腹中歟。是反吐痢極毒也。蠅入腹中多頓死者云云

狗蠅 通名

今名　イヌバイ

本草綱目曰、狗蠅。生二狗身上一、狀如レ蠅黄色能飛、堅皮利喙啖二咂狗血一、冬月則藏二狗耳中一〇倭名鈔曰、兼名苑云、狗蠅、一名犬蠅著二於犬一者也

加 倭名類聚鈔

漢名　蚊 本草　**今名**　カ

山堂肆考曰、蚊。說文、齧人飛蟲、以昏時出也。五雜組曰、蚊蓋水蟲ノ所レ化、故近レ水處皆多〇倭名鈔曰、蚊。和名加。萬葉集卷第二曰、柔田津乃、荒礒之上爾　蚊靑生。同卷第十一曰、得干蚊將去云云。妹待鳴蚊云云。山田守翁、置ク蚊火之云云。同卷第十六曰、若子蚊見庭云云平生蚊見庭云云童子蚊見庭云云。蚊黑爲云云於是蚊寸云云津蚊經色丹云云寶ラ之等蚊云云稻寸丁女蚊云云飛鳥壯　蚊云云禁　尾迹女蚊云云己蚊果云云我矣思

經蚊云云名津蚊爲跡云云。土記曰、令レ渡二蚊松殿一。吾妻鏡卷第五十二曰、文永三年四月七日、將軍家御蚊觸之間、可レ有二蛭喃一之由云云。延喜式卷第四曰、內蚊屋一條、長七尺廣二幅。水左記曰、承保三年六月廿一日、巳刻許右大殿令渡蚊松殿給

［附錄］

蚊日

隨兵次第曰、かのめの事は、赤革に黑革をかさねて入る也。是は軍陣の扇同事也。明月記曰、嘉祿元年十月十五日、教雅少將以使者尋、別當五節女房扇二枚可調送由消息、何樣物哉。答云、扇近代檜扇、塗雲母、書繪、金銅蚊日以村濃絲貫之、絲末結蛭物也

［集註］

伊勢國風土記曰、膽森此處四時無蚊虻。平家物語卷第五曰、そもく\この文覺と申は云々六月の日の草もゆるがずてつたるに、あるかた山里のやぶの中へはいり、はだかに成あふのけにふす。あぶぞ、蚊ぞ、はちありなどいふどくちうどもが、身にひしと取付て、さしくひなどしけれども、ちツとも身をもはたらかさず。七日まではおきあがらず云々。枕草紙曰、大藏卿ばかりみゝとき人なし、誠に蚊の睫（まつげ）のおつるほども聞付給ひつべくこそ有しか。河越記曰、蚊虻ノ雷をなし。言塵集曰、かばしら。蚊の多く集り立上る事。淸輔袋草紙曰、おとたてゝ（蚊）ものはいはねどゆふぐれのはゑはらひつるこゑはきこへつ。シノビテオコナヒシケルニ、カノクヒケレバ、アヲギシテウチハラヒツヽ子ブリケル夢ニ、僧ノ讃カケケル哥ハ蠅（ハヘ）也。詞ハ蚊（カ）也。如何。世諺問答曰、問テ曰、ヲサナキワラハノ、コギノコトイフテツキ侍ルハ、イカナル事ゾヤ。答、コレハヲサナキモノヽ、蚊ニクハレヌマジナヒ事ナリ。秋ノハジメニ、蜻蛉トイフ虫出キテハ、蚊ヲトリクフ物ナリ。コギノコトイフハ、木連子ナドヲ、トンボウガシラニシテ、ハ子ヲツケタリ。コレヲイタニテツキアグレバ、ヲツル時ハトンバウガヘリノヤウナリ。サテ蚊ヲオソレシメンタメニ、

本草綱目ニ八搗ニ楸葉…則

コギノコトテツキ侍ルナリ

【形狀】枕草紙曰、にくきもの。ねぶたしとおもひてふしたるに、蚊のほそごゑに名のりて、かほのもとにとびありく、はかぜさへみのほどにあるこそいとにくけれ。宇治拾遺曰、蚊(カ)のこゑのやうなる聲して

奴可我(ヌカガ) 新撰字鏡　【漢名】蚋子 本草　【今名】ヌカヾ

正字通曰、蚋似レ蚊而小、望レ之如レ霧、因レ雨生。本草綱目曰、長慶集云、蜀中小蚊名ニ蚋子一〇字鏡曰、蚋。如銳而税二反、奴可我。虻同。莫向反、奴可我（字典曰、虻同蝱、即アブ也

【集註】百錬抄巻第八曰、高倉天皇承安二年八月廿日、天皇俄遷ニ幸三条殿一。去十七日南殿蚋群集、無レ程散失。被レ行ニ御卜一之處、御愼重云云。仍可下令ニ立避一給上也。十一月廿七日還幸

【形狀】〇本草啓蒙曰、蚋子。ヌカヾ、蚊ノ形ニシテ至テ小ク、大サ一分許、白色首ニ絮アリ

口不止我(クチフトガ) 新撰字鏡　【漢名】蠓子 本草　【今名】ブト

本草綱目曰、小而黑者爲ニ蠓子一。隴蜀餘聞曰、又有ニ蠓子者一蚊蝱之屬。元微之蠓子詩序云、黑而小不レ礙ニ紗穀一、夜伏晝飛、嚙レ人成レ瘡、秋夏不レ愈、膏ニ楸葉一傅レ之則差、閩ニ栢烟麝香一即去

【一名】

濕トアリ

次刊本なし出おりてす

口夫止　字鏡曰、蚊。亡云反、口夫止。異本字鏡曰、口夫止我　〔形狀〕字鏡曰、蟁。亡眠反、似於蜩稍大、口不止我〇本草啓蒙曰、蠓子ブト、形蜂ニ似テ至小ク、長サ一分、色黑ク光リ

アリ

加波比良古（カハヒラコ）新撰字鏡　〔漢名〕蛺蝶 本草　〔今名〕テフ 總名也　こてふ 源氏物語

〔一名〕てふ　枕草紙。萬葉集卷第十一曰、朝東風爾、井提越浪之、世蝶（セテフニモ）似裳云云。字鏡曰、蛺。古夾反、蝶也。加波比良古。蝶。徒頰反、蛺也。加波比良古

こてふ曰、花ぞのゝこてふをさへや下草に秋まつ虫はうとくみるらん。藻塩草曰、こてふ、春さまぐ〳〵の花さくより、秋の花のちるまでの物也。塵添壒囊抄曰、胡蝶ト云ヲバ胡國ノ蝶ト云心歟、常ノ蝶ニハ非歟、イカン。尋常（ヨノツネニハ）タヾナベテ蝶ノ名ト思ヘリ。文華秀麗集曰、舞蝶。御製。數群胡蝶飛乱レ空、雜色紛々花樹中

〔集註〕三代實錄卷第二十六曰、蝗虫或化レ蝶飛去。明月記曰、天福元年五月十八日、或人云、自四月廿八日至于五月三日一日吉社頭蝶雨降云云、治承七宮治山、山上滅亡之時有此事歟。每聞動肝。文曆二年三月一日、鶯前梅已落始、次紅梅二本盛開、蝶次來飛。榮花物語哥合曰、はやうはなにてふのいみじうおかしきが、とをばかりゐたるなりけり云云右には兼房の右衛門佐、てふゐたるとこなつのえだを出。赤染衛門集曰、草のなかにてふのしにたるをみて〽うき世にはながらへじとぞおもへどもしぬてふばかり

けみち
にとら
すトア
り

かなしき
はなし

【形状】平家物語卷第八曰、木そは車の內にてあをへきにたをれぬ、てうのはねをひろげたるやうに、左右の袖をひろげ、手をあがひて、おきん〳〵としけれ共云々

（　）

粉蝶 泉州府志郎 和漢通名

【今名】白キテウ

品字箋曰、蝴蝶、一名粉蝶。雲南通志曰、萬曆三十一年廣西有白蝶、羣飛蔽天、自東而來。順治十八年臨安小白蝶羣飛蔽天、自東南而北月餘乃止。康熙元年師宗白蝶羣飛蔽天、數月方散

【集註】帝王編年記曰、高倉院治承二年戊戌八月、叡山坂本粉蝶如雨降、高雄寺廢滅之時如此云云

【形状】倭名鈔、蝶註曰、形似蛾而色白者也

保々天布（ホヽテフ） 倭名類聚鈔

【漢名】鳳車 事物紺珠

【今名】アゲハ

倭名鈔曰、鳳蝶。今案和名保々天布。是鳳蝶二音之轉乎

黄蝶 吾妻鏡 泉州府志

【今名】キナルテフ

【集註】吾妻鏡卷第六曰、文治二年五月一日、自ㇾ去比ㇾ黄蝶飛行、殊遍ㇾ滿鶴岳宮、是恠異也。同卷第二十一曰、建保元年八月廿二日、庚寅、天晴。未尅鶴岡上宮寶殿、黄蝶大小群集、人奇ㇾ之。同卷第三十八

曰、寶治元年三月十七日、庚午。黄蝶飛、幅假令一許丈、列三段許、凡充二滿鎌倉中一、是兵革兆也。承平則常陸下野、天喜亦陸奥出羽四箇國之間、有二其怪一、將門貞任等及二鬪戰一訖。而今此事出來、猶若可レ有二東國兵亂一歟之由、古老之所レ疑也。同卷第三十九曰、寶治二年九月七日、辛亥。黄蝶飛行、自二由比浦一至二于鶴岡宮寺幷右大將軍家法華堂一、群亘云云。十九日癸亥。未申兩時之間、黄蝶群飛自二三浦三崎方一、出二來于名越辺一、其群集之幅、三許段云云

比々流（ヒヒル）　倭名類聚鈔

漢名　燈蛾　本草蟲集解

今名　ウチスヾメ

正字通曰、一種好拂燈、名飛蛾、一名慕光。毛詩鳥獸草木攷曰、今有二一種一、善ク拂二燈火一、夜飛。一名慕光、一名火化

一名　比々留　新撰字鏡曰、蛾。比々留。日本靈異記曰、蛾。ヒヽル。倭名鈔曰、蛾。和名比々流。萬葉集卷第十一曰、燈之、陰爾蚊蛾欲（カガヨ）布、虛蟬之、妹蛾咲狀思、面影爾所見。酢蛾島之、夏身乃浦爾、依ル浪

夕蛾　令義解序曰、有二爛蛾之危一。是猶三夕蛾去レ暗赴二灯一而死（ルカ）

那菟務始（ナツムシ）　日本書紀仁徳曰、皇后答歌曰、那菟務始能、譬務始能虚呂望、赴多弊蓍氏云云。八雲御抄曰、按夏虫は惣名也。火にいるをも云。後撰になつむしのこゑよりほかになども云り。又螢を夏むしといふ、つねの事なり。枕草紙曰、夏むしいとおかしく、らうのうへとびありくいとおかし。又曰、さしぬきは、いとあつき比、夏虫の色したるも涼しげ也。藻塩草曰、夏虫は惣名也。又は火に入

是以下今ノ刊本ニハ無シ

螢寫本古刊本モ務ニ作ル

とも云
刊本「也」ニ作ル

をも云。飛蛾と云は是之。又云、夏虫と云は四色之。火取虫螢蟬蚊之と云々。何も歌のやうによるべきか。又夏のむしと、のゝ字ありても。夏虫の辭よりほかに、是は蟬之。なつ虫の身をいたづらに、是は火取むしか。のりにたく火にいる夜半のなつむしややみを出べきたよりなるらん。おもひにもゆる、夏虫とも云。十訓抄曰、或殿上人の五月廿日余いとくらきに、大后宮にまいりて、めうどうにたゞずみけるに、うへより人の音のあまたして來りければ、さりげなく引かくれてのぞきけるに、つぼのやり水に螢のおほくすだくを見て、さきなる女房ゆゝしき螢かな、集たるやうにこそ見ゆれとて過るに、次なる人優（やさしか）なるこゑにて、螢火乱レ飛ブと口ずさびけり。また次なる人、夕殿に螢飛て、とうちながむ。しりなる人、かくれぬ物はなつ虫の、と花やかにひとりごちたりけり。とりぐ\にやさしくおもしろくて。耳底記曰、問云、夏虫とは螢を申候哉。答、ほたるも申候なり。又せみをも申候之。つねに申は、火（ひ）などをとるを夏虫と申候なり

夏蟲 萬葉集卷第九曰、夏蟲乃、入火之如（ヒニイルガゴト）云云

火取虫 釋日本紀曰、火虫衣、謂ニ火取虫ニ也。如ニ夏虫ニ入ニ火非レ能之由也

火虫 見上

〔集註〕日本靈異記曰、愚人所レ貪如ニ蛾投ニ火。太平記卷第二曰、折節夏ナレバ、燈ノ影ヲ見テ、蛾ト云蟲ノアマタ明障子ニ取付タルヲ、スハヤ究竟ノ事コソ有レト思テ、障子ヲ少引アケタレバ、此蟲アマタ内ヘ入テ、驚テ燈ヲ打ケシヌ○品字箋曰、投火飛蛾俗謂ニ之撲燈蛾ニ

○**白蛾** 通名 〔今名〕シロキヒヽル 正字通曰、漢書元帝紀、白蛾羣飛蔽レ日

〔集註〕日本書紀曰、持統天皇六年九月、越前國司獻ニ白蛾（ヒヽル）ニ。戊午、詔曰、獲ニ白蛾ヲ於角鹿郡浦上之濱ニ、故增ニ封笥飯

神ニ二十戸通(カヨハス)レ前ニ

○蠶蛾 本草 【今名】 カイコノヒヽル 正字通曰、蠶化者似二黃蝶一而小シ。天工開物曰、凡蛹變ニ蠶蛾一、旬日破レ繭而出、雌雄均等ナリ。雌者伏而不レ動、雄者兩翅飛撲ツ、遇ハレ雌ニ即交ル、交ルコト一日半日方解、解脫スル之後、雄者中枯而死、雌者即時生レ卵○倭名鈔曰、文字集略云、蝱蠒內老蠶也。今案即是蚊虻之虻字也。見下文。和名比々流

比乎無之(ヒヲムシ) 倭名類聚鈔 【漢名】 白露虫 正字通 【今名】 アサガホ 正字通曰、又朝生暮死、蟲狀如蠶蛾名蟓母白露節後生水上羣飛墜水中隨水去以千百計宛陵人謂之白露蟲俗呼魚糧 【一名】 ふよう 源氏物語○倭名鈔曰、唐韻云、蜏。朝生暮死虫也。漢語抄云、比乎無之。枕草紙曰、ひをむし かげろふ つれ〴〵曰、かげろふの夕べをまち 【集註】 本朝闘諍集曰、云ニ蜉蝣(フユウ)ノ如レ虫生無レ程死ル事コソ無慙。源氏物語若菜ニ曰、さらばふようなめり、身をいたづらにやはなしはてぬ、いとすてがたきによりてこそ云々。源平盛衰記卷第卅一曰、蜉蝣(フユウ)ノ風ニ戯(タハム)ルヽ、貇逝ノ樂ミ幾許。同卷第十一曰、生死不定ノ命ナレバ、蜉蝣(コウ)ノ夕ベヲ待ヨリモ短シ。撰集抄卷第四曰、蜉蝣(ふいう)のあだなるとはしりあれど。又曰、蜉蝣(ふゆう)の空に飛をみ。同卷第五曰、芭蕉の上にかける蜉蝣、風になびけるは芭蕉やさきだちて破れんとする、蜉蝣やさきに消むとする、ともにあだなる身なり

【形狀】 源氏和秘抄曰、ひをむし、しろきてふのやうなるむしの、朝にむまれて夕に死するものなり○詩經名物解曰、蜉蝣今京南淀河、或ハ攝ノ大坂ナド河邊ニ群游シ、朝ニ生シ暮ニ

頭ツ。狀蛾ニ類ノ羽色翠碧青色ナル虫ナリ。土俗アサガホト呼。蓋其短死ナルガ故ニ名ク。按ニ其尾二鬚アリ

以奈古萬呂 倭名類聚鈔 【漢名】 蚱蜢 本草 【今名】 オホイナゴ

證類本草曰、蚱蜢。如レ蝗有二黑斑一者候二交時一收レ之

【一名】 以禰古萬呂 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、蚱蜢。本草云、蚱蜢ト貌似二蟿螽一而色少蒼、在二田野間一者也。本草曰、蚱蜢、一名蚱蜢

伊奈己 本草類編曰、蚱蜢。和伊奈己

【集註】 散木集曰、人々あまたぐして、観音寺のかたへまかりけるに、ひきかへのうしの、ことの外にちいさくやせて、えひかざりしかば、いぼうじりとつけてわらふほどに、かたはしざまにたふれぬべくよろぼへば、うしろざまにあゆばせてたふすなと人々あるを聞て「くひほそくいほ蟷螂しりしてたちなをれ。つぐ「いなごまろびてみそにおつるな

【形狀】 俊頼髄腦抄曰、いなごまろといふ虫は、そのいねのいでくる時、このむしもいでくれば。狭衣曰、ふたかへりばかりひき給ふに、いとわりなきこゑをおとしあげ、しやうがするにはやされて、かきかへしく、おなじいなごまろにて、時もやゝかはるは云云。本草綱目、蚱蜢。注ニ五月動レ股作レ聲○本草啓蒙曰、蚱蜢、オホイナゴ、形ハ螽斯ニ似テ首圓目大ナリ。身長一寸餘、翼アリ。ソノ色或ハ緑、或ハ褐、ソノ鳴クコ股ヲ以テ相擊テ聲ヲナス

以禰豆木古萬呂（イネツキコマロ）　倭名類聚鈔　○蟲螽ノ一種也　【今名】イナゴ

【一名】イネツキ　塵添壒囊抄卷第八曰、公羊傳云、云云同傳何休。注云　蝝螽ハ童部ノイ子ツキト云フ虫也。是カ田ヲクラヒソコナフヲ蝝災ト云歟。常ニハイ子ツチヲマロト云フヲ、イ子ツキマロト古クハ云ヘリ。イナゴニモ通ヘリ。漢書ニハ冬虹ヲバ、イナゴトヨメリ

イネツキテマロ　見上注　イネツキマロ　同上

イナゴ　同上　以禰都岐古萬呂　天文写本和名抄○倭名鈔曰、螽斯。漢語抄云、以祢豆木古萬呂○按螽斯ハキリ〴〵ス與ニ蟋蟀一同名也。本草啓蒙曰、螽斯ハキリ〴〵ス、五月ヨリ鳴ク、小童樊（カゴ）ニ入レ、瓜瓠ヲ與ヘ、自ラ鳴シメテ玩トス

【正誤】本草啓蒙曰、蠜螽ハイナゴマロ　和名抄　イ子ツキコマロ　同上　子ギムシト三物ヲ混ズ、非也。以奈古萬呂ハ蟲螽ニメ大イナゴ也。以祢豆木古萬呂ハ稲蝗ニ聚リ其葉ヲ食フ、イナゴニメ蟲螽ノ一種小ナル者ナリ。子ギムシハ蠜螽ニメ、ハタ〳〵也。和名鈔既ニ波太波太（蠜螽）。以奈古萬呂（阜螽）。以祢豆木古萬呂（阜螽一種）ト三條ニ載、即為ニ三物一甚明矣。今其誤ヲ正ス

波太波太（ハタハタ）　倭名類聚鈔　【漢名】蠜螽　本草　【今名】ハタ〳〵

山堂肆考曰、似ニ蚱蜢ニ而細長、鋭頭青翼能飛能跳、飛不甚遠、亦能害稼、人執其兩股、能搖動其身、如女人織然、故又名織絹娘。帝京景物略曰、其青而長身者、曰匾蝨、嬉者股擊而提之、使飛不止、以覩其翼羽〇倭名鈔曰、本草云、蟿螽ニ下。似ニ蚱蜢ニ而長細、色黄。飛時作レ聲、在ニ荒田ニ者也。和名波太波太。源平盛衰記卷第三曰、指ツマ彈ハタ〱トシ給ケリ。落くぼ物語曰、帶刀つく〱とつまはじきをはた〱として

形狀

〇本草啓蒙曰、蠜螽。子ギムシ、ハタハタ、螽斯ヨリ狹瘠、首尖リテ兩角ナラベリ、綠色褐色ノ二品アリ。雄ナル者ハ長サ一寸許、雌ナル者ハ長サ一寸半ヨリ三四寸ニ及ブ者アリ。背後ヨリ尾ニ至ルマデ色赤シ。翼ニ掩レテ見ヘズ。飛ブ寸ハ翼股ニフレテ聲アリ、故ニハタハタト名ク。ソノ内羽ノ黄色アラハレテ美ハシ

以イ保ボ無ム之シ利リ 倭名類聚鈔　**漢名** 螳螂 本草　**今名** カマキリ

本草綱目曰、螳螂。驤首奮臂修頸大腹二手四足善緣而捷以レ鬚代レ鼻

一名 伊保無之利 天文写本和名抄〇倭名鈔曰、螳螂。和名以保無之利

伊比保牟志利 新撰字鏡　伊保之利 本草類編　いもしり 女郎花物語

集註 字鏡曰、螵。伊比保牟志利、螵蛸之母也。三代實錄卷第十三日、清和天皇貞觀八年十一月十七日戊午、詔曰云云徒称ニスレトモ爪牙之備ハ、不レ異ニ螳螂之衛ニ。續日本後紀卷第三日、豈異ニナランヤ螳蜋之擧斧ニ

〇於オ保ホ知チ加カ布フ久グ利リ 本草和名

【漢名】螵蛸 本草 【今名】オホヂガフグリ 本草綱目曰、螳螂其子房名ニ螵蛸一、其狀輕飄如レ綃也。深秋乳レ子作レ房粘-着枝上一、卽螵蛸也。房長寸許、大如ニ母指一、其內重重トノ有ニ隔房一、每レ房有レ子、如ニ蛆卵一、至ニ芒種節後ニ一齊出 【一名】於保知加不久里 倭名類聚鈔曰、螵蛸。和名於保知加不久里。同親屬部曰、曾祖父、和名於保知。族父、於保知乎知。祖父、於保知。字鏡曰、曾祖、於保地。曾我物語第六曰、さればにや、おほぢにうだうのむほんによつて、きられまいらせしまごなれば 於々知加不久利 本草類編 阿志万夫 新撰字鏡曰、螵蛸、上芳遙反、下市遙反。螳螂之子。阿志万夫、又阿志加良女、又於保地不久利 阿志加良女 見上 於保地不久利 同上 足万豆比 字鏡曰、蚌。足万豆比。正字通曰、蚌。按蚌蟭蛸屬、本草注作車渠、玉篇作硨磲、別作碑磲、從車渠爲正。品字箋曰、蚌。蚌螯蟲名、如硯而大。按秋燈叢話曰、若等螳臂亦當車耶、蓋字鏡用ニ蚌字ニ本ニ於此一乎 ヲキナノフグリ 延喜式、桑螵蛸傍訓

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國云云桑螵蛸各二斤。伊勢國、桑螵蛸一斤。尾張國、桑螵蛸二兩。參河國、桑螵蛸三兩三分。遠江國、桑螵蛸一斤七兩三分。駿河國、桑螵蛸五兩。近江國、桑螵蛸一銖。美濃國、桑螵蛸云云各二斤。因幡國、桑螵蛸十斤四兩。出雲國、桑螵蛸二兩。石見國、桑螵蛸九兩。備前國云云、桑螵蛸各一斤。備中國、桑螵蛸十兩。備後國、桑螵蛸十兩。本草類編曰、桑螵蛸。於々知加不久利、又云伊

保之利也、二月三月採之蒸之トアリ、能是ヲ見弁テ用ヘキ者也

形狀 福田方曰、桑螵蛸、先焙過テ使ヘ。或少炒トモ云リ。是ハ桑ノ枝ニマサシクウミ付タルヲ使ヘ。或ハ他木ナルヲ取テ桑ノ枝ニ膠ヲ以テ付、人ヲ狂惑スル

フヨウビ 塵添壒囊鈔

漢名 黑靑蒡蟲 廣群芳譜

今名 アブラ アリマキ

一名 油ラ虫 塵添壒囊鈔

廣群芳譜曰、菊惡將レ發頭或惡腦已ニ發ノ上ニ生ニ黑靑蒡蟲一、可下用ニ棕刷一拂去上、間用ニ茅灰一摻レ蟲、或以ニ魚腥水一灑レ之、或將ニ洗鮮魚水或死蟹水一灑ニ之ヲ葉上一

形狀 塵添壒囊鈔卷第八曰、朝ニ生シ暮ニ死ル蟡(ヒヲムシ)ト云ハ、童部(ワッパ)ノ打敏メカシラニヌルムシ也。其ノ虫ヲハ童部ハフヨウヒトゾ云フ。萩ノ枝ナドニ付ク油ラ虫ト云フ靑キ虫ノ、長ク成テ(ヲトトシ)羽ノ生ヒタルヲ、フヨウヒト名付テ、頭ニヌル、アブラ虫ナレバ、髮ノキラ有ル故歟、實ノ蟡(ヒヲムシ)ハソレニ非ト云云

○アブラハ靑色或ハ黑色、形狀蝨ノ如キ蟲新芽ニ聚リ附後白絮ヲ生ジ羽化メ飛ブ

末久奈木(マクナギ) 倭名類聚鈔

漢名 蠛蠓 爾雅

今名 マクナギ

一名 加豆乎無之

本草綱目曰、與レ塵相浮上下者爲ニ浮塵子一

倭名鈔曰、爾雅集注云、蠛蠓。小虫亂飛者也。磑則天風、舂則天雨。漢語抄云、加豆乎無之。日本紀私記云、

蠛。末久奈木。品字箋曰、列子蠛蠓。朽壤上。因雨而生。見陽而死。郭璞曰、蠓飛磑則天風、舂則天雨、言將風、則旋飛如磑、一上一下如舂、則雨。彙註。磑譌作螘非　天文写本和名抄

摩愚那岐　日本書紀曰、蠛。此云摩愚那岐

加豆乎　新撰字鏡曰、蚙。加豆乎

集註

末久南岐　日本書紀允恭天皇曰、行山撥(ハラヘ)レ蠛(マクナキヲ)也。源氏物語明石曰、まくなぎつゝらせてさしをかせけり

形狀　源語秘決抄曰、またゝきする事を、まくなぎつくるといふなり。まくなぎといふちいさき虫のとびちる時は、目たゝきをする故に、此むしのとぶ時のやうに、またゝきをするゝ。藻塩草曰、めになみだまくなぎつくるまたゝきするを云ゝ。是はちいさき虫のとびちるときは、目たゝきをするゆへに、この虫の飛時のやうにまたゝきをする也。又まくなぎと云てまたゝきと云、瞬の字をかくゝ〇本草啓蒙曰、浮塵子ハウンカカツホ大サ半分許、身黒ク翅白ク首ニ絮アリ、簷下ニ群飛ス、或ハ一上一下舂ク狀ノ如シ、或ハ旋リ飛テ磑狀ノ如シ、人以テ雨晴ヲ占フ

酒(サケ)乃(ノ)波(ハ)戸(ヘ)　新撰字鏡

漢名　醯雞　槐西雜志曰、酒酸而後醯雞集

今名　サカバイ

字鏡曰、蠛。亡結反、蠓也。又酒乃波戸。爾雅疏曰、郭象云、醯雞者甕中蠛蠓也。正字通曰、生酒醯中似蚋而小、是莊子所謂醯雞也

猩々　塵添壒囊抄曰、狸(シャウ)々(く)ノ事。酒ノ香(カ)ニ付ク小虫ヲ猩々ト云ハ何ニ事ゾ。猩ハ非虫獸也。彼ノ獸酒ヲ好ム故ニ小虫ノ酒ノ香ニ航(フケ)テ倚(ヨ)來ルヲ以テ推テ猩々ト云ナルヘシ

形狀　〇大サ一分許、茶褐色、蠅ニ似タリ

あり 枕草紙與レ蟻同名也

［漢名］ 水黽 本草　［今名］ シホハイ

［集註］ 枕草紙曰、ありはにくけれど、かろびいみじうて、水のうへなどを、たゞあゆみありくこそおかしけれ○大和本草曰、水黽。水上ニウカビ游ブ。身長クメ四足アリ、足ナガシ、後足最長シ。畿內ニテ飄ウリト云、筑紫ニテ、マメタカト云。其臭糖ノ如シ。水黽ハ其身鬼鍼草(ヒツキノハリ)ノ實ニ似テ黑色羽アリ、水上ヲ走ル、水涸ハ飛去ル

介良(ケラ) 倭名類聚鈔

［漢名］ 螻蛄 本草　［今名］ ケラ

正字通曰、螻蛄、短翅四足、雄善飛、雌腹大羽小不飛

［一名］ 計良 本草類編○本草和名、和名抄俱曰螻蛄、和名介良。字鏡曰、螻蛄、螻也。介良蛚介良、螻介良。延喜式第卷十五曰、內藏寮。諸國年料、供進。檳榔馬簑六十領。同螻簑百二十領。右太宰府所レ進。同卷第六曰、齋院司。三年一請雜物。駕女料螻簑九十八領。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。太宰府、檳榔馬簑六十領。同螻簑百廿領。源平盛衰記卷第卅一曰、螻蛄ノ露ニ囂(カマビスシク)メ合乳ノ譬詣テ傳

［集註］ 本草類編曰、螻蛄、和計良。夏至取暴乾。撰集抄曰、生(いき)とし生る物、ありけらの類(たぐひ)まで、思放(はな)つべきものにはあらざりけり

［雜製］ 頓医抄曰、螻蛄。ホシテ、アシカシラヲサレ

花益軒本若水本共ニ無シ

阿久多牟之（アクタムシ）本草和名　漢名　蜚蠊 本草　今名　アブラムシ　一名　都乃牟之 本草和名曰、蜚蠊。和名阿久多牟之、一名都乃牟之

本草綱目曰、蜚蠊。今人家壁間竈下極多、甚者聚至二千百一、身似二蚕蛾一、腹背俱赤、兩翅能飛喜二燈火花光一、其氣甚臭、其屎尤甚

安久太无之 本草類編曰、蜚蠊。和安久太无之　豆乃無之 倭名類聚鈔曰、蜚蠊。和名豆乃無之　都乃無之 天文写本和名抄

形狀　○大和本草曰、蛐蟲（アブラムシ）。此蟲形扁ク色黒シ、器物ヲカンデ爲レ害、アブラ蟲ハ龍蝨（ゲンゴロウムシ）ニ似テ羽薄ク、醬褐色臭氣アリ

古名錄蟲部卷第四十八　終

古名錄蟲部卷第四十九目錄

無翅蟲類

賀比古 蠶　○白殭蠶　○比々留乃布多古毛利 蠶蛹
○己太祢於加美仁川久 蠶退紙　○末由比介畄之畄 繰絲湯
奈都古 原蠶　○夏子ノヒヽルノコ 雄原蠶蛾
○加比古乃久曾 原蠶沙
山比古 山蠶
久毛 蜘蛛
阿之太加乃久毛 蠨蛸
波倍度利 蠅虎
平蜘 壁錢
寺蜘蛛 刺毛蜘蛛
土蛛 蛈蟷
蟢子 即喜母
みのむし 結草虫
於保禰無之 蜫
乃美 蚤
之良美 蝨　○木佐佐 蟣
太仁 壁蝨
齧レ牛虫 牛蝨

阿利 蟻○アリノコ 蚳
伊比阿里 黄蟻
阿末比古 馬陸
之美 衣魚 ○衣書中蠹蟲
乃岐波虫 瓦蛆
乎岐無之 尺蠖
屋蠧
阿乎無之 螟蛉
佐之 蠁蟲
須久毛 蟏蛸
止己与虫 蠋
蠧虫

於保阿里 蚍蜉
無加天 蜈蚣
於女無之 鼠婦
加波無之 毛虫
伊良虫 蛓○須々美乃都保 雀甕
乃牟之 木蠹蟲
毛毛乃牟之 桃蠹蟲
宇自 蛆
與奈無之 姑螿
仁波豆々 地膽
差曾利 蠍
者小神 沙蝨

齒乃虫 齒蠹　　加以 蚘蟲

通計五十二種

附ハ俯カ
延喜式巻十

古名録蟲部巻第四十九

紀藩　源　伴存撰

無翅蟲類

賀比古 倭名類聚鈔　漢名 **蠶** 本草　今名 **カイコ**

品字箋曰、蠶吐絲蟲、三●附三起、二十七日而老

一名 **加比古** 天文写本和名抄〇本草和名曰、白殭蚕。和名加比古。倭名鈔曰、蠶俗爲蚕。和名賀比古。延喜式曰、陸奥國會津郡、蠶養國神社。萬葉集巻第十二曰、垂乳根之、母我養蚕乃、眉隱。同巻第十三曰、帶乳根笑、母之養蚕之、眉隱、云云。郁離子曰、蠶吐レ絲而爲レ繭、以自衛ル也。卒以烹ニツル其身ヲ一

加伊己 本草類編

神虫 續日本紀　**蚕兒** 同上　**桑子** 萬葉集巻第十二曰、中中二、人跡不在者、桑子爾毛、成益物乎、玉之緒許。藻塩草曰、桒こ、桒子之。いとをする也。いせ物語に、しなずはくはくにてといへるも同事之。くとこと同五音也

養子 萬葉集巻第十一曰、足常、母養子、眉隱、隱ル在妹ヲ、見ル依モ鴨。同巻第十三曰、母之養蚕之、眉隱云云。藻塩草曰、まゆこもり蚕也

久

禮乃彌と受

新撰字鏡曰、蚕。蠒蚕、久礼乃弥と受。
駿河國風土記曰、安弁郡産蠶虫

集註 日本書紀曰、雄略天皇六年三月辛巳朔丁亥、天皇欲下使ニ后妃一親桑以勸中蠶事上。爰命ニ蜾蠃一聚ニ國內蚕一。於レ是蜾蠃誤聚ニ嬰兒一、奉レ獻ニ天皇一。天皇大咲。續日本紀卷第六曰、元明天皇和銅七年二月辛丑、始令ニ出羽國養一レ蚕。同卷第十六曰、聖武天皇天平十八年冬十月癸丑、日向ノ國風雨共發、養蚕損傷ス。仍テ免ニ調庸一。同卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年三月乙巳云云又長門國豐浦、厚狹二郡、宜シク養レ蚕、乞ノ停テ調ノ銅一、代令レ輸レ綿。同卷第卅一曰、光仁天皇寶龜二年五月己酉、右京人白原ノ連三成獻ス蚕產成レ字ヲ、賜ニ若狹國稻五百束一ヲ。三代實錄卷第五十曰、光孝天皇仁和三年秋七月十七日戊子、左京ノ人從五位下行采女ノ正時原ノ宿祢春風賜ニ朝臣ノ姓一ヲ。春風自言、先祖出タリ自ニ秦ノ始皇十一世ノ孫功德王一也帶仲彥天皇四年歸化入朝、奉レ獻ニ珍寶蚕種等一ヲ。皇太神宮儀式帳曰、又每年六月祭仁、己之家仁養蚕乃絲一絇捧持弖、祭之日告刀申弖。新年御年御調進、又每年九月、己之家仁養蚕乃赤引生糸九絇織奉、太神御衣仁。又曰、祢宜幷宇治大內人日新、內人已上三人、己之家養蚕乃糸一絇乎備奉弖。吾妻鏡卷第二曰、壽永元年五月廿六日、金剛寺僧徒訴事。昨日擬レ有ニ其沙汰一之処、已及ニ黃昏一之上、召寬中ニ障而不參之間、今日被レ經ニ沙汰一、被レ成ニ下外題一云云。如ニ申狀一僧徒等者有レ謂山寺仁、公事幷狩山蠶養乃仕事、見苦事也。速可レ令ニ停止一狀。仰処如レ件。藻塩草曰、蚕養事、六百番歌合の判にいへるは、かひやが下の儀つきてこれあり。蚕養之屋をば蚕室とぞ申侍、是即俊頼朝臣の書之侍物にも、玉はゝきの事をいへる所、春初子日、玉はゝきをもて蚕室をかきはらひ祝そむるゝと云り。凡蚕養之法は、正月初子日、子午歲生せる女子をかひ

麻自、類聚國史麻呂自に作る

めと稱して、蠶室をかきはらひ祝そむるなり。次に二月午日はじめて蚕の胤を出して、暖日にあたらしめて、三月午日はじめて桒に付て、四五月をまゆをひく時とす云々。俊頼髓腦抄曰、にゐくわまゆといへるは、桒の木のわかきなるはを、はじめてこきくはせ、かいこのまゆしておりたるきぬといへる也。藻塩草曰、桒のゑびら、矢さすゑびらにあらず、かいこをかうに、すゝきなどをあみているゝ物也。又云、ゑびらとおよめり。李花集曰、住侍しあたりの、山かつのすまゐも、みならはぬことのみおほく侍りし中にも、こかふわざなんいとむつかしく、はこきたるあたりも、まことに所せげに見え侍しかば云々

形狀

續日本紀卷第二十曰、孝謙天皇天平寶字元年八月己丑、駿河國益頭郡人金刺舍人麻自、獻蚕產成字。甲午詔曰、爰得駿河國益頭郡人金刺舍人麻自獻蚕兒成字。其文云、五月八日開下帝釋標知天皇命百年、因國内頂戴茲祥、踊躍歡喜云云。謹案蚕之爲物、虎文而有時蛻、馬吻而不相爭、生長室中、衣被天下、錦繡之麗、於是出焉。朝祭之服、於是生矣。故令神虫作字、用表神異、而今蕃息之間、自呈靈字、止戈之日、已奏丹墀、實是自天祐之、吉無不利。神女傳曰、蠶女者、當高辛帝時、蜀地未立君長、無所統攝、其父爲隣所掠去、已逾年唯所乘之馬猶在、女念父隔絕、或廢飲食、其母慰撫之、因誓于衆曰、有得父還者、以此女嫁之、部下之人、唯聞其誓、無能致父歸者、馬聞其言、驚躍振迅、絕其拘絆而去、數日、父乃乘馬歸、自此馬嘶鳴不肯飲齕、父問其故、母以誓衆之言白之、父曰、誓于人、而不誓于馬、安有人而偶非類乎、但厚其芻食、馬不肯食、每見女入。出入、輒怒目奮擊、如是不一、父怒射殺之、曝其皮于庭・女行過其側、馬皮蹶然而起、卷女飛去、旬日得皮于桑樹之上、女

作代蠶、食桑葉吐絲成繭、以衣被于人間、父母悔恨、念之不已、忽見蠶女、乘流雲、駕此馬、侍衛數十人、自天而下、謂父母曰、太上以我孝能致身、心不忘義、授以九宮仙嬪之任、長生于天矣、無復憶念也、乃沖虛而去、今家在什邡綿竹德陽三縣界、每歲祈蠶者、四方雲集、皆獲靈應、宮觀諸處、塑女子之像、披馬皮、謂之馬頭娘、以祈蠶桑焉

○白殭蠶 通名

今名 タフレガイコ

諸類本草曰、圖經曰、白殭蠶、今所在養蠶處皆有レ之、用ニ自ラ殭レ死シ白色ニシテ而條直ナル者ヲ爲レ佳

集註 本草類編曰、白殭蠶、四月採白花之物。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、白殭蠶十兩。參河國、白殭蠶二兩。近江國、白殭蠶一兩。丹波國、白殭蠶二兩。丹後國、白殭蠶二兩。但馬國、白殭蠶二兩。因幡國、白殭蠶二兩。播磨國、白殭蠶二兩。美作國、白殭蠶二兩。備前國、白殭蠶二兩。安藝國、白殭蠶二兩

形狀 福田方曰、白殭蠶。白色ニメスグナルヲ取テ、嘴ト絲トヲ去テ炒過テ使ヘ ○本草啓蒙曰、白殭蠶。蠶ノ死メ白直ナルモノナリ。曲リタルハ佳ナラズ。色黒キモノハ僞ナリ

○比々留乃布多古毛利（ヒヽルノフタコモリ） 本草和名

漢名 蠶蛹 本草

今名 ヒヽルノフタゴモリ

本草綱目曰、蠶蛹。瑞曰、繰絲後蛹子今人食レ之呼ニ小蜂兒一。○本草和名曰、螈蠶蛾。和名比々留乃布多古毛利。原蠶蛾ハナツコノ蝶也、本草啓蒙曰、蛹ニヒイルノ俗名ヲ用ルハ非也。ヒイルハ蛾ノ名也。蛹ハニシドチ也

○己太禰於加美仁川久（コダネオカミニツク） 本草類編 按於平誤

漢名 蠶退紙 證治準繩

今名　タネガミ　本草類編曰、蠶退。和己太祢於加美仁川久　○末由比介留之留　本草和名　漢名　繰絲湯

今名　マユヒケルユ　本草和名曰、繅絲汁。和名末由比介留之留　本草　附録　小兒アカクサノ治方

頓醫抄曰、カイコノクチスヲ灰ニ燒、ソバムギノ葉ノ露ヲ、紙ニシメ取テシボリ、其汁ニ灰ヲ合テ服セシメヨ

奈都古

倭名類聚鈔　漢名　原蠶　本草　今名　ナツコ

證類本草曰、原蠶屎、弘景云、原蠶是重養者。圖經曰、此ノ蠶處々皆有レ之、此是重養者、俗呼爲晩蠶○倭名鈔曰、原蠶。玉篇云、原蠶。晩蠶也。和名奈都古　集註　仙覺萬葉集註釋巻第十四曰、蚕養(こかひ)は春夏するに、春かひたる蚕の糸にてをりたるきぬのよきをいふなり。それをにゐくはまゆのきぬはあれど云々　○夏子ノヒミルノコ　壒嚢抄　集註

壒嚢抄曰、日本ニモ馬醫師ヲ伯樂ト云也。內火藥云云夏子ノヒ、ルノコ二錢云云夏子ノヒ、ルノコ三錢云云　○加比古乃久曾　本草和名　漢名　原

蠶沙

本草　今名　ナツコノクソ　證類本草曰、圖經曰、至テハ於用ルニ蠶沙蠶退ニ亦須レシ用ニ晩出ノ者ヲ。本草彙言曰、蠶沙即蠶屎也。以ニ晩蠶者ニ良

一名 古久曾 倭名類聚鈔曰、蠶沙。和名古久曾。本草和名曰、蠶沙。和名加比古乃久曾。本草云、蠶沙蠶矢名也。本經逢原曰、蠶沙惟晩者爲レ良、早蠶者不レ堪レ入レ藥

山比古(ヤマビコ) 新撰字鏡 漢名 山蠶 池北偶談 今名 ヤマヽユ

池北偶談曰、山蠶ハ食ニ椒椿槲柘諸木葉ヲ而成ニ繭ヲ、各從其名。舊唐書太宗紀曰、是歲滁州言野蠶食ニ槲葉ヲ成ス繭ヲ、大如レ柰其色綠 今案 字鏡曰、晩蠶比古。晩ハナツコ也。本草蘇頌ノ說ニ、原蠶重養者俗呼爲ニ晩蠶ト云リ

形狀 ○大和本草曰、野蠶モ繭ヲナス、山野ニアルヲ村民取テ、絮(ワタ)トシ絲トシ絹ヲヲル、山マユト云。按山マユハ其糸黃色也

久毛(クモ) 新撰字鏡 漢名 蜘蛛 本草 今名 クモ

正字通曰、蜘蛛布網如罾、絲右繞處其中、飛蟲觸網者纏縛食之、春得暖風吐遊絲、遠颺有長數丈者、絲入目傷明、花者溺人生瘡

一名 蜘蟵 萬葉集卷第十二曰、馬聲(イ)蜂音(ブ)石花(セ)蜘蟵(クモ)荒鹿(カ)。令義解序曰、蛛絲設ニ黏虫之禍一、蛛音豬具反、即蜘蛛也。蛛絲蛛網也。倭名類聚鈔曰、蜘蛛。和名久毛。字鏡曰、蜘蛛、久毛。蠨蛸二字久毛

區茂(クモ) 日本書紀允恭曰、我儕勞故餓、句倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能(ノ)、區茂能於虛奈比云 云

さゝかに 藻塩草○源氏物語はゝ木ゝ日、さゝかにのふるまひしるき夕暮に日るますくせといふがあやなき。同さかき日、風ふけばまづぞみだるゝ色かはるあさぢ

が露にかゝるさゝがに。撰集抄曰、かれ野にさせるさゝがにのいとかきみだして、そことも見え侍らぬまゝには、とにかくにくもでに物を思つゝ

久母

字鏡曰、蟵。豆涙反、久母。蜘。知伊反、久毛。蜘。朱音、久毛〇字典曰、蟵。蟵蜍今之蜘蛛

集註　三代實錄卷第九曰、貞觀六年八月九日癸亥、勅云云尤同ジ蜘蛛之秋網ニ。蜻蛉日記曰、くものかくいとぞあやしき風吹ばそらにみだるゝものとしるく。山家集曰、蜘のゐかきたるを見て、さゝがにのくもでにかけて引いとやけふ七夕にかさゝぎのはし。四季物語曰、ことしはれいよりもくものゐをだにのこさで云云。榮花物語くものふるまひ曰、そのおはしましける御门のうちに、くものすをかきたりければ、わかれにし人はくべくもあらなくにいかにふるまふさゝがにぞこは。御返し、宰相の君、きみくべきふるまひならぬさゝがにはかきのみたゆるこゝちこそすれ。枕草紙曰、九月ばかり、夜一よふりあかしたる雨の、けさはやみて、あさ日の花やかにさしたるに、すいがい、らもん、すゝきなどのうへにかひたるくものすのこぼれのこりて、所々に糸もたえざまに、雨のかゝりたるが、しろき玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじふあはれにおかしけれ。本朝無題詩曰、蛛網織成珠緊簷。又曰、外戸風來蛛網破。俊頼髓腦抄曰、なつひきのいとゝも、さゝがにのいとゝも、思ひよりなばおもひたゆとも、かきたゆとも、くるにつけても、くりかへしとも、心ぼそしとも、又心ながしとおもひみたるとも、かきみだるとも、わがてにかけ、しつはたにかけても云々。實方朝臣集曰、さゝがにのくものいがきのたえしよりかくべきよひも君はしらじな。赤染衛門集曰、秋くものゐをいみじくかきたるをみて云々。藻塩草曰、くものすがき、蜘のいとにて、すかきたるを云之。家のあばらなるかきといはんとて、く

ものすがきと云之

形状　倭訓栞抄曰、是をまた雲(蜘蛛)といふむしの、手はやつあれば、その雲(くも)のすは、軒に見ゆるもの丶、てをくみたるやうに見ゆれば、それによそへてよむ之、ともいふ之。重之集曰、又此君のもとにて、くものてひとつおちたるが、二三日までうごくを「さゝがにのくものはたてのうごく哉かぜを命におもふなるべし。釋日本紀曰、佐瑳餓泥能、佐佐蟹也。謂蜘蛛也。又說、蜘蛛之別名也。言其躰如蟹住ニ左右原ニ故名。冝茂能於虚奈比、蜘蛛之行也。言ニ蜘蛛之下ニ縋也。私記曰、雲乃於支天也。又說謂ニ蜘蛛ニ也。源平盛衰記巻第廿四曰、蜘ノ子ヲ散スガ如ク落行ケリ。同巻第四十四曰、口立ル乞者法師原モ、蜘蛛子ヲ散メ失ニケリ。十訓抄曰、くものこを吹ちらすやうに逃にけり。大鏡曰、くものすを風のふきはらふごとく云云。袖中抄曰、くもと云虫の、手はやつあれば、それをやつはしといふにそへて、くもでに物を思ふとよめるなり、といへり。綺語抄云、みかはの八はしは、柱の八あれば、くものあしの八あるによそへてよめる也

阿之太加乃久毛(アシダカノクモ)　倭名類聚鈔

漢名　蠨蛸　本草

今名　アシダカクモ

一名　足高久毛　新撰字鏡曰、蠨蛸、二字、足高久毛。倭名鈔曰 蠨蛸。和名阿之太加乃久毛

形状　○本草啓蒙曰、アシタカグモ、人家地板(イタ)ノ下、或ハ箱篋中ニ住ム、形小ニメ長ク、足至テ細ク絲ノ如ニメ長シ、全身淡白色○大和本草曰、蠨蛸ハ足ノ長キナリ。其身如レ豆、其足細而長數寸ナルアリ、ト云ハ山野樹木陰及水道ノ橋下ニ多ク聚住クモ也。足ノ節白色餘ハ黑シ

波倍度利（ヘヘトリ） 倭名類聚鈔　［漢名］蠅虎 本草　［今名］ハイトリグモ

本草綱目、蠅。註曰、一種小蜘蛛專捕食之、謂之蠅虎者是也○倭名鈔曰、蠅虎。和名波倍度里　［形狀］○大和本草曰、蠅虎ハ蠅ヲトル。本草啓蒙曰、蠅虎ハハイトリグモ、大小數品アリ。ソノ色ハ住トコロニ從ヒテ一ナラズ

平蜘（ヒラグモ） 著聞集　［漢名］壁錢 本草　［今名］ヒラタグモ

本草綱目曰、壁錢。大如蜘蛛而形扁斑色、八足而長、亦時蛻殼、其膜色光白如繭○槃蟪嘶餘曰、続秋ソウヅト云時衆ガ持タル平蜘ト云釜ヲ所望ノ、聰雪ヲ此菴ニ招請テ茶ヲ獻ス　［集註］古今著聞集卷第六曰、兼俊殿上に笙吹なきによりて、昇殿を免さるべきよし沙汰有けり。先試有ける日、きさき笛を給ひてふかせられけるに、用心なくして吹出しける程に、管中に平蜘（ひらくも）の有けるが、喉（のど）にのみ入られにけり。むせてはつきまどひける程に、主上羣臣も笑ひ給て腸を斷けり　［形狀］○本草啓蒙曰、壁錢（ヒラタグモ）。全身扁薄ニシテ左右ニ八足平排ス、大サ一寸許、淡黑褐色。晝ハ柱ノ裂タル中、或ハ物ノ重リタル間ニ隱レ居リ、夜ハ壁上ニ出テ蟲ヲ取ル。雌ナル者ハ錢ノ大サナル巢ヲツクリ、ソノ上ニ居ル。巢ハ白ク紙ノ如シ。二重ニシテ中ニ卵ヲ挾ム

底本「網」ト書ス可考

寺蜘蛛(テラグモ) 太平記　［漢名］　刺毛蜘蛛 事物紺珠　［今名］　オホグモ

［集註］太平記巻第二十三曰、其座中ニ禪僧一人眠ラデ有ケルガ、燈ノ影ヨリ見レバ、大ナル寺蜘蛛一ツ天井ヨリ下テ、寢入タル人ノ上ヲ這(ハヒ)行テ、又天井ヘゾ擧リケル云云僅ナル蜘ノイニ、手足ヲ被繋テ、更ニハタラキ得ザリケリ

［形狀］○本草啓蒙曰、大身有ニ刺毛生ル者ハ、事物紺珠ニ刺毛蜘蛛ト云フ、俗名オホグモ、形壁(ヒラグモ)錢ニ似テ扁ナラズ、甚大ナリ、脚長サ二寸許、粗ニメ白斑及刺毛アリ。此クモ夏月人家ノ壁上ニ出、大サ三寸許、身如ニ小指頭ノ茶褐色白斑アリ、身足刺毛多シ、雄ハ瘦テ身細小、斑色分明、雌ハ身大ニメ斑色暗也

土蜘蛛(ツチグモ) 壓添壒囊抄　［漢名］　蛈蝪 本草　［今名］　ヂグモ

何氏類鏥曰、有土蜘蛛、結網土中。本草藏器曰、蛈蝪、形似蜘蛛、穿土爲巢、穴上有蓋覆穴口

［形狀］壒囊鈔曰、土蜘ト云、蛛ノ土ノ穴ニスンデ、虫ナドヲ捕(トヘ)テ、我栖ヘ引入ル、ニニタレバ土蜘ト云フニヤ○本草啓蒙曰、蛈蝪ハ ヂグモ、此蜘ハ墻陰或ハ樹木ノ根ニ、細長ク管ノ如クナル巣ヲ成シ、下ニ底アリテ、袋ノ如シ。ソノ半ハ地中ニ入ルヿ三五寸、袋ノ內ニ一ノ蜘アリ、蜘大ナル者ハ袋モ長大ナリ。蜘小ナル者ハ袋モ短小ナリ。ソノ蜘ハ蜘蛛ニ比スレバ頭大ニ體瘠テ赤黑色、足ニ爪アリ

嬉子 江家次第。博物志ニ作₂喜子₁　漢名 **喜母** 事物紺珠　今名 **サガリグモ**

事物紺珠曰、喜母小₂於長蹄₁集而百事喜著₂人衣₁當有₂親客至₁又名₂親客₁。字典曰、劉勰新論、野人晝見₂蟢子₁者以爲₃有₂喜樂₁之瑞₁。又曰、陸璣云、河内人謂之喜母、此蟲來著人衣當有親客至有喜也。幽州人謂之親客、亦如蜘蛛爲羅網居之是也

集註　江家次第卷第八曰、七月七日乞巧奠事云云設₂瓜菓於庭中₁以乞ㇾ巧ヲ、有₂蟢子₁羅₂於瓜果上₁則以爲ㇾ得ㇾ巧

形狀　○本草啓蒙曰、サガリグモハ、地板下或ハ假偶棚(カフスミ)下ニ於テスヲ爲ス、卑キモノハ上ハ板下ニ粘シ、下ハ土沙ニ粘シテ絲ヲ營ㇾ窠ナリ。蟲ノ地上ヲ行者、或ハ飛ブ者、ソノ絲ニ觸レバ、便チ引上ゲ、絲ヲ以テ縛スルヿ甚捷ナリ。ソノ蜘ハ腹大ニシテ形圓ク、脚ハ蜘蛛ヨリ長ク、長蹄(アシタカクモ)ヨリ短シ。黑褐色ニシテ小白斑アリ、冬ハ偶隙ニ蟄ス。春暖ニナレバ出テ長ク絲ヲ引テ下垂ス、故ニサガリグモト呼ブ

みのむし 枕草紙　漢名 **結草虫** 採蘭雜志　今名 **ミノムシ**

古今注曰、結草蟲、一名結葦、好於₂草末₁折₂屈ㇾ草葉₁以爲₂巣窟₁、處處有ㇾ之

一名 **蓑蟲** 源平盛衰記　**鬼の子** 藻塩草曰、鬼の子、是蓑虫の事と、八雲御說之　**みなし子** 言塵集曰、みなし子、蓑虫の事之。又無親子。枕草紙曰、心づきなきもの云々みの虫のやうなる。採蘭雜志曰、結草虫、一名蓑衣丈人　**無親子** 言塵集

集註

枕草紙曰、雨いたうふる日、藤三位のつぼねに、みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木のしろきに、たて文をつけて、これ奉らんといひければ云々。俊頼髄腦抄曰、とをばかりなるちごの、みのむしの梅の枝に付たりけるを見てしたりければ

【形狀】 枕草紙曰、みのむしいとあはれなり。をにのうみければ、おやににて、これもおそろしき心ちぞあらんとて、おやのあしききぬひきゝせて、今秋風ふかんおりにぞこんずる。まてよといひて、にげていにけるもしらず。風のをときゝしりて、八月ばかりになれば、ちちよ〳〵とはかなげになく、いみじくあはれなり。源平盛衰記卷第九曰、草木ノ葉ヲ結(キ)集(ツメ)テ著タリケレバ、荊(ヲドロ)ヲ戰ケル蓑蟲(ミノムシ)ニ似タリ〇大和本草曰、蓑虫(ミノ)ハ口ヨリ絲ヲ出シ、木葉ヲ綴テ巣トシ、木ノ枝ニ附テ下リ垂ル

於保禰無之(オホネムシ) 倭名類聚鈔 【漢名】 蝗 爾雅註

爾雅曰、食二苗心一螟、食レ葉蟘、食レ節賊、食レ根蟊。疏舊說云、螟蟘蟊賊、一種蟲也〇螟ハ莖(クキ)ムシ、綠色蠶ニ似テ小也〇蟘ハ葉ムシ、葉ヲ食フムシ、蠶形ナルニ種類多シ、一種草木ノ新芽ヲ食テ、綠色羽アリテ、蜻蛉ニ似テ小ナルヲ、サ子モリ虫ト云、大小數種アリ。イナゴモ此ニ屬スレモ、稻葉ヲ食フノミニメ稻ヲ害スル丆少シ〇賊ハ節ムシ、草木ノ節ヲ食フ蟲也。蠶形ニメ白色、或ハ黃ヲ帶、褐黑ノ牙アルモアリ〇蟊ハ子ムシ、根切蟲也。蠶ノ形ニメ白色黃ヲ帶、地中ニ居ス。大小品類多シ。三代實錄卷第三曰、螟螣賊害二五穀一。詩傳曰食レ葉曰レ螣

【一名】 腹赤虫 新撰字鏡曰、蝝。腹赤虫。按字典曰、螽、

古文蝗。說文、蝗也。又蟓字詁曰、集韻同蝗。玉篇蝗也

【集註】續日本紀卷第二曰、文武天皇大寶元年八月辛酉、參河遠江相摸近江信濃越前佐渡但馬伯耆出雲備前安藝周防長門紀伊讃岐伊豫、十七國蝗。同二年三月壬申、因幡伯耆隱岐三國、蝗損禾稼。同卷第三曰、慶雲元年八月戊午、伊勢伊賀二國蝗。同卷第十七曰、聖武天皇天平勝寶元年二月庚子、下総國旱蝗飢饉、賑給之。同卷第三十四曰、光仁天皇寶龜七年八月庚午、天下諸國蝗。令義解曰、凡遭水旱災蝗（謂災蝗者釋見考課令也）不熟之處少粮應須賑給者、國郡撿實預申太政官奏聞。百練抄卷第四曰、後一條天皇寛仁元年、今年蝗虫間起、餓噉生苗。延喜式卷第二十二曰、民部上凡遭水旱災蝗不熟田、一處五十戶以上者、馳驛申上。古語拾遺曰、昔在神代、大地主神、營田之日、以牛完食田人。于時御歲神之子、至於其田、唾饗而還以狀告父。御歲神、發怒以蝗放其田、苗葉忽枯損似篠竹。於是大地主神、令片巫肱巫占求其由、御歲神爲祟、宜獻白猪白馬白鷄、以解其怒。依敎奉謝御歲神。答曰、實吾意也。宜以麻柄作桛桛之、乃以其葉掃之、以天押草押之、以烏扇扇之。若如此不出去者、宜以牛完置溝口、作男莖形以加之、以薏子蜀椒呉桃葉、及鹽班置其畔、仍從其敎、苗葉復茂、年穀豐稔。是今神祇官以白猪白馬白鷄祭御歲神之縁也。類聚國史曰、弘仁三年六月辛卯、薩摩國蝗、逸浦負稻五千束。弘仁四年大隅薩摩二國蝗、免未納稅。弘仁六年五月甲申、薩摩國蝗、免調庸田稅租。弘仁十年十一月丁丑、薩摩國蝗、免田租。新猨樂記曰、未會旱魃洪水蝗虫不熟之損。釋日本紀曰、昆虫之灾異近則蝗虫害田之類也

【形狀】三代實錄卷第二十六曰、清和天皇貞觀十六年八

月丁巳、是ノ日、伊勢ノ國上言ス。有ニ蝗虫一食レ稼、其頭赤如レシ丹ノ、背青黒、腹斑駁。大ナル者ハ一寸五分、小ナル者一寸、種類繁聚。一日所レ食四五許町、其所ニ一過スル無レシ有ニコト遺穗一。十三日己巳、遣ニ從五位下守玄蕃ノ頭弘道ノ王ヲ於伊勢太神宮ニ奉レ幣ヲ、禱レ去ニコトヲ灾蝗ヲ一。從リ此以後、蝗虫或ハ化シ蝶飛去、或ハ爲ニ小蜂ノ所ニ刺殺一、一時ニ消盡ク矣○雲南通志曰、雍正九年六月、昭通田生赤蟲長寸許、食稻葉旋有群鴉數千下啄蟲俱盡不無傷　○

黄節食虫（キフシムシ）　新撰字鏡

[漢名] 賊　爾雅　[今名] フシムシ

乃美（ノミ）　倭名類聚鈔

[漢名] 蚤　本草　[今名] ノミ

山堂肆考曰、蚤。齧レ人蟲也。黒色善跳。蝨生汗垢。蚤生積灰。亦有雌雄。雄小雌大

[一名] 奴彌　新撰字鏡曰、蛯蝋二奴弥。蚤、子孝反、上乃美○字典曰、蝋。方言郭註、蜻蛉淮南人呼爲ニ蝋蚻一。倭名鈔曰、蚤。說文云、蚤齧人跳虫也。和名乃美

[集註] 砂石集曰、有人ノ妻マオトコト子タリケル時、夫俄ニ子ヤノウチヘイラントス、イカニメカニガサントト思テ、衣ノノミトル由ニテ、ニガサントテ、マオトコノハダカナルヲ、ムシロニカヒマヒテ、衣ノノミトラムトテ、スビツヲトビ越ケルホドニ、スベラカメ、スビツニトウドヲトシツ。男是ヲ見テ、目見ノベ、口ヲホヒテ、ノドカナル氣色ニテ、アライシノノミノ大サヤト云テ、ナニトモセザリケレバ、勢ハ大ナレドモ、小ノミノ如クモトバズメ、ハダカニテハヒニゲニケリ

[形狀] 枕草紙曰、のみもいとにくし、きぬのしたに

脫群活本執に作る

略記ハ昌泰四年八月

々群本之

貫の下

をどりありきて、もたぐるやうにするも

之良美（シラミ）　倭名類聚鈔

【漢名】蝨　本草　【今名】シラミ

山堂肆考曰、說文。蝨齧人蟲也。或云、蝨最忌水銀銀硃。以二物薰之絕跡。支諸皐曰、相傳ハ將死。蝨離身。或云、取病者蝨於牀前可以卜病。將差。蝨行向病者、背則死。物理小識曰、人身之蝨本因汗垢後乃孳滋

【一名】志良彌　新撰字鏡曰、蛆、志良彌。蝹、志良彌〇字典曰、蝹同蝨。又與レ蟋同。蝨ハイラムシ也。蟋ハツヾリサセ也。倭名鈔曰、虱。和名之良美　白虫　著聞集。續古事談曰、昔ハ諸道ノ博士ナドハ、裝束脫スル事ナカリケルニヤ、光榮ト云ケル陰陽師、上東門院ノ御產ノ時、アサマシゲナルウヱノキヌ、指貫ニヒラグツハキテ、ビムモカヽデ、中門ヨリイリテ、ハシガクシノ間ヨリノボリテ、フトコロヨリ白虫ヲトリイダシテ、カウラムノヒラゲタニアテヽ、大ユビシテコロシケリ。ウヱノキヌノシタニハ、ヌノヽアヲトイフ物ヲゾキタリケル〇諺海圖編、倭國事略曰、蝨水失辣

【集註】扶桑略記第廿三曰、陽勝仙人云云慈悲殊深、憐二愍群迷一、蛾蚤蚊虻委レ身令レ餌。中外抄曰、保延三年六月十一日、仰云、諸道々人上古不好衣服、以才藝爲先者也。光榮ハ上東門院御產日ハ鬢モ不搔、表ノ指貫希有にて、着平履天入自中門、思□階隱間天候御緣天武衣の下ニハ布乃合□ヲ着タリ。

【形狀】古今著聞集卷第一　白懷中蝨ヲ取出天、高欄の平ゲタニ宛天、大指して殺ケリ。つれ〴〵曰、身に虱有

ハあり
思を直
ニに作
る
表を、
に作る

十日、或田舎人貢上して侍けるが、宿にて天道ぼこりして居たりけるに、くびのかゆかりけるをさぐりたれば、大なる白虫のくひつきたりけるを。それを何となくて、腰刀をぬきて、はしらを少けづりかけて、其中にへしこめて、はたらかぬやうにをしおほひてげり。さて此ぬし、ゐなかへくだりぬ。次の年のぼりて、又此宿にとゞまりぬ。ありし折の柱を見て、扨もこの中にへし入ししらみ、いかゞ成ぬらんとおぼつかなくて、けづりかけたる所を引あけて見れば、白虫のみもなくて、やせがれていまだ有。死にたるかとみれば、猶はたらきけり。ふしぎに覺へて、己がかいなにをきて見れば、はたらきてかいなにくい付ぬ。いとかゆく覺へけれ共、いまだ生たるむざんさに、事のやう見んとて、猶くはせをりけるほどに、次第にくいて、身あかみけるおり、はらひすてゝげり。そのはいたる跡あさましくかゆくて、かきゐたりけるほどに、やがてはれて、いく程もなくおびたゞしき瘡に成にけり云々

○木佐佐(キササ) 倭名類聚鈔 漢名 蟣 本草 今名 キカゼ 品字箋曰、蟣。蝨卵。未成蝨者亦作蟣

一名 岐左左 天文写本和名鈔○和名鈔曰、説文云、蟣。虱子也。和名木佐佐 支加佐 新撰字鏡曰、蟣、九豈反、上志良弥、又支加佐

キサシ 塵添壒嚢抄曰、シラミノ子ヲバキサヽト云歟、キサシト云歟 集註 新猿楽記曰、衣ニハ集ム蟣虱ヲ

○頭之蝨(カシラ) 古事記 漢名 頭蝨 山堂肆考 今名 アタマシラミ 山堂肆考曰、枹朴子云、頭蝨著身、皆稍變而白、身蝨處頭、皆漸化而黒 集註 古事記曰、令

取其頭之蝨

太仁 倭名類聚鈔　[漢名] 壁蝨 本草　[今名] ダニ

本草綱目曰、壁蝨狀如酸棗仁、咂人血食、與蚤皆爲牀榻之害

[一名] 太尓 天文写本和名抄○倭名鈔曰、蜱、如棁反、與茜同、和名太仁○字典曰、蜱或作蚋、即ヌカヾ也

[形狀] 沙石集曰、學匠之蟻蜹之問答、事云蟻蜹ニ問テ云、何故蜹名蜹耶、答曰、背上谷故名蜹、セナカノ上クボミテ谷ニタルユヘニト答フ。難云、背上谷アルヲ名蜹者於團子等不名蜹、背クボキ故ニタニトイハヾ、ダシゴヲモタニトイフベシト問也。前得タルカ團子ノ名ヲ故ニ突杜子等ニ准例セハ亦尓、シカラズ、サキニダンゴノ名ヲウルユヘニトビヤウシ等モ是ニナズラフベシト答フル也○大和本草曰、壁蝨小ナルハ胡麻子ノ如ク、大ナルハ酸棗仁ノ如ク、大豆ノ如シ。本草啓蒙曰、壁蝨、タニコハ形圓扁ニシテ一頭ニ多ク足ツケリ、大ナル者一二分、小ナル者ハ罌粟ノ如シ、赤色ナル者アリ、白色ナル者アリ、白黒斑駁ナル者アリ

齧牛虫 新撰字鏡　[漢名] 牛蝨 本草　[今名] 獸ニ着ダニ

本草綱目曰、牛蝨。生二牛身上一、狀如二蓖麻子一、有二白黒二色一、嚙レ血滿レ腹時自墜落也

[集註] 字鏡曰、蜱蝨一作蝨上補奚反、齧牛虫也。今食蝨有蝨也。下所乙反、志良弥

[形狀] ○大和本草曰、牛馬狗ニツクハ大ノ蓖麻子ノ如シ、大ナルヲ殺セバ全身皆黒血イヅ、瘦タルハ扁シ。本草啓蒙曰、牛蝨白黒斑駁ナリ

阿利（アリ） 新撰字鏡 [漢名] 蟻 本草 [今名] アリ

五雜組曰、物之小ニシテ而可レ愛者莫レ如クハ蟻ニ、其占ノハ候ヲ似リ智ニ、其鬪ルハ弱ヲ似レ勇、其呼ハ類似レ仁、其次序ハ似レ義、其不レハ爽似ノ信、有ニ君臣之義焉、兄弟之愛焉、長幼之倫ニ焉○沙石集卷第五曰、南都ノ春日野ノ邊ニ、學匠ノ房近キ所ニ、蟻ト螨ト有ケリ。自然ニ學問スルホトリニ住テ、共ニ學匠也ケルガ、互ニ聞及テ、ヨリアヒテ論議セント思ヒケルホドニ、或時道ニ行相テ、互ニ悦テ、ヤガテ蟻螨ニ問テ曰、何故ゾ蟻ヲ名レ蟻ト耶。ナニノユヘニアリヲ、アリトナヅクル。ソノコヽロイカン、ト問ナリ。答、前後有ルニ故名ク蟻ト、中ハクビレテ前後ノカタチアルユヘニ、アリトイフト答フ。難ノ云、前後有ルヲ名レ蟻ト者、於テ輪子等ニ不レ名レ蟻、前後アルモノヲ、アリトイフベクハ、リウゴ等ヲモ、アリト云ベシトナリ。答、不レ尓、前ニ得ニ輪子ノ名ヲ故ニ執テ轉提等ニ准ノ例セハ亦尓ナリ。サキニスデニ、リウゴノ名ヲ得タルユヘニ、アリト云ハズ、シテ、イモ、例セバ亦シカナリト答フ

[一名] 安利 字鏡曰、蛾。柯我反、螘也。安利。又曰、蟻螘同上、義音宜奇反、阿利○字典曰、蛾。玉篇蠶蛾也。禮樂記、蛾子時迷レ之。註、蛾蚍蜉也。後漢皇甫規傳、蛾角等皆著ニ黃

巾爲標幟、時人謂之黃巾、亦名爲蛾賊。註、卽蟻字。萬葉集卷第三曰、大王之、遠乃朝庭跡、蟻通云云。同卷第四曰、須臾羽蟻待。同卷第六曰、諸毛塩燒、蟻往來云云。自神代、芳野宮爾、蟻通云云。同卷第十二曰、將相者、千遍雖念、蟻通云云。同卷第十六曰、蟻衣之。攝津國風土記曰、有馬郡或蟻毛郡

【集註】日本靈異記曰、卒尓閇着蟻嚼踊死。枕草紙曰、七わたにわだかまりたる玉の中とをりて、左右に口あきたるが、ちいさきを奉りて云〻おほきなるありを二つとらへて、こしにほそき糸をつけ、又それに、今すこしふときをつけて、あなたの口に、みつをぬりて見よと、いひければ、さ申て、ありをいれたりけるに、みつのかをかぎて、まことにいととう、あなのあなたのくちに出にけり（晋博物志曰、小說孔子得九曲珠、欲穿不得、遇二女教、以塗脂于線使蟻通焉）つれ〳〵日、蟻のごとくあつまりて。藻塩草曰、蟻。ありのかよひぢ、みな月やてる日のつちのわれのみとありのかよひぢ行ちがふ也。出雲國風土記曰、蟻散

○アリノ子　塵添壒囊抄

【漢名】蚳　本草　爾雅曰、蚍蜉大螘、小者螘、其子蚳。本草時珍曰、其卵名蚳○塵添壒囊鈔曰　蟓事。蟓ノ字ハアリノ子歟、蚳蟓ト云ヲリハアリノ子也○字典曰、蟓。爾雅、蟓蝮蜪。註、蝗子未有翅者。春秋宣十三年、冬蟓生。註、以冬生過寒而死、故不成螽。劉歆云、蚍蜉子也。爾雅註、董氏解曰、蚳螘子也。可以爲醢。蟓蝮蜪也。可食舍不取也。正字通蟓字註、蟓螘殊、不類、董仲舒劉向何休並云、蝗始生獨。漢書五行志引春秋蟓生、劉歆以爲蟓ハ蚍蜉有翼者。按歆說不足信、說文蟓蝝說不誤復引歆說　誤也

於保阿里（オホアリ） 倭名類聚鈔　[漢名] 蚍蜉 爾雅疏　[今名] ヤマアリ

[一名] 於保阿利 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、大蟻。爾雅集註云、蚍蜉、一名馬蟻官倚反、今案即蟻字也。見玉篇。和名於保阿里 大蟻也。本草綱目、蟻釋名曰、大者爲ニ蚍蜉ト、亦曰ニ馬蟻ト　[形狀] ○本草啓蒙曰、山中ニ居ル者、形大ニシテ長サ七八分、或五六分ナルアリ、ヤマアリト呼ブ、此ニモ赤黒二色アリ

伊比阿里（イヒアリ） 倭名類聚鈔　[漢名] 黃蟻 通雅　[今名] アカアリ

通雅曰、小而微黃曰ニ黃蟻ト。五雜組曰、蟻有ニ黃色、小而徙

[一名] 伊比阿里 天文写本和名抄○倭名鈔曰、赤蟻。和名伊比阿里　[形狀] ○本草啓蒙曰、黃蟻ハアカアリナリ、庭上ニ多シ、一分許ノ長サニシテ微黒色ヲ帶ブ、ソノ行クコト速カナリ、性驚ヤスシ

無加天（ムカデ） 倭名類聚鈔　[漢名] 蜈蚣 本草　[今名] ムカデ

[一名] 牟加天 本草和名曰、呉公。和名牟加天。倭名鈔曰、蜈蚣。和名無加天　旡加天 本草類編　[集註] 本草類編曰、蜈蚣。和无加天。七八月取之。

古事記曰、亦來日夜者、入蜈蚣與蜂室。亦授蜈蚣蜂之比禮、教如先。故平出之。又曰、故尓見其頭者、蜈蚣多在云云。其大神以爲咋破蜈蚣唾出。出雲國風土記曰、嶋根郡蜈蚣嶋。古老傳云、有蛸蜷嶋蛸蜷、食來蜈蚣、止居此嶋、故云蜈蚣嶋。枕草紙曰、やのいとふるくて、かはらぶきなればにやあらん、あつさの世にしらねば、みすのとによるもふしたるも、ふるき所なればむかでといふ物ひとひおちかゝり云々いとおそろしき

［正誤］砂石集曰、百足イハク、我ハ百足アレドモ餘リモ覺ヘズト云。塵添壒囊鈔曰、蚿百足也〇蚿。字典曰、廣韻、馬蚿蟲。卽本草ノ馬陸ニメ、ヲサムシ也

［藥製］頓医抄曰、蜈蚣カシラトヲ、サレ、炙ス。福田方曰、蜈蚣炙過テ使へ

阿末比古 倭名類聚鈔

［漢名］馬陸 本草　［今名］ヲサムシ　［一名］阿萬比古 天文写本和名鈔〇倭名

本草綱目、馬陸。集解曰、形大如蚯蚓、紫黑色其足比比至百、而皮極硬、節節有橫文如金線、首尾一般大觸之卽側臥局縮如環

鈔曰、馬陸。和名阿末比古 本草和名亦同之　安末比己 本草類編　阿万比古 新撰字鏡曰、蛔。阿万比古

［形狀］本草類編曰、馬陸。和安末比己。此虫大如細筆管長三四寸班色狀如刀 此文唐本草說也 〇大和本草曰、馬陸。小蜈蚣ニ似テ色黑足多シ、長一寸餘。和名ヲサムシ、又クサムシト云、悪臭アリ

於女無之 倭名類聚鈔 【漢名】鼠婦 本草 【今名】オメムシ

證類本草曰、衍義曰、鼠婦。此濕生蟲也。多足其色如レ蚓、背有二横紋一、蹙起大者長三四分 【一名】於女牟之 本草和名曰、鼠婦。和名於女牟之〇按倭名鈔ニ塵虫、和名於女無之ト云非也

於女旡之 本草類編 奈女旡之 同上 於女虫 新撰字鏡曰、蛘於女虫。蛜、於指反蟣也。於女虫〇蛘ハウハヽミ也 安久太

旡之 本草類編曰、安久太旡之、又云於女旡之 【集註】本草類編曰、安久太旡之、十月採暴干之、沙中及墻壁下也 【形狀】本草類編曰、鼠婦・和於女旡之。又云、奈女旡之。五月五日取之乾長三四分〇大和本草曰、鼠婦。屋下ノ濕地ニ生ズ、背ニ横紋アリ、色如レ蚓、衣魚ニ似テ大ナリ、灰色ナリ

之美 倭名類聚鈔 【漢名】衣魚 本草 【今名】ハクムシ

本草綱目曰、衣魚其蠹ニ衣帛書畫ニ始則青色、老則有ニ白粉一、碎レ之如レ銀 【一名】志彌 新撰字鏡曰、蟫、余針大南二反、平志弥。倭名鈔曰、衣魚、和名シ美 本草和名亦同于倭名抄 頓医抄曰、衣白魚シミト云虫ナリ 【集註】本草類編曰、衣魚、和之美、衣書中虫有之。延喜式卷第三十一曰、宮内省。凡應レ給ニ諸司ニ月料魚完ノ者、省司毎月臨ミ勘厨庫ノ見物ノ多少及ヒ可レ蠹之物ヲ申レ官充テ用ヨ。

勿レ致ス二蠹蝕一ヲ。駿河國風土記、文和奥書曰云云然蠹魚之害闕誤繁多。源氏物語孀姫曰、しみといふむしのすみかになりて、ふるめきたるかびくさくながら、跡はきえず、たゞいまかきたらんにもたがはぬことのは共の、こまごまとさだかなるをみ給ふに。河越記曰、經はしみの栖となり

【形狀】○大和本草曰、衣魚、衣帛書紙ノ中ニ生ス、尾ニ二岐アリ、其形魚ニ似タリ、色白シ

○衣書

中蠹蟲　小知錄　【今名】ホンノムシ

【今案】衣魚ト書蠹ハ二物也。塵添壒囊鈔曰、蠹字丁護反、古文蠹ト書、ノンシト讀也。木蠹トモ云、又白魚共云。皆是ノンシ也。其國ニ居テ其國亡、蠹ノ其木食テ其木枯スニ喩ヘタリ。今シミト云是也。私思ハク、木食ノンシニハ木蠹用、紙食ノンシニハ白魚ヲ用ヘキ歟。蠹字何レニモ亘ヘキ也

【集註】今物語曰、後堀河安貞のころ、河内國に百姓有けるが子に、蓮花王といひけるわらはありけり。七なりける年死けるが、念佛申て、西に向て、かたはらなる人に、我死たらば、七日といはんにあけて見よ、と云て死にけり。其後人の夢に、必あけよといふとみて、あけてければ、舍利に成にけり。是を取て、人におがませんとて、かりそめにちやうをして入たりけるに、此帳をほどなくむしのくひたりけるを見ければ、歸命蓮花王、大聖觀自在、廣度衆生界、父母善知識。とくひて、はての文字の所に、虫の死てありける、いとふしぎにめでたき事也。仁部記奥書曰、文明七年十月廿八日於大津旅亭拂牛蠹畢。砂石集曰、或ルワカキ僧、師ノ讓リアタヘタル大般若ノ虫ハラハントテ、トリヒロゲタルヲ

加波無之（カハムシ） 倭名類聚鈔 【漢名】毛虫 衍識録 【今名】ケムシ

○倭名鈔曰、烏毛虫。兼名苑云、蠚虫、一名烏毛虫、和名加波無之。諸葛亮新書曰、蠚蟲之觸負其毒也

乃支波虫（ノキバムシ） 新撰字鏡 【漢名】瓦蛆 醫學正傳 【今名】ヤネケムシ

医學正傳曰、勞傷ニ手叶蠚ル者、則爲ニ毛蟲一、如ニ刺蝟瓦蛆之屬一。字鏡曰、蛄、乃支波虫

【形狀】○瓦蛆ハ夏月板屋ノ軒裏ニ生スル小ナル毛蟲也、能ク人ヲ螫ス

伊良虫（イラムシ） 新撰字鏡 【漢名】蛓 雨航雜錄 【今名】イラムシ

雨航雜錄曰、蛓者螫レ人蟲也。身扁綠色、似レ蠶而短無レ足有レ毛。常在ニ林間花葉背一、不レ知者輒爲レ所レ刺、一名林蛓、蟲之最惡者也。老則吐レ汁自裹、久漸堅凝如ニ巴荳ノ大ノ、就ニ其中一作レ繭、謂ニ之蛄蟖一。正字通曰、蛓、蛄蟖別名、無足有毛、身扁綠色、似蠶而短、能螫レ人、俗呼ニ揚瘌子一。品字箋曰、蛓。刺毛蟲也。身大如レ蠶而毛作ニ五彩一、能螫レ人疼痛之奇能言喩。字鏡曰、蛓。伊良虫

○**須々美乃部保**（スズミノベボ） 本草和名 【漢名】雀甕 本草 【今名】スズメノタゴ

證類本草曰、雀甕。唐本注云、此物紫白間斑狀似ニ棒碟文ニ可レ愛、大者如ニ

雀卵ニ在ニ樹間ニ似ニ螵蛸蟲ニ也

一名　須々美乃川保　本草類編○本草和名曰、雀甕。和名須々美乃都保

形狀　本草類編曰、雀瓮。和須々美乃川保。又云、計无之。八月取之。但五色斑毛生之也。在石榴枝上之可用也○雀甕ハ梅石榴棗柹ノ樹枝ニ粘着ス、形雀卵ノ如ク白質褐黒斑文アリ、殼堅シ、內ニ蟲アリ

乎岐無之（ヲキムシ）　倭名類聚鈔

漢名　尺蠖　本草

今名　シヤクトリムシ

本草綱目曰、似ㇾ蝎而小、行則首尾相就屈メ而後伸ル者ヲ爲ニ尺蠖ニ

一名　於幾無之　天文写本和名鈔○倭名鈔曰、蚇蠖。和名乎岐無之　新撰字鏡曰、蠖。烏郭於擢二反、乘虫也。蝍蝛也。屈申虫、衣比万良虫

衣比万良虫

形狀　○大和本草曰、尺蠖（シヤクトリムシ）。蠋ニ似テ長ク、小キニ色青クメ、行ニハ首尾ヲ一處ニヨセテ、頭ヲ先ニ尾ヲアトヨリ首ニツケテ行虫ナリ。恰手ノ指ニテ寸尺ヲトルガ如シ。俗ニ尺トリムシト云

乃牟之（ノムシ）　倭名類聚鈔

漢名　木蠹蟲　本草

今名　キクヒムシ

一名　乃無之　天文写本和名鈔○倭名鈔曰、蠹。說文云、蠹木中虫也。和名乃牟之。山密往來曰、研精之功勞似虫食木。新撰字鏡曰、蛀。注音、謂虫物損壞衣者如白魚等。乃牟之

〔形狀〕○大和本草曰、木蠹蠐螬ニ似テ節長ク足短ク、腐木ノ中ニ生ジテ木ヲウガチクラフ、蟻ニ似タリ、後ニ天牛トナリテトブ

屋蠹 山堂肆考 〔今名〕ドウトヲシ 筑前 家作ノ木ヲ食フ虫

捷錄曰、木朽而蠹生。山堂肆考曰、屋蠹。蚌蠹。入家屋中蠹也。似蟻而大。正白色。蠹食梁棟如鋸開薄片。腐屑可掬。最畏土鼈及鴿鳥。蓋其氣相制耳。夏日南風起時。則悉脫殼生翅。如蟻飛出 〔集註〕帝王編年記曰、村上天皇應和三年二月内裡火事、世人云、新造内裏柱虫食三十一字、其詞云、作倫文持歴許南菅原舍棟之板間之不合限者。叡岳要記曰、内陣妻戶調木上、虫食文云、得見此塔礼拜供養當知是等持近菩提云云件木隱其上調木螺摺上被打付畢云云

〔今案〕屋蠹ハ即白蟻也。後羽化シテ飛蟻（農政全書曰、春暮暴發、屋木中出飛蟻）トナル。飛蟻ハ羽アリ也。下ニ見エタリ。本草啓蒙曰、白蟻、此蟲ハ朽木、或ハ木ニ近ヅキ常ニ濕ヘル柱杙中ニ自生シ、木ヲ嚙中ヲ空シク數ナクソノ内ニ往來連行ス、蟻ノ形狀ニメ色白ク、春暖ノ候ニ至レバ羽化シテ出飛ブヿ甚多シ。羽ハ四片ニメ身ヨリ長シ。身ハ淡黑色ニメ光アリ。其飛ブヿ高キヿ能ハズメ地ニ下リ、即翼ヲ脫シテ地上ヲ行ク

○波阿里 倭名類聚鈔 〔漢名〕飛螘 本草 〔今名〕ハアリ 本草綱目曰、白蟻卽蟻之白者、一名蟫、一名飛螘、穴レ地而居、蠹レ木而食、因レ濕營レ土、大爲ニ物之害一、初生爲ニ蟻蝝一、至レ夏遺レ卵生レ翼、而飛則變ニ黑色一、尋亦隕死 〔一名〕波阿利 天文写本和名

略記の裡書なり

鈔○倭名鈔曰、爾雅集注云、蟦、一名飛蟻、蟻有翼而能飛也。和名波阿里

羽蟻 三代實錄　**白虫** 扶桑略記廿四曰、延喜廿三年五月廿二日、不レ知レ名白虫飛、竟ニ城東大路一、北從ニ三條間一南及ニ六條一、竟ニ大路正中一、如レ曳レ帛、長六分、落死者多

【集註】 三代實錄卷第五十曰、光孝天皇仁和三年八月四日乙巳、地震五度。是ノ日、達智門ノ上ニ有レ氣、如レ煙ノ非レ煙ニ、如レ虹ノ非レ虹ニ、飛上テ屬ケリレ天ニ。或人見レ之、皆曰、是羽蟻也。八日己酉、有ニ羽蟻一、出ニ大藏正藏院一ニ、群リ飛ト竟レ天、屬ツケリニ于船岳一、扶桑略記此下有曰其氣如虹文 吾妻鏡二十曰、建暦二年十月廿日、午尅、鶴岡上宮寶前羽蟻飛散、不レ知ニ幾千萬一。同卷第三十一曰、嘉禎二年四月一日午尅、鶴岡若宮羽蟻群集。同卷第三十八曰、寛元五年正月廿九日、羽蟻群集、充ニ滿鎌倉中一云云。山槐記曰、治承四年五月十四日、賀茂社羽蟻出來事。扶桑略記廿二曰、宇多天皇寛平元年十月云云大臣云、一日安然法師云、近來在ニ雲林院一人云、蟲螽々、爰出看レ之、其虫所レ竟、東至ニ園池司一、西至ニ絹笠岡一、北至ニ紫野一。即羽蟻也。康富記曰、嘉吉三年四月廿日、又先日比、春日社一御殿、瑞籬內羽蟻之由、社家有注進。永享八年有此事、仍來廿七日可被發遣春日一社奉幣使之由、頭弁爲奉行、今日被仰清大外記

毛毛乃牟之（モモノムシ） 倭名類聚鈔　【漢名】 **桃蠹蟲** 本草　【今名】 **モヽノ木ヲクラフムシ**

倭名鈔曰、桃蠹。本草云、食桃樹虫也。和名毛毛乃牟之

阿乎無之 倭名類聚鈔　漢名 螟蛉 詩經　今名 アヲムシ

本草綱目曰、似蠶而在樹上食葉者爲蠋、而青小者爲螟蛉

一名 蒼虫 三代實錄○倭名鈔曰、螟蛉。毛詩注云、螟蛉蒼虫也。和名阿乎無之。塵添壒囊抄曰、蜂ニ似タル虫ヲ、ジガ〳〵ト云、何ナル名ゾ。似我似我ハ、只蜂ノ類也。本名ハ螟蛉也。朝野僉載ニ曰、蜂銜ヘ他虫ヲ置ニ於窠中ニ、呪ノ曰ニ似我々々ト、即成ㇾ蜂ト云云。故ニ名テ曰ニ似我ト也。我ガ子ニ非ル別ノ虫ノ子ヲ取テ、呪ノ我子トスル也○五雜組曰、螟蛉有ㇾ子、蜾蠃負ㇾ之、謂下負ニ它子ヲ作中己ガ子上ト也。故人以ニ過房子ヲ爲ニ螟蛉、此語用沿舛ルㇾ今ニ然蜾蠃實ニ非下取ニ它物ヲ爲ルニモ子ト也。酒ナ放ヲ卵ヲ窠中ニ、而殺シ小蟲ヲ以飼ㇾ之耳。隱居通議注云、蠮螉銜ㇾ泥竹壁及器物ニ作ㇾ房生ㇾ子、如ニ粟米ノ乃捕ニ取草上蜘蛛ヲ滿ニ中塞ㇾ之、以俟ニ其ノ子ノ爲ルニ糧ト、此蟲蓁々ト有ㇾ聲、足レリ破ルニ千古之誤ヲ、且ッ詩ニハ但言ニ蜾蠃負ㇾ之、未ㇾ言ニ其作ニ己ガ子ト也。則楊子雲類セヨトㇾ我之亦誤ㇾ之也

宇自 新撰字鏡　漢名 蛆 本草　今名 ウジ

正字通曰、蛆子胥切、音疽。蠅乳ニ肉中ニ所ㇾ生。本草時珍曰、蛆蠅之子也。凡物敗臭則生ㇾ之○字鏡曰、蜡、且鹿反、去、宇自。蛆、子餘反、宍中蟲也○蜡。字典曰、周禮註、蜡骨肉腐臭蠅蟲所ㇾ蜡也。證類本草曰、蜡。音宅、一名水母。即クラゲ也

一名 波閉乃古 倭名抄曰、蛆、和名波閉乃古。蠅子也

佐之（サシ） 倭名類聚鈔　[漢名] 蠁虫 爾雅註　[今名] ハヘノコノ小者

倭名鈔曰、蔣魴切韻云、蠁子、酒醋上小飛虫也。和名佐之。按酒醋上ノ小飛虫、醯雞ニタ、サカバイ也〇蠁。爾雅註曰、今呼蛹蟲爲蠁。字典曰、蠁。廣韻、蛹中蟲也。蠶化爲レ蛹、蛹化爲レ蛾

與奈無之（ヨナムシ） 倭名類聚鈔　[漢名] 蛄螿 爾雅　[今名] コメムシ

倭名鈔曰、蛄螿。爾雅集註云、蛄螿。今穀米中蠹小黑虫也

[集註] 古事記曰、奴理能美之所レ養虫一度爲レ殼、一度爲レ蜚（ツノムシト） 有下變三ニ色ニ之奇虫上者、行ニ見此虫ニ而入坐耳　字典曰、蜚。爾雅、蜚。蠦肥。疏、其爲レ蟲臭惡。アブラムシ也

[形狀] 蛄螿ハ米中ニ生ジ、黑甲ニシテ細長、身薄ク長サ三四分、形コガ子虫ニ似タリ。一種鼻長ク、二分許ノ者ハ米蟓也。難字智燈ニ出タリ

須久毛無之（スクモムシ） 倭名類聚鈔　[漢名] 蠐螬 本草　[今名] ネキリムシ　[一名] 須久毛牟之 本草和名曰、蠐螬。和名須久毛牟之。倭名鈔曰、蠐螬。和名須久毛無之　須久毛虫 新撰字鏡曰、蟦。在雞反、須久毛虫　須久毛无之 本草類編　己伊无之

本草綱目曰、蠐螬。其狀如レ蠶而大。身短節促、足長有レ毛、生ニスル樹根及糞土ノ中ニ者、外黄内黑、生ニスル舊茅屋上ニ者、外白内黯

同上 【集註】 本草類編曰、蠐螬。和須久毛无之、又云已伊无之。不拘時採之 【形状】 〇大和本草曰、蠐螬（キリウジ）。地中ニ生ジ、白大ニ身短ク節シヾマル者、菜ノ根ヲキル 【附方】

女人陰脱肛治方

頓医抄曰。スクモ虫ノ自然ニ死タルヲ取テ、灰ニ焼テ、猪油ニトキテ可付

仁（ニ）波（ハ）豆（ツ）々 倭名類聚鈔 【漢名】 地膽 本草 【今名】 ツチハンメウ

證類本草曰、地膽。陶隱居云、狀如ニ大馬蟻一有レ翼。圖經云、形倍黑色 【一名】 尓波都々 天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、地膽。和名仁波豆々 【形状】 〇本草啓蒙曰、地膽。山中土内或ハ原野石間ニ居リ時時出行ク、長サ一寸餘、濶サ三四分、色黑ク碧光アリ、背上ニ短翅アリ、飛ブヿ能ハズ。地膽ハ青腰蟲ニ似テ、大ニメ背ニ翅アルヿ青腰蟲ノ如シ。翅身足俱ニ碧黑色

地膽圖



ツチハンメウ

七月は三年のなり

止己與虫 新撰字鏡　【漢名】蠋 正字通　【今名】イモムシ　【一名】常

正字通曰、蠋與レ蜀同。又蜀字註曰、蟲狀似レ蠶墳首瞑目色多青。淮南子蠶與レ蜀相類、而愛憎異也。詩作レ蠋。凡草木上皆有レ之、各隨二所レ食草木之性一、故廣志云、藿蠋香槐蠋臭

世神 日本書紀　騰擧預能柯微 同上〇字鏡曰、蠋。之欲反蠋止己与虫

蟲ノ名、通作レ烏。爾雅曰、蚅ハ烏蠋、註大蟲如レ指似レ蠶。疏、烏蠋ハ形似レ蠶而大サ如レ指

止己與牟之 字鏡曰、蝺。一胡反、平、蠋。止己与牟之〇字典曰、蝺蝺蠋

【形狀】

日本書紀皇極天皇曰、秋七月、東國不盡河邊人、大生部多勸レ祭二虫於村里之人一曰、此者常世神也。祭二此神一者致二富與レ壽。巫覡等遂詐託二於神語一曰、祭二常世神一者貧人致レ富老人還レ少。由レ是加勸捨二民家財寶一、陳二酒菜六畜於路側一而使レ呼曰、新富入來、都鄙之人取二常世虫一置二於淸座一。歌儛求レ福棄二捨珍財一。都無レ所レ益損費極甚。於レ是、葛野秦造河勝、惡二民所レ惑打二大生部多一。其巫覡等恐休二其勸祭一。時人便作レ歌曰、禹都麻佐波、柯微騰母柯微騰、枳擧曳倶屢、騰擧預能柯微乎、宇智岐多麻須母。此虫者常生二於橘樹一或生二於曼椒一。其長四寸餘、其大如二頭指一許、其色綠而有二黑點一。其貌全似二養蠶一。〇大和本草曰、蠋。薯蕷ニ生ズルハ大ニ肥テ大拇指ノ如ク、長サ三四寸アリ。イモムシト云、青色又褐色アリ

差曾利（サソリ） 新撰字鏡與二蠚蠋一同名　【漢名】蠍 本草　眞物和產未詳

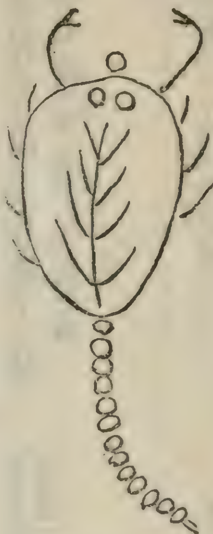
本草綱目曰、蠆。形如ニ水黽一、八足而長尾有レ節、色青。字鏡曰、虰蛵佐督利。爾雅曰、虰蛵負勞。註、曰即蜻蛉也

兩ガ直ヒ百疋

二百疋ニ及ブ

形状

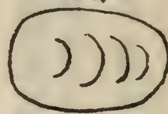
福田方曰、全蝎如此形ナル虫之。足ヲ去テ微炒テ使ヘ。不ニ渡来ニ時ハ一



頓医抄曰、乾蝎黄色ニシテ小ヲ用

廚事類記曰、餲餅煎麺作蝎虫形也○推篷寤語曰、如江南無蠍虎以ニナリ蠍虎ハ多ク喜ヲ燥。按ニ蠍ヲ蠍虎ト云コト此ニ見エタリ○蝎ノ字同名アリ。本草綱目ニ、凡木中ノ蠹蟲通名爲レ蝎ト云ハ木クヒムシ也。字典曰、蠍。俗作レ蝎非○本草啓蒙曰、蠍身ハ蟷螂ノ如クメ八足アリ、此外ニ前ニ向ヒテ兩足アリテ、手ノ如ク長クメ末ニハサミアリ、尾ハ細長クシテ蜻蛉トンボウノ尾ノ如ク、末ニ勾レル刺アリ

鋁鍸



䗪虫 本草

和産未詳

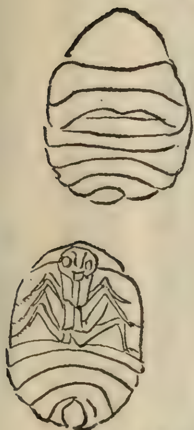
本草蘇恭曰、此物好生ニ鼠壌土中及屋壁下一、狀似ニ鼠婦一而大者寸餘、形小似レ鼈無レ甲、而有レ鱗

集註

延喜式巻第三十七曰、典薬寮。臘月御薬、䗪虫六十枚

延喜式傍訓アクタムシ

䗪虫圖



黒褐色無翅頭足斐蠊(アブラムシ)ニ似タリ背ハフナムシニ似テ短ク闊シ

者小神 大隅國風土記 【漢名】 沙虱 本草

廣東新語曰、有沙蝨者生水中、大不過蟣喜入皮膚害人。本草時珍曰、廣志云、沙蝨在ニ水中ニ色赤、大不レ過レ蟣、入ニ人皮中ニ殺レ人 【集註】 塵添壒囊抄曰、大隅國ハ、夏ヨリ秋ニ至マデ、シラミノ子多クシテ、食ヒ致サル、者アリ。是風土記ニ云ヘルニハ沙虱二字訓者小神注セリ。サテハ、キサシトモ云ベキニヤト覺ユ

齒乃虫（ハノムシ） 字鏡 【漢名】 齒蠹 說文

新撰字鏡曰、齲。去主反、上齒病、波也牟。又齒乃虫。說文齲齒蠹也。倭名鈔曰、齲齒。釋名、齲蟲齧之齒缺朽也。齲齒、無之加女波 【集註】 砂石集曰、南都ニ齒取唐人有キ、或在家ノ猥貧ニ〆利簡ヲサキトシ、事ニフレテアキナヒ心ノミアリテ得モアリケルガ、虫ノクヒタル齒ヲトラセントテ、唐人ガモトヘユキヌ。ハ一トルニハ、錢二文ニサダメタルヲ、一文ニテトリテタベトイフ。少分ノ事ナレバ、タヾモトルベケレドモ、心ザマノニクサニ、フツト、一文ニテハトラジト云、ヤヽヒサシク論ズルホドニ、オホカタトラザリケレバ、サラバ三文ニテ、ハ二ツトリ給ヘトテ、虫モクハヌヨニヨキハヲトリソヘテ、二トラセテ、三文トラセツ

加以（カイ）倭名類聚鈔　［漢名］蚘蟲 本草綱目　［今名］ハラノナガムシ

本草綱目曰、蚘人腹中ノ長虫也。按巣元方病源ニ云、人腹ニ有ニ九虫伏虫ハ長四分、群虫之主也。蚘蟲長五寸ヨリ至ニ一尺ニ發則心腹作レ痛、上下口喜ッ吐ニ涎及清水ヲ貫ニ傷スハ心ヲ則死、白虫長一寸、色白頭小、生育轉多、令ニ人精氣損弱、腰脚疼ニ。奇効良方曰、白蟲生ニシテ子孫ニ多ス其母轉大サ至ニハ四五丈ニ亦能ク殺レ人

［一名］阿久太　倭名鈔曰、蚘虫寸白虫、唐韻云、蚘音回蛕蛔并同、人腹中長虫也。病源論ニ云、蚘虫今案一名寸白、俗云加以、又云阿久太　飲ニ白酒ニ食ニ生栗ニ等所レ成ル也

［集註］今昔物語曰、其醫師よりてこれをみていはく、必定寸白なりといふ云云ぬくにしたがつて、白き麥のやうなるものさし出たり。それを取てひけば、綿ことながくのぶれば、出るにまかせ廳（まんどころ）の柱卷つけたり。漸ミ卷にしたがひて、此女が顏の腫いゑ、色もなをりけり。柱に七尋八尋ばかりまきおはるときに、女が目鼻なをりて、例の人のごとくに成ぬ

古名錄蟲部卷第四十九　終

古名錄蟲部卷第五十目錄

鳴蟲類

通計十二種

古名錄蟲部卷第五十

紀藩　源　伴存撰

鳴蟲類

叢海集曰、馬蜥之蟲、至レ秋而鳴、秋之令金也。蟲色綠木也。金木相軋以爲レ聲、然以ニ兩股ニ擊レ翼而鳴、金木傍擊之謂也。丹鉛總錄曰、鄭玄注、脰鳴竈黽之屬、注鳴精列屬、旁鳴蜩蟬屬、翼鳴蟋蟀屬、股鳴螽斯屬、胷鳴榮原屬。○榮花物語玉の臺曰、むしはこゑ〴〵よりあはせて、なくもたゞならずきこゆ。同きくはわびしとなげく女房曰、せんざいもやう〳〵かれ〴〵になり、むしのねもよはりゆき。同根合曰、あきになるまゝに、むしのこゑをきかせ給も。扶桑略記廿三、裡書曰、延喜九年十月廿八日、仁王會、依ニ桃李襖秋華、蟄虫冬鳴ニ也。俊賴髓腦抄曰、くさむらのむしのこゑ〴〵に人にしられ。源氏物語桐壺曰、月は入がたのそらきようすみわたれるに、風いとすゞしくふきて、くさむらのむしのこゑ〴〵もよほしがほなるも、いとはなれにくきくさのもとなり。同帚木曰、風すゞしくて、そこはかとなきむしのこゑ〴〵きこえ。宣胤卿記曰、長享三年八月一日、壇帋十帖幷虫籠進禁裏

鈴蟲（スヾムシ）　禁秘抄

漢名　金琵琶　秘傳花鏡　今名　チンチロリ　京

選の上群本、寫本、向の字あり。考註本は屋の下なし

【一名】 すゞむし 枕草紙曰、むしはすゞむし。文明写本下學集曰 鈴レイ眞言具。リン禪律具。スヾ御子具

【集註】 禁秘抄曰、松虫鈴蟲類、人々進レ之、或被レ召ニ賀茂社司、堀河院御時、頭以下向ニ嵯峨野ニ、誠有ニ逍遙ニ是給ニ虫屋ニ選レ虫奉レ之。女郎花物語曰、夕暮がた、ちいさきむしこに、すゝむしをいれて、むらさきのうすやうにつゝみて、はぎの華にさして云云。公任卿集曰、ことのうせさせ給ふて後はなちたるすゞむしのとしへて侍ければ「いかでかは昔たゝざらん鈴虫のうき世にふるはくるしきものを。十訓抄曰、其野には嵐にたぐふ紅葉、風になびく尾花がもとに、松虫鈴虫鳴にや。筑紫道記曰、夕日がくれのほど、松虫の鳴からしたるもあはれあさからず

【形狀】 義經記曰、梶原は、こんくずのはかまに、山ばと色のすいかん、たてゑぼし、なんりやうをもつてつくりたる、こがねのきくがた打たる銅拍子に、たくぼくの緒を入て、祐經が右のざしきになをりて、つゞみの手色にしたがひて、すゞむしなどの鳴くやうにあはせて、はたけ山をまちけり。源氏物語かゞり火曰、弁少將拍子うち出て、忍びやかにうたふこゑすゞむしにまがひたり。ふたかへりばかりうたはせ給て。同すゞむし曰、げに聲々聞えたるなかに、すゞむしのふりいでたるほどはなやかにおかし。權中納言定賴卿集曰、おまへなる人のこゑをにはかにいとたかく笑ひければ「ふりたてゝわらふこゑをば秋過て又すゞむしの鳴かとぞきく。堀河院百首曰「御狩するかたのゝ野べのすゞ虫は戀するこゑかふりたてゝ鳴。餘略之〇今京畿ニテ、チンチロリト呼ブモノハ古ノ鈴蟲也。形ハ金鐘兒ニ似テ微大茶褐色

松虫（マツムシ）禁秘抄　［漢名］金鐘兒 花鏡　［今名］スヾムシ

帝京景物略曰、有蟲、黑色、銳前而豐後、鬚尾皆岐、以躍飛、以翼鳴、其聲磴稜稜、秋蟲也、暗卽鳴、鳴竟刻、明卽止、瓶以琉璃、飼以靑蒿、狀其聲名之、曰金鐘兒。花鏡曰、金鐘兒似二促織一身黑而長。銳前豐後、其尾皆岐。以レ躍爲レ飛以レ翼鼓鳴。其聲則磴稜々、如二小鐘一〇謠曲野々宮曰、誰松虫の音は鈴々（リン）として。同松虫曰、分て我忍ぶ松虫の、聲りん〱りん〱として、夜の聲明々たり［集註］源氏物語さかき曰、風いとひやゝかに吹て、松虫のなきからしたるこゑも、おりしりがほなるを。同すゞむし曰、秋の虫のこゑ、いづれとなき中に、松むしなんすぐれたるとて、中宮のはるけき野へをわけて、いとわざとたづねとりつゝ、はなたせ給へる、しるくなきつたふるこそすくなかめれ。名にはたがひて、命の程はかなきむしにぞあるべき。心にまかせて、人きかぬおく山、はるけき野の松ばらに、聲おしまぬも、いとへだて心あるむしになんありける。古今著聞集卷第五曰、むしをはなちて、松虫のしきりにこゑの聞ゆるは千世をかさぬるこゝろなりけり。同卷第十九曰、松むし、鈴むしをはなたせ給けり云々虫をもなかせたり云々。今物語曰、此女房ども、なくねなそへてのべの松むし、とくち〴〵にひとりごちあへるを。公任卿集曰、松虫の音をたづねてやほりつらんのどけくみゆる秋の花かな。俊頼髓腦抄曰、このもとに、まつむしなどの、こゑきこえぬかや、とためらひつゝ。堀河院百首曰、夕暮は過うかりけり秋の野は我まつ虫の聲ならね共。十訓抄曰、萩をみなべしかぜになびきて、松虫のこゑ所々聞ゆるをわけ入ほど、何となく心ぼそくてあはれ也。

てへそ カ
十訓抄 上

見の下「姑蟬」二字

撰集抄曰、あかつきに松虫の鳴待りければ云〻。さよ衣曰、松むしの音すごう、ふりたて〻なくすゞむしの聲は、いかになりゆく身のはてならむ、となみだつゆけきゆふべなりけり

形狀 ○今スヾムシト呼モノハ古ノ松蟲也。大和本草曰、スヾムシ西瓜（スイ）ノサネノ如ク扁クヲ色黑シ、首小ニヒゲ半白ク、ヒゲ二條アリ、長キ事二三寸、羽アリ、背ニ細文アリ、色ハ不レ異ニ于身一、尻ニ左右二毛アリ、左右各三足、スベテ六足アリ、聲清亮ナリ、秋夜ナク

岐（キ）利（リ）岐（キ）利（リ）須（ス） 天文写本 和名鈔

漢名 蟋蟀 花鏡

今名 ツヾリサセ イトヾ京 コホロギ江戸

今案 岐利岐利須ハ初秋夜庭砌ノ間ニ鳴テ、其聲美ニヲツヾリサセト云ガ如シ。古今集ニ、秋風にほころびぬらしふぢばかまつゞりさせてふきり〴〵す鳴。と云此也。秋更ニ及テ、人家ノ中ニ入テ、土石ノ間ニ鳴。詩經ニ七月在レ野、八月在レ宇、九月在レ戸、十月蟋蟀入ニ我牀下一。ト云、始ヨリ終ニ至デツヾリサセト鳴。身黑ク頭圓シ

一名 木里木里須 倭名類聚鈔曰、蟋蟀、和名木里木里須

支利〻〻受 新撰字鏡曰、蠷支利〻〻受

支利〻〻須 字鏡曰、蟭。虞各反、蟋支利〻〻須 ○字典曰、蟋。說文、蟋蟀蛁蟟也。鹽鐵論、諸生獨不レ見ニ季夏之蟋一乎。音聲入レ耳秋風而聲無ニ互見一。蛁蟟ハミン〳〵也。又蟋蚸。爾雅曰、蟴螽蟋蚸。註、蚸音歷、今俗呼似ニ蚣蠑一而細長飛翅作レ聲者爲ニ蟋蚸一。卽ハタ〳〵チギムシ也

させ

註一とあり

藻塩草 はや丸 同上異名之 ちくろ 同上、是も異名之。八雲御抄曰、蛬蟋蟀、壁書中に有はや丸云、つゞりさせといふ也。平家物語曰、千草にすだくしつしゆつのきり〴〵す。蠡海集曰、蛩近陰依於土以陽而爲聲、蛩則背翅鳴。帝京景物略曰、塔鐸忽歛他聲作于下籽籽然類蛩鼓翼者

集註

萬葉集卷第八曰、湯原王蟋蟀歌一首。暮月夜、心毛思努爾、白露乃、置此庭爾、蟋蟀鳴毛。同卷第十曰、詠蟋蟀。秋風之、寒吹奈倍、吾屋前之、淺茅之本、蟋蟀鳴毛。影草乃、生有屋外之、暮陰爾、鳴蟋蟀者、雖聞不足可聞。庭草爾、村雨落而、蟋蟀之、鳴音聞者、秋付爾家里。寄蟲。蟋蟀之、待歡、秋夜乎、寐驗無、枕與吾者。草深三、蟋蟀多、鳴屋前云云。蟋蟀之、吾床隔爾、鳴乍本名云云。明月記曰、寛喜二年九月廿九日、秋日早沒、暮雲僅聳、菊蘂初開、蛬聲猶殘。本朝無詩題曰、秋夜宿野亭于吮天晴月明終夜不眠鴻雁叫天蟋蟀今床。又曰苔地露寒蛬怨切。又曰雨滴蓬蒿只聽蛩。又曰暗蛬過雨曉声餘。又曰暗蛩寒響猶傍壁。桐火桶曰、袖のつゆ霜は、夜さむの秋になりそめて、物がなしきに、まくらにちかききり〴〵すの、こゑよはり行て云云。住吉物語曰、いとかた寒きさまくらのしたに、よもすがらおとなふきり〴〵すのこゑも、そのことゝなきに。闘詩略記曰、蛬聲入夜催。順。蛬聲切々夜漫々云云直幹。蛬喧暮艸夜更闌。撰集抄曰、又枕の下にきり〴〵すの聞えければ云云。世繼物語曰、秋の夕暮きり〴〵すいたく鳴けるを、ながき思ひはなど詠め給けるを。歌林四季物語曰、かべのうちのきり〴〵すも、かれ〴〵になりて。源氏物語曰、かべの中のきり〴〵すだに、まどをに聞ならひ給へるに。同あげまき曰、かべの中のきり〴〵すは、はひいで給へる、おぼすらん。吾妻鏡卷第二十一日、建暦三年八月十八日丙戌、霽、子尅、將

軍家出₋御ンテ南面₋、于レ時燈消人定マリ、悄然トメ無レ音スルヿ、只月色蛬思ヒ傷ム心計也。御歌數首有₋御吟₋。曾我物語曰、さらぬだに秋のゆふべはさびしきに、獨ふせやの軒の月云々まくらによはるきりぐす。東關紀行曰、寢屋ちかききりぐすのこゑの乱れも、ひと方ならぬねざめの催しなれば。新撰西行物語曰、ねやの秋風身にしみ、きりぐすのこゑよはりゆくも、あはれにおぼえて

形狀

萬葉集曰、蟋蟀高低壁下鳴。又曰、秋風之吹立沼禮者蛬己鯛綴砥木之葉緒脊刺。藻塩草曰、世俗にきりぐすは、つゞりさせ、からはひろはん、となくと云り。からはとは、きぬ布のやれて、何にもすべくもなきを云ゝ。それをはからうへをつくるにくはへてつくりたればつよきゝ。からは、わらう心と云也。又足などを、物にふみきりたるこそのまいてのはしを、なはにないて、火をつけて、そのきずをあたゝむるをば、からは火うつと云也。されば、此歌は秋風の吹に、ふちばかまのほころびぬるは、すなはち、やれぬる心ゝ。つゞりは、おほやうやれたる物を、とりあつめてさせば、そのふちばかまや、秋かぜに、やれぬらん、つゞりさせ、からはひろはん、ときりぐすのなくは、とよめるゝ。又云、きりぐすの名をば、させと云と云り。其火にさせと云、きりぐすとはいふを、つゞりさせとはそへたる也。なくを云にはあらずとゝ。しかれ共、ふるき物に、これをいづれともわかざるなりと云云。梁塵愚案抄曰、きりぐすの、ねたさ、うれたさや、見そのふに、まいりて、木のねをほりはんで、をさまさつのおれぬ、をさまさ。袖中抄曰、つづりさせて、ふきりぐすなくとは、世俗に、きりぐすは、つゞりさせ、からはひろはむ、となくといへり。からはとは、きぬ布のやれて、なにゝもすべくもなきを云ゝ。

波太於里米（ハタオリメ） 倭名類聚鈔　【漢名】促織 即蟋蟀也　【今名】アネカウロギ 紀州

帝京景物略曰、爾雅翼ニ云、蟋蟀ハ生ニ埜中ニ、好ミ吟ス于土石磚甓下ニ、鬬則矜鳴其ノ聲如レ織、故幽州謂ニ之ヲ促織ト也

【今案】波太於里米。岐利岐利須。古保呂岐ハ其蟲三種ニ〆一類也。古エハ其別チ正シカリシニ、今ハ相混ゼリ。波太於里米ハ、アネカウロギニ〆、其頭方ニ〆蟷螂頭ノ如シ。花鏡ニ蟋蟀ノ種類ヲ載テ蟷螂形者ト云此也。又婦人ノ髮結タル形狀ニ似タリ。其聲ハツヾリサセト鳴ズ、數聲重子、或ハ二三四五聲重子鳴テ、急ニ機ヲ織聲ニ似タリ。和名鈔曰、促織。和名波太於里米。鳴ク聲如シ急ニ織ルカ機ヲ、故ニ以テ名レ之。新撰萬葉集曰、鵙鵙聲之羽風緒寒美促織之管子纒音之切切砥爲。此說ニ相合ス、故ニ波太於里米ノ名アリ。然レ𪜈三物皆蟋蟀也

ハタヲリメノ圖



黒色

うノ下古写本やアリ

仰られハ古写本大系本「あり」トアリ

一名 はたをり 枕草紙 波太於利米 天文写本 和名鈔 はた織むし 曾根好忠家集曰、七月終、をみなへしにほへるのべとみるなべにはた織むしもよはに鳴なり

幡織 八雲御抄曰、幡織はたおる虫といへり

集註 散木集曰、はたをりめ。すゝきをはたをりめしてよほに出てたてらぬ人をまねきもぞする。古今著聞集曰、花園大臣の御家に、始て参たる侍の、名簿のはしがきに、能は哥よみと書たりけり。おとゞ秋のはじめに、南殿に出て、はたをりのなくを愛しておはしましけるに、暮ければ、した格子に、人まいれと仰られけるに、藏人五位たがひて人も候はぬと申て、此侍の参たるに、たゞさらば汝おろせ、と仰られければ参たるに、汝は哥よみなど有ければ、かしこまりて、格子おろしさして候に、此はたをりをばきくや、一首つかうまつれ、と仰られければ、青柳のとはじめの句を申出したるを、さぶらひける女房達、折にあはずと思ひたりげにて、咲ひ出したりければ、物をきゝはてずして咲ふやう有ると仰られて、とくつかうまつれ、と仰られければ、あをやぎのみどりの糸をくりおきて夏へて秋ははたをりぞなく。とよみたりければ、おとゞ感じ給て、萩をりたる御ひたゝれおし出て給はせけり 十訓抄ニモ出

古保呂岐（コホロギ） 天文写本 和名鈔

漢名 油胡盧 促織志

今名 オニコホロギ

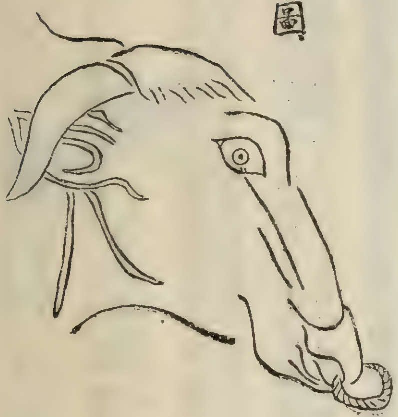
一名 古保呂木 倭名類聚鈔曰、蜻蛚。和名古保呂木○爾雅曰、蟋蟀蛬。註、今促織也。亦名ニ靑𧎋一。本草作ニ蜻蛚一。按ニ唐ノ書ニテハ蜻蛚、蟋蟀、促織、蛬一物ノ名也○擁書漫筆曰、猿

源氏册子に、まきゑのばんにこほろぎのさかづきすゑて、と見ゆ。富士人穴册子に、たけなるかんざしは、せいたいかたていたに、こほろぎのすみをすりながしたるごとくえ。うらみの介下卷に、雪のうすやうに、こほろぎの墨すりながし、などあるをおもひあはすれば、黑漆の盞をこほろぎのさかづきとはいへるなるべし。こほろぎといふ虫も、そのいろくろければよしあり

今案　國牛十圖曰、河内牛。額さし出て、こうろぎがほなり。江戸砂子ニ、蚷ノ字ヲかうろぎト云。字鏡ニ、蚷。足万豆比（アシマツヒ）、螵蛸螳蜋之子阿志万夫（アシマフ）、又於保地不久利ト云。花鏡蟋蟀ノ註、螳螂形者ト云ルヲ以テ考レバ、國牛十圖ニ出ルこう

國牛十圖

河内牛圖



ろぎがほハア子コホロギヲ指ス者也。然則萬葉集ニ出ル蟋蟀モ、廣クコホロギト訓ジテモ害ナカルベシ。然レトモ倭名鈔ニ波太於里米、古保呂木、木里木里須。ト三物別條ニ出ルヲ以テ觀レバ、三物各別物タルヿ明白也。四季物語ニ、またなりはうつくしう玉おしなどいひていみじけれど、きり〴〵す、はた織、かうろぎにさへおとりて、こゑたてぬもあれどトミユレバ、波太於里米、古保呂木、木里木里須、各別物タル正證也。其古保呂木ハ油胡盧也。今オニコホロギト云、形狀蟋蟀ヨリ大ニシテ、頭圓ク身黑、啼聲馬ノ嘶ニ似タリ。令義解ニ、或語聲嘶變。倭名鈔病類ニ、嘶。古路々久。又牛馬鑑ニ、嘶。玉篇云、嘶。音西、訓ニ以波由ト。俗以奈々久、馬鳴也。トミユ。尤可レ證。落くぼ物語曰、かほつき駒の樣にて、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。ひとゝ嘶きて引放れていぬべき顏したり。本朝麗藻曰、于レ時西鳥漸ク落、離駒頻嘶。字鏡曰、嘶。馬啼也。伊奈久。丹鉛總錄曰、蛩未ニ嘗テ斷ハ而曰ニ蛩斷ト。古今注曰、蟋蟀、一名ハ吟蛩、一名蛩、秋ノ初メニ生得レ寒ヲ則鳴ク。正字通曰、蛩同蛬。嘶先棲切、音西、聲長而殺也。曾我物語第七曰、むまやせてはけながくいばふるにちからなし。同第十曰、むまもしやうあるものなれは、人とのわかれをやおしみけん、ふじのゝそらをかへり見て、二三どまでぞいばへける。撰集抄曰、駒と生ては、おもきをおひて九重の雲にいなゝき。隨兵次第曰、馬のいばゆるについて、吉凶まじなふ事云〻馬のいばふに、吉凶といふは云〻。書犢曰、蟋蟀キリ〴〵ス、コウロギはいづかたにもおほし。キリ〴〵スにあらず。大和國には今もあり。ヤマコウロギといふ豐後國にてはキナツヾといふ、よくたゝかふ。このむしコウロギより形大にて健なり。聲高くして、よくすめりし木里木里須、波太於里米ハ倶ニ促織ニシテ、木里木里須ハ、ボウズカウロギニシテ、ツヾリサセト鳴。波太於里

米ハ、アヲカウロギニメ、其聲急ニ機ヲ織ガ如シ。古保呂木ハ其形ボウズカウロギニ同ク、大ニメ聲馬ノ斷ニ似タリ

世比（セビ）新撰字鏡　［漢名］**蟬** 本草　［今名］**セミ** 總名也

物理小識曰、蟬以レ腹鳴。眞珠船曰、蟬不ニ翼ニテ鳴、蟬以レ翼鳴キ不レ啻タ若キ自ニ其ノ口ニ出ト。龍因レ角聽、爲其不足於耳、與世以爲巧對。按考工記以旁鳴者以翼鳴者。鄭玄注旁鳴蜩蟬屬、翼鳴蟋蟀屬。許氏說文、蟬以旁鳴者、蟜蜻以翼鳴者、今睹蟬兩脅下有孔實能振迅作聲謂以翼鳴非也。蠡海集曰、蟬近レ陽依ニ於木ニ以レ陰而爲レ聲、蟬則腹板鳴

［一名］**勢ひ** 倭賴髓腦抄曰、勢ひ丸か哥〇字鏡曰、蛦、虫尾、又世比。蟜、世比。蟬、時旃反、蜩也、世比。嘒、虎惠反、世比乃己惠〇蟜卽鱎イセヱビ也。大淸會典、鱎魚ト云。傳信錄ニ龍頭蝦名レ鱎、大者一二尺、形絕タ似レ龍、時以供レ饌。正字通曰、蝦鰕雜ニ水族ニ鰕實ニ魚屬。說文蝦ニ歸ニ蟲部、鰕歸ニ魚部、族類分別甚明。按鰕譌爲レ蝦失考、正蝦ハ蝦蟇、蝦也

打蟬 萬葉集卷第二曰、打蟬等、念之時爾云云。一云、宇都曾臣等、念之。打蟬跡念之妹之。同卷第三曰、打蟬乃、借有ナレル身在者、露霜乃、消去ユ之如久云云。同卷第十三曰、打蟬之、命乎長ク、有社等云云。同卷第八曰、打蟬乃、人有ナル我レ哉云云。奧儀抄曰、うつせみ云々或說には文に打磬蟬と云事あり、磬をうつごとくなくゆへなり。いきたるをうつせみとよむはその義之

宇都蟬 萬葉集卷第四曰、宇都蟬之云云

欝蟬 萬葉集卷第三曰、欝蟬乃、惜此世乎、露霜ノ云云

欝膽 萬葉集卷第四曰、玉有者、手

露霜 寛永本霜露ニ作ル

二毋将卷乎、虛蟬乃、世ノ人有者、手二卷難石

宇都世美 萬葉集卷第十九曰、宇都世美波、戀乎繁美登云云。宇都世美乃、與能許等和利等云云

虛蟬 萬葉集卷第一曰、然爾有許曾、虛蟬毛云云。同卷第三曰、虛蟬之、代者無常跡、知物乎、秋風寒、思努妣都流可聞。同卷第八曰、吉念公者、虛蟬之云云。同卷第九曰、虛蟬乃、世人有者云云。同卷第十一曰、燈之、陰爾蚊蛾欲布、虛蟬之云云。同卷第十二曰、虛蟬之、宇都思情毛云云。虛蟬之、常辭登云云

宇都勢美 萬葉集卷第十九曰、宇都勢美波、物念之氣思云云。宇都勢美能、名乎競爭登云云。宇都勢美毛。無常阿里家里云云

宇都曾見 萬葉集卷第二曰、宇都曾見乃、人爾有吾哉云云

宇都曾臣 萬葉集卷第二曰、宇都曾臣跡、念之時云云。宇都曾臣等、念之時、携手

打背見 萬葉集卷第三曰、打背見乃、世之事爾在者云云

空蟬 萬葉集卷第二曰、空蟬師、神爾不勝者、離居而。同卷第四曰、空蟬乃、代也毛二行。同卷第十三曰、空蟬與人。同卷第一曰、空蟬之、命乎惜美○延喜式卷第十四曰 縫殿寮。蟬翼綾二疋云云

【集註】 明月記曰、寛喜元年六月十九日、昨今初聞蟬声。文曆二年閏六月廿五日、朝天遠晴、蟬声滿庭樹。四季物語曰、五月雨のはれまなき空も、いつしかなごりなくなりて、雲のみねく\たちかさなり、いみじきかな居が手にも、かうやうにはたくみえがたう、木葉のせみのこゑぐ\は、かしがましく、まくらがみうるさけれど、げには里のかたへの、ごぼぐ\となる・からうすの音とはやうかはりたり。源平盛衰記卷第十一曰、梢ニ高ク鳴蟬モ、熱サニ堪ヌ思カハ。蜻蛉日記曰、見な月のこかげにわぶるうつせみのむねさけてこそなくらん。紀巴富士見記曰、山深きかたつかた

なれば、蜩聲して後も殘る日に。殿上詩合曰、蟬鳴宮樹深。師家。夏蟬嘒々報二淸吟一云云。師基朝臣。云云嘒々新蟬迎レ夏鳴。又曰、資仲朝臣。夏蟬抱レ樸有二何情一、宮樹深中嘒々鳴。公任卿集曰、たや寺の君のむすめどものもとに、しろきかみに、せみをつゝみて、はちすの花にさしてやり給ふたりければ、蓮の花をつくりて、この歌かきて、せみのなかにさしいれて奉りたりける。いづれをかのどけきかたにたのまゝし蓮の露と空蟬のよと。返し。蓮葉にうかぶ露こそ頼まるれ何空蟬のよを歎らん。狹衣曰、御前の木だちこぐらく、あつかはしげなる中に、せみのあやにくになき出たるを、見いだしたまひて。聲たてゝなかぬばかりぞもの思ふ身はうつ蟬にをとりやはする。など口ずさびにいひまぎらはして。又曰、ありのうつせみとてなみだこぼれぬべきを。なぐさめ草曰、うつせみのむなしき音をなく夏むしの、身をいたづらになす事をかなしみ。つれ〴〵曰、夏の蟬の、春秋をしらぬもあるぞかし

[形狀] 源氏物語まぼろし曰、夏ごろもたちかへてけるけふばかりふるき思ひもすゝみやはせぬ。御返し。はごろものうすきにかはるけふよりはうつせみの世ぞいとゞかなしき。同夕顏曰、いよのすけ神無月のついたち比にくだる云云せみのはもたちかへてけるなつ衣かへすをみてもねはなかれけり。塵添壒囊抄曰、蟬モ淸キ虫也。露ヨリ外ニ不レ呑。和久良半の御法曰、夏衣蟬の羽のうすもに、たまらぬ袖の追風までもすゞしく覺侍りぬ

○世美乃毛奴計（セミノモヌケ） 本草類編 [漢名] 蟬脫 本草

[今名] セミノヌケガラ [一名] 蟬のぬけから 仙覺萬葉集註釋卷第一曰、うつせみとは、つねに人のおもひならひたる

依齋云。奈波美、恐脱二世字一

は、蟬のぬけがらをいふといへども云々

うつせみ 奥儀抄曰、うつせみとは、蟬のもぬけたるから也。みなきものをばかくいふ之云々せみはもぬけて、からをばをきてゆきさるものなれば云々。新撰字鏡曰、蛻。毛奴介加波。正字通曰、蟬脱蛻也。源氏物語若紫曰、いときよらに、ゆら〳〵として、あをみおとろへ給へるしも、いろはまほにしろく、うつくしげに、すきたるやうにみゆる御はだつきなど、世になくらうたげなり。もぬけたるむしの、からなどのやうに、またいとたゞよはしげにおはす

【集註】源氏物語うつせみ曰、うつせみの身をかへてける木のもとに なを人がらのなつかしきかな云 云 さすがにとりて見給ふかのもぬけをいかに云々 うつせみのはにをく露のこがくれて忍びしのびにぬるゝ袖かな。同夕顔曰、うつぜ見の世はうきものとしりにしをまたことのはにかゝるいのちよ云々なをかのもぬけをわすれ給はぬを。源平盛衰記巻第十九曰、身ハ蟬ノヌケガラノ如クニ成ヌ。重之集曰、五月ばかりに、さまうつくしきわらはの、からのうすやうに、蟬のもぬけをつゝみてもてきて、人にさしおこせてうせぬ

【藥製】福田方曰、蟬蛻(セミノヌケカラ)、翅足ヲ去テ湯ニ浸メ、土ヲ洗ヒ去テ、少シ炙リ過テ使へ。頓医抄曰、蟬蛻、土ヲ洗アブレ

奈波世美(ナハセミ) 倭名類聚鈔

【漢名】蚱蟬 本草

【今名】アカセミ

本草綱目曰、夏月始鳴、大而色黒者、蚱蟬也

【一名】南波世美 天文写本和名抄○倭名鈔曰、蚱蟬。和名奈波世美。本草和名亦同之。日本霊異記曰、蟬。奈波美。

奈和世

比 本草類編

【集註】本草類編曰、蚱蟬、和奈和世比。生楊柳上、五月採蒸乾。蜻蛉日記曰、六月になしつ。ひんがしおもてのあさひのけ、いとくるしければ、みなひさしにいでたるに、つゝましき人のけぢかくおぼゆれば、やおらかされらふしてきけば、せみのこゑいとしげうなりにたるを、おぼつかなうて、まだみゝをやしなはぬおきなありきり。にはゝくとて、はゝきをもちて、きのしたにたてるほどに、にはかにいちはやうなきこれば、おどろきてあふぎて、いふやう、よひ所〳〵といふ、なはせみ、きにけるは、むしだにときせちをしりたるよ、とひとりごつに、あはせて、しか〴〵となきみちたるに、おかしうも、あはれにも、ありけん、こゝちぞありきなかりける

【形状】〇大和本草曰、羽スキトヲラザルアリ、赤セミト云。晩ニナク。本草啓蒙曰、蚱蟬ハ形大ニメ翅ノ色赤ク、スキトヲラズ。八月ニ至リ未ノ刻以後多ク鳴ク

無末世美（ムマセミ） 倭名類聚鈔

【漢名】馬蜩 爾雅

【今名】クマセミ

帝京景物略曰、馬蜩蟉者、蟬也。名以聽者之所爲情。寂寥然也。鳴叅呼其候焉。三伏鳴者。聲躁以急。如曰伏天伏天。取者。以膠首竿。承焉。驚而飛也。鳴則攸然。其粘也。鳴切切。如曰吱吱。入乎手而握之。鳴悲有求。如曰施施。倭名鈔曰、馬蜩。和名無末世美。爾雅曰、蜩ハ馬蜩。註、蜩中最大ナル者ヲ爲ニ馬蟬ー

【一名】長蟬 言塵集曰、蟬長蟬とは大蟬之

【形状】〇大和本

かされら本ノマヽ
き本ノマヽ
こ本ノマヽ
り本ノマヽ

日具良之ト比具良之ト混同セリ

草曰、熊セミハ羽スキトホレリ、晴日辰巳ノ時ナク、他時ハ不レ鳴。雄ハ腹ニ黄嚢アリ、コレヲ鼓メナク。按ニ蜻蛉日記ニ云なはせみハ恐クハクマセミヲ云者也

比具良之 萬葉集

漢名 茅蜩 爾雅

今名 カナセミ

本草綱目曰、小而色青緑ナル者曰ニ茅蜩一。爾雅曰、蠽、茅蜩。註、似レ蟬而小、青色

一名 比久良之 倭名鈔曰、茅蜩。和名比久良之

日晩 萬葉集卷第十曰、詠蟬。默然毛將有、時母鳴カ奈武、日晩乃、物念時爾。鳴管本名

日倉足 萬葉集卷第十曰、寄蟬。日倉足者、時常雖鳴、我戀、手弱女我者、不定哭久。言塵集曰、日倉足ハ蜩茅之

日具良之 萬葉集卷第十五曰、伊麻欲里波、安伎豆吉奴良之、安思比奇能、夜麻末都可氣爾、日具良之奈伎奴。山布佐禮婆、比具良之伎奈久、伊故麻山、古延豆曾安我久流、伊毛我目乎保里

ひくらし 枕草紙

日晩之 萬葉集卷第十曰、詠蟬。暮影、來鳴日晩之、幾許、毎日聞跡、不足音可聞。芽子花、咲有野邊ニ、日晩之乃、鳴奈流共、秋風吹。同卷第十七曰、日晩之乃、奈吉奴流登吉波、乎美奈弊之云云

秋の蟬 言塵集曰、秋の蟬、ひぐらし

晩蟬 萬葉集卷第八曰、大伴家持晩蟬歌一首。隱耳、居者欝悒、奈具左武登、出立聞者、來鳴日晩

日くらし 堀河院百首曰、山里はさびしかりけり木枯の吹夕暮の日ぐらしのこゑ。八雲御抄曰、ひぐらし、秋近成鳴は、ひぐらしなり

集註 源氏物語とこなつ曰、日のどかに、くもりなき空の、

西日になるほど、せ見のこゑなども、いとくるしげに聞ゆれば。同夕霧曰、しばしふし給へる程に暮にけり。ひぐらしのこゑにおどろきて、山のかげいかに霧ふたがりぬらん云々。同やどりぎ曰、日ぐらしのなくこゑに、山のかげのみこひしくて、おほかたにきかまし物をひぐらしのこゑうらめしき秋のくれかな。蜻蛉日記曰、ゆふぐれのいりあひのこゑ、日九らしのね、めぐりのこてら、ちいさきかねども、我も〱とうちたゝきまつりなどするこゑをきくにぞ。又曰、やまぢにいたりかゝれば、さるのはてばかりになりにたり。ひ九らしさかりとなきみちたり。又曰、日ぐらしのはつこゑきこゑたり。いとあはれとおどろかれて。榮花物語煙の後曰、御こゝちなやましくおぼしめされけるころ、ひぐらしのなくに「あすまでもきくべきものとおもはねばけふ日ぐらしのこゑぞかなしき。などおほせらるゝ。桐火桶曰、山かげのけしき物あはれなるゆふまぐれに、日ぐらしのなきたるなどぞおもひ出られ侍る。六代勝事記曰、あひさはといふ所の、木しげきゆふ露を、日ぐらしの音にそへてきゝにける。赤染衛門集曰、つとめてかへるに、空いみじうきりわたるに、ひぐらしのなきしに云々

形狀

源氏物語若菜曰、日るのおましにうちふし給て、御ものがたりなど聞え給ほどにくれにけり。すこしおほとのごもりいりにけるに、日ぐらしのはなやかになくにおどろき給て云云ゆふ露に袖ぬらせとや日ぐらしのなくをきくきくおきて行らん云々まつさともいかゞ聞らんかた〱に心さはがすひぐらしのこゑ。同夕霧曰、日入がたになり行に、そらのけしきもあはれに霧わたりて、山のかげはをぐらき心ちするに、日ぐらしなきしきりて。同まぼろし曰、日もくれにけり、日ぐらしのこゑ花やかなるに云々つれ〱とわがなきくらす夏の日をかごとがましき虫

のこゑかな○本草啓蒙曰、茅蜩ハクツワセミ上總大サ蟪蛄ノ如ク、身色淡褐ト、淡黒ト相雜リ、緑條アリ。長サ六分許、羽ハ長ク身ニ倍シテ、スキトヲレリ。此蟬ハ、山中ニ在リ、必申刻ヨリ鳴ク。按ニ茅蜩ハ五六月ニ多シ、深山樹陰日光ヲ不レ見トコロニハ巳午ノ時ヨリモ鳴

久都久都保宇之（クツクツボウシ） 天文写本 和名鈔　【漢名】寒螿 本草　【今名】ツクツクボウシ

帝京景物略曰、入秋而凉。鳴則凄短、如曰秋凉秋凉。本草綱目曰、小而色青赤者、曰寒蟬、曰寒蜩、曰寒螿。正字通曰、七八月鳴者曰寒螿。爾雅曰、蜺ハ寒蜩。註、寒螿也。似レ蟬而小、青色。月令曰、寒蟬鳴

【一名】久豆久豆保宇之 倭名類聚鈔　【集註】新撰萬葉集曰、秋之蟬寒音丹曾聞湯那留木之葉之衣緒風哉脱鶴。寒螿亂響𢡃ニ秋林ニ、黄葉飄々混ニ數聲ニ一流聞巴子瑟、閒中自此思沈々。菊地記曰、うつせみの羽よりもうすき身を持てつくしよしとはいかゞ云べき。蜻蛉日記曰、八月になりぬ、ついたちの日あめふりくらす。しぐれだちたるに、ひつじの時ばかりにはれて、くつくつほうしいとかしがましきまでなくをきくにも、ものはといはる。いかなるにかあらん【形狀】○大和本草曰、ツクツクホウシ、此蟬夏ハ不レ鳴、八九月晩景ニナク、俗ニツクシヨシトナクト云モノ也。長キ事一寸ニ不レ足、蚱蟬ヨリ甚小ナリ

くつはむし 枕草紙　[漢名] 紡績娘 花鏡　[一名] くつわむし 紫式部集　轡虫 土御門院御製集　[集註]

花鏡曰、紡績娘、北人呼爲二聒聒兒一、似二蚱蜢一而身肥、音似二促織一而悠長、其淸越過レ之

曾根好忠集曰、くつわ虫ゆら／＼思へ秋のゝのやぶの住家はながきやどかは。堀河院百首曰、駒なべて蘆の野べに尋ぬれば小倉にすだくくつは虫かな。赤染衛門集曰、くつはむしのちかく鳴しに「秋の野をわけてばかりはたれかこんくつはのこゑのちかくする哉。散木集曰、夕がほのしげみにすだくくつわ虫おびたゞしくも戀さけぶかな。山家集曰、打ぐする人なき道の夕されば聲たてゝくるくつは虫かな

[形狀] 枕草紙曰、ひちりきはいとむつかしう、秋の虫をいはゞ、くつはむしなどにゝて、うたてけちかくきかまほしからず。正字通曰、觱篥、羌人所レ吹以驚者一名笳以レ竹爲レ管以レ蘆爲レ首九竅皆角音俗作二篳篥一 紫式部集曰、くつわむしのちかくなきしに、秋の野を分てばかりは誰かこんくつわのこゑのたかくする哉。大和本草曰、クダマキ莎雞ニ似テ大也。色青シ。頭小ニ腹大ニ、背ニ羽アリテ、羽ノ上如レ双六足アリ。長角二アリ、尻尖レリ。鳴聲紡車ヲマクガゴトシ、卽クツハ虫也

古名錄蟲部卷第五十　終

古名錄蟲部卷第五十一目錄

水濕蟲類

加倍留（カヘル） 蝦蟇○都知加閉流○田父○はへるこ蝌斗
井堤ノカハヅ
比木（ヒキ） 蟾蜍
加佐比流（カサビル） 草蛭
也末比留（ヤマビル） 王蟲
加布良美美須（カブラミミズ） 白頸蚯蚓
奈女久知（ナメクヂ） 蛞蝓
知伊佐支加太川不利（チイサキカタツブリ） 緣桑蠃
伊佐己无之（イサゴムシ） 石蠶

阿乎加閉流（アヲカヘル） 蠪
阿末加閉流（アマガヘル） 樹蛤
比流（ヒル） 水蛭
無末比流（ムマビル） 馬蜞
美々須（ミミズ） 蚯蚓○蚯蚓屎ノ蚯蚓泥
青弥々須（アヲミミズ） 蚯蚓ノ一種
加太豆不利（カタツブリ） 蝸牛
トビ虫 漢名未詳

美加良（ミカヲ）蠉即孑孓　（池中小虫）

通計二十二種

紀藩　源　伴存撰

水濕蟲類

加倍留 本草和名　【漢名】蝦蟇 本草　【今名】カイル

證類本草曰、蝦蟇、生江湖、今處處有之、腹大形小、皮上多黑點、能跳接百蟲食之時作呷呷聲、在陂澤間擧動極急。

【一名】加閇流 天文寫本和名鈔

賀閉流

倭名類聚鈔曰、蝦蟇。和名賀閉流。墻蘺鈔曰、蟇俣、又曰、蠹字カヘルトヨム。庭訓往來曰、門冠木扉裝束唐居敷板鼠走方立雲臂木懸魚蟇俣木。新猿樂記曰、腹脹蛙腹

加比留

新撰字鏡曰、蛙。加比留。日本書紀孝德天皇曰、是月天皇御蝦蟇行宮

具久

萬葉集卷第五曰、多爾具久能、佐和多流伎波美。同卷第六曰、山彥乃、將應極、谷潜乃、狹渡極、國方乎。延喜式卷第八曰、祝詞。生嶋能御巫能辭竟奉云 云皇神能敷座嶋能八十嶋者、谷蟆能狹度極。仙覺萬葉集註釋第五曰、たにぐゝとは、たにみづなり。谷をくゞれば、たにくゞといふなり。令曰、有寬狹者從上法。義解曰、謂受田

足二一段一者爲レ寛、不レ足者爲レ狹也。令曰、凡國郡界內、所部受レ田、悉ク足者、爲二寛鄕一不レ足者、爲二狹鄕一。萬葉集第十曰、霍公鳥、鳴而沙渡。同第十一曰、雲間從、狹徑月之。袖中抄曰、さは狹ノ義也。ちゐさくすくなき心にて、たゞすこしくらかる心歟。萬葉集第十五曰、左奴流欲能、伊米爾毛伊母我、美延射良奈久爾。又曰、左奴流欲波、於保久安禮杼毛

目借蛙

言塵集曰、目借蛙とは、春夏あのめを蛙のかる故にねむきかはつといへり　なぐさめ草

集註

日本書紀應神天皇曰、夫レ國樔者、其ノ爲レ人甚淳朴也。每取二山菓一ヲ食フ。亦煮二蝦蟆一ヲ爲二上味一ト、名曰二毛彌一ト。續日本紀卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年秋七月庚寅、太宰府言、肥後國八ッ代ノ郡正倉院北ノ畔、蝦蟆陣列スルコ廣 可二七丈一、南向テ而去ル、及二テ于日暮一ニ不レ知二去處一。古今著聞集卷第二十曰、寛喜三年夏の比、高陽院殿の南の大路に堀有、蝦數千あつまりて、方ぎりてくひあひけり。ひとつがひ〲くひあひて、或はくひころし、或はかたいきして、はらじろに成て有けり。又も〱多くあつまる事かぎりなし。ある者心みにくちなはを一もとめて、その中へなげ入たりけるに、すこしもおそるゝ事なし。くちなはも又のまん共せずにげさりにけり。京中の者、市をなして、見物しけり。ふるくも蝦のたゝかひはありけるとかや。百練抄卷第六曰、崇德天皇、保延四年三月廿一日、神泉內蝦蟇鬪諍。同卷第八曰、高倉天皇治承四年三月十六日、於二海橋立池一蝦蛇合戰、互決二雌雄一。同卷第十六曰、後深草院寶治元年正月十七日、今日關東若宮神前螻蟈數十万充滿、亥子時人々見二付之一。翌朝失畢之由。世繼物語曰、陽成院位につかせ給ひて、物にくるはせ給やうにて、けうふしきのまつり事をせさせ給へば、すべきかたなくて、關白殿を始て、世はうせなんと歎きあひ給へどかなはず。い

きたる物どもをとりあつめて、くちなはに蛙をいくらともなくのませ云々。扶桑略記第四曰、皇極天皇三年十一月、有二一蟇一、如レ人立行。宇津保物語曰、よもぎの野邊に蛙の声する心ちなんつかうまつるべきと聞ゆるに。明月記曰、寛喜二年六月廿四日、東小壺有蛇、以友村令取弃、腹中飲物、出庭中之間漸吐出之、蛙也、未死漸動搖、令入水中、無事存命云々、於蛇は弃川原、蛙已生非悪事哉。應永廿五なくさめ草曰、夜はかはづの見ゝかしがましきなど、めづらしきこゝちぞせし。催馬樂曰、ちからなきかへる云々。狹衣曰、いとゞあれまさりて、物ふりにける山のけしきも物おそろしげにて、池の水もみ草ゐて、昔のかげもとまらぬに、かはづの聲ばかりたのもしきしるべにて。赤染衛門集曰、かへるべきほどちかくなりて、かはづのなきしに云々。宇治拾遺物語卷第十一曰、庭に蛙の出きて、五六ばかりおどりて、池のかたざまへ行けるを云々草のはをつみきりて、物をよむやうにして、かへるのかたへなげやりければ、その草の葉の、蛙のうへにかゝりければ、かへるまひらにひしげて死たりけり。つれ〲曰、綾小路宮のおはします小坂殿のむねに、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためしおもひ出られ侍しに、誠や烏のむれて、池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給てなん、と人のかたりしこそ、さてはいみじくこそと覺しか。蜻蛉日記曰、あめうちみだるくれにて、かはづのこゑいとたかし。明衡往來曰、閉レ門蟄居、不レ異二井蛙一。注、井蛙者在二井中一不レ知二世間一事也。今人閉レ門而在二家中一似レ蛙也

形狀

續日本紀卷第三十八曰、桓武天皇延暦三年五月癸未、攝津職言、今月七日卯時、蝦蟇二万許、長可二四分一、其色黒斑。從二難波市南道一、南行池列可二三町一、隨レ道南行、入二四天王寺内一。至二於午時一、皆悉散去。四季物語曰、みくさ清きあせの夕ぐれは、

秋ならねどもあはれおほかれど、かはづといふものはえせたるむしにて、人のあしになれきて、ともすれば沓のしたにしかれ、うでをひしがれ、身をあやぶむ。律だつひじりなどは、この比は足をとゞむるもむつかしき身なるべし。新猿樂記曰、蟇眼粥(カヘルメノカユ)。女郎花物語曰、いわまのこほりはやくうちとけ、水のかはづなどの様にとびかゝり侍るべきに

○都知加閉流　天文写本和名抄、卽綱目ニ所レ指蝦蟇也。啓蒙ニ色黑ク疿癗(イボ)多ク〆臭キ者ハ蝦蟆ナリ。ト云此也。紀州ニテヲバガヘルト云、鳴声低ク小也

一名　豆知加閉流　倭名鈔曰、黑蝦蟇、和名豆知加閉流

久呂加惠留　本草類編曰、久呂加惠留、生水幷田中有小毒　○田父　本草綱目曰、蛇呑レ蛙而有ニ制スルノ蛇ヲ之田父一。洽聞記云、蝦蟇大ナル者ヲ名ニ田父一ト。見レ蛇則啣ニ其尾ヲ一、良久蛇死尾後數寸皮不レ損、而肉已ニ盡矣。物理小識曰、石蝓似ニ癩蟆ニ大者徑七八寸、色近レ黑ニ能食レ蛇、蛇浮レ水則首ノ仰テ水上ニ、石蝓仰レ腹誘レ蛇、蛇來テ呑レ之、則前兩足抱レ蛇入レ水侵死而食レ之

集註　百練抄曰、治承四年三月十六日、於ニ海橋立池ニ蝦蛇合戰。又蝦蟇食ニ殺ス蛇ヲ一。見者如レ垣、賀茂上社同有ニ此事一云云。同卷第九曰、安德天皇壽永二年十二月廿五日、於ニ鳥羽南樓門外ニ蛇與レ蛙合戰。蛇死去、謂ニ咎徵一

○はへるこ　假名文字遣　漢名　蝌斗　本草　今名　カイルコ　品字箋曰、蝌斗、蝦蟇之子也。頭圓色黑。始出有尾無足。稍大。足生尾脫。或曰月大前足先出。月小後足先出。古今注一名懸針一魚元魚以ニ其狀如レ魚又幷其頭尾言之。則似斗字。古科斗之取象于此。古文正宗曰、科斗書之始作者古無紙筆、以漆書字于竹簡上、始濃

大而後纖小似科斗初生之形、孔安國得尙書于壁中、皆科斗書、科斗卽蝦蟇初生者于文所謂漆書蝌緯是也 【正誤】 本草啓蒙曰 春月池澤小水中ニ而透徹メ中ニ烏ノ如キ小黑點アルモノ、長クメ纒索ノ如ク丈餘ニ至ル、是蟾蜍ノ胎ナリ。蝦蟆ノハ圓塊ヲナシテ長カラズ、長サ六寸許、毬形ノ如シ、色白シ。小黑點日ヲ歷テ大ニナリ、科斗出、深黑ナリ。按ニ此誤蝦蟇子ト蟾蜍子トヲ混ズ誤也。蝦蟇ハ四五月ノ間池水ニ交接シテ、直ニ砂ノ如キ灰色ノ卵ヲ落シテ、水中ニ入テ一團ノ透明塊ヲナス、柔ナルコトコロテンノ如シ。後漸黑色ノ蝌斗ト成リ、其形蟾蜍ノ蝌斗ヨリ大也。蟾蜍子ハ小ニメ黑色、後尾脫足生テ水邊ヲ去陸ニ出ル

阿乎加閉流（アヲカヘル） 倭名類聚鈔 【漢名】 鼃 本草 【今名】 アヲガヘル

事物異名錄曰、蛙色青腹細嘴尖後足長 【一名】 勾當蟇 壓添壒囊鈔 安於加惠留 本草類編 青加邊留 新撰字鏡曰、蠑」青加邊留（）字典曰、蟼。蛙屬。急就篇註、蝦蟆一名蟼、大腹而短脚。卽カイルノ事也（）書傳曰、鼃」淮南曰、水相擯減宗廟羔䰱鼃。周官、蟈氏、劉康成注曰、今御所食鼃也、鼃又作蛙、俗名田雞、則前代以供祭祀、凡進御矣

【集註】 本草類編曰、鼃。和安於加惠留、不拘時採之 【形狀】 壓添壒囊鈔卷第八曰、土鴨事。土鴨ト書ケルハ、鳥ノ名歟。土鴨ヲバ、アヲガヘルトヨム。今蟲部ノ勾當蟇ト云モノ是也。アヲクビト云フカモノ、クビノアヲキニ似タレバ、カモト書リ。空ヲ飛事ナケレバ、土ノカモトハ書ナリ。按、爾雅疏曰、大而青脊者俗ニ名ニ土鴨ニ、其鳴甚壯。卽此鼃也。オホアヲガヘル也

井堤ノカハズ

袋草紙。言塵集曰、かはづ井手に詠り藻塩草○南禪寺記曰、住吉松、龍田楓樹、難波葦芦。歌津蝦蟇、至レ今尚存焉

【一名】ゐてのかはつ

【集註】袋草紙曰、加久夜長刀帶節信ハ數奇者也。始テ逢ニ能因ニテ相互ニ有レ感。能因云、今日見參ノ引出物ニ可レ見物侍トテ自ニ懷中ニ錦ノ小袋ヲ取出、其中ニ鉋屑(カンナクズ)一筋アリ。示ノ云、是ハ吾重寶也。長柄橋造之時鉋クヅナリト云云。于レ時節信喜悅甚クシテ、又自ニ懷中ニ紙ニ裹メル物ヲ取出セリ。開レテ之ヲ見ニ、カレタルカヘルナリ。コレハ井堤ノカハヅニ侍云云、共感歎シテ各懷レ之退散云云。今世人可レ称ニ嗚呼ニ歟。古今榮雅抄曰、橘の諸兄、井手に寺を立て、堤に山吹をうへ、池に蛙をはなちて、花を見蛙の聲をきかれしと。存命ならば、花の盛を見らるべき物をといふ心とぞ。山吹と蛙とをもろこしより取よせらるゝとなり

【形狀】無名抄曰、井堤の蛙(カハヅ)と申す事こそやうある事にて侍れ。よの人思ひて侍るは、たゞかへるは、みなかはづといふぞとおもひて侍るめり。それもたがひ侍らず。されど、かはづと申すかへるは、外にはさらに侍らず。たゞ此井堤の河にのみ侍る也。色黑きやうにて、いとおほきにもあらず、よのつねのかへるのやうに、あらはにおどりありく事などもいとも侍らず。つねには水にのみすみて、夜更る程に、かれがなきたるは、いみじく心すみ、物あはれなるこゑにてなん侍る。春夏のころ、かならずおはして聞給へと申侍し也藻塩草ニモ出之

【今案】無名抄ニ、井堤ノ蛙、外ニハ侍ラズ、只此井堤ノ川ニ侍ル也。色黑キヤウニテ、大ニモ非ズ、常ノカヘ

ルノヤウニ躍変侍ラズ。常ニ水ニノミ住テ、夜更ル程ニ、カレカ鳴タルハ、イミジク心スミ、物アハレナル事ニナン侍ル。春夏ノ比、必行テ聞タマヘト云ハ、即河鹿ノ事也。萬葉集、神名備川、佐保川、六田川ニ詠ル河津此也。凡テ山河ニ詠、今四五月田中ニ鳴鼃ト迥ニ別也。河鹿ノ名ハ後世ノ名ニシテ、物類称呼ニ載タリ。本草啓蒙ニ、カジカ、形雨蛤ヨリ微大ニシテ、瘠テ痱瘰アリ。色黒シ。又褐色ニシテ、黒斑アルモノアリ、ト云ヘ、雷公ノ説ノ黒虎也。齊雲山志曰、石雞ハ似レ蟾而小、皮黒肉白、味甚タ甘美ナリ。生ニ石嵓淵中ニ、此也。本草綱目ニ、呉瑞曰、長肱ハ石雞也、一名錦襖子、六七月山谷ノ間ニ有レ之、性味同ニ水雞ニ。又本草綱目鼃。集解、頌曰。陶氏所謂土鴨、即爾雅所謂在レ水曰レ黽者是也。俗名ニ石雞ニ所謂蛤子、即今水雞是也○綱目ニハ、長股ヲ鼃ノ一名トス。南楚新聞曰 錦襖子其味絶珍

一名

河豆　萬葉集卷第七曰、河豆鳴、清川原乎、今日見而者、何時可越來而、見乍偲食

河津　萬葉集卷第八曰、河津鳴、甘南備河爾、陰所見テ、今哉開良武、山振乃花

河蝦　萬葉集卷第六曰、不所念、來座君乎、佐保川乃、河蝦不令聞、還シ都流香聞。同卷第九曰、吾疊、三重乃河原之、礒裏爾、如是鴨跡、鳴河蝦可物。河蝦鳴、六田乃河之、川楊乃、根毛居侶雖見、不飽君鴨。言塵集曰、河津ハ蝦之

川津　萬葉集卷第十曰、川津鳴、吉野河之、瀧上乃、馬醉之花會、置ニ末勿勤。按ニ萬葉集卷第三曰、春ノ日者、山四見容之、秋ノ夜者、河四滿之、旦雲二、多頭羽亂、夕霧丹、河津騷、毎見。トミユレバ、河津ハ蝦蟇ト錦襖子ヲ通シテ云者也。錦襖子ハ春夏間ニ鳴テ秋夜ハ不レ鳴也

阿末加閉流（アマガヘル）倭名類聚鈔　【漢名】**樹蛤** 漳州府志　【今名】**アマガヘル**

【一名】**阿万加戸留** 新撰字鏡曰、蛙。阿万加戸留○蛙ハアヲガヘル也。言塵集曰、あまかへる　【集註】蜻蛉日記曰、山こもりの後はあまがへるといふ名をつけられたりけれ云々おほばこの神のたすけやなかりけんちぎりしことをおもひかへるは　【形状】○アマガヘル最小也。色青シ。雨降ントスレバ鳴、木枝ニ住、樹葉ト色ヲ同フス、後變メ茶褐色、灰色ヲ帶、其既ニ變ゼントスルトキ斑ヲナス

比木（ヒキ）倭名類聚鈔　【漢名】**蟾蜍** 本草　【今名】**ヒキ**

【一名】**比支** 新撰字鏡曰、蚪。比支。倭名鈔曰、蟾蜍。和名比木　**比岐** 證類本草曰、圖經曰、蟾蜍。形大背上多ニ痱𤻣一行遲緩不レ能ニ跳躍スルコト一、亦不ニ解鳴一、多在ニ人家下濕處一　天文写本和名鈔　**比支加惠留** 本草類編曰、蝦蟇。和比支加惠留。又云、比支。本草和名曰、蝦蟇。和名比支。今物語曰、小侍從が子に法橋實賢と云もの有けり。いかなりける事にか、世の人是を、ひきがへるといふ名をつけたりける。法眼をのぞみ申て「法の橋のしたに年ふるひきがへる今ひとあがりとびあがらばや。」と申たりければ、やがてなされにけり。倭名鈔國郡部曰、遠江國長上郡蟾沼、

比 •木

形状 ○本草啓蒙曰、雄ナル者ハ、體痟、雌ナル者ハ體肥。按ニ、蟾蜍ハ、夏月人家庭園夕日既ニ入ントスル頃多ク出テ蟲ヲ食ス。雄ハ色黒ヲ帶、雌ハ黄褐色也

比流(ヒル) 倭名類聚鈔

漢名 水蛭 本草

今名 ヒル

一名 比留 本草類編。新撰字鏡曰、蛭。之逸反、比留。本草和名曰、水蛭。和名比留。倭名鈔曰、水蛭。和名比流。倭名抄國郡部曰、遠江國敷智郡蛭田、比留多。相摸國御浦郡氷蛭、比々留。古事記曰、生玉フ子水蛭子ヲ。太平記第三十二曰、蛭卷シタル樫ノ木ノ柄ヲ、中ヨリヅンド引切テ云云

田蛭(タヒル) 倭姫世記曰、家田堰水道尓波、田蛭磯(ケカラヘシ)故礼波、我田尓波不レ住ヒ志止宜支○九江名勝志曰、葛洪相傳葛仙翁曾テ游ブ此ノ山ニ仙翁見ニ田蛭害レ人爲ニ書符ヲ錄シテ于石ニ置ク田畔ニ蛭害遂止。然則田蛭亦通名也

集註 本草類編曰、水蛭。和比留。五月六月採暴乾。拾遺集曰、雨のふる日大原河をまかりけるに、ひるのつきたりければ。惠慶。世の中にあやしきことは雨ふれど大原川のひるにぞ有ける。散木集曰、備中守政長、八条の家にて、人々あまたあそびけるに、泉すこしひてつくにもあまらざりけるに、やくする侍の、はぎにひるのくひつきたりけるを云々

附方 蛭飼 吾妻鏡卷第五十二曰、文永三年四月七日、將軍家御蚊觸之間、可レ有ニ蛭喰之由、施藥院使忠茂朝臣申ニ行之ニ而依ニ三嶋社神事ニ、憚哉之由申レ之。又被レ尋ニ社司ニ之處、同申ニ無レ憚之由ニ、仍有ニ此御療。明月記曰、建仁二年五月二日、依無力平臥、蛭飼。六月一日、夕行九条、足腫苦痛、飼蛭之後弥發動。嘉祿二年四月八日、又蛭飼。上下

陽道、無二御參社之儀一、何可レ有レ憚」を脱せるか

十一月は十月の誤なり

正本なし刊

又校之刊本なし

予本なし刊

幾遺に作る刊本

十月八日刊

日、未時許蛭向飼齒訖。八月十二日、未時許飼蛭、齒幷耳後熱氣多所也。寛喜元年六月十二日、午時許齒幷手左、蛭飼、今年始。十六日、午後又蛭飼、齒少々、左手卅許。九月十八日、朝移點、晝念誦之後、口熱欲飼蛭、蛭不付、仍今日不果之。十九日、未時蛭飼。廿日未時、又蛭飼。昨日上齒、今日下齒、依蛭少、昨日不終功。十一月十二日、又齒飼蛭。寛喜二年四月廿七日、未時蛭飼齒頤。手振痛示合心寂房、猶可飼之由称之。五月十日、昨日猶有熱氣、仍齒飼蛭。十四日、未時許又蛭飼。日來齒有障過之。七月卅日、朝間校正止觀、未時口熱、飼蛭之後又校之、又校之第八卷上卷校了。八月二日、未時蛭飼。四日、宗清法印予來談、歸之後蛭飼。無蛭而不幾。十月八日、午終心寂房來、叓外付減之由如詞、但惡靈充滿非蛭飼時難治云々。天福元年四月八日、未時許蛭飼、頤下、年來頻好之、去々年以後二年付念蓮說ニ止レ之ヲ、面ニ熱興リ盛ニシテ難レ堪、示ニ合貞幸朝臣ニ相待程出來之間、今日々次宜云々、但依彼說三十飼之。八月三日、未時許蛭向飼フ卅許。嚴增阿闍梨依蛭飼不逢。天福二年七月廿七日、未後頤下飼蛭、血頗留之間、四条中納言忽枉駕、驚出相謁。八月一日、蛭向飼、未時終之、申時許櫻井宮御使參川來、蛭狼籍之間、隔物申披存旨等了。三日、未時猶飼蛭。文曆二年四月八日、未時蛭飼。閏六月四日、未時又飼蛭。台記曰、久壽二年四月十四日、女房重蛭啗腫物已滅。中右記四十二曰、大治二年五月三日云々今朝此堅根飼蛭卅許ト兩度。七日施藥院使來令見堅根申云、明後日今一度可喧蛭者、但有減氣者。九日今日依醫師敎又飼蛭卅餘ト已及三度之。雖有減氣誠身力屈了。廿九日天晴、右腰下堅根平喩ト、從去月廿六日更發以蓮柳洗之四ケ度飼蛭療治之間之。又一月親老之身神心屈ト

寒風鼻塞苦痛ヲ治ス

頓医抄曰、又云蟠カイヲシテ血ヲトルベシ

本此記事なし
許の下刊本飼あり

加佐比流 倭名類聚鈔 漢名 草蛭 本草 今名 ヤマビル

正字通曰、生二深山草上一者爲二草蛭一。證類本草曰、唐本注云、草蛭在二深山草上一、人行卽傳二著脛腰一、不レ覺、遂於二肉中一産育、亦大爲レ害○倭名鈔曰、草蛭。和名加佐比流。蛭之在二草上一也

形狀 ○大和本草曰、草蛭ヲ國俗山ヒルト云、深山ニアリ。山中ヲ行ニ、林木ノ枝ヨリ人ニヲチカヽルヿアリ。故ニ笠ヲキテ山行ス

無末比流 倭名類聚鈔 漢名 馬蜞 本草 今名 クマビル

倭名鈔曰、馬蛭。和名無末比流、蛭之大也

形狀 本草啓蒙曰、馬蜞。クマビル、コノ蛭ハ梅雨中ニ多ク出、形大ニシテ長サ三四寸アリ。按馬蜞ハ其色淡黑褐色、腹淡白色、水蛭ニ似テ大ニシテ指ノ如シ。此ヲ犯シ痛マシムレバ圓塊ヲナシ、栗子ノ如シ。口ニ細キ刺ノ如キ白牙四ツアリ。水田ニテ田螺ヲ食フ

也末比流 本草類編 漢名 土蠱 本草 今名 カウガイビル

酉陽雜俎曰、度古俗呼二土蠱一、身形似二衣帶一、色類二蚯蚓一、長一尺餘、首如レ鏟背上有二黃黑襴一、稍觸則斷

形狀 本草類編曰、也末比留。日本大者一尺許也 ○本草啓蒙曰、カウガイビル、カウガヒビルアリ。馬蜞ニ

螆は唐韻同レ蛓
螆は集韻同蛓とせり

似テ、頭ノ形丁ノ字ノ如シ。按ニ土蠱ハ長キ者尺許、短キ者三五寸、幅狹ク扁ニメ茶褐色、頭銀杏葉形ヲナス

美々須 本草和名　　漢名 蚯蚓 本草　　今名 ミヽズ

一名 彌々受 新撰字鏡曰、蠖、丘忍反、弥々受。蟺。才宣反、蚓也。又虚元反、弥々受。蛓螆螅蚝四字同、七吏反、去弥々受。蜹。弥々受○蝖。字典曰、玉篇、蟦螬也。楊氏方言、蟦螬或謂二之蝖蝚一。郭註、亦呼二當齊一、或呼二地蠶一ト云ハ、根キリ虫也○蛓。字典曰、說文、毛蟲也。爾雅、蛅毛蟲。疏、即蛓也。今俗呼爲二毛蛓一、有レ毒螫レ人。雨航雜錄曰、蛓者螫人蟲也。身扁綠色、似蠶而短、無足有毛。本草ニ蛅蟖、背毛螫人、故名蛓ト云ハイラムシ也。毛蟲ハケムシノ惣名也○螆。字典曰、螆。集韻同レ蛓○螅。字典曰 螅。篇海、同レ蛓○蚝。字典曰、蚝。唐韻同レ蛓○蜹。正字通曰、與螫同○蠚。正字通曰、蠚。說文、螾也。今謂二之蚓一。本草和名曰、白頭蚯蚓。和名美々須。倭名鈔曰、蚯蚓、和名美々須

耳受 新撰字鏡曰、蚯蚓云云蚓、耳受○塵添壒囊抄曰、抑ミヽズヲ歌女ト云テ、歌ウタウ事アリ。但シミヽズノ歌ト云ハ、多分ケラノ鳴ク事ハ一定、ミヽズノ證未レ見、鳴ケバコソハ歌女ノ名ハアルラメト思フ計也。按ニ此說確也。大倉州志ニ、蓋今謂フ曲蟺善ク鳴クト者非レ是。其鳴者乃チ螻蛄也、曲蟺ハミヽズ也。本草啓蒙ニ、螻蛄ノ鳴クハ雨フル時ニ在リテ、ソノ聲短シ。蚯蚓ノ鳴クハ、晴タル時ニ在リテ、ソノ聲長シ。自ラ分別アリ。ト云ハ、本草ニ蚯蚓其鳴長吟、故曰歌女。本草原始ニ、蚯蚓雨則先出、晴則夜鳴ト云謬說ニ泥ミタル也。螻蛄モ亦清

天ノ夜ニ鳴テ其聲長ク、耳底ニ達ス 【集註】 催馬樂曰、ちからなきかへる、力なきかへる、ほねなきみみず、ほねなきみゝず。愚案抄曰、かへるは力なく、みゝずは骨なきといへり。みゝずをば、かへるがとりて[illegible]物なり。故に對していへるにや（正字通曰、荀子蚓無爪牙之利筋骨之法） 【藥製】 稿田方曰、地龍土ヲモミステ、炙使ヘ。或ハ炒ル。唐ノ方書ニ、地龍ト云ハ蚯蚓也

○蚯蚓ノ屎（カ）　頓医抄　【漢名】 蚯蚓泥 本草　【今名】 ミヽズノクソ　【附方】 本草經疏曰、蚯蚓泥、即蚯蚓屎也

頓医抄曰、白クサ治方。蚯蚓ノ屎ヲ灰ニ燒テ、細末シテ付ヨ

加布良美美須（カブラミヽズ）　倭名類聚鈔　【漢名】 白頸蚯蚓 本草　【今名】 クビタマミヽズ

【集註】 本草類編曰、白頸蚯蚓。和美々須、三月採陰干　【今案】 證類本草曰、陶隱居曰。白頸是其老者。圖經曰、白頸蚯蚓、今處處平澤皐壤地中皆有之、白頸是老者耳。本草啓蒙ニモ、白頸ナルモノ大小共ニアリト云リ。自ラ一種也

青彌々須（アヲミヽズ）　新撰字鏡　蚯蚓ノ一種也　【今名】 キチガイミヽズ

蛔天、字本は蜧とし字典は蛔とす

字鏡曰、蛔。青弥々須〇字典曰、蛔同蚤

【形状】〇青弥々須ハ陸地水湿少キ處ニ生ズ、地ヲ掘テ出セバ之ヲ狂スルガ如シ、其色青色微黒ヲ帯、形状蚯蚓ニ同ゾ細シ

奈女久知（ナメクヂ）　倭名類聚鈔

【漢名】蛞蝓　本草

【今名】ナメクジ

【一名】奈目久知　天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、蚰蜒。奈女久知。本草和名曰、蛞蝓。和名奈女久知〇按、蚰蜒ハゲジ〱也

奈女久地　新撰字鏡曰、蜒。以旃反、奈女久地。蝓、奈女久地

【集註】本草類編曰、蛞蝓。和奈女久知、八月採之、有垣下之。枕草紙曰、いみじくきたなき物、なめくぢ、ゑせ板敷の帚（ハヽキ）

加太豆不利（カタツブリ）　倭名類聚鈔

【漢名】蝸牛　本草

【今名】デヾムシ

正字通曰、蝸牛似蠃白色、背有肉負殼行、行則頭出、頭有兩黒角、驚則首尾縮入殼中、常夜出盛夏日中則自懸樹葉下、往々升高、涎沫枯盡即自死

【一名】加太川不利　本草類編曰、蝸牛。和加太川不利。倭名鈔曰、蝸牛。和名加太豆不利

加太豆夫利　新撰字鏡曰、蝸。加太豆夫利。明衡往来曰、一有ニ蝸舍一。蝸牛舍也。狭少貧家也

【集註】豆相記曰、蝸牛が角をあらそふごとく、物にもたらずかし。詠百首和歌曰、あぢきなや家をはなれぬかたつぶり世にあらそひの角をおらばや

知伊佐支加太川不利（チイサキカタツブリ） 本草類編 【漢名】 緣桑蠃 本草 【今名】 木ニ登ルモノアラ介

本草綱目曰、緣桑蠃。此蠃諸木上皆有、獨取桑上者。本經逢原曰、其形尖小、而緣ニ桑上ニ者、謂ニ之緣桑蠃ト 【形狀】 本草類編曰、緣桑蠃。和名知伊佐支加太川不利。此螺全似蝸牛小黃色、不拘時採之○本草啓蒙曰、緣桑蠃（ノボリガヒ）。卑濕ノ處ニ生ズ、多ハ石下、或ハ土中ニ蟄シ、春雨ノ後出テ草木ニ緣リ上リ葉ヲ食フ、形狹ク尖リテ榧子ノ如ク、微黑色、長サ三分許、一頭ハ濶サ二分許、一頭ハ尖レリ、桑枝上ニ在ルモノヲ採リ藥用ニ入ル

伊佐己无之（イサゴムシ） 本草類編 【漢名】 石蠶 本草 【今名】 セムシ

【集註】 本草類編曰、石蠶。和伊佐己无之、論云沙中蟲白是虫也山堂肆考曰、石蠶。伊洛間水底石下。有蟲如蠶。亦解放絲。連綴小石如蠒。春夏羽化作小蛾水上飛。名石蠶蟲、一名石下新婦

【形狀】 ○大和本草曰、石蠶（セムシ）、此虫山中ノ石河ノ瀨ニアリ、口中ヨリカイコノ絲ノ如クナルイトヲ吐出シ、河ノ小石ヲ、絲ヲ以テツヾリ合セ、其中ニスム蟲ナリ。其形ハ蠶ノゴトクニシテ堅ク、色靑黑色

トビ虫 麻嶋眼科書 【漢名】 未詳

【一名】石金虫 眼科書 【形狀】○大和本草曰、トビムシ、蚤ニ似テ大ナリ。能飛ヲドル。屋中下濕ノ地ニ多シ 【附方】慶長十七年眼科書曰、石金虫、トビ虫也。黑燒ニス。目イボトテ、目ノフチ腫ル時、ハコベノ汁ニテ付、少イロハヌ之

美加良（ミカラ） 倭名類聚鈔 【漢名】蠉 字典 子孑 【今名】ボウフリムシ アカムシ

字典曰、蠉醫兗切、音暖同蠉、井中小蟲。爾雅曰、蜎蠉註、井中小赤蟲也。一名蜎、一名蠉、一名蛣蟩、一名孑孓。五雜組曰、孑孓今雨水中ノ小蟲也。其形短而屈ッ、羣テ浮テ水面ニ、見レハ人則沉、其行一曲一直、若シ無カ臂然、故名レ之。孑無ニ右臂一也。孓無ニ左臂一也 【形狀】○大和本草曰、孑孓蟲（ホウフリムシ）、汚濁ノ水中ニ生ズ。水中ニ動キテ恰棒ヲフル勢ノ如シ。大小二種アリ。皆蚊トナル。ホウフリ虫ハ其色黑ト赤トアリ

○**池中小虫** 日本書紀 【形狀】日本書紀曰、皇極天皇二年七月、是月、茨田池（マムタノ）水大ニ臭（クサリテ）、小ナル虫覆リ水ニ、其ノ虫口黑而身白、八月戊申朔、壬戌、茨田池水變テ如ク藍ノ汁ノ、死ル虫覆（ヘリ）レ水。溝瀆之流亦復凝結、厚三四寸、大小魚臭（クサルコト）如ニ夏爛死一。由レ是不レ中ノ喫焉。九月、是月茨田池水漸變成ニ白色一、亦無ニ臭氣一。冬十月、是月、茨田池水還テ淸（スメリ）

古名錄蟲部卷第五十一 終

古名錄蟲部卷第五十二目錄

甲蟲類

加美木里無之 天牛
沼加豆木無之 叩頭蟲
玉無し 綠金蟬
保多留 螢
久曾牟之 蜣蜋
末太良无之 斑蝥
久須加ツ良乃牟之 葛上亭長
芫青
宇利波閉 蠸

通計九種

雜蟲類

万自物 蠱 ○蛇蠱
毛牟
衣女虫
たるなむし

惡虫　　奴天乃岐乃牟之

ツヽカ　恙

通計八種

古名錄蟲部卷第五十二

紀藩　源　伴存撰

甲蟲類

加美木里無之（カミキリムシ）倭名類聚鈔　［漢名］天牛 本草　［今名］カミキリムシ

本草綱目曰、天牛。大如レ蟬黑甲光如レ漆、甲上有二黃白點一、甲下有レ翅能飛、目前有二二黑角一、甚長前向、如二水牛角一能ク動ス、其喙黑而扁如レ鉗甚利、亦似タリ二蜈蚣喙一、六足在レ腹、乃諸樹蠹蟲所レ化也。夏月有レ之

［一名］加美岐利無之 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、齧髮虫。玉篇云、蠰。齧レ髮虫也。漢語抄云、加美木里無之　［形狀］○大和本草曰、木蠹蟲（キクノムシ）、蠐螬ニ似テ節長ク、足短ク、腐木ノ中ニ生ジテ、木ヲウガチクラフ、蠶ニ似タリ。後ニ天牛トナリテトブ

沼加豆木無之（ヌカツキムシ）倭名類聚鈔　［漢名］叩頭蟲 本草　［今名］コメツキムシ

帝京景物略曰、有玄身而兩截。形剛而性媚。掐其後。首則前頓。㬥㬥然。仰置之。彈而上。還覆其故處。不能遂覆而走也。曰叩頭蟲、一曰搗碓蟲焉。榮花物語後悔大將曰、われはたゞほとけの御まへにおはしまして、たすけ給へとぬかをつかせ給ふ。宇治拾遺物語曰、御堂にまいりて、男はほとけの御まへにてぬか二三度斗つきて云々。堀河次郎百首曰、はじめなき罪のつもりの悲しさをぬかのこゑ〴〵ときつる哉　散木集にくときたつ也とアリ　赤染衛門集曰、太子のぬかづきたまふとて、ひたひにあてたまひけるいしをみて云々。萬葉集卷第五曰、布之弖額拜。藻塩草曰、拜ぬかづく、佛などおがむ時、らいはいまいらする事也。八雲御抄曰、大てらにて仏にこそぬかをもつくべきに、がきのしりへにぬかづかんは、せんなきことなると云々。更級日記曰、身をすてゝぬかをつき、祈り申ほどに云々人まにはまいりつゝぬかをつきし、やくし佛の立たまへるをみすて云々。又曰、いみじうぬかづきおこなひてねたりしかば。又曰、念佛する僧の、あかつきにぬかづく音のたうとく聞ゆれば。大鏡曰、御ぬかつかせ給ひしも見たてまつり侍り云云

一名

沼加豆岐無之　天文写本和名鈔○倭名鈔曰、叩頭虫。和名沼加豆木無之

ぬかづき虫　枕草紙

形状

枕草紙曰、ぬかづき虫、又あはれ也。さる心に道心おこして、つきありくらん。又おもひかけずくらき所などにほとめきたる、聞つけたるこそおかしけれ○大和本草曰、叩頭蟲、小虫黒色少長シ、俗ニ木切ムシト云、木ヲキル聲ヲナス、其勢人ノ額ヅクガ如シ。按ニ大者一寸許、小者二三分、天牛ニ似テ窄ク頭長ク黒褐色

叩頭蟲圖



大考

玉無し 四季物語

漢名 綠金蟬 廣東通志 一名 たま 八雲御抄曰、虫松鈴くつはみのひとりたま 今名 タマムシ

通雅曰、綠金蟬、卽吉丁蟲也。背正綠有ニ翅甲下一、出ニ嶺南一人取帶レ之令人相媚

集註 四季物語曰、またなりはうつくしう玉むしなどいひていみじけれど、きり〴〵す、はた織、かうろぎにさへおとりて、こゑたてぬもあれど、此むしは、やんごとなききさちあるものにて、宮のざうにてなにくれの御つぼねにも、御くしげのなか、はくふんの中にまろびて、からは人をさへ野邊にふてためるならひなるに、十とせ、はたとせの後までも、御もの丶なかにつ丶ませ給ふことよ、かくやうのもの丶、雲井にまうのぼるむかしのかしこき人は、くさをたがやして、位にのぼりしをさへめづらしう、在がたきことにものするに、是はやうかはれり

形狀 〇大和本草曰、タマムシ、雄ハ綠色有レ光、雌ハ灰色無レ光、形狀ハコガチムシニ似テ長シ、有レ翼額ニ有ニ兩角一而長有ニ六足一俗玉蟲ト云。按ニ本草啓蒙ニ、タマムシノ雄ヲ叩頭蟲トス。强說也。叩頭蟲、別ニ玉蟲ノ雌ノ大サナルアリテ、玉ムシト自ラ異也

保多留（ホタ）　本草和名　**漢名**　螢　本草　**今名**　ホタロ

郁離子曰、螢之爲レ明微微也。昏夜得レ以之可ニ以炤一レ物、取而眞ニ諸燭下一則黝然亡矣

一名　夏むし　今物語曰、御局のやり水に、螢のおほくすだきけるを見て、さきにたちたる女房の、螢火みだれとびて、とうちながめたるに、つぎなる人、夕殿に螢とんでとくちずさむ。しりにたちたる人、かくれぬものは夏むしの、とはなやかにひとりごちたり。耳底記曰、問云、夏虫とは螢を申候哉。答、ほたるも申候なり。世繼物語曰、螢の飛ありくを、かれとらへて、かざみの袖に、螢をつゝみて、御覽ぜさせ聞えける。つゝめ共かくれぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひ成けり

飛たる　後鳥羽院御集曰、飛たるとぶあしへの浦のしほひがたあまのたく火のかずやそふらん

保太流　倭名類聚鈔曰、螢。和名保太流。天文写本和名鈔曰、保多留。萬葉集卷第十三曰、使之云者、螢成

保太留　新撰字鏡曰、蟒。力人反、螢。保太留。熒蠸二形同。胡永反、平火也。耻也。保太留。仙覺萬葉集註釋卷第八曰、ほどろとは、ひかると云詞也。ひかれる虫をほたるなど云がごとし。同卷第四曰、よのほどろとは、よのひかると云也。夜のあくるを云也。しのゝめのほがら〳〵とあけゆけば、など云を、ひかりあくる心也

クチクサ　壓添壒囊鈔曰、三数指飯ニハ、數十ノ熠燿ノホタルトヨメリ。和語ニ螢ヲ、クチクサト云。又蟒ノ字ヲ螢トヨム、此ヲ釋スルニ、馬ノ血爲レ螢ト云リ。サレバ馬ノ血ノ螢ニ成ト云ハ、由有事也。又曰腐草事、ホタルヲクチ草ト云ハ、草ノ朽テ螢ト成ル心歟云云。

かすなる本ノマヽ

伊賀國風土記曰、河辨郡油日里有神号油日大明神、螢火曜神等之垂跡之地。釋日本紀曰、螢火光神、師說曰、以ニ神之威光ヲ喩ニ螢火之光ニ者也〇東華錄曰、囊螢讀書睒會取丙枚踏

集註　本草類編

曰、螢火、和保太留、七月七日取除干。源氏物語はゝ木ゝ曰、風すゞしく、そこはかとなき虫のこゑ〳〵聞え、ほたるしげくとびまがひて、おかしきほどなり。同まぼろし曰、ほたるのいとおほうとびかふも、夕殿にほたるとびてと、れいのふる事も云ゝ。同夢のうき橋曰、やり水のほたるばかりを、むかしおぼゆるなぐさめにてながめ給へるに。大和物語曰、ほたるのとびありきけるを、かれとらへて、とこのわらはにのたまはせければ、かざみの袖にほたるをとらへて、つゝみて御らんぜさせとてきこえさせける。枕草紙曰、むしはほたる。伊勢物語曰、かのいたる螢を取て、女の車に入たりけるを、車なりける人、此螢のともす火にやみゆらん、ともしけちなんとて。世繼物語曰、和泉式ア云ゝやすまさにわすれて侍ける比、貴布禰に參て、御手洗河に螢の飛けるをみて、物思へば澤の螢も我身よりあくがれ出る玉かとぞみる。明月記曰、嘉祿二年四月七日、招請承明門黄門、令褁灌佛布施三ヱダスキ薄物、小單文裏、白張、薄物以胡粉、キコヱヌ虫ノ思ダニト令書、以几張手横竿以黑紐結付之、其中入螢也。吉野拾遺曰、暮なばかがり火にて鵜をつかはしてむ。螢のおもしろからしなど、おもひ玉へるけうもつきて云ゝその夜鵜をつかはせ、螢をとりなどせさせたまひて。又曰、山かげのほたるをよすがにたのみたまひて。賢林四季物語曰、かはべのほたるどもの、しぬべくかすなるあり。あきらけきあり。なぐさめ草曰、木の下やみの螢をあわれむ。源平盛衰記巻第十一曰、潭邊(フチベ)ニ亂レ飛螢、何トテ身ヲハ焦(コガ)スラン。同巻第廿三曰、終夜篝ノ火ヲゾ燒タリケル。宿々浦々ニ充滿テ、澤

獸林四季物語群本ノニハ此處見アタラヌヤウナリ

る群本ナシ

初秋ハ内侍のかみトアルベシ

邊ノ螢ノ飛集タルニ似タリ。撰集抄曰、螢火をもとめて學問をこたらざれば

形狀

源氏物語夕がほ曰、はじとみはおろしてけり。ひま〳〵よりみゆる火の光、螢よりけにほのかに哀なり。同螢曰、み木丁のかたびらをひとへうちかけ給ふにあはせて、さとひかる物、しそくをさしいでたるかとあきれたり。ほたるをうすきかみに、この夕つかた、いとおほくつゝみをきて、ひかりをつゝみかくし給へり。本朝無題詩曰、翫螢。惟宗孝言。丹螢萬點在蘆洲云云暗風声後乱猶幽云云變化有時生腐草云云。中右記曰、長承三年五月八日、今日離宮祭也云云入夜遙見河上螢火乱飛如陰天星。四季物語曰、石山寺の御卷數納めらるゝことは、廿日あまりになむあるべし。つとめては治部のかみ圖書、かうろくはんの人をめして、そのかへりまうしに、石山にまうでぬる。かへさには螢いくそばく、うすきぬのうつはにつゝみいれて、宮の内にたてまつれば、こゝらの御す、あるは御つぼのそこらに、あまたはなされて、晴る夜のほしとものせしも、いひしらず思ひたどりぬ。されど此むしも、夜こそあれ、ひるはいろことやうに、夜の光には氣をされて、をとれる虫なり。まいて、手にふれ身にそへては、あしき香移りきぬ。手には蘭をにぎり、身には百壽の香をぬるわかうど、君前にては、心あるべきむしのかならし。方丈記曰、草むらの螢は、とをく眞木の嶋のかゞり火にまがひ。太平記卷第三十一曰、笛吹峠ヲ顯レバ、月ニ消行螢火ノ山陰ニ殘ルニ不異。袖中抄曰、伊勢物語云云今案云云ともしけちは、ほたるのひかるを、こよひおほんをくりの火にたとへてよめるゝ。奥義抄云云物見車に源至が螢をとりていれたりけるを、車なりける人、このほたるのともすにやあらん、ともしけちなんとすめるとてよめるなり。宇津保物語初秋曰、螢、おはします御前わたりに、みつよ

うハたノ誤カ

つゝれてとびありく。上これがひかりにものはみえぬべかめり、とおぼして、たちはしりて、みなとらへて、御そでにつゝみて、御らんずるに、あまたあらんはよかりぬべければ、やがてわらはべやさぶらふ、螢すこしもとめよや。かのふみ思ひ出ん、と仰らる。殿上わらはべ夜ふけぬれば、さぶらはぬ。うちにもなかたゞの朝臣は褻りうる心ありて、水のほとり草のわたりにありきて、多くの螢をとらへて、朝服のそでにつゝみてもて參りて、くらき所にたちて、この螢をつゝみながらうそぶく時に、上いとゝく御らんじつけて、なほしの御袖にうつしとりて、つゝみかくしてもてまゐり給ひて、內侍のかみのさぶらひ給ふ几帳のかたびらをうちかけ給ひて、ものなどの給ふに、かの內侍のかみのほどちかきに、この螢をさしよせて、つゝみながらうそぶき給へば、さるうすものゝ御なほしにぞたゞつゝまれたれば、殘る所なくみゆる

久曾牟之（クソムシ） 本草和名

【漢名】 蜣蜋 本草

【今名】 クソコガネ

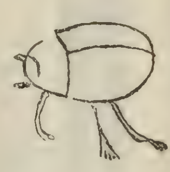
正字通曰、蛣蜣、一名蜣蜋、深目高鼻黑甲、甲下有翅、飛鳴洪洪狀、五六月中、𠻘糞土作丸、雌雄相與還之一前行以後兩足曳之一自後推致堀地爲坎納丸覆之去不數日丸自動又一二日有蜣蜋自中出飛去〇倭名鈔曰、糞推阿久太布

【一名】 末呂無之 倭名類聚鈔曰、蜣蜋。和名久曾無之、一云末呂無之 久曾無之 見上註 久曾无之 本草類編 末呂牟之 本草和名曰、蜣蜋。和名末呂牟之、一名久曾牟之

【形狀】 本草類編曰、蜣蜋。和久曾无之、九月五日採、明干蒸狀黑、而有羽飛屎上一寸餘〇大和本草曰、蜣蜋糞中ノ黑

虫ナリコガ子ムシニ似タリ、
蜣蜋ハ甲黒色甲下ニ翅アリ

證類本草蜣蜋圖



末太良无之（マダラムシ）本草類編　漢名　斑蝥　本草綱目

今案　本草類編ニ末太良无之ヲ葛上亭長トシ、末女无之ヲ斑猫トス。末太良无之ハ卽斑猫ヲ訓シタルモノ也。末女无之ハ卽マメハンメウ也。本草啓蒙ニ、葛上亭長マメハンメウ、江州ノ地豆ニ宜シ。夏月北風吹ク寸ハ、此蟲生シテ擧田皆食ヒ枯ラスニ至ルト云。和州ニテハ數多群ヲナシ、菽田ニ來リ、コグチヨリ苗ヲ食ヒ盡ス。蟲長サ四五分濶サ二分弱、形蠻來ノ芫青ニ似テ小ク、甲ハ色黒クシテ綠光アリ。竪ニ褐色ノ細條二三條アリ、首ハ黄赤色ナリト云。卽末女无之也。證類本草曰、斑猫。陶隱居云、豆花時取レ之、甲上黄黒斑色如ニ巴豆大一者是也。圖經曰、斑猫、長五六分、甲上黄黒斑文烏腹尖喙如ニ巴豆大一

【形狀】○本草啓蒙曰、漢渡眞物ナレモ今ハ渡ラズ、蠻舶來モ形狀同ジ、長サ一寸許、首ニ兩短鬚アリ、背甲ニ黄ト赤黄色ノ斑アリ、本草原始ノ圖ニ異ナラズ、腹ノ色黑シ。和ノ斑猫、俗名ミチシルベ、此蟲ハ舶來ノ者ヨリ形小ク、長サ八分許、前ハ狹ク後ハ廣ク、行夜(ヘヒリムシ)ノ形ニ似タリ。背甲黑色ニシテ碧綠ノ光アリ。黄ト紅トノ小斑ヲ點シテ美ハシ。腹ノ色黑シ。大和本草曰、斑猫。夏秋多シ、靑黑ニシテ白點多ク、マダラナリ。翅アリテ飛ブ。毒虫ナリ

【藥製】福田方曰、斑猫。足ト翼ヲ去テ、糯ノ米ニマゼテ、炒過テ使ヘ。ナマシケレバ吐瀉スルゾ

本草原始所載

斑蝥



物品目錄所載斑蝥圖



漢渡

久須加ツ良乃牟之(クスカツラノムシ) 醫心方

【漢名】葛上亭長 本草

【今名】マメハンメウ

證類本草曰、雷公云、亭長形黑黃在ニテ葛葉ノ上ニ居食ニフ葛膠汁一赤頭額上ニ有ニ大紅一點一身黑

【一名】末女无之 本草類編。按ニ末女无之ハ、マメハンメウ也

【集註】

醫心方曰、葛上亭長、和名久須加ッ良乃牟之

芫菁 頓医抄

今名 アヲハンメウ

證類本草曰、芫靑。陶隱居云、芫花時取之靑黑也

薬製 頓醫抄曰、芫靑。入糯米同炒作、赤色黃黑ク去頭足翅ハ用

形狀 ○本草啓蒙曰、芫靑(アヲハンメウ)蠻舶來アリ、形斑猫ヨリ狹小長サ六七分許、ゼウカイホウニ似テ小ク、綠色ニメ金光アリ。腹ハソノ光多シ。和產稀ニ草木上ニ飛來ルヿアリ。形蠻產ニ異ナラズ。一種形瘠細ク、黑色ニメ碧光アルモノハ處々ニ多シ

宇利波閉(ウリバヘ) 倭名類聚鈔

漢名 蠸 爾雅

今名 ウリバヘ

倭名鈔曰、守瓜。爾雅注云、蠸、一名守瓜。食瓜葉者也。和名宇利波閉

集註 古今著聞集巻第六曰、或時ハ信近茋田にありて共むしをはらひければ、頼能も隨て朝より夕にいたる迄もろ共にはらひけり。延喜內膳式。耕種園圃。營早瓜一段云云拂虫十二人

形狀 ○ウリバヘハ甲蟲也。夏月瓜葉上ニ聚リ、瓜葉ヲ食ヒ害ヲナス、大サ三分許、黃甲ニメ、身黑コガ子ムシニ似タリ

雜蟲類

万自物（マジモノ）　新撰字鏡

〔漢名〕 **蠱**　無寃錄註曰、蟲有足虫也

正字通曰、蠱、公虎切、音古、蠱毒也。日南蠻方以五月五日聚百種虫、大者至蛇、小者至蝨、合置皿中、餓使相啖、其獨存者爲蠱、以其矢因食入人腹、人輙死。無寃錄曰、造畜蠱毒、（造謂聚自造成蠱害人也）害人性命、宋孝武時、沛縣唐賜往北村朱起母彭家飲酒、還得病、吐蠱十餘枚、臨死語妻張氏、剉腹出病、屍死後張手自破視、五臟悉碎、蛆蠱有多種、罕能究悉。五雜組曰、蠱蠱、北地所無、獨西南方有之、閩廣滇貴關中延綏臨洮皆有之、但各處之方有不同耳、閩廣之法大約以端午日取蛇蜈蚣蜥蜴蜘蛛之屬聚爲一器、聽其自咬、其它盡死獨留其一、則毒之尤矣、以時祭之、俾其行毒、毒之初行必試一人、若無過客、則以家中一人當之、中毒者絞痛吐逆、十指俱黑、嚼豆不腥、含礬不苦、是其驗也、其毒遠發十載、近發一時、初覺之時尚可用甘草菉豆諸藥解之、及眞麻油吐之、三月以後不可爲也、又有桃生蠱、食雞魚之類、皆變爲生者、又能易人手足及心肝腎腸之屬、及死視之皆木石也、又有金蠶毒、川筑多有之、食以蜀錦、其色如金、取其糞置飲食中、毒人必死、能致它人財物、故祀之者多致富、或不祀則多以金銀什物裝之道左、謂之嫁金蠶、夷堅志所載有得物者、夜而蛇至其人知其蠱也、生捉而啖之、至盡飲酒數斗、而臥帖然無恙、說海載福淸有訟金蠶毒者、取二刺

蛕ニ取レ之立ニ得、然今福淸不ニ惟無ニノミ金蠶一、亦無ニ刺蛕一也。文選理學權輿補曰、南中畜蠱之家蠱昏夜飛出飮水之光如曳彗。柳河東集曰、皿蠱化爲レ癘。夷俗多所神、註左傳皿蟲爲蠱、注皿器也、器受蟲害者、爲蠱。事物紺珠云、蠱毒中州他省所無。獨閩廣滇貴有之。行廣右。見艸有斷腸。物有蛇蜘蛛蜥蜴蜣蜋。食而中之。絞痛吐逆。十指俱黑。遠發十年。近發一時。吐水不沈。嚼豆不腥。含礬不苦皆是物也。又有桃生蠱。食魚則腹變生魚。食雞則腹孕活雞滇畜蠱甚衆不害人。其神多蛇蟾騾馬之狀。取死兒墳土。灑牀下。置蠱神於上。其上或化錢貝咫聞錄曰下蠱。廣西近安南之區家多畜蠱入其室無灰塵蛛網者卽是有蠱之家其類不一有魚蝦之蠱有牛皮之蠱有蛇蠱布蠱狗蠱蛤蟆蠱難以備載　○寄園寄所寄曰、凡ッ中ルニ蠱毒ニ無レ論スルコ年代遠近ヲ、但煮テニ一雞卵一ヲ插ミ銀釵ヲ於肉ニ併含レ之、約一食頃取ニ出雞卵一、俱黑卽中毒也。其方用ニ倍子二兩硫黃末一錢甘艸三寸一半炮出火毒一半生丁香木香麝香各十文輕粉三文糯米二十粒其八味ヲ入ニ小沙瓶內一水十分煎取ニ其七倭一藥面生ニ皺皮一爲レ熟絹濾去レ滓通曰服病人平正仰臥令ニ頭高一覺ニ腹間有物衝心者一三卽不レ得レ動若ニ吐出一以レ桶盛レ之如ニ魚鰾之類一乃是惡物吐罷飮茶一盞瀉亦無レ妨旋煮ニ白粥一補忌ニ生冷膩酢醬一十日後服ニ解毒丸三兩丸一又經テ旬日一平復○字鏡曰、蠱。宮戶反、万目物　集註　律曰、凡造ニ畜蠱毒一謂造合盛レ蠱堪レ害レ人者、及敎令者絞云云。明月記曰、伯三位妻取夫之宿衣入厭物、三位卽見付弃之追却妻之所從等

○蛇蠱　今名　タウベウ

嵩谿織志曰、有ニ蛇蠱蜥蜴蠱蜈蚣蠱金蠶蠱諸種一不レ一今間有レ之惟彼人能解然亦不レ令ニ人見一也。按已上ハ人ノ造畜テ災スルモノ也。蛇蠱ニ同名アリ。廣東通志ニ、蛇蠱形如ニ蜘蛛一、腹大足短、時處ニ樹間一ニ人皆忽レ之傷レ人最毒ト云ハ

一種ノ蟲也　**集註**　大鏡曰、右大臣道兼、この君人しもこそあれ、蛇れうし給ひて、そのたよりにより、かしらに物はれてうせ給ひ云々。明月記曰、建久七年四月十七日、新日吉近日有蛇、男一人隨其蛇、吐種々狂言、稱蛇託宣。又云、後白川院後身也云々、此事不便、書奏狀進之云々、殿下仰云、是可追拂事也。率爲故院甚見苦事也似例ヲ注ス　**形狀**　〇大和本草曰、日本ニ中國ノ小蛇トテ、安藝ニ虵神アリ。又タウベウト云、人家ニヨリテ蛇神ヲツカフ者アリ。其家ニ小蛇多クアツマリ居テ、他人ニツキテ災ヲナス事、四國ノ犬神、備前ノ兒島ノ狐ノ如シ

毛牟 字鏡

一名　母牟　新撰字鏡曰、蛇。母牟。蟒、毛牟

衣女虫 字鏡

字鏡曰、蝒。衣女虫

たるなむし 後葉集

【集註】後葉集物名曰、たるなむし「君かためむれてきたるなむしろ田の鶴の毛衣ちよをかさねて

惡虫 百練抄

【集註】百練抄第八曰、高倉院治承三年四月。近日童謠云、自二五月一日一惡虫可レ降、不レ可二日食一者可二天命一、三百年一度有二此事一云云、無二差本文一

奴天乃岐乃牟之（ヌテノキノムシ） 本草和名

【漢名】樗雞 本草 和産今不知

【一名】奴天乃支乃无之 本草類編○本草和名曰、樗雞。

證類本草曰、樗雞。陶隱居云、形似二寒螿（ツクヽボウシ）一而小。圖經曰、蘇公云、五色具者爲雄、靑黑質白斑者是雌

和名奴天乃岐乃牟之

【集註】駿河國風土記曰、烏渡郡産樗鷄

證類本草樗雞ノ圖



ツヽカ　【漢名】恙

天祿識餘曰、恙毒虫也、能傷人、古人草居露宿、故早相見問勞必曰無恙。品字箋曰、恙本毒蟲名、能食人心、古者穴居、多被此害、故相問勞曰無恙。又神異經北方有獸曰㺊。㺊卽恙也、黃帝殺之、由是人無憂疾、謂之無恙、今俗問人病爲貴恙、本此

【集証】萬葉集第十三曰、眞福座跡、恙無。下學集曰、恙者齧レ人虫也。上古之時人未レ知レ造二家屋一皆處二土窟一、此ノ時彼ノ恙虫螫レ人ヲ爲レ害ヲ、故ニ人々相慰問ノ云レートレーレ也

古名錄蟲○卷第五十三目錄

鱗蟲類

太都(タツ) 龍 ○龍骨
遠呂智(ヲロチ) 蟒
加良須倍三(カラスヘミ) 風梢蛇
平等扁比 兩頭蛇
白蛇
足蛇
青蛇
白花蛇
止加介(ムカケ) 石龍子
イモリ 守宮

美豆知(ミツチ) 蛟龍
倍美(ヘミ) 蛇 ○倍美乃毛奴介(ヘミノモヌケ) 蛇蛻
またらなるこくちなは 赤鏈蛇
金色蛇 金蛇
波美(ハミ) 蝮蛇
五色蛇
仁之木倍美(ニシキヘミ) 蚺蛇
烏蛇
井毛利(キモリ) 蠑螈
しゝ虫 蛇醫

通計二十二種

海蟲類

久良介　水母　　古　沙暎　○伊里古海參　○このわた

海馬　　爲伊

通計五種

古名錄蟲部卷第五十三

紀藩　源　伴存撰

鱗蟲類

龍 本草　[漢名]

タツ　[今名]

太都（タツ） 倭名類聚鈔

[正誤] 本草綱目ニ出タリ

名物攷曰、說原云、龍有三停九似之說、謂自首至膊、膊至腰、腰至尾、皆相停也。角似鹿、頭似駝、眼似鬼、項似蛇、腹似蜃、鱗似魚、爪似鷹、掌似虎、耳似牛。或云、龍無耳、故以角聽。按ニ此說非也。海南日抄曰、尺木。吳志ニ龍欲騰翥、先階尺木、解者謂、尺木ハ龍頭上之骨也。攷ルニ桓譚新論ヲ本草啓蒙曰、典籍便覽ニ龍額上有一物、如博山形、名尺木ト、龍無尺木不能升天ト云フ。按ニ此說云、龍無尺水、無以升天、聖人無尺土、無以王天下、則尺木當爲尺水、或吳志本是尺水後人誤爲木耳

[一名] **於箇美**（オカミ） 日本書紀曰、龗、此ヲ云於箇美ト。音力丁反。豐後國風土記曰、即有蛇龗、謂於箇美ト。字典曰、龗、唐韻、集韻、竝丁切音靈。說文龍也、玉篇作靈神也

於可美 萬葉集第二曰、吾崗之、於可美爾言而、令落、雪之摧、彼所爾塵家

武。萬葉集註釋第二曰、をかみは虵龍を云也

淤加美 古事記曰、此神娶淤加美神之女、比那志毘賣。

於箇魚 釋日本紀曰、闇龗、私記曰、是山神也。但謂之ヲカミト未詳其由。豐後國風土記曰、直入郡球覃郷、此村有泉云云、即有蛇龗、謂於箇魚、於茲天皇勅云、必將有臭、莫令汲用、因斯名曰闇泉、因爲名、今謂球覃郷者訛也。案闇龗非山神、可謂蛇之類。

りう 思ひのまゝの日記曰、扨もち月の御馬、ことしはまことのおくのへいのむまども四五歳の、行すゑは、りうにもなりぬべき物どもなり。周禮、凡馬八尺已上爲龍駥

多都 萬葉集第五曰、多都能馬母云云。多都乃駒乎。六帖曰、十つゑあまり八つゑをこゆる龍のこま。竹取物語曰、我ゆみの力は、龍あらばふといころして首の玉はとりてん云云いと遠くて、筑紫のかたの海にも漕出給ぬ。いかゞしけむ、はやき風吹て、世界くらがりて、船を吹もてありく云云波は船に打かけつゝまき入、神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに云云神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは、辰を殺さんと求給ふ故にある也。はやても龍のふかするなり云云梶取のいはく、是もたつのしわざにこそ云云たつはなる神のるいにこそ有けれ。倭名鈔曰、龍。和名太都。延喜式第十三曰、圖書寮。山形二基、一基立青龍形、一基立赤龍形。同卷第十九曰、式部下。其禮冠者云云一品青龍、尾上頭下、右出左顧。眞俗交談記曰、五龍時、青龍掌木、黑龍掌水。神泉苑龍王者水龍也。御諸青龍種木也。水龍木龍雖各別、木水是一也。萬葉集第十五曰、多都多能山乎云云

【集註】三代實錄卷第二十七曰、淸和天皇貞觀十七年六月廿三日、甲戌、不雨數旬、農民失業云云。古老言曰、神泉苑池中有神龍、昔年炎旱、焦草礫

乾ノ上水字脱カ

てハ衍カ古寫本ナシ

召台頌大系本合嶽トス

レ石、決二テ乾池一、發二鐘鼓ノ聲一ヲ、應時雷雨ルヿ必然之驗也。百練抄卷第十六曰、後深草院寶治元年正月廿五日己卯、入レ夜大雨雷鳴。北野邊大蛇出現云云。吾妻鏡卷第十曰、文治六年五月十五日、甚雨、大風、雷鳴、終日不二休止一セ、大倉山震動シ、樹木多顚倒シ、岩石頽落、其跡俄ニ爲二細流一ト、是龍ノ降ト云云。同卷第三十二曰、嘉禎四年六月廿五日、雨降、終日不レ休、大風霹靂洪水人屋多破損、栂尾淸瀧河邊虵出云云。同卷第四十九曰、正元二年十月十五日、相洲政村息女煩二邪氣一、今夕殊惱亂、爲二比企判官女讃岐局靈祟一之由、及二自託一云云、件局爲二大蛇一頂有二大角一、如二火炎一、常受レ苦、當時在二比企谷土中一之由發レ言、聞レ之人豎二身毛一云云。古今著聞集卷第一曰、基隆朝臣周防國をしりける比、保安三年十月にかたりけるは、彼國にしまの明神とておはします、神主寧籠の事有て、論しけるもの有とて、神田をかりとらんとしければ、寶前より蛇三百斗出たり。其内につの有二つ有けり。しばしありて入ぬ。同卷第十七曰、延長八年七月十五日云云同廿日くろき雲にして南より來て、龍尾壇をおほふ。すなはち風吹て、大じやの五六丈ばかりなるおちかゝりて、高欄やぶれにけれど、虵は見へざりけり。源平盛衰記卷第四十八曰、龍ニアラ子バ雲ヘモ上ラズ。美濃國風土記曰、渥美郡瑞龍山、往昔龍在此山中數年故以名。日本記略曰、弘仁十年秋七月丙申、京中白龍見テ、有二暴雨一、損二民屋一ヲ。東海一漚集云、二條關白藤丞相殿下池中ニ有レ龍見焉云云且言是歲有レ龍見二于此池一云云。扶桑略記廿二、宇多天皇紀曰、即位之間、自二乾角山中一、黃龍騰レ天。太宰少貳淸原令望爲二堰大井灘使一、見レ之。從五位下橘有棟參二梅宮一之次見レ之。丹波博士丹波有多、在二彼國一見レ之。件三人慥見レ之、往々見多也。同廿九日、治曆元年五月廿一日、今日、召台頌僧侶等群二集賀茂社一、爲二祈雨一轉二讀仁王經一、爰有二小蛇一、於二寶殿前一吐二出水

氣、不レ經ニ時刻一雨脚少降

形狀 百練抄第四曰、後冷泉天皇永承六年五月五日、主上令レ吹レ笛給、如三龍之吶ニ水中一。近世無ニ如レ此事一、人以感歎。 塵添壒嚢抄曰、龍蛇トハ別物ト覺ルニ、虵ノノボリテ龍ニ成ルト云ハ、龍ハシメハ虵歟。又龍モ虵ノ姿ニテ見ル事先蹤アリ云云、虵ノ竜ニ成事ハ、轉證ノ義歟云云。竜ハ足羽アリ、虵ハ羽モ足モ無キ物ナレバ也。當時ノ相ハ不同、名モ又別也。龍ノ虵ノ形ヲ顯スハ、虵常ニ世間ニアル物ナレバ、是姿アリテ現歟。虵龍ハ身ノ長クテ物ヲマツフ能アルニヤ、蛇ノ登リテ、辰ニ成云ハ、蛇龍ニ成ルマデアルニコソ。龍門ノ魚ハ、魚龍トコソ成ラメ。便宜皆可レ然覺ル也。龍ノ吟スル聲、馬ノイナヽクニ似タリト申ハ、馬龍声歟。帝釋乘玉フ伊羅波大龍馬トテ、鼻ノ長シテ、馬ノ如クナル龍アリ、是ナドハ馬龍ナルベシ。蝦蟆龍ト云ハ、カエルニ似タル龍ナリ。龍ニハ種々ノ形アリ、羽無モアリ、無レ足アリト。又曰、役行者、箕面ノ瀧三尺ノ龍有テ、常ニ黑雲ヲ吐ヲ見テ、彼瀧ノ上ノ深淵ニ入レリ云云 ○今世蝦夷(エゾ)錦ト云物ニ龍形皆五爪也。帝京景物略、窯器註云、今市所爭購、多當年不レ中ニ御用一者ハ、其有ニ龍紋五爪一不レ落ニ民間一。或礪ニ去一爪一ヲ、而亦市レ之ヲ。 楊州畫舫錄云、金扇面江洋海水諸式惟貼レ金、五爪龍ハ則親王用レ之、仍テ不レ許レ離ニ刻スルヿヲ龍首一、降ニ一等一用ニ金彩一、四爪龍ハ貝勒貝子以下則貼ス各樣ノ花草一、平民ハ不レ許サレ貼スルヿヲレ金。 韃靼漂流記ニ、同廿一日馬十五疋引セ、武官ト覺シキ人迎ニ來レリ。五爪ノ龍ノ紋付タル大旗二本云云。 陔餘叢考ニ、辰ハ屬レ陽龍ハ五爪也

漢名 龍骨 本草 ○タホ 延喜式龍骨ノ傍訓

本草彙言曰、龍骨一品本經謂ニ死龍之骨一、陶氏謂ニ蛻化之骨一、後之臆度者辯訟紛紛總レ之未ニタ嘗テ親ク見聞一、嘗過ニ晉蜀山谷一、爲レ訪ニ所レ產ニ龍骨一之處上、岩石稜峭谿徑墳衍、則有ニ礌

三貞、京二本卅ニ作ル

磪トメ如ニ龍鱗ニ隱隱トメ若ニ爪牙ニ者ト、隨レ地掘レ之盡皆龍骨、豈眞龍之骨有ニ若レ此之多而又皆盡積ニ於梁益諸山ニ也、要皆石燕石蟹之倫、蒸氣成レ形石化ニメ而非ニ龍化ニ耳

【集註】延喜式卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥。龍骨一兩二分。諸國進年料雜藥。安房國、龍骨三斤。太宰府、龍骨六十斤

【藥製】福田方曰、龍骨、五色具者乃各五藏ニ主ル、酒ニ浸テ一宿メ焙干テ研テ使ヘ。若急ニ使ニハ、酒ヲ以テ煮干メ焙テ使ト云ヘリ。頓医抄曰、龍齒打碎テスレ

【附方】產后尿血ヲ治ス　頓医抄曰、龍骨五兩、右細末メ毎服方寸貝ニテ三スクヒ、空服ニ以酒調下ス、卅服シテ平愈ス

【形狀】○本草啓蒙曰、凡龍骨ハ中ニ針眼アリテ、舐レハ舌ニ着クモノヲ撰ベシ

美豆知（ミツチ）　倭名類聚鈔

【漢名】蛟龍　本草

【今名】ミヅチ

廣雅曰、虬無角。柳河東集曰、有虬蜲蛇不角不鱗、注有角曰龍、無角曰虬

【一名】水虬　日本書紀。萬葉集卷第十六曰、虎爾乘、古ル屋乎越エ而、靑淵爾、鮫龍取リテ將來（コム）、劒キ刀（タチ）毛我

美都知　日本書紀

天文写本和名抄○倭名鈔曰、蛟。說文云、蛟龍屬也。山海經注云、蛟似蛇而四脚、池魚滿ニルトキハ二千六百ニ則蛟來爲ニルカ之長ト。和名美豆知、日本紀用ニ大虬二字ニ

【集註】日本書紀曰、仁德天皇六十七年、是歲、於ニ吉備中國川嶋河派ニ有ニ大虬ニ令レ苦レ人、時路人觸ニ其處ニ而行、必被（ヲカサル）ニ其毒ニ以多死亡。於レ是笠臣祖縣守、爲レ人勇悍而强レ力、臨ニ派淵ニ以ニ三全瓠ニ投レ水曰、汝屢吐レ毒令レ苦ニ路人ニ、余

蚪諸本虬ニ作ル下同

殺ニ汝蚪一、汝沉ニ是瓠一、則余避之、不レ能レ沉者、仍斬ニ汝身一。時水蚪化レ鹿以引ニ入瓠一、瓠不レ沉、即擧レ劍入レ水斬レ蚪、更求ニ蚪之黨類一、乃諸蚪族滿ニ淵底之岫穴一、悉斬レ之、河水變レ血、故號ニ其水一曰ニ縣守淵一也

形狀 砂石集曰、海ノ中ニ虬（ミヅチ）トイフ物アリ、蛇ニテ角ナキ物トイヘリ

遠呂智（ヲロチ） 古事記　漢名 蟒　今名 ウハヾミ

野獲編曰、蟒者大蛇非龍類、蟒無足無角

和名耶萬加々知　夜萬加々智　一名 於呂地 駿河國風土記、按於遠誤也　耶萬加々知 天文写本和名抄曰、兼名苑云、蟒。蛇之最大者也。倭名類聚鈔曰、蟒蛇。和名夜萬加々智。見內典。古事記曰、是高志之八股遠呂智云云、答曰、彼目如赤加賀智云云此謂赤加賀知者、今酸醬者也。本草和名曰、酸漿。和名保々都岐。塵添壒嚢抄曰、大蛇ヲヤマカヾチト云ハ何心ゾ。ヤマハ山ノ義歟。大蛇ヲ、クハ深山幽谷ニ住ハ也。カヾチトハ、酸醬（ホウヅキ）ノ名也云云。大蛇ノ目ヒカリテ、赤クマロキガ、色ヨキホウヅキニ似タリケレハ、カク云ヘリ。サレバ日ノホウヅキニ似ニヨリテ、山酸醬（ヤマカヾチ）トハ云ニコソアリケレ。駿河國風土記曰、其川上常世有ニ大蛇一橫行。松柏生レ背、其徑尋々阿里氏、蔓ニ延於八丘八谷之間一、其眼如ニ赤酸醬一、頭尾各有ニ八岐一、因レ之史家謂ニ八岐大蛇一、不レ云ニ大蛇一可、謂ニ於呂地一、取ニ於上晉一、云云、志機之義也 ○續國雜志曰、金華金參軍光善ニ兵法一、明ノ末遊ニ海外一縱ニ觀ニ形勝一、一日乘レ馬登ニ高山一云云望ニ見山形一嵩ク峙シ、山巓ニ

水ノ下本朝紀畧泛字アリ
緣ノ下本朝紀畧河苗稼アリ

懸紅燈二、山忽動、跡之乃巨蟒燈其目也。大理府名勝志曰、蒙詔時龍尾關出大蟒、呑啗人。有段赤城者、葉楡人、披甲持雙刀赴蟒、蟒呑之、劍鋒出其腹、倶死。土人剖蟒、取赤城骨葬之建塔冢上、煆蟒骨以堊塔、因名靈塔。寄園獺祭寄曰、蟒圓目

乎呂知 倭名鈔曰、日本紀私記云、乎呂知　**乎路知** 天文写本 和名抄　**羽羽** 古語拾遺曰、古語大蛇謂之羽羽。源平盛衰記卷第四十四曰、十握劍ヲバ羽々斬劍ト名ク。羽々トハ大蛇ノ名也。此大蛇ヲ斬ハ也）古今著聞集曰、件の山にはやをといふ蛇あり、長さ二丈あまり斗え。かまくびをたてゝ此二人の輩にかゝりて、大口をあきてのまんとしけり云々

集註 日本書紀曰、雄略天皇七年秋七月、甲戌朔、丙子、天皇詔少子部連蜾蠃曰、朕欲見三諸岳神之形、汝膂力過人、自行捉來。蜾蠃答曰、試往捉之。乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇。日本靈異記曰、我飢、七月七日成大蛇到家將入屋戶之時以杖懸棄。三代實錄卷第十九曰、貞觀十三年五月十六日、辛酉、先是、出羽國言、從三位勳五等大物忌神社、在飽海郡山上、巖石壁立、人跡稀到、夏冬戴雪、禿無草木、去四月八日、山上有火、燒土石、又有聲如雷、自山所出之河、泥水溢流、其色青黑、臭氣充滿、人不堪聞、死魚多浮、擁塞不流、有兩大虵、長十許丈、相流出入於海口、小蛇隨者不知其數、緣流損者多、或染濁水臭氣、猶不生、聞于古老、未嘗有如此之異。但弘仁年中見火、其後不幾、有事兵杖。同卷第二十一曰、貞觀十四年五月卅日、己亥、駿河國國分寺別堂有大蛇、呑般若心經三十一卷、複寫一軸、觀者以繩結蛇尾、倒懸樹上、小選吐經、蛇落地半死、俄而更生。吾妻鏡卷第十七曰、建仁三年六月一日、

五月癸丑ハ六月癸亥ノ誤ナリ

將軍著御伊豆奧狩倉、而號伊東崎之山中有大洞、不知其源遠、將軍怖之、已尅、遣和田平太胤長、被見之。胤長擧火入彼穴、酉刻歸參、申云、此穴行程數十里、暗令不見月光、有一大蛇、擬呑胤長之間、拔劔斬殺訖云云。常陸國風土記曰、角折濱、謂古有大蛇、欲通東海、堀濱作穴、蛇角折落。因名。日本後紀曰、弘仁六年五月癸丑、先是、有大蛇入人屋、即殺之、未幾其人被震。平家物語卷第八曰、さらばとて岩屋の内より、ふしたけは五六尺、あとまくらへは十四五丈も有らんとおぼゆる大じやにて、どうようしてぞは出たる云々。宇治拾遺曰、この方の汀ちかくなりて、虵の頭をさしいでたりければ、このくちなは大ならむかし、とざまにのぼらんとするにやと見たてりけるほどに、虵かしらをもたげて、つく〴〵とまもりけり。いかにおもふにかあらんとおもひて、汀一尺ばかりのきて、はたちかく立て見ければ、しばしばかりまもり〳〵て、頭を引入てけり。さてあなたのきしざまに水みなぎると見けるほどに、またこなたざまに水浪たちてのち、くちなはの尾を汀よりさしあげて、わがたてる方ざまにさしよせければ、この蛇おもふやうのあるにこそとて、まかせて見たてりければ、なをさしよせて、經頼が足を三四返ばかりまとひけり。いかにせんずるにかあらんと思て、たてるほどに、まとひえて、きし〳〵と引ければ、河に引いれんとするにこそありけれ、とそのおりにしりて、ふみつよりて、たてりければ、いみじうつよくひくとおもふほどに、はきたるあしだのはをふみおりつ。ひきたをされぬべきを、かまへてふみなをりて立れば、つよく引ともおろかなり。引とられぬべくおぼゆるを、あしをつよくふみたてければ、かたづらに五六すんばかりあしをふみいれてたてりけり。よく引なりとおもふほどに、なはなどのきるゝやう

にきるゝまゝに、水中に血のさつとわきいづるやうにみえければ、きれぬるなりけりとて、足を引ければ、くちなは引さしてのぼりけり。そのときあしにまとひたる尾を、ひきほどきて、足を水にあらひければども、蚰のあとうせざりければ、酒にてぞあらふ、と人のいひければ、酒とりにやりて、あらひなどしてのちに、従者どもよびて、尾のかたを引あげさせたりければ、大きなりなどもおろかなえ。切くちの大さ、わたり一尺ばかり有らんとぞみえける。頭のかたのきれをみせにやりたりければ、あなたのきしに、大なる木の根の有けるに、頭のかたをあまたかへりまとひて、尾をさしおこして、足をまとひて引なりけり。沙石集卷第七曰、他行ノ隙ニ、妻ヒル寢メ久ク不レ驚。夫歸テ子ヤヘ入テ見レバ、五六尺バカリナル蛇マトハリテ、口サシ付テ臥タリ。杖ヲ用テ打ハナチテ申ケルハ、親ノ敵、宿世ノ敵(テキ)トイヒツレバ、子細ニ不レ及殺害スベキナレドモ、今度バカリハ許(ユル)ス、自レ今以後カヽルヒガ事アラバ、命ヲタツベシト云テ、杖ニテ少シ打ナヤメ、山ノ方ヘステツ。其後五六日有テ、家內ノ男女驚サハグ。何事ゾト問ヘバ、蛇ノオビタヽシクアツマリ候ト云。主ナサハギソ、トテ直垂キ、ヒモサメ出居(デヰ)ニ井タリ。一二尺ノ蛇頭ヲナラベテ、間モナク四方ヲカコミテ、庭ノキハマデ來ル。サシマサリタル蛇ツヾキテ、幾千萬ト云數ヲ知ズ。ハテニハ一丈二三尺バカリナル蛇、左右ニ五六尺バカリナル蛇、十バカリ具メ來ル。ミナ頭ヲアゲ舌ヲウゴカス、オソロシナンド云計ナシ云云。又曰、下野ノ國或所ノ路ノ傍ニ、大ナル木ノウツヲヨリ、大蛇ノ頭ラヲサシ出シタルヲ見テ、或ル俗、何ニヲ見ルゾ、ニクキモノカナトテ、矢ヲヌキイダメ、頸(クビ)ヲツヨク木ニイツケテ、ウチステテ、行程ニ、大キナル沼ノホトリヲ打メグリテ、スギケルニ、水ノ上ニオヨグ者有、見レバ大蛇ノ一丈バカリナルガ、頭ニ矢タチテ、水

ノ上ヲオヨギテ來ル。又マチウケテ射殺シツ。サテ家へ歸リハテズ、ヤガテヤミクルヒ、種々ノ事共云テ、狂死ニ死ニケリ云云

【形狀】宇治拾遺曰、大蛇の目はかなまりを入たるやうにて、せなかは青く紺青をぬりたるやうに云々。竹生島緣起曰、有一大蛇、長數丈也。古今著聞集曰、攝津國岐志庄に一丈あまりばかりなる蛇の耳おひたる、時々出現して人をなやましけり。見あふもの必やみければ、此蛇出たると聞ては、村人門戸をとぢて、にげかくれける

倍美(へみ) 倭名類聚鈔 【漢名】**蛇** 本草 【今名】**クチナハ**

正字通、蛇注曰、尾細指中其舌雙、其耳聾、其聽以目、其蟠向壬、其毒扗涎、艸居嘗饑食稍飽輒蛻、冬含土入蟄春出蟄

【一名】**久知奈波** 倭名鈔曰、蛇。和名倍美、一云久知奈波〇萬葉集卷第十日、秋芽子(ハギ)乎、落過沼蛇(ヲアリノギスベヒ)、手折持

蚖(くちなは) 大鏡〇鳴門中將物語曰、くちなはなれば、もとのあなに入て、もとの所に出べし

夜刀神 常陸國風土記、行方郡、古老曰、石村玉穗宮、大八洲所馭天皇之世、有レ人箭括氏麻多智、點二自郡西谷之葦原一、墾闢新治レ田、此時夜刀神、相群引率、悉盡到來、左右防障、令レ勿二耕佃一。俗曰、謂レ蛇爲二夜刀神一云云

宇加 塵添壒囊抄曰、虵(クチナハ)ヲ今ノ世ニ宇加ト云フハ、宇加神ノ蛇(クチナハ)形ニ變ジ、人ニ見エ玉フ心カ 〇常陸國風土記曰、古老曰、有二兄妹二人一云云時妹在レ室、有レ人不レ知二姓名一、常就求レ婚、夜來晝去、遂成二夫婦一、一夕懷妊、至レ可レ産月一、終生二小蛇一

集註 日本書紀卷第三十曰、持統天皇朱鳥元年十二月云云是歲、蛇犬相交、俄而俱死。文德實錄卷第三曰、仁壽元年五月乙未、地震。有二死蛇一、有二南殿前一、頭ニ有二傷處一、似下有レ物嚼上之、何以盡レ之、記レ異也。日本靈異記曰、然後所レ產兒之頭纏レ蛇二遍、首尾垂レ後而生。百練抄卷第四曰、一條天皇寬弘三年七月三日、三尺餘蛇自二御在所庇一落二庭中一、登レ自二南殿北階一、赴レ西不レ見。同卷第八曰、高倉天皇嘉應元年三月云云近日、淸水寺瀧水枯失。去正月自二瀧上一蛇百許出來、占二求之一處、山崩瀧濁歟云云、今亦如レ此爲レ奇。中右記曰、齋院中蛇出來死事。又曰、永久六年、去年十二月、高良宮蛇出來事。明月記曰、建仁二年五月四日、近日頻幸神泉苑、其中被致鹿獵之間、生取猪也。仍堀池苑多食蛇、年々荒池偏蛇之棲也。今如此、神龍之心如何、尤可恐者歟。俗呼云、依此事炎旱云云。古今著聞集卷第二十曰、其父田をすかすとて、田づらに出たりける時、くちなは蛙（かへる）をのみて有けるを、うちはなたんとすれども、はなたざりければ、誠になをざりがてら、其かへるはなて、さらば聟にとらん、といひかけたりける時、くちなは、此ぬしが顔をうち見て、のみかけたるかへるを、はき出して、藪の中へはひ入ぬ。又云、攝津國ふきやと云所に下女ありけり。夏昼ねしたりけるに、家のたる木に、大成くちなはまとひ付てありけり。此女のうへにて、尾をばたる木にまとひて、かしらをさげて落かゝらんとしけるが、又ひきかへし〳〵する事、たび〳〵になりにけり。女が夫、ふしぎのやうかなとおもひて、事のやうを見はてんと思ひて、追ものけずして、かくれよりのぞき居たり。かくたび〳〵けれ共、いかにもおちかゝらざりければ、あやしくて、女をよりてみれば、かたびらのむねに、大なる針をさしたりけるが、きら〳〵として見へけり。もしこれにおそるゝかと思て、針をぬき、又もとの所に

て見るに、やがてくちなは落かゝりにけり。其ときよりて打はなちつ。すなはち女おどろきて語りけるは、夢にもあらず、うつゝにもあらで、うつくしきおとこの來て、われをけざうしつるを、なんぢきて追さまたげつるなり、とぞいひける。されば、人の身には、鉄のたぐひをば必もつべきゝ。わづかなる針にだに、毒虫おそれをなす事かゝり云々。又云、渡邊に往年の堂あり、藥師堂とぞいふなる。源三左衛門かけるが先祖の氏寺ゝ。つがふの馬允が時、此堂を修理しけるに、もとこけらぶきにて有けるが、年久しくなりて、みな朽くさりて侍けるを、ふきかへんとて、うへを取やぶりて侍けるに、大なるくちなは有けり。何とかしたりけん、おほきなる釘に打付られて、年比はたらきもせでかくてありける也。其時、此堂建立の年記をかぞふれば、六十余年になりにけり。その間かく打つけられながら、生て有ける命ながさ、おそろしき事ゝ。其（る）蚰の有けるしたの裏板は、あぶらみがきなどをしたるやうにて、きらめきたりけり。いか成故にか、おほつかなし。是はまさしくかけるが語りけるゝ。又云、建保の比、北小路堀川邊の在家に女有けり。湯をわかして、釜のまへに火をたきて居たりけるに、三尺斗成蛇來て、其かまのまへなるねずみの穴へ入にけり云々。湯を穴の口にくみ入たりける程に、あんにたがはず蛇出て、びり〳〵とひろめきて、やがて死ぬ云々。平家物語巻第四曰、是に付ても天下の人、小松の大臣の事をぞしのび申ける。ある時、大臣さん内のついでに、中宮の御方へまいらせ給ふに、八尺ばかり有けるくちなはの、大臣のさしぬきの、ひだりのりんを、はひまはりけるを、しげ盛さはがば、女房だちもさはぎ、中宮もおどろかせ給ひなんず、と思しめし、ひだりの手にておさへ、右の手にてかしらを取て、なをしの袖の中へひき入、ちつともさはがずつい立て、六位やゝ、

ばノ下ニず、我が郎等のきほふを召してこれをたぶ。たまは」ヲ書キ落セルナラン

六位やゝ、とめされければ、伊豆のかみ仲つな、その時は、いまだゑぶの藏人にてゝはれけるが、仲つな、と名乗てまいられたるに、此のくちなはをたぶ。給つて、弓ば殿をへて、殿上の小庭に出つゝ、見くらの小とねりをまねひて、是給はれ、といはれければ、大きにかしらをふつてにげさりぬ。伊豆の守力およばつて、すてゝけり。撰集抄曰、又草むらの中にそなはりて、人にをちられし虵(へび)にもや侍らん云〻おもひかけぬに、草むらより虵(へひ)の出侍れば、心さはぎて、にげまどふ事のかなしさよ。つれ〴〵曰、龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なるくちなは、數もしらずこりあつまりたる塚有けり。たゞみな堀すつべしと申されたりければ、塚をくづして、蛇をは大井川にながしてけり

形状 枕草紙曰、又二尺ばかりなるくちなはの、おなじやうなるを、是はいづれか、男女とて奉れり。又さらに人えしらず。れいの中將ゆきてとへば、二つをならべて、尾のかたにほそきすばえをさしよせんに、おはたらかさんを、めとしれ、といひければ、やがてそれを內裏のうちにてさしければ、まことに一つはうごかさず、一つはうごかしけるに、又しるしつけてつかはしけり

○倍美乃毛奴介(へミノモヌケ) 本草和名

漢名 蛇蛻 本草

今名 クチナハノキヌ

本草、宗奭曰、蛇從ㇾ口退出、眼精又退。證類本草曰、雷公云、凡使ニ勿ㇾ用ニ青黄蒼色者ヲ、要用下白如ニ銀色ニ者上

一名 返美乃毛奴計 本草類編曰、蛇蛻。和返美乃毛奴計。本草和名曰、虵蛻皮。和名倍美乃毛奴介

倍比乃毛沼介 天文写本和名抄○倭名類聚鈔曰、蛻。野王按、蛻訓毛沼久蟬蛇之解皮也。本草云、蛇蛻、一名龍子

和名 衣倍美乃毛奴介 クチナハノモヌケ 延喜式、虵脫皮ノ傍訓 ノカハ 福田方曰、虵蛻、土アラバ洗テ、炙過テ使ヘ くちなはのかは 薫集類抄

集註 延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊賀國、虵脫皮一兩。尾張國、云云虵脫皮各四斤。近江國、虵脫皮一兩。美濃國、虵脫皮一兩。丹波國、虵脫皮五兩。丹後國、虵脫皮二兩

形狀 ○本草啓蒙曰、蛇脫皮、甚薄ク色白クメ光アリ、銀ノ如シ

加良須倍三 倭名類聚鈔

漢名 風稍蛇 本草

本草綱目曰、烏蛇。有二二種一、一種長大無二劍脊一、而尾稍粗者名二風稍蛇一

今名 カラスクチナハ

一名 黑蛇 百練抄○倭名鈔曰、蚖蛇。加良須倍三。塵添壒囊鈔曰、蚖蛇ト書テハ、カラスヘビトヨム ○本草綱目曰、蚖與レ蝮同類、即虺也。長尺餘、蝮大而虺小、其毒則一。即クソヘビ也

集註 百練鈔卷第十一曰、後鳥羽院、建久三年八月一日辛丑、北野御輿迎也。仍奉レ昇二出神輿一之處、自二三王子御輿一蛇出來、遷二正殿御輿一云云。大炊頭師尚勘二申天仁二年八月一日御輿迎日黑蛇死二御輿中一事上。今昔物語曰、そのかたはらより三尺ばかりの烏蛇はひ出たり

形狀 ○大和本草曰、黑蛇ハ又ウシクチナハト云、遍身黑シ。腹ハ淡黑ナリ。口中紅シ。身長大ナルアリ、人ヲ逐フ

またらなるこくちなは 宇治拾遺　[漢名] **赤楝** 正字通　[今名] **アヅキクチナハ**

本草綱目曰、赤楝、紅黑、節節相間儼トシ如ニ赤楝桑根之狀ー。正字通曰、赤楝ハ蛇ノ名、伏ニ人家屋間ニ食ニ鼠子雀雛ヲ、卽赤楝蛇、又名桑根蛇　[一名] **にしきの色のくちなは** 水鏡。古事記曰、又錦色小蛇纏ニ繞(マトメグリ)我頸ニ

[集註] 宇治拾遺曰、ふみかへされたるはしのしたに、まだらなるこくちなはの、きり／＼としてゐたれば、石の下にくちなはのありけるといふほどに、このふみ返したる女のしりにたちて、ゆら／＼と、このくちなはのゆけば云々

[形狀] 〇大和本草曰、蛇(クチナハ)カラセウヒ、黑赤相マジハル小ナリ。腹黃、舌黑シ

平等扁比(ベウトウヘビ) 本草類編　[漢名] **兩頭蛇** 本草

嶺表錄異曰、兩頭蛇、嶺外多有此類、時有見者如小指大。長尺許腹下鱗紅背錯錦文。一頭有口眼。一頭似有口眼。兩頭俱能進退。亦謬也昔孫叔敖見之爲不祥。乃殺而瘞之。慮後人見之必受其禍。而南人見之以爲常。其禍安在〇本草類編曰、兩頭蛇。和平等扁比。按藻塩草曰、あひおひふたまたの木ゝ。又古今の序に、あひおひのやうにおぼえとあるは、相逢也。たがひなるやうに、平等に思理也。觀此則平等ハ內典ニ乃至法界平等(ヘウトウ)利益ノ平等也

金色蛇 空海遺告　〔漢名〕 金蛇 本草

證類本草曰、金蛇、大如中指、長尺許、常登木飲露、身作金色、照日有光、亦有銀蛇。北戶錄曰、公路至雷州、對岸倚舟候風勢、見群小兒簇二互蛇、各長丈餘、一如孔雀尾毛、色金翠奪日

〔集註〕 本朝神仙傳曰、昔神泉苑行請雨經法、金色小龍乘丈餘蛇、有兩蛇[illegible](クチトリ)　〔形狀〕 空海遺告曰、神泉蘭池邊御願修法祈雨云云、從池中現形宛如金色、長八寸許蛇也、此金色虵居在長九尺許虵之項也

白蛇 中右記○白蛇名出于北戶錄　〔今名〕 シロヘビ

史記曰、高帝被酒夜徑澤中、有白蛇當道、高帝拔劍斬之

〔集註〕 中右記曰、長承三年五月十三日、今日院白虵、十八日天晴、白虵渡一条庭水、大湛如池水也。康富記曰、嘉吉三年六月五日、後聞、今日石淸水八幡宮末社、武內御社御殿內、白蛇死有之、久成躰之間、臭氣以外也。仍驚入之由、自社家令注進之間、後日被尋先例於兩局輩云云。太神宮袈裟記曰、八月二日師再詣大神宮時自外宮中三尺餘白蛇出來、蟠屈于師之袈裟下

波美（ハミ） 倭名類聚鈔

【漢名】蝮蛇 本草

證類本草曰、陳藏器云、蝮蛇形短鼻反、錦文亦有ニ與レ地同色者一、著ケハ足ニ斷チ足ヲ、著ケハ手ニ斷ツ手ヲ、不レハ爾ラ合身糜潰

【今名】ハビ

【一名】乃豆知 新撰字鏡曰、蝮。扶福反、乃豆知。延喜式曰、加賀國加賀郡野蛟神社○砂石集曰、野槌（ノツチ）トイフハ常ニナキ獸ナリ。深山之中ニ希ニアリ、形大ヌ目鼻手足モナシ、只口計リアル物人ヲ取テ食ト云リ。按此說不確。古書ノヅチト云ハ蚖（クソヘビ）ニヌ長サ四五寸、首尾一般ノハビ也。

乃川知 本草類編

久知波美 同上。徒然曰、めなもみといふ草あり、くちばみにさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、則いゆとなん。見しりてをくべし。本草和名曰、蝮。和名波美。倭名鈔曰、蝮。和名波美、俗呼蛇爲反鼻、其音片尾。塵添壒囊抄曰、毒虵ヲ、クチハミト云フ、イカナル義ゾ。クチト云ハ腐爛ノ心也。サシタル所ニ、毒氣入テ、クヂクサル故ナルベシ。蝮ノ字ヲバ、ハミトヨム。兼名苑ニハ、一名ハ反鼻ト云ヘリ。又片尾（ヘン）トモ可レ書。ヒヲ略ノ、ヘミト云フ。蚖蚰書テハ、カラスヘビトヨム云云通音ナレバ、ヘミヲハミト云ヒナセリ。此故ニクチハミトモ云フ（蚖ハクソヘビ也。本草綱目、蚖、色如レ土、小如ニ蝮蛇一者是也

片尾 見上注

多治比 古事記

眞虫（マムシ） 頓醫抄曰、癩病、鴨燒ケハ黑藥可付、鴨燒ケ者如ニ火燒ケ跡一黑藥ハ眞虫（マムシ）ノ灰也。又曰、赤竜丸云 云眞虫灰五八霜也

【集註】本草類編曰、蝮蛇膽。和久知波美。又云、乃川知、五月取燒使之

【形狀】○大和本草曰、蝮虵。倭名クチバミ、又マムシト云。

及ハ乃ノ誤カ

西土ノ俗、ヒラクチト云、人ヲクラヘバ往々死ス。形不レ長、頭尾ノ大サ相似タリ。黑色腹白シ。又黑色ニ靑赤ナル星アルモアリ。本草啓蒙曰、蝮蛇、長サ一尺餘、灰色ニシテ黑斑文アリ、又小朱點アルモノアリ

今案 延喜式卷第二十二云、民部上。凡ソ勘籍之徒、或ハ轉シテ蝮部姓ヲ注ス丹比部ト、如レ此之類、莫レ爲ス不合ト。ト觀レバ、古ハ蝮ヲ多遲比ト云ルヿ明也。古事記曰、次蝮之水齒別命云、次蝮之水齒別命亦治メタマフ天下ヲ。亦爲ニ水齒別命之御名代、定ム蝮部ヲ。水齒別命坐シテ多治比之柴垣ノ宮ニ、治メタマフ天下ヲ。ト觀ユ。蝮ヲ多治比ト云正證也。日本書紀曰、天武天皇十二年春正月己丑、庚寅、筑紫太宰丹比眞人嶋等。續日本紀卷第一曰、文武天皇四年春正月、癸亥、有レ詔、賜フ左大臣多治比ノ眞人嶋ニ靈壽杖及輿ヲ。倭名類聚鈔曰、河內國丹比、太知比ト云フ。日本書紀云、多遲蕤者、今虎杖蕤也。故謂ニ多遲比瑞齒別天皇ト。新撰姓氏錄曰、色鳴宿禰稱ニ天神ノ壽詞ヲ、奏レ号曰ニ多治比瑞齒別命ト、及ヒ定ム多治部ヲ諸國ニ爲ニ皇子湯沐邑ト。即チ以テ色鳴ヲ爲レ宰、令レ領ニ丹比戸ヲ。因テ号ニ丹比連ト、遂ニ爲ニ氏姓ト。此即蝮ノ狀形、小朱點アリテ、虎杖ニ似タルニ據テ、蝮ヲ多遲比ト云ル徵ニシテ、本草類編ニ、虎杖。和伊太止利、莖狀斑赤色ト云是也

足蛇（アシアル） 百練抄 **漢名** 千歲蝮 本草

本草綱目曰、蛇有ル四足ノ者、注 鱗蛇、千歲蝮、苟印、蜥蜴皆有レ足。證類本草曰、又有ニ一種、狀蝮而短、有ニ四脚、能跳來テ齧レ人、東人名爲ニ千歲蝮、人或ハ中レハ之ニ必ス死ス、然ノ其齧メハ人ヲ已ニ即チ跳テ上レ木ニ作レ聲、其聲云フ、

註 諸本雖に作る　躰 同時　愚 同是　童ノ上 同見アリ　云云 同云也　叶ノ下 同了アリ

研木斫木者
不レ可レ救也

［集註］

百練抄曰、鳥羽天皇保安三年五月十四日、故二品親王白川堂善勝寺前庭有レ足蛇出來、爲レ犬被ニ喰殺ー。上皇仰ニ敦光師遠ニ令ム勘ヘ申サ子細ヲ

［形狀］

中外抄曰、久安四年閏六月四日云云近則白河院御時、故匱親子白川堂字善勝寺有足蛇文 師遠依院宣註申女子之祥也。又本朝奇令例爲寂、去□□□申了、今當顯季孫躰、皇后出來了。愚女子之祥相叶、仰音人例如何。申云、爲童時見有足蛇、餘音□之由不見也。仰云、大有興事也。我小年時見虵足、華山院乃寢殿乃東南乃南端ニ日がくしあ□き、件所乃前ニ仕丁朝掃時、蛇ヲ木ニ懸テ持出之時、□有足、ムカデノ足のごとし、而有傍他人更不見之由申、還テ我見由を云をも時人不信き、如此事ハ幸人目ニ見トゾ時人云云、今音人例相叶、尤有興々々云云。仰云、故顯季語我之夢ニ見虵乃足タリ、いみじき事なりとぞ云々　○證類本草、蝮蛇。註曰、陶隱居云、別有ニ方蛇一、皆有レ足、五月五日取テ燒テ地ヲ令レ熱、以テ酒沃レ之、置ケハ中ニ足出、術家ニ所也レ用。又曰、人見レハ蛇足ヲ亦云不レ佳。物理小識曰、桑柴燒ケハ蛇ヲ則見ニ其足ー。猗覺寮雜記曰、退之云、畫蛇著足無用處爲蛇畫足見戰國策與史記楚世家及陳軫傳莊子以爲脊脇而行又有足以言蛇無足也余在曲江老兵捕一蛇燒之四足垂出如ニ雞足狀一以此□古人有ニ未盡窮之事一

五色蛇　八幡愚童訓

○小知錄曰、扁蛇、一名壁鏡、身扁五色、愚童訓ニ戴ル五色蛇未詳

［集註］

八幡愚童訓曰、御殿ノ内ヨリ五色蛇ハイ出デ、淸丸ガ脛ヲ舐ルニ、如レ元足ニ成シカバ

青虵 塵添壒囊鈔

壒囊抄曰、夫浮藏ハ云云或ハ加ニ持ツ時平ノ大臣ニ奉ル

今案 青蛇ヲ、唐ニテモ青色ノ蛇アリ、此書ニ出ル者未詳

仁之木倍美（ニシキヘミ） 倭名類聚鈔

漢名 蚺蛇 本草

和產無之

本草綱目曰、按錄異記云、蚺蛇大者五六丈、圍四五尺、小者不レ下ニ三四丈ニ、有ニ斑紋ー如ニ故錦纈ー。續博物志曰、南裔異物志、蚺蛇賛曰、蚺惟レ大蛇既洪ニシテ且長シ、采色駮犖其文錦章

一名 仁之岐倍美 天文写本和名抄〇倭名鈔曰、蚺蛇。文字集略云、蚦。蛇文如ニ連錢錦ー也。和名仁之木倍美。塵添壒囊抄曰、蚺虵ト書テハ、ニシキヘミトヨム

白花蛇

本草綱目曰、白花蛇。其蛇龍頭虎口、黑質白花、脇ニ有ニ二十四個ノ方勝文ー、腹ニ有ニ念珠斑ー、口有ニ四長牙ー、尾上有ニ一佛指甲ー、長サ一二分、腸形如ニ連珠ー

形狀 稲田方曰、白花蛇、諸蛇ノ鼻ハ皆下ニ向ケリ。独リ此蛇ハ褰レ鼻（アゲテ）ヲ向レ上ニ、背ニ有ニ方ニ勝タル白花紋ー、以此眞之トス。先頭ヲ幷ニ項ノ後七寸ヲ去テ、酒ニ浸テ二日、皮骨ヲ去炙之

烏蛇

證類本草曰、烏蛇ハ尾細長、能ク穿ニツ小銅錢一百文ヲ者佳、有ニ身一丈餘者ハ、烏蛇脊高也、謂ニ之ヲ劒脊烏梢ト

【形狀】福田方曰、烏蛇、背ニ三稜アリテ劒ノ脊ノ如シ、色黑ク漆ノ如ク、尾ノ梢纖ク長メ錢五六十ヲ穿カ如クナル眞之。或ハ他蛇ヲ以テ熏黑カメ乱レ之コトアリ。但眼ノ光無ヲ異メトス。又云、酒ニ浸テ二三日メ皮骨ヲ去テ炙使ヘ〇本草啓蒙曰、烏蛇。舶來アリ、色黑メ脊ニ稜アリテ圓ナラズ、尾末數寸、急ニ細クメ常蛇ニ異ナリ

止加介 倭名類聚鈔

【漢名】石龍子 本草　【今名】トカキ

正字通曰、蜥蜴。似蛇四足、長五六寸、生草澤中。一名石龍。證類本草曰、衍義曰、石龍子ハ、蜥蜴也。今人但呼ニ蜴蜥ハ、大者七八寸、身有ニ金碧色ト。物理小識曰、蜥蜴亦五色具者雄、不備者雌。又曰、蜥蜴斷テハ尾猶動

【一名】度加介　天文写本和名抄〇倭名鈔曰、蝘蜓。和名止加介。本草和名曰　石龍子。和名止加介。字鏡曰、蝍。子力反、止加介。蛙、止加介。蜈。止加介〇字典曰、螂蜩蜋。玉篇、螳蜋。集韻、蟯蜋〇蛙。字典曰、木蠹蟲、亦名蛀蟲〇蜈。字典曰、說文、蠅乳ニ肉中ニ蟲也〇字典曰、蝘。說文曰、在レ壁曰ニ蝘蜓ニ在ノ草曰ニ蜥蜴ト

止加計 本草類編

【集註】本草類編

曰、石龍子。和止加計、九月採之、著石上令乾可用。宇治拾遺卷第二曰、あふ。はち。むかで・とかけ・くちなはなどいでゞ、目はなともいはず、ひと身にとりつきてさせども云々

【藥製】頓醫抄曰、石蜥蜴カシラアシヲサレ炙

【今案】石龍子（トカケ）ハ二種アリ、倶ニ人家庭間ニ生ズ、一種ハ肥大ニシテ六七寸、細鱗アリテ、油茶褐色肥大光アリ、此雌也。雄ハ尾背碧色ヲ帯、形狀微細シ、其始涯ノ者ハ小ニシテ一二寸、身ニ黒褐ノ條アリテ、其尾至テ青碧色、長ズルニ隨テ此色自ラ去ル、證類本草ニ小形長尾、見レ人不レ動名ニ龍子ハ、次テ有ニ小形ニシテ而五色ナル、尾青碧ニシテ可レ愛、名ニ斷蜴ハ、唐本注云、其名ニ龍子ハ及五色者並名ニ斷蜴ハ、以ニ五色者ニ爲レ雄、而良色不レ備者爲レ雌、劣ル即此也。○本草啓蒙曰、石龍子、形蛇ニ似テ小ク、四足長尾アリテ體ニ細鱗アリ、長サ六七寸ニシテ肥、茶褐色光アリ。一種瘠小クシテ、長サ二三寸、青色ヲ帯ビ、尾最青碧色ナルモノヲ、俗ニアヲドカキト呼ブ、皆雌雄アリ。按ニ、啓蒙ニ一種瘠小者トアヲトカキヲ混ゼリ。アヲトカケハ、樹ニ登ルコト不レ能、瘠小者ハ身瘠細ク、尾細長ニシテ黄褐色、細鱗アリテ光澤ナシ。雄ハ背腹ノ間黒斑點アリ。雌ハ色アサシ。白腹ト黃腹トアリ。倶ニ能樹ニ登リ蟲ヲ捕食フ。盤山志曰、布雲虎ハ蛇ノ屬、尖頭長尾四足、有ニ二種ハ、一ハ淺黃色、長三四寸、一ハ黑花色、脊ニ有ニ金暈ハ、尾如ニ翡翠毛ノ、俗呼ニ四足蛇ハ、觀ルニ此則石龍子ノ一種自ラ明也。石龍子ヲ四足蛇ト云フコト蛇譜ニ見エタリ

井毛利（ヰモリ）

新撰字鏡　【漢名】蠑螈　本草　【今名】ヰモリ

出ハ虫ノ訛（攷異ノ説）

一名 伊もり 藻塩草。字鏡曰、蛸。井中出。井毛利。按ニ蛸ハ孑孒(ボウフリ)蟲也

形状 〇大和本草曰、ヰモリ、井中又水溝ニ生ズ、腹赤ク背黒ク、形守宮(ヤモリ)ニ似タリ、田家ノ井中ニ多シ、土人コレヲ悪マズ、毒ナシト云、井中ニヲルユヘヰモリト云

集註 藻塩草曰、いもりすむ山下水の秋の色は結ふてもつくしるし成けり

形状 俊頼髄脳抄曰、いもりといふ虫は、ふるきいなどにとかけにそおながきむしの手足つきたるなり〇本草啓蒙曰、・種止水浅井中ニ生シ、形守宮ニ似テ色深黒、腹赤ク尾扁ナルモノヲ、イモリト云、古名ノイモリニ非ズ

イモリ 塵添壒囊鈔 漢名 守宮 本草 今名 ヤモリ

證類本草曰、堰蜓ヲ名ニ守宮ト矣、以レ朱飼レ之、滿ルレ三斤ニ殺、乾末以塗ル女子身ニ、有レハ交接ノ事一便チ脫ス、不レハ爾如シ赤誌ノ、故ニ謂ニ守宮ト。本草綱目曰、守宮處處人家墻壁ニ有レ之、狀如ニ蛇醫ニ而灰黒色、扁首長頸、細鱗四足、長者六七寸

集註 壒囊抄曰、ヰモリノシルシト云ハ、何事ゾ。是和漢共ニ沙汰アル事ナリ。イモリトハ、守宮共書リ。其本ノ名ハ、蜥蜴也。是ヲ血ヲ取テ、宮人ノ臂等ニ塗事アリ、其ノ虫取テ蜥蜴ヲ飼ニ以ヲ丹砂ヲ、躰盡ク赤キ時、搗テ之ヲ其血ヲ宮女ノ臂ニ塗ニ、何ニ洗ヒ拭ヘ共、更ニ落ル事ナシ。然共有レハ婬犯、其血則消失スルナリ。此ヲ以テ、敢テ不調ノ儀ナシ。仍守宮トハ云也。サレバ古詩ニモ、臂上ノ守宮(イモリ)何日カ消ト云云。又和語ニモ、脫履(マクツ)ノカサナル事ノ重ナレバ守宮(イヒー)ノシルシ今ハアラジナ云云。ワスルナヨタブサニ付シ虫ノ色ノアセテハ人ニイカヾコタヘン。是ハ此驗シ、アセヌベケレバ、難レ合云ヘル也。此返歌

シシ虫鳴時歌拾芥抄にはシ、蟲ハコ、ニハナ、キソシラハ、カシツガヤニユキテナキヲレ。是ヽ誤あるか

ニ曰、アセズ共我塗替唐シノ守宮ノ守(マモ)ルカギリコソアレ○大和本草曰、守宮(イモリ)、國俗ニヤモリト云、カベニヲル蟲也。石龍子(トカゲ)ニ似テ四足アリ、灰色ナリ、尾ヲウテバ切ヤスシ、毒ナシ。此血ヲ婦人ノ身ニヌレバヲチズ、婬事アレバヲツルト云。此故宮中ヲ守ルト云意ヲ以守宮ト名ヅク、此事淮南子博物志幷ニ顏師古ガ說ニ出ヅ。右ノ二書ニ用レ之法アリ、各カハレリ。本邦ニモ是ニヨツテ、古ヨリイモリノシルシト云リ。古哥ニモヨメリ。又水中ニアリテ、腹赤ク、背クロクシテ、形ハ守宮ニ似タルヲモイモリト云、イモリノシルシノ事ハ守宮(ヤモリ)ナリ、イモリニアラズ。守宮モイモリ共ニ倭名ヲイモリトイヘバ紛ヤスシ

しゝ虫 袋草紙

漢名 蛇醫 本草

今名 ヤマイヲ
又一種ヤフトゼウ

本草綱目曰、生スル草澤間ニ者曰ニ蛇醫一、形同ニ石龍一、而頭大尾短、形粗其色青黃、亦有ニ白斑者一。按青黃ト云ハ、ヤブドゼウ也。白斑者ト云ハ、山イヲ也

集註 袋草紙曰、しゝ虫鳴時哥。しゝ虫ハコ、ニハナキソシ、ラハ、カシシマシツカトニユキテナキヲレ

今案 大和本草曰、一種シ、虫ト云物アリ、草ニ生ズ、是亦守宮(ヤモリ)ニ似タリ、其色青白色ナリ。本草啓蒙曰、シ、ムシ、形守宮ニ似テ瘠、長サ六寸許、灰色、又或ハ褐色ニメ、脊ニ黑條一道アリ、脇ニ黑斑アリ、四足ニ五指アリ。陶隱居曰、一大形純黃色爲ニ蛇醫母一。物理小識曰、董子言土龍祈雨之事、王彥威鎭汴李玘以ニ白蛇醫二甕一、青衣小兒擊レ甕致レ雨事云云。本草原始曰、形大純黑者爲ニ蛇醫一、觀レ此蛇醫非ニ一品一

海蟲類

久良介（クラゲ） 新撰字鏡

【漢名】水母 本草　【今名】クラゲ

雨航雜錄曰、鮀魚。一名水母、其形如二覆笠一。本草綱目曰、水母形渾然トシテ凝結ス、其色紅紫、無二口眼一、腹下有レ物、如二懸絮一、群蝦附レ之咂二其涎沫一、浮汎如レ飛云云。品字箋曰、蛇ハ水母也。形如二羊胃一、浮二水上一

【一名】

止毛虫 字鏡曰、䖳。扶非反、水母也。蛇、止毛虫

久良計 本草類編曰、海月。和久良計。本草和名曰、海月。和名久良介同之 倭名抄 字鏡曰、鏡。久良介。後葉集物名曰、くらけを海の月といふよし人のましけるを聞て、祭主親定母。ふかくすむちいろのそこもみるべきにくらげにみゆるうみの月哉。袋草紙曰、瑠賀上人。みつはさすやそぢあまりのおひのなみくらげのほねにあひにけるかな

久良岐 倭名鈔國郡部曰、武藏國久良久良岐。吾妻鏡第三十四曰、行二向武藏國海月郡一

久羅下 古事記曰、次ニ國稚（イシク）如ニタ浮（ウカベル）脂（アブラノ）一而久羅下（クラゲ）那洲多陀用弊流之時。舊事記曰、葦原ノ中ツ國ハ如ク水母（クラゲ）浮ビ漂ヘル之時。釋日本紀曰、公望私記云、師說、天地未レ定之時、其ノ形猶ヲ如ニ水母之浮ニルカ水上一也〇按海月ハタイラギ、海鏡ハマトガヒ也

【集註】

延喜式卷第三十一曰、宮內省 諸國例貢御贄。備前水母。日向國風土記曰、宮崎郡三浦鄕出云云海月等。厨事類記曰、供御次第、窪器一坏、銀器海月。類聚雜要抄曰、仁和寺殿、競馬行幸、御膳幷御遊酒肴事云云次御酒肴五種、蚫・千鳥・蛸・小鳥・海月、大

盤居之。鮮取御前物、十進、中盤、蚫汁加居、鯛平焼・窪坏・海月・生鮑・蚫味噌。母屋大饗、饗膳差圖、海月。人車記曰、保元二年八月有任大臣事。窪物二種云〻海月。祇園會御成記曰、三献、たい、くらげ。海道記曰、海月は潮のうへに、水にうつるかげともにごれ、うき世を論じて人をいましめたり。「浪のうへにたゞよふ海の月もまたうかれ行とぞ我を見るらん。文祿四年御成記曰、御相伴二ノ膳くらげ

食法

職人記曰、きやうせん云 云さしくらげ上ニくりはなかつほ、さしくらげにかはる事なし。たゞそのまゝもるなり。大草相傳聞書曰、海月切様は、いかにもながくきりてよし。あへ候はけしと、はじかみと、かつほを三ツ一ツにしてすりて、すこしすにてあへ候。またすだてを又さし候。酒にてあへたるもよし。一方のれうりによるべし。くらげをあらひ候時は、先一あらひ仕候而、其後こぬかをふり掛ケ候て、もみあらふ也。其後きりて、又よき酒にてもみあらふ也。其後あへ候。四條流庖丁書曰、海月之事・差ミ海月ノ時モ、酢ハクルミ酢ニテ參ラスベシ。アヘ海月ノ時モ、クルミ酢ニテアヱテ可レ參候。花鰹能入ベシ、カラミニハ生姜ヲ可レ用也。厨事類記曰、海月ハ、或說云、酒ト塩トニテメデタクアラヒテ、方ニキリテ、鰹ヲ酒ニヒダシテ、其汁ニテアフベシ。酢イルベシ。キザミ物イルベシ。キカハトテ橘皮ヲモサス也。故實、晴時ハタヾ細ク切テ、ソクヒニテ打違天盛レ之

形狀

○大和本草曰、水母（クラゲ）泥海ニアリ、故備前、筑後等ヨリ出、生ナルヲ取、クヌギノ葉ヲ多クキザミテ、クラゲノ內ニ包ミ、塩ヲ不レ用、木ノ葉ヲマジヱ、桶ニ入、フタヲオホヒ、水ヲ入、時ニ水ヲカユル、久クアリテ不レ敗、水ナケレバヤクル、ヤクルトハ枯テ不レ可レ食、ナリ。又唐クラゲアリ、水母ヲ白礬水ヲ以テ制メ、鹽ニヒロゲ、乾シテ白クナリタル也。味又ヨシ

古（コ）倭名類聚鈔　漢名　沙噀 閩小紀　今名　ナマコ

閩小紀曰、寧波誌ニ沙噀塊然タル一物、如シ牛馬腸臟頭ノ、長可ニ五六寸許一、胖軟如ニ水蟲一、無レ首無レ目。但能蠕動、觸ルレハ之ニ則縮小如ニ桃栗一、徐ニ復臃腫、去ニ涎腥ニ、雜エテ五辣ヲ煮レ之、脆美ニシテ爲ニ上味一

一名　生海鼠（ナマコ）　壒囊抄○倭名鈔曰、海鼠。和名古。本朝式、加ニ熬字ニ云ニ伊里古ニ。本草和名曰、海鼠。和名古

はなだ　伊勢守貞陸記曰、女房ことば、なまこはなだ

醒海鼠　たはらこ　大草相傳聞書

鼠　類聚雜要曰、五節殿上饗目錄。居物次第云々、次生海鼠

集註　和泉國風土記曰、大鳥郡高師濱出海鼠。宣胤卿記曰、長享三年正月十七日息女十五歲　來栁二荷、鮒一折、海鼠一折、圓鏡等持來。厨吏類記曰、供御次第、六御盤云々云海鼠

食法　四條流庖丁書曰、カキ、コタ海鼠腸、ミノ吏。此冷汁。當世アヱ給樣當流ニ相違也。是ヲモロ傳ヲバ不レ知メ、推量成ニ依テ、如レ此ノ事ナル哉。先ナマコヲ能ホドニ作リテ、酒ニテソト色ヲトルベシ。同カキヲモ酒ニテ色ヲトリテ、蠣ヲバ能タ、キテ、サテ山葵（ワサビ）辛ミニテ、辛ミハ山葵可レ入、シホ酒ヨキ、若山葵ナクバ、辛ミニハ何ニテモ可レ入、若蠣ナクナマコ許ニテアラバ、コタ、ミト云也

形狀　古事記曰、海鼠（コ）不レ白サ爾チ天宇受賣命謂ニ海鼠（コ）ニ云此口乎不ルレ答ヘ之口ニ而、以ニ紐小刀（ヒモコカタナ）一拆ニ其口一故ニ於レ今海鼠（コ）拆（サケル）也○山海名產圖會曰、なまこ、江東にては尾張和田、參河栅の島、相撲三浦、武藏金澤、西海にては讚刕小豆島最多く、尙北國の所々にも採れり。又奧刕金花山に採物は形丸く、色は黃白にて、腹中に砂金を

含む、故に是を鉗こと事

○伊里古（倭名鈔）〔漢名〕海參（時珍食物本草）〔今名〕イリコ（本草從新曰、海參、遼海產者良、有レ刺者名ニ刺參一、無レ刺者名ニ光參一、閩中海參色獨白類レ撐ニ、以ニ竹簽大サ如レ掌。五雜組曰、海參、遼東海濱有レ之、一名海男子、其狀如ニ男子勢一、其性溫補足レ敵ニ人參一、故曰ニ海參一）〔一名〕伊利古（天文写本和名抄）熬海鼠（令）煎海鼠（塵添壒囊鈔）くろ物（伊勢守貞陸記曰、いりこ、くろ物）焦蠟（玉造曰、煮ル鮑焦蠟）

〔集註〕賦役令曰、若輸雜物者、熬海鼠二十六斤。延喜式卷第四曰　伊勢太神宮九月神嘗會、熬海鼠十二斤。諸司春祭、熬海鼠云云各二斤。同卷第五曰、齋宮。正月三節料云云熬海鼠各二斤。度會宮、御膳殿料、熬海鼠八斤。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡供ニ神御一雜物者云云熬海鼠一百斤。凡諸國調脯云云熬海鼠八斤十兩。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、熬海鼠、能登國、調、熬海鼠二百四十五斤。隱岐國、調、熬海鼠。筑前國、脯、熬海鼠八百二十八斤。肥前國、調、熬海鼠三百一斤十四兩。肥後國、調、熬海鼠二百三十二斤十四兩。同卷第三十二曰、大膳上、御膳神八座、熬海鼠云云各六斤。醬院高部神、云云熬海鼠云云各六斤。六月神今食、云云五位已上一人、熬海鼠云云各二兩。六位已下一人、熬海鼠二兩。雜給料、參議已上。人別熬海鼠三兩二分。五位已上云云、人別熬海鼠三兩二分。新嘗祭云云、五位已上一人、熬海鼠云云各五兩。六位已下一人、熬海鼠云云各五兩。同小齋解齋給食云云、五位已上一人、熬海鼠二兩。同會皇后宮小齋云云、五位已上一人、熬海鼠五兩。六位已下一人、熬海鼠四兩。同

宮神熊直相給食、五位一人、熬海鼠四兩。宴會雜給、親王以下三位已上並四位參議、人別、熬海鼠云云各二兩二分。四位五位幷命婦、人別云云熬海鼠各一兩。園、韓神祭雜給料、熬海鼠云云各十二斤。平野夏祭雜給料、熬海鼠五十二斤十四兩、各加二十八斤六兩。春日祭雜給料、云云熬海鼠各二十九斤。松尾神祭雜給料、熬海鼠云云各十六斤五兩。釋奠祭別供料、熬海鼠云云各六斤。同卷第三十三曰、大膳下。九月九日節文人料、云云熬海鼠各一兩。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、云云熬海鼠各八斤四兩。同卷第四十三曰、主膳監、月料、云云熬海鼠各七斤二分。祇園會御成記曰、九献いりこ

【形狀】〇山海名產圖會曰、熬乾の法は、腹中三條の腸を去り、數百を空鍋に入れて、活火をもつて煮ること一夜にして、再び稍大くなるを取出し、冷むるを候、糸につなぎて乾し、或は竹にさして乾たるを、串こと云。また大なる物は、藤蔓に繋ぎ懸る、是江東及越後の產、かくのごとし。小豆島の產は大にして味よし。薩摩筑前豐前豐後より出るものは極て小なり

〇このわた　祇園會御成記

【一名】こうばい　伊勢守貞陸記、このわた、こうばい。大草相傳聞書曰、このことはたはらこの中の、からばいわたの事にて候。自然このこなき時は、うに又うるかなどもくるしからず。そうじて、このこ桶をばみがき、けうくはうの人には、松竹橘を繪に書用也

【集註】延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物、能登國、海鼠腸一石。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調海鼠腸十五斤十兩、能登國調海鼠腸六十二斤八兩。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、云云海鼠腸各四升五合。同卷第四十三曰、主膳監。月料海鼠腸三升八合二勺七撮。祇園會御成記曰、三献このわた。婚入記曰、きやうのせん云

〻このわた。大内問答曰、このわたは、桶を取あけて、はしにてくふべし。是も一番よりは如何、年に一兩度もくふべき也。わかき衆は、しんしやく有べき也

【藥用】 水左記曰、承保四年八月七日、去夜心地苦、於昨日早朝賢暹僧都入座、午臥間語云〻、申時許令問雅忠朝臣云、海鼠腸熱氣間所食也、仍熱散後雖食不可有禁忌、而件物若爲腹病何樣物乎、返解云、御熱氣間開食何事候哉、況件物御腹病之藥也者食之、今夜心地極苦

【食法】 四條流庖丁書曰、コノワタノ事、可レ秘レ之。塩カラ少損ジタルヲバ、スヽギテ滲スル也。但コノワタヲスヽグ事大事也。大キナル物ニ、酒カ水ニテモ入、扱コノワタヲ箸ニテハサミ上テ、振スヽグベシ。當世是ヲ推量ニ、コノ腸桶ノ中へ、水ヲ汲入スヽグ間、コノワタ水ニ盛テ用ニ不レ立也。結句腐タリト云。猶麁キ物ニ水ヲ入テ、コノワタヲハサミ上テ振スヽグベシ。然間切タルコノワタスヽグ事不レ叶、セバキ物ニ水ヲ入スヽガバ、細々水ヲ入替テヨシ

【形狀】 山海名產圖會曰、このわたを取り、淸き潮水に洗ふ事數十遍、塩に和して、是を收なり。黃色に光り有て、琥珀のごとき物を上品とす。黒み交る物下品なり。又此三色相交る物を、日影に向ふて、頻に攪まはせば、盡く變じて黃色となる。

海馬　通名

證類本草曰、海馬。異物志云、生二西海一、大小如二守宮一、蟲形若二馬形一、其色黃褐、性溫平無レ毒、主二婦人難產一帶二之於身一神驗。圖經曰、生二海南一、頭如レ馬、形蝦類也。婦人將レ產帶レ之、或燒末飮服、亦可二手ニテ持一レ之。異

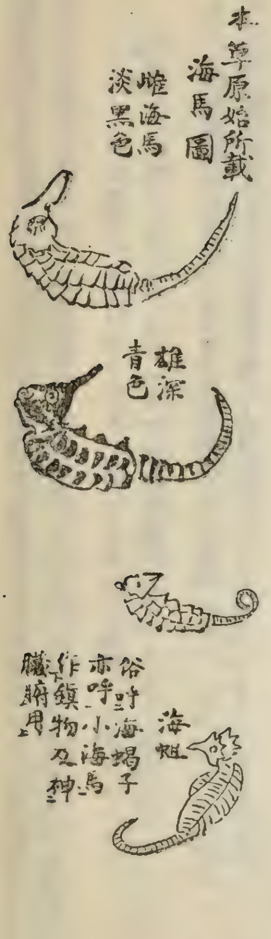
魚圖云、牧之暴乾以ニ雌雄ニ爲レ對、主ニ難產及血氣ニ。本草原始曰、海馬出ニ南海ニ、鰕類也。其背傴僂、有ニ竹節紋ニ長サ二三寸、雌黃色、雄黑色、狀如ニ馬形ニ故ニ名ク。

集註

山槐記曰、治承二年十一月十二日、定成朝臣獻御乳付具納手箱一合、所儲置之御藥雜物等海馬六入道被獻之

形狀

○大和本草曰、海馬海中ニ生スル小蟲ナリ。頭ハ馬ノゴトク、腰ハ鰕ノ如ク、尾ハトカケニ似タリ。雌ハ黃ニ、雄ハ青シ。本草啓蒙曰、海馬頭馬ノ如ク、身ハ鰕ノ如ク、蝎ノ如シ。背傴僂シテ稜アリ、節多シ、尾ハ石龍子ニ似テ、皆內ニ卷典ス。身ノ長五六寸ナルハ稀ナリ。大海馬ナリ。一二寸ナルハ多シ、小海馬ナリ。褐色銀色黑色三等アリ、舶來ノ者ハ皆褐色ナリ



爲伊　延喜式

【一名】い　土佐日記曰、ほやのつまのいずしあはびをぞ、こゝろにもあらぬはぎにあげてみせける。抄云、ほやのつまのいすしとは、穂屋の妻の蝙蛸鮨

蝛蛺　倭名類聚鈔曰、七卷食經云、蝙蛸、其貌似蛸大者也。和名保夜、俗用蝛蛺二字、本文未詳。正字通曰、蛜蝛。本草衍義曰、溼生蟲也。多足色如蛸背有横文蹙起、大者長三四分、埤雅則云、蛜蝛形似白魚而大、食之令人善淫佚。證類本草曰、鼠婦一名蛜蝛、一名蛜蝛。以此考レバい ハ形鼠婦ニ似タル物ナルベシ

爲　見上

委　本草和名曰、蝙蛸甚似大蛸也。出七卷食經。和名委。字典曰、類編、涸水之精曰蟡。管子水地篇、涸川之精者生於蟡、蟡者一頭而兩身其形若蛇、其長八尺。又曰、蟡。類篇、蟲名、蜲蠕也

【集註】延喜式卷第三十九曰、内膳司。年料、尾張國、爲伊二擔二十籠二度。類篇雜要曰、母屋大饗、

二十籠二度ハ伊勢國ニテ尾張國ハ二十壺ナリ

饗膳差

圖蝙蛸

古名錄蟲部卷第五十三　終

古名錄魚部卷第五十四目錄

海魚類上

多比（タヒ）　棘鬣魚　○こだい　紅翅
久呂太比（クロダヒ）　烏頰魚
須受枳（スズキ）　鱸魚　○せいご
都奈之（ツナシ）　江鰶魚
阿遲（アヂ）　竹筴魚
志毘（シビ）　金鎗魚　○くま引
しくち　赤目鳥
加禮比（カレイ）　比目魚
仁倍（ニベ）　鯩
ひらた　鱄魚

知沼（チヌ）
尼鯛　方頭魚
古乃之呂（コノシロ）　鰶魚
加豆乎（カツヲ）　鮣鯅　○かつほのふし　○加豆乎以呂利（カツヲイロリ）
佐波（サバ）　青花魚
奈與之（ナヨシ）　鯔魚　○えふな　○スバシリ　○いなのうす
多樂（タラ）　吞魚
止比乎（トビヲ）　文鰩魚
伊之毛知（イシモチ）　踏水
乎古之（ヲコジ）　虎魚

金頭 角魚
以和之(イワシ) 鰮魚 〇小鰯腊 〇比師古以和之(ヒシコイワシ)

かこのうを 青魚
波里萬知(ハリマチ)（鰣 海鰻）〇くる〳〵

ゑそ 狗母魚
かます 梭魚

まなかつほ 鯧魚
きす 雞魚

與理度(ヨリト) 鱵魚
久恵(クヱ)

タチイヲ 帶魚
ムツ

コチ 牛尾魚
サハラ 馬鮫魚 〇からすみ

通計四十七種

古名錄魚部卷第五十四

合璧事類曰、魚鱗物之總名也。其種族尤繁名言所不可既也。五雜組曰、凡魚之遊ハ皆逆ヘ水而上、雖ニ至細之鱗遇ニ大水ニ亦搶ツイテ而上。陳後山談叢、謂魚春夏則逆ニ流ニ秋冬ハ則順フト流、當ニ再ヒ考フ之

紀藩　源　伴存撰

海魚類

上○駿河國風土記曰、伊穗原郡油伊、出ニ海魚磯苔ー。筑紫道記曰、香椎潟なり云々風はげしく浪たかうして、物心ぼそきに、ちいさき魚のこゝろよげに飛をみるに、是も又波の下には、我より大なる魚のおそるゝおほからむ、とみるにうらやましからず。日本書紀曰、魚此ヲ云レ儺ナ。倭名抄國郡部曰、越後國魚沼、伊乎乃。備中國小田郡魚緒、伊保須奈。蜻蛉日記曰、またいをなどもくはず。榮花物語玉の飾曰、この日ごろ、いをきこしめさでとてあれど、けふはあしき日、あす八日なれば、九日のつとめて、くはんばくどのよりさま〴〵のいをどもてまいりたれど、すべて御ぞをひきかづきて、きこしめすべき御けしきなし。宇津保物語俊蔭曰、いまうをゝとりにいきたれど、氷いとかたくて、いとことなし。おもといかゞし給はんずると云て。多武峯少將物語曰、このひめぎみ、山のきみのをこなひたまふらむ、われいを魚をくはんこそゆゝしけれとて、御さうじを精進そなをしたまひける。令義解曰、謂ニ凡鱗甲羽毛ー、

漉ㇾ自ニ山水之氣ー、飲ゞ啄ゞ飛ゞ栖不ㇾ服ニ人之飼養ー。扶桑略記廿九曰、後三條天皇延久元年七月十八日壬午、停ニ止内膳司供御、諸國御厨子并贄、後院等御贄ー。廿二日、令ニ御厨子所預御厨子等、始供ニ精進御菜ー。延久二年二月十四日、永停ニ近江國筑摩御厨ー、并今年許止ニ同國日次御贄ー、又停ニ止…高砂御厨魚ー、令ㇾ供ニ精進物ー。續古事談曰、道昌僧都ト云人ハ、俗姓秦氏、讃岐國香河郡人也云云。天長五年、弘法大師ニ從テ眞言ノ大法ヲウク。内裏ノ佛名會ニメサレケリ。御門問給ハク、帝王ノ殺生ノ罪ト、凡夫ノ罪トイヅレカヲモキ。道昌申テ云ク、帝王ハヲモク凡夫ハ輕シ。コノ事ヲ聞者、法師年ワカクテ、イフ事アサシト思ヘリ。御門良久アリテノ給ハク、帝王ノ罪ヲモシトイフ、其説アリヤ。道昌申テ云ク、ヒソカニ此事ヲ思ニ、帝王ノ供御ハヲホクノ魚鳥ヲ殺シテ、ワヅカ三膳ニアツトイフトモ、ソノ罪ヲホシ、凡夫ハ山海ノ禁制アレバ、カリスナドリタヤスカヲ凡ニ、ワヅカニコレヲトリテ心腹ヲ養。ソノ業カロキ也。御門此事ヲ信ジテ殺生ヲヤメラレタリ。江家次第巻第五曰、二月、祈年穀奉幣、雖ㇾ當ニ宇佐使ー、聞御精進ト供ニ於魚味ー。吾妻鏡巻第卅四曰、仁治二年二月廿三日、今日、若君御前魚味、御着袴、御馬召始等事、有ニ其沙汰ー。世俗淺深秘抄曰、稲荷祇園行幸有同日尓ハ、雖精進食魚、又於祇園ハ爲精進、然而近代ハ實不食魚之、只居交之。康富記曰、應永廿七年十月十三日、室町殿御違例御減之間、人々御方御所へ御太刀進ㇾ之、其外諸人令參賀、天下大慶何事如之哉。又自閏ニ月一日御精進于ㇾ今不ㇾ被ㇾ聞ニ食魚ー入ㇾ之處、今朝始ㇾ被ㇾ聞ニ食魚肉ー云云御減之驗ー〇四條流庖

ノ群本なし

非トモ群本なし

丁書曰、美物上下之事。上ハ海ノ物、中ハ河ノ物、下ハ山ノ物。但定リテ雉定事也。河ノ物ヲ中ニ致タレ𪜈、鯉ニ上ヲスル魚ナシ。乍レ去鯨ハ鯉ヨリモ先ニ出タモ不レ苦、其外ハ鯉ヲ上テ可レ置也。鮒又ハザコ以下ノ河魚ニハ、海ノ物下ヲスベカラズ。乍レ去鮮ナドハ、龜足在時ハ、少ハ其心得有レ之ベシ。山ノ物ノ下ハ定タレ𪜈、鷹ノ鳥ニハ、如何ナル白鳥成𪜈、上ヲスベカラズ。雉ノ鳥ニ必可レ限。何ニテモ鷹ノ取タル鳥ヲバ、賞翫勝タルベシ。鷹ノ鳥ヲ人ニ參ラスル時ニハ、燒物ヨリ外ニスベカラズ。余ノ御肴ニ組付ル事スベカラズ。一種タチニテ可レ參。鷹ノ鳥ニテハ、非トモ白鳥ノ叓一種タチニテ可レ參。鯨モ同前也。如何ナレバ似相タル物マレ成故、組付ニハスベカラズト云云

多比　本草和名　漢名　棘鬣魚　閩書　今名　タヒ　一名　平魚

閩書曰、棘鬣魚、似レ鯽而大、其鬣如レ棘紅紫色

延喜式卷第一曰、春日神四座祭。祭神料、平魚云云各六斤。散祭料、云云平魚各六斤。同卷第三十二曰、大膳上。賀茂神祭齋院陪從等人給食料。雜平魚云云各七斤十四兩。同祭齋院司別當已下四人食料。云云平魚楚割各十二兩。松尾神祭雜給料。雜平魚二十一斤。拾芥抄曰、宮咩祭文。維永承△年云云鯛ノ平ニ云云。散木集曰、ひくしまといふ所のあまども、くだりにもまうできて、ものども心ざして侍けるが、このたびもまうできて、たひといふ魚をとりいでゝ侍けるを見てよめる「たつなみのひくしまにすむあまだにもまたたひらか

に有けるものを〇狹衣曰、たいらかにだに云々。源平盛衰記曰、平カニ上付テ、人々ヲ見奉ラン事モカタシ。新撰字鏡曰、平素平也舒也。太比良介志。源氏物語葵曰、げにや、たいらかに事なりはてぬれば云々。たいらかにもはたとうちおぼしけり。同明石曰、住吉にもたいらかにて云々。同見はつくし曰、たいらかにものし給ふ。同若菜曰、人の心たひらかにて。同やよひの十よ日の程に、たいらかにむまれ給ひぬ。又曰、たひらかに思ひことときにあひ給。又曰、たいらかにものし給。同かしは木曰、たいらかにとだに、いかできゝをい奉らん。又曰、たいらかなるためし。又曰、たいらかなりときこしめして。又曰、かくてもたいらかにて。又曰、かくてもたいらかにおはしまさばとねんじつゝ。同夕霧曰、たいらかにすぐし給はんこそ。同橋姫曰、たいらかにはし給ながら。同あげまき曰、身づからもたいらかにあらんと。撰集抄曰、平らかに身ことならせ給ひしかば。萬葉集第十七曰、暮ッ庭爾 敷美多比良氣受。蜻蛉日記曰、思ひさはりしこともたいらかになりにしかば。榮花物語煙後曰、いとたいらかにきら〳〵しきおとこぎみむまれさせ給ぬ。高倉院嚴嶋御幸記曰、たいらかに宮古へ帰べきよしぞいのり申さるゝ。更級日記曰、たいらかにまちつけたるうれしさ

おひら　伊勢守貞陸記曰、女房ことば。たいおひら。日本書紀曰、平此ヲ云ニ毘羅ト

赤女　日本書紀曰、赤女ハ鯛魚名也

赤鯛　日本書紀曰、赤女、即赤鯛也。尺素往來曰、赤鯛

赤海鯽魚　古事記曰、頃者赤海鯽魚、於レ喉鯁、物不レ得レ食ヲ愁ヘ言ス、故必是取ルカ。於レ是探レハ赤海鯽魚喉ヲ者有レ鈎

赤魚　日向國風土記曰、宮崎郡三浦郷、出赤魚。和泉國風土記曰、大鳥郡高濱郷、出赤魚。按ニ和泉國風土記、日根郡貢鯛トアリ。異本和泉國

脯 京本脯に作る

風土記、赤魚トアリテ、鯛ノ字無ヲ以テ觀レバ、赤魚ハタヒ也

太比

新撰字鏡曰、鰽。太比〇按鰽ハ和產ナシ。倭名類聚鈔曰、鯛。和名太比。字鏡曰、鯛。都聊反、太比。萬葉集卷第九曰、浦島ノ兒之、堅魚鉤、鯛釣矜、及七日。同卷第十六曰、醬酢爾、蒜都伎合而、鯛願ッ云云。新猿樂記曰、鯛中骨。塵添壒囊抄曰、鯛。玉造曰、䐑。煮ニ此海之鯛ヲ〇鯛ハ古來タヒニ用タリ。正字通曰、鯛。舊註都僚切、音彫、引ニ說文骨端䏿ニ也。按ニ長箋ニ、它魚不レ𫅜疑爲ニ鱏魚ハ宜レク訓鱏鼻端脆骨。本草綱目曰、鱘魚。釋名。鱏魚、和產未詳。南嶺子曰、久しくあやまり來りし文字を、今書改ては俗に通ぜず、通せざれば文字の益なし

櫻鯛

言塵集曰、あかめは鯛の名之。櫻鯛は春之。藻塩草曰、新春のさかひのうらのさくら鯛あかぬかたみにけふや引らん。明衡往來、三月消息曰、況櫻鯛柳絲可具春遊、註櫻鯛三月四月鯛也。山家集曰、霞しく波の初花をりかけてさくら鯛つる沖のあまぶね

鰶

淸輔雜談集曰、後拾遺亦号ニ小鰶集ー。字典曰、鰶。集韻、徒登切音騰、與レ鰧同。郭璞江賦鰶其狀如レ鱖。鰧字注曰、集韻、直捻切音朕、魚似レ鰕赤文。此魚未詳

集註　延喜式卷第五曰、齋宮、月料。鯛楚割云云、各七斤八兩。正月三節料云云、鯛楚割各三斤。凡諸國送納調庸、云云鯛楚割九十斤。鯛枚乾一百斤。已上參河。同卷第二十四曰、主計上、凡諸國輸調。鯛腊云云各十六斤十兩。志摩國、庸調鯛楚割。參河國、調鯛脯一百斤、鯛楚割九十斤。若狹國、中男作物、鯛楚割。紀伊國、中男作物、鯛楚割。讃岐國、中男作物、鯛楚割。筑前國、中男作物、鯛腊。肥後國、調鯛腊三百三十二斤八兩。同卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢御贄。和泉鯛。同卷第三十二曰、大膳上。大直神一座、座別鯛脯二斤五兩。同卷第三十九曰、內膳司、六月神今食料。干鯛六隻、甘鹽鯛四隻。新

嘗祭供御料。甘塩鯛四隻。年料。和泉國、鯛。讃岐國、鯛ノ塩作二十隻、白干十二籠。伊勢國、鯛春酢二擔二十籠二度。太宰府、鯛醤四斗八升二缶。明月記曰、正治二年三月廿五日、若君御着袴云々、次持參御汁物、鯛燒物、鳥足如二種。殿中申次記曰、正月十四日。鯛十。十七日、鯛廿枚、進上之、例年之儀也。從二永正十三丙子一至二同十七庚辰歳一記錄事。鯛一折。安東郡專當沙汰文曰、直會料、生鯛三隻、勢二尺一二寸計、代錢百五六十許歟。厨事類記曰、供御次第。七御盤、燒物菜料二坏、鯛一坏云々。大江御厨所レ進鯛、一種、河内攝津、生物鮨、生鯛ナキ時ハ塩ヲモル、カハヲスキテモル也。類聚雜要抄曰、母屋大饗、差膳鯛立盛。深窓愚案抄曰、いそらがさきにたひつるあまの、たひつるあまの。愚案、たひは鯛之。宇治拾遺曰、あはちのかみよりちかゞ鯛のあらまきをおほく奉りたりけるを云々、はかぐしき魚もなし、鯉鳥などやうありげ之。それに用經が申やう、用經がもとにこそ、津の國なる下人の、鯛のあらまきみつもてまうで來たりつるを、一まきたべ心み侍りつるが、えもいはずめでたくさぶらひつれば、いま二まきはけがさでをきてさぶらふ云々、九月ばかりの比なれば、比鳥のあぢはひいとわろし、鯉はまだいでこず、よき鯛はきいのもの之、などいひあへり云々。宣胤卿記曰、永正三年十二月廿九日、伊勢又七送鯛三、鮑三、百本炭一荷、每年之儀也。續詞花集曰、鯛といふいをに、梅花をかざして、人のをこせたりけるが、かのつきたりければ、赤染衛門、春ごとに櫻だいとぞ聞しかど梅をかざせるかぞつきにける。文祿四年御成記曰、御二獻鯛。娵入記曰、きやうぜん云々たいのあつつくり

○こだい 山家集

漢名 紅翅 異魚圖贊閏集

異魚圖贊閏集曰、赤鯮、一名交鬣、小者名紅翅、蓋其子也

集註

延喜式卷第三十九曰、內膳司。年料。丹後國小鯛腊一石二斗。山家集曰、こだいひくあみのかけなはよりめぐりうきしわざあるしほさきのうら

○たいの子 三好亭御成記

三好義長亭御成記曰、十六献、つぐみ・かも・たいの子。朝倉亭御成記曰、八献、たいの子。又曰、御五たいのこつみいり

【形狀】○大和本草曰、鯛ニ雌雄アリ、雄ハ色淡黑、背ニカドアリ。雌ハ色紅ナリ、形ウルハシク、性味最ヨシ。雄ニマサレリ

棘鬣魚鰤也 【集註】

知沼（チヌ） 倭名類聚鈔　○烏頰魚ノ一種也　【今名】チヌ

【一名】鎭仁 出雲國風土記　海鯽魚（チヌ） 日本書紀仲哀天皇　倭名鈔曰、海鯽。辨色立成云、海鯽魚、知沼　智怒鯛 和泉國風土記曰、茅渟海。古老傳云、往昔神日本磐余彥尊、欲馭天下、師船軍東征之時、至河內国日下之邑白肩津、欲踰生駒山、而入中洲時、登見長髓彥徼（サヘキ）之孔舍衛坂、會戰有流矢中彥五瀨命肱脛、皇師不能進戰、引軍乃還、乃至智怒山井水門於智怒海洗其御手之血、故謂血沼海也。今謂智怒其緣也。古事記、到血沼海、洗其御手之血、故謂血沼海也。日本書紀曰、茅渟此ヲ云ニ智怒ト　知奴 新撰字鏡曰、鮏、薄佳反、知奴

【集註】和泉國風土記曰、茅渟海云云此海小魚多、大魚少、而出黑鯛、世人所謂智怒鯛是也。出於此海謂也。貴人不食者也。出雲國風土記曰、嶋根郡凡南入海所ノ在雜物、云云鎭仁云云等之類至多。秋鹿郡、南入海、春則有ニ鎭仁鯿鰕等ノ。神

門水海、有ニ鎭仁須受根鯛一

形狀 ○大和本草曰、チヌ、鯛ニ似テ青黒色

久呂太比(クロダヒ) 倭名類聚鈔

漢名 烏頰魚 閩書

今名 クロダヒ

閩書曰、烏頰魚、似ニ奇鬣一而形稍黒、當ニ於大寒時一取レ之

一名 黒鯛 續日本紀卷第廿九曰、稱德天皇神護景雲二年八月癸丑、賜ニ大學直講正七位上凡直黒鯛伊豫國稻一千束一、共援ニ其母從八位下一、賞ニ勤學一也、同卷第三十六曰、桓武天皇天應元年十一月庚午、正六位上林忌寸稻麻呂、凡直黒鯛、朝原忌寸道永、並外從五位下。倭名類聚鈔曰、鮀魚、和名久呂太比○正字通曰、鮀同レ鮭。拾遺俗引ニ淮南子一、地形海外三十六國有ニ無繼民一、硥魚在ニ其ノ南一。註、硥魚如レ鯉有ニ神靈一、乘テ行ニ九野一、硥讀如レ鮀。咸陽靈臺碑有ニ鮀魚一、疑即此。按、鮀與鮭同、淮南子硥、或鮀之譌。字典曰、鮭與蜯同トブ介也

形狀 クロダヒハ、棘鬣ニ似テ、短ク濶ク、口タヒノ如シ、背深黒色、腹淺黒色、味劣レリ

尼鯛 精進魚類物語

漢名 方頭魚 華夷鳥獸考

今名 アマダヒ

華夷考曰、方頭魚、通志似ニ棘鬣一、而頭方味美。或曰、方疑作レ芳、言ニ其頭爲ニ味芳香一也。見ニ興化府志一

形狀 ○大和本草曰、方頭魚(クズノ)アマダイトモ云、東土ニテ奥津鯛ト云、鼻ノ上他魚ヨリ高シ、

目モ高ク付ケリ、色ハ鯛ノ如ニシテ長シ、肉ヤハラカ也

須受枳 出雲國風土記　【漢名】鱸魚 本草　【今名】スヾキ

正字通曰、海鱸。大者四五尺、其肉毳者尤美

【一名】須々支 新撰字鏡曰、鱸。落胡反、須々支　須須木 倭名類聚鈔曰、鱸。和名須須木。本草類編曰、鱸魚。和須々支。天文写本和名鈔曰、鱸。和名須須岐　須々岐 本草和名曰、鱸。和名須々岐　鈴寸 萬葉集卷第三曰、荒栲、藤江之浦爾、鈴寸釣、白水郎跡香將見、旅去吾乎。同卷第十一曰、鈴寸取、海部之燭火、外谷、不見人故ニ、戀ル比日。三代實錄卷第五曰、貞観三年十一月十一日辛巳云云、讚岐國多度郡人、故佐伯直鈴伎麻呂云云　須受吉 萬葉集卷第十五曰、須受吉都流、安麻登香見良武　須受岐 古事記曰、訓レ鱸云フ須受岐ト。玉造曰、鮨非ニ紅鱸鰓ニ未レ味ハヘ

【今案】大草家料理書曰、川鱸料理の事。但差味は上也。酢塩はしやうが酢上なり。又煎酒中也。辛し、酢下也。海鱸は汁にするは上也。さしみは中也。と觀ユ。河鱸、海鱸ノ分チアルコ明也

【集註】人車記曰、保元二年八月在任大臣事、生物二種鯉鱸。類聚雜要抄曰、平大饗目錄、生物鯉雉鯛鮪。吾妻鏡卷第十一曰、建久二年辛亥八月一日丁丑、雨降、終日不ニ休止一。大庭平太景能、於ニ新造ノ御亭一獻ニ盃酒一、其儀强不レ極レ美ヲ、以ニ五色鱸魚等一ヲ、爲ニ肴物一ト。和泉國風土記曰、日根郡貢鮪。陸奥國風土記

曰、宮城郡貢鱸。厨事類記曰、供御次第、干御盤、燒物菜料云云、一坏鱸鱠。生物、鱠。鱸ハ、皮ヲキテ、ツクリカサ子テモルベシ。スヾキナキ時、タイノカハノカタヲキリカサ子テモル。蜻蛉日記曰、またこゝなすゝきなどしきりにあめり。平家物語曰、鱸の事。清もりはいまだあきのかみたりしとき、い勢の國あのゝ津より、舟にてくまのへまいられけるに、大きなるすゞきの、ふねへおどり入たりければ云云みづからてうびして、我身くひ、家の子らうとうどもにもくはせらる云云。山家集曰、秋風にすゝきつり舟はしるめりうのひとはしの名殘したひて。出雲國風土記曰、嶋根郡、南入海所レ在、須受枳。秋鹿郡、南入海、春則有二須受枳一。神門水海、有二須受枳一。

古事記曰、栲縄之千尋縄打延、爲レ釣海人之口大之尾翼鱸、佐和佐和迩控依騰

【形狀】 ○大和本草曰、鱸魚大ナル者二三尺、二月以後七月マデ肥ユ。暑月多クメ味ヨシ。八月ヨリヤスル。夏秋サシミ鱠トシ鮓トス。夏月膓ノ味ヨシ、クモワタト云、膓アリ、脂多ク味ヨシ

カハスヾキ

華夷鳥獸考曰、有二江鱸一差小而四腮味淡

○川鱸 大草家料理書 【漢名】 江鱸 寧波府志 【今名】

【集註】 延喜式卷第三十一曰、宮内省。諸國例貢御贄。山城鱸、同卷第三十九曰、内膳司。年料、山城國鱸魚。山背國風土記曰、久世郡樻殖云云鮎等。兎道郡貢鮎。大和國風土記曰、平群郡坂門川、出鮎鱸等。攝津國風土記曰、有馬郡布敷川、出鱸鮎等。駿河國風土記曰、伊穂原郡岩淵、出鮭鱸等

【形狀】 吉野拾遺曰、左衛門尉やすかた云云又あみをいれんとせしが、ふみはづすごとくにして、つぶ〳〵と水のそこにしづみけるを云云すこし河上のかたに、えぼしばかり水の上に見えけるを、あれ〳〵といふがうちに、かほ

ばかりさし出して、うちわらふを、いかにといはれて、まさなごとにせさせたまはんほどのものは、あみにてはとめえじと思ひさぶらひて、水そこをもとめ侍りしに、こゝもとには、さぶらはで、宮の瀧のあたりまでゆきてこそ、おもふ程にさぶらひ玉はねどゝいひて、うきあがるをみれば、三尺ばかりなるすゞきといふ魚と、二尺餘の鯉とを、左右のわきにはさみて、ひるこのさまして、岩の上につゐゝけるに云々つとめて、うへのおまへに、ありつるすゝきをたてまつりて、やすかたがことをけいし玉はせければ云々○大和本草曰、河鱸味尤ヨシ、暑月ノ佳品ナリ。出雲松江（マツエ）ノ湖ノ鱸味最スグレタリ。海ト河トノ間ニアル モ味ヨシ。按ニ、山堂肆考曰、江鱸味淡、和漢其ノ味相反ス

○せいこ　三好亭御成記

漢名　棠花小鱸　江南魚鮮品　伊勢貞丈雜記云、せいことは鮬のちいさきをいふ。江南魚鮮品曰、有ニ鱸魚一、巨口細鱗味甚腴、長至ニ二三尺一者上、又有ニ棠花小鱸一、僅長四寸、而四腮產ニ松江一、蘇子所謂松江之鱸也

一名　世比　倭名鈔曰、鮬。唐韻云、鮬、婢妾魚也。漢語抄云、世比。今ﾏ訛ニ婢妾一謂ニ妾婢一。新撰字鏡曰、鰁。曾當反　魚脂、世比○字典曰、鰁。博雅、鱓其雄曰鰁鱧。本草綱目、鱧。釋名、雄曰ニ鰁鱧一、雌曰ニ博帶一○鮬。爾雅曰、鱊鮬ハ鱖鯞、註小魚也。似ニ鮒子一而黑、俗呼爲ニ魚婢一。鱊、音聿。鮬音步。疏、說文、鯜魚也。正字通曰、鯜、即妾魚。爾雅、鱖鯞、後人因ニ郭璞謂ニ妾魚一、婢魚竝鯙鯜字鯙鯜即婢妾皆魚之小者、崔豹謂ニ之青衣魚一、其行以レ三爲レ率、一前二後、若ニ婢妾肰一、故名。柴桃軒又說曰、又有ニ婢妾魚一、言從ニ大魚一出遊、成レ隊、相尾、如ニ侍魚一然也。事物異名錄ニ載ル旁皮鯽ニテシブナ也

集註　三好義長亭御成記曰、十七献、せいご

形狀　○大

和本草曰、鱅魚。小ナルヲセイコト云セ、イゴハ小鱅也

古乃之呂（コノシロ） 倭名類聚鈔　【漢名】鰶魚 閩書　【今名】コノシロ

閩書曰、鰶魚。如レ鰣而小鱗ニ青翠。又名ニ青鱗一。以ニ其鱗脊俱青一也。冬月味腴。雨航雜錄曰 青鰶魚、多月肥美海錯之佳者。或以レ此敵ニ松江之鱸一　【一名】近志呂 出雲國風土記

己乃志呂 新撰字鏡曰、鮗。讀各反。己乃志呂。又曰、鰶鯯鱵鰤鮗鰣六字、己乃志呂○鮗。爾雅疏、鮗、一名鮗。和產未詳○鯯。字典曰、集韻、子例切、音祭、與レ鰶同○。鱵字典曰、鱵鱵海、鰶或省作レ鱵、即烏鰂（イカ）魚也○鰤。字典曰、鱵。集韻、魚名

擧能之盧 日本書紀孝徳天皇曰、塩屋鯯魚。鯯魚、此云ニ擧能之盧（コノシロ）一。新猨樂記曰、伊勢鯯（コノシロ）　鮗（コノシロ）　頓医抄曰、鮗（コシロ）

【今案】倭名鈔曰、鯯。四聲字苑云、鰶子例反、字亦作レ鯯 似レ鯽而薄、細鱗者也。和名古乃之呂 觀此則古ヨリコノシロヲ以テ鰶トスル事明ニシテ、字鏡ニモ亦コノシロニ鰶ノ字ヲ用ヒタリ

【集註】出雲國風土記曰、嶋根郡、凡南入海所レ在雜物云云近志呂。安東郡專當沙汰文曰、号ニ鯛鯯代一、錢十二文成レ之。但鯛專當之御菜料、鯯馬子饗菜料

【形状】○大和本草曰、コノシロ長七八寸、細鱗ナリ

都奈之（ツナシ） 萬葉集　【漢名】江鰶魚 閩書　【今名】コハダ

閩書曰、江鰶魚、三四月有レ之、味美。但小而多レ刺、淡鹹之間、江溪之涯、泉人謂二之刺芒一。

一名　つなし　慈元抄。萬葉集卷第十七曰、都奈之等流、比美乃江過底、多古能之濔

集註　慈元抄曰、昔有馬の王子零ぶれ給て、下野國まで下り給。其國に五万長者とて富人あり云々。其比長者獨の娘を持たり、かねては常陸の國司に參すべきよし、約束有ければ、彼王子忍逢給ひて、無レ程懷姙有ければ、國司より催促ありけれど、娘は早死したりとて、喪葬の儀式をなして、野邊に送る。棺には、つなしと云魚を入て、燒て烟を立、彼魚は燒臭ひ人を燒に似たればなり。其心を讀る。あつま路の室のやしまに立煙たが子のしろにつなし燒らん。このかはりに燒とよめり。それよりしてこのしろと云となむ

形狀　○コハダハ鰶魚(コノシロ)ニ似テ小也。河海ノ間ニ多シ

加豆乎(カツヲ)　倭名類聚鈔　漢名　鮰鯅　臺灣府志　今名　カツヲ

一名　鰹　新猿樂記曰、稻荷山阿小野之霙法師(ウセテ)ニ鰹(カツヲ)破(ハセ)前ヲ喜フ。玉造曰、鮭鰹之臁(ニコガシ)

堅魚　令○倭名鈔曰、鰹魚。漢語抄云、加豆乎。式文用堅魚二字。今按可爲堅魚之義未詳○按鰹爾雅出ニ鱁魚、和產無レ之。萬葉集卷第九曰、浦島兒之、堅魚鈎云云。古事記曰、有下上ニ堅魚一作ニ舍屋一之家上、天皇令レ問ニ其家一云、上ニ堅魚一作レ舍者誰家ソ

鰹　延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭云云凡天皇十月下旬臨ニ幸川上ニ爲レ禊、料云云鰹各六斤。同卷第三曰、遣ニ蕃國使一時祭。鰒堅魚各十連。言麗集曰、鰹、かつほ。壓添壒囊鈔曰、鰹(カツヲ)一節

おかつ　伊勢守貞陸記曰、女房ことば、かつほ、おかつ、からくく

其

から〳〵 同上註

生鰹 室町殿日記曰、伊勢國司より御進上あると云々御進上には大生鰹十放上ル

かつうほ 御献御調進次第曰、かつうほのけづり物一つゝみ、かつうほのふし一ふし〇爾雅曰、鰹。大鮦小鮦。疏、即鮦也。其大者名鰹。即七星魚ニメ、乾腊者號來アリ

集註

賦役令曰、若輸ニ雜物ニ者、堅魚三十五斤、煮堅魚二十五斤。延喜式卷第一曰、新年祭神。云云座別云云堅魚各五兩。同卷第二曰、御巫ミカンコノ奉レ齋神祭。堅魚云云各十二斤。同卷第三曰、霹靂神祭。堅魚六斤。同卷第四曰、伊勢太神宮。九月神嘗祭。堅魚十四斤。同卷第五曰、齋宮。稜料云云堅魚各八斤。凡諸國送納調庸。云云堅魚五百斤。志摩二百八十八斤、伊豆二百十二斤。煮堅魚一百四十四斤。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡供ニ神御ニ雜物者、煮堅魚十五合、別一籠不レ開アケ。堅魚笞二十四合、別納ニ十二斤ニ。同卷第十二曰、中務省。內教坊。春神祭、堅魚云云各一籠。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、堅魚九斤、西海道ノ諸國十一斤十兩。煮堅魚六斤七兩。凡中男一人輸作物、堅魚一斤八兩三分、西海道諸國二斤。志摩國。調、輸ニ堅魚ニ。駿河國。調、煮堅魚二千一百三十斤十三兩。堅魚二千四百十二斤。相摸國。中男作物、堅魚。安房國。中男作物、堅魚。土佐國。調、堅魚八百五十五斤。豐後國。調、堅魚三十四斤十四兩。中男作物、堅魚。同卷第三十二曰、御膳神八座。堅魚九斤。平野夏祭雜給料。堅魚十五斤、多加ニ十五斤ニ。同卷第三十九曰、內膳司。新嘗祭供御料。堅魚五斤、右夜料。煮堅魚云云各十三兩一分二銖、右解齋料。同卷第四十三曰、主膳監。月料、堅魚一百五斤七兩二分。煮堅魚云云各七斤二分。餘畧之。台記別記曰、康治元年十一月、大嘗會、堅魚百斤。皇太神宮儀式帳曰、次取ニ吉日ニ、山口神祭用物。堅

斗或ハ斤ノ誤カ

二分は一分二銖トアルベシ

魚二斤。次取二吉日一爲二正殿云々一、祭用物堅魚二斗。厨事類記曰、供御次第、六御盤云々堅魚生物鱠雉ナキ時カツヲ魚ヲモル。山家集曰、沖のかたより、風のあしきとて、かつをと申いをつりける舟どものかへりけるを見て、いらこざきにかつをつり舟ならびうきてはがちの浪にうかびてぞよる　今案 つれ〴〵曰、鎌倉の海にかつほといふ魚は、彼さかひには、左右なき物とて、此比もてなす物之。それも鎌倉の年寄の申侍しは、此魚をのれらわかゝりし世迄は、はか〴〵しき人の前へ出る事侍らざりき。頭は下部迄もくはず、切て捨侍し物之と申き。かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入たつわざにこそ侍れ。伊勢雜記曰、かつをと云魚は、古はなまにては食せず、ほしたる斗り用し之。ほしたるをかつほぶしとはいはず、かつをトいひし之。かつほと云之。されば古は、堅魚と書て、かつをとよみしを、後に鰹の字を作り出したり。俗字也

○かつうほのふし　御散飯調進次第　今名　カツブシ　集註　精進魚類物語曰、鰹房十連を指遣　按ニ凖俗ニて呼木魚也

○加豆乎以呂利（カツヲイロリ）　倭名類聚鈔　一名　堅魚煎　延喜式卷第三十二曰、大膳上。雜給料。參議已上。人別堅魚煎二兩二分。同卷第三十三曰、大膳下。親王以下月料。堅魚煎、紫菜各一斤十四兩、日一兩。妃云々堅魚煎云々各一斤十四兩、日一兩。夫人、堅魚煎云々各一斤、日三分二銖。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料。堅魚煎云々各四升五合。凡伊豆國ノ貢堅魚煎一斛四斗六升、以ニ中男作物內ニ進レ之。厨事類記曰、調備部云々或止レ醬用ニ色利ヲ一。裏書云、煎汁イロリトハ、大豆ヲ煎タル汁也云々或鰹ヲ煎タル汁也云々。倭名鈔曰、

煎汁。本朝式云、堅魚煎汁、加豆乎以呂利。令義解曰、若輸二雜物一者、堅魚煎汁謂二熬ッ煮ノル汁一曰レ煎也。延喜式卷第三十三曰、大膳下。凡諸國交易所レ進、駿河國堅魚煎汁二斛、擇二好味者一別器進レ之。若當年所ノ輸中男作物不レ滿二此數一者、正税充レ直交易進レ之

[集註]

賦役令曰、其調副物、正丁一人、堅魚煎汁一合五勺。延喜式卷第五曰、齋宮月料云云堅魚煎汁各三升。凡諸國送納調庸云云堅魚煎四斗、伊豆。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、煮堅魚煎汁十二兩二分、駿河國、中男作物、堅魚煎汁。伊豆國、中男作物、堅魚煎汁。同卷第三十二曰、大膳上。雜給料。五位已上堅魚煎汁一兩一分。園韓神祭雜給料。堅魚煎汁一升四合。平野夏祭雜給料。堅魚煎汁七瓶。別五合、多加二三瓶一。春日祭雜給料。堅魚煎汁三升。同卷第三十三曰、大膳下。賀茂齋內親王月料。堅魚煎汁云云一斤十三兩。三位已上、四位參議、堅魚煎汁二勺。同卷第四十三曰、主膳監。月料。堅魚煎汁三升一合五勺。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、丹波國堅魚煎三匹

阿遲（アヂ）倭名類聚鈔　[漢名] **竹筴魚** 寧波府志　[今名] **アヂ**

興化府志曰、竹筴魚似二鰤魚一近レ尾處有二硬鱗一

[一名] **阿地** 新撰字鏡曰、鰺。桑勞反。鮭、阿地。和名鈔曰、鰺。和名阿遲〇字典曰、鰺。字彙、鱢字之譌。鱢字註曰、說文、鮏臭也。周禮曰、膳二膏鱢一。按今周禮天官庖人作レ臊。品字箋曰、鰺、鰺鰷。魚名。又曰、鱶、同レ鰺。亦作鯵。正字通曰、鯵。倉三切、音參。白鰷別名。今江淮間謂二之鯵魚一、省作レ餐。即鰷魚ニメ、ヘエ也〇續日本紀卷第三十八曰、桓武

天皇延暦四年春正月、庚戌、遣使堀ニ攝津國神下、梓江、鯵生野、通ニ于三國川ー

【集註】延喜式卷第三十一曰、宮内省諸國例貢御贄。和泉、鯵。同卷第三十九曰、内膳司。六月神今食料、干鯵二十隻、年料、和泉國、鯵。御散飯調進次第曰、七月七日鯵ーれんつみて三かんかんなかけに二ー參ル。あとさき二所、わらにてゆふ也

佐波（サバ） 本草和名

【漢名】青花魚 日用襍字母

【今名】サバ

【一名】阿乎佐波 倭名類聚鈔曰、鯖。和名阿乎佐波。本草和名曰、鯖。和名佐波。倭名抄國郡部曰、周防國佐波、波音馬。大内家壁書曰、佐波郡鯖川之渡御定法事。周防國鯖川渡舟賃二瀨之事云々。新猿樂記曰、周防鯖○按、鯖。和產未詳

佐波乃宇於 本草類編曰、青魚。和佐波乃宇於。按、於乎誤

左波 字鏡魚部曰、鮹、左波。鮑、左波○字典曰、鮹。與鮀同。爾雅、鯊鮀。註、今吹沙小魚、體圓而有黒點文。スナフキ魚也

佐者 類聚雜要抄曰、母屋ノ敷上料、東京錦茵一枚、方三尺五寸之中、緣弘五寸角ニ佐者口ヲ合タリ。雅輔裝束抄曰、このゆたんのすみをば、すびつのすみのやうにすおかへてさばくち（鯖口）にをるなり

佐婆 續日本紀卷第廿五曰、廢帝天平寶字八年冬十月庚午、紀朝臣鯖麿從五位下、癸酉、以從五位下紀朝臣佐婆麻呂爲ニ和泉守ー。同卷第三十四曰、光仁天皇、寶龜七年三月丙申、從五位上紀朝臣鯖麿爲ニ木工頭ー。同卷第三十五曰、寶龜十年十一月甲午、從五位上紀朝臣佐婆麻呂爲ニ大炊頭ー。同卷第三十六曰、寶龜十一年六月辛酉、授ニ

兩ノ下ニ「二分」脫ス下ノ分モ同ジ

文人料ニハ鯖ハ無キヤウナリ

從五位上紀朝臣佐渡麻呂正五位下。天應元年十一月丁未紀朝臣鯖麻呂爲御裝束司。延喜式神名記曰、周防國佐婆郡。倭名類聚抄曰、周防國佐波郡佐波

さもし 伊勢貞陸記曰、女房ことばさばさもし

【集註】延喜式卷第五曰、齋宮。月料、大鯖九十隻。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、鯖鱐。周防國、中男作物、鯖。讃岐國、中男作物、鯖。伊豫國、中男作物、鯖。土佐國、中男作物、鯖。同卷第三十二曰、大膳上。六月神今食、小齋給食云云五位已上一人、鯖三兩。六位已下、鯖一兩。雜給料、六位已下云云鯖三兩。新嘗祭。小齋解齋給食、六位已下一人、大鯖三兩三分。同會皇后宮小齋云云、六位已下一人、鯖三兩二分。同宮神態直相給食云云、六位已下一人、鯖三兩。大歌立歌。人別、大鯖一隻。園韓神祭雜給料。鯖五十斤。平野夏祭雜給料。鯖五十七斤八兩。賀茂神祭齋院陪從等人給食料。鯖百十三隻。春日祭雜給料。鯖百二十斤。松尾神祭雜給料。鯖四十斤。同卷第三十三曰、大膳下。九月九日節。文人料、云云鯖各一斤。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、能登鯖一百四十二隻。同卷第四十三曰、主膳監。月料、能登鯖一百卅五隻。出雲國風土記曰、秋鹿郡。凡北海所在雜物、佐波。新猨樂記、周防鯖。宇治拾遺物語卷第八曰、鯖賣翁きたる云云又いはく鯖をうる翁杖をもちて鯖をになふ、其鯖の數八十云云彼鯖の杖の木三十四年がさきまでは、葉は靑くさかへたり

志毘(シビ) 出雲國風土記 【漢名】金鎗魚 日用襍字母 【今名】シビ

【一名】 茲寐 日本書紀曰、鮪。此云茲寐 志毘魚 出雲國風土記 思寐 日本書紀武烈天皇曰、由是、太子放影媛袖移廻向、前立直當鮪、歌曰、之哀世能、儺鳴理鳴彌黎鷹、阿蘇寐倶屢、思寐我簸多泥伱、都摩陀氐理彌喩、鮪臣答歌曰、飫哀枳瀰能、耶陛能矩瀰架枳、賀々梅騰謀、儺鳴阿摩之彌弭、賀々農倶彌柯枳。又影媛歌曰、瀰儺曾曾矩、思寐能和倶吾鳴云云。舒明紀曰、鮪〇按瑯河東集註曰、鮪。大魚也。形似鱣而靑黑、大者七八尺。正字通曰、鮪。烏鬼切、音委鮥魚、陸璣曰、鮪一名鮥似鱣而靑黑、頭小而尖。似鐵兜鍪、口在頷下、甲可摩薑、大者爲王鮪、小者爲叔鮪、周禮獻人春獻王鮪、月令季春薦鮪于寢廟、註鮪魚之先至者、古今注、謂鱣之大者爲鮪非是。本草綱目、鱘魚。釋名、鮪魚、一名鱘山堂肆考曰鱘、一作鱏。江湖皆有之、鼻長如鸛嘴、故又名鸛嘴魚、無鱗有靑黑斑文、作鮓甚美、一名鱘鰉魚、觀此則志毘ト大ニ異也。尤和産未詳 之彌 見上註 鮪 塵添壒囊鈔 斯毘 古事記曰、斯本勢能、那哀理袁美禮婆、阿蘇比久流、志毘賀波多傳尓、都麻多氐理美由。志毘臣愈怒歌曰云云尓王子亦歌曰、意布袁余志、斯毘都久阿麻余、斯賀阿禮婆、宇良胡本斯祁牟、志毘都久志毘 大魚 精進魚類物語

【集註】 出雲國風土記曰、嶋根郡宇由比濱、捕志毘魚。盜道濱、捕志毘魚。澹由比濱、捕志毘魚。加努夜濱、捕志毘魚。美保濱、捕志毘魚。又曰、凡北海所捕雜物、志毘。萬葉集卷第六曰、藤井乃浦爾、鮪釣等、海人船散動云云。同卷第十九曰、鮪衝等、海人之燭有伊射里火之云云

【形狀】 〇大和本草曰、今シビト云魚ハ、其形カツヲノゴトク、略マルシ。皮ノ色、カシラ、尾ノ形モ、カツヲノ如シ。有鱗、口トガレリ。皮色淡白頭扁シ、長一間バカリ、肉

赤シ、肥大ナリ

○くま引　三好亭御成記　[集註] 包丁聞書曰、熊引といふは、しびの塩引也

奈與之(ナヨシ)　倭名類聚鈔　[漢名] 鯔魚　本草　[今名] ボラ

證類本草曰、鯔魚。身圓頭扁骨軟、生江海淺水

[一名] 名吉　尺素往來。安東郡專當沙汰文曰、宮中奉納之時、安濃東西郡正權專當等、寄合直會祓ヘノ料肴魚以下之物等貢ㇾ之。大意日記事、云云名吉十五隻計、方々料代錢三百計歟。高直之定。毎年五月五日節供料ニ、御田牛之丁部面々方ヨリ、千名吉一隻宛上之間、專當使部郡ニ令ニ入部一。五月一日安乃津市ニテ大略取集之歟、方々支配之次第。七隻長官進ㇾ之、二隻七殿進ㇾ之、家子ノ分也 二隻多聞大夫殿進ㇾ之、家子ノ分也 二隻政所大夫方ヘ進ㇾ之。已上十三隻方々ヘ進ㇾ之、取殘之分專當得分之。但彼魚對捍之時者、代錢二十文宛取ㇾ之。常樂寺御田米、無ニ沙汰ニ之時、魚等取進之送文案。進上。名吉十三隻。右任ニ先例ニ進上如ㇾ件。嘉元二年五月三日。安東郡權專當吉貞上。進上。名吉參隻。右進上如ㇾ件。嘉元二年五月三日。安東郡權專當吉貞上。闕日記云、今日三日、丁部字彌宜太郎、名吉廿九隻持來之間、相ニ副彼太郎於若菜女ヲ一、任ニ送文ニ所ㇾ進ㇾ之了。土佐日記曰、けふはみやこのみぞおもひやらるゝ、こへのかどのしりくめなはの、なよしのかしら、ひゝらぎらいかにぞとぞいひあへる。玉造曰、鮭(サケノ)條鯔(ナヨシノスハイリ)楚

伊勢鯉　言塵集曰、鯔。世俗に名吉と云魚之。伊勢鯉とも云

口女(クチメ)　日本書紀曰、口女ハ、即鯔(ナヨシ)魚也。釋日本紀曰、口女魚、先師申云、口女者、鯔魚之

鈎ノ上　前田本神字アリ
魚　前田本無シ
至　同無シ
理ノ下　同致ノ字アリ

由、見下一書耳。都督申云、依呑鈎鯔魚、不進御、亦女又呑件鈎者、正說也。以鯛何進御哉。大問云、鯛者如神膳備之歟、如何。先師申云、新嘗會、神今食、神潜內、干鯛備之。攝問云、鯔魚雖呑鈎、何不進御哉。攝重仰云、云云以鯔魚殊可進御歟。然者、如師疑申、於鯛者、雖呑鈎魚不可進御之識、已正書之說也。至鯔有此識、一書之說猶不叶理歟。大仰云、云云正書一書其說雖異、鯔魚不進御、尚非無其謂乎()新撰字鏡曰、鱳。七孝反、奈与之。倭名鈔曰、鯔。鯔讀奈與之。本草和名曰、鯔。和名奈与之。本草類編曰、鯔魚、和奈与之〇字典曰、鱳。集韻、魚子也。山海經、鯈魚如鯉而雞足。

［形状］未詳

［集註］伊勢國風土記曰、安濃郡出鯔鮒鮎鰻。出雲國風土記曰、嶋根郡南入海所在鯔。秋鹿郡南入海春則有鯔魚。神門水海有鯔魚。和泉國風土記曰、日根郡貢鯔伊勢國風土記曰、桑名郡市部礒海上多口女、而商民賣、中古以來有夢相之事、而備熱田之神膳、其魚大者、如鯉、細鱗而長口、其味美也

○スバシリ　塵添壒囊鈔

［一名］鯬（スバシリ）壒囊抄〇字典曰、鯬白魚也。ミゴヒ也。精進魚類物語曰、すはしり

［形状］○大和本草曰、鯔魚、海中及潮ノ入ミナトニアリ、最小ナルヲエブナト云、エブナヨリ少大ナルヲイナト云、ヤ、大ナルヲスバシリト云、此三ハ皆其小ナル時ノ名ナリ、最大ナルヲボラ、ナヨシ、イセゴイト云

○えふな　山家集

［集註］山家集曰、たねつくるつぼ井の水のひく末にえぶなあつまる落合のはた

○いなのうす　三好義長亭御成記曰、御くわし、いなのうす

［形状］○伊勢貞丈雑記曰、いなのうすは、なよしのちいさき時を、い

なといふ。いなの腹に、うすのごとくなる物あり。なよしは、江戸にてほらといふ、なよしのちいさきを、すばしりといふ。すはしりのちいさきを、いなといふ。いなのうすを江戸にては、すばしりのへそといふ

しくち 散木集 [漢名] 赤目鳥 閩書 [今名] スクチ

閩書曰、烏魚。本草所レ謂鯔魚澤首喙員、其質則細シ、又有ニ赤目鳥一、此魚産ニ江南大江中一、春時群來リ、至レ潮打レ子、遊シ魚子須ニ跳躍迺出一、大江無レ石彭湖海石廉ノソムレ外、於レ此犯撃方ニ得レ生スルコトヲレ子ヲ

[一名] まくち 言塵集曰、鯔云々しくち、まくちなど云 [集註] 散木奇謌集曰、しくちひくあごのはやまに年ふりていかみになればしめられにけり

多樂 尺素往來 [韓名] 呑魚 東醫寶鑑 [今名] タラ

[一名] 由支 新撰字鏡曰、䲔。由支○通雅曰、鰻別作䲔。正字通曰、䲔俗鰻字。伊勢守貞陸記曰、女房ことば、たら、ゆき

鱈 文録四年御成記曰、御三献干鱈与ノ御膳御相伴与ノ膳

鱈 [集註] 朝倉亭御成記曰、献立次第、ひたら、七献、鱈。十三献、ほしたら、こうるか。殿中申次記曰、十月三日、初鱈二、武田大膳大夫 [食法] 大草相傳之聞書曰、たらのやはらぐる事。先白水にたらをつけ、又それに、春はゑのきの葉、又ゑの木のかはを入てよくい。夏も同前。秋は柳のかはもよくい。冬同前。それを入て、たらをやはらげべし。やはらぎて、たらのかはをは

ぎ、たらの腹にもやうじをつかひ、能々あらひ候て、きり様は、厚さ五分程にわぎりにて、其後くろ物にいれて、さかしほをくはへ、塩を少入て、一ふきにる也。さて取て置たらのゆに。料理の事は、たら一しやくに、はまぐりのみを、わんのすゐのかさ一ツ程、いかにもよくすりて、又かつをゝ一ふしの半分程けづりて、すしほ、さらの大小により、一も半分もすりて、水八はい計也。其心得は、客により又存分たるべく候。右の兩種をすまして、いまのはまぐりいれてにて、いかにもにへたるとき、たらをいれて、よきころにになるべし。たらのうはをきは、山のいものぬかご、よきころに入べく候。又なつめのあきゝに入、一ふきふかせいれべく候。夏はたらにはたてゆの葉本うらきりて、一葉づゝ用べく候。春夏秋多同前也

【形狀】○本朝食鑑曰、雪魚、略類二于鱸一而大口細鱗大頭堅骨、頷下有二細鬚一而難レ見、頭中有二白石二箇一若二棋子之小一若二蛤殼之碎一端有二鋸齒一鱗色靑黃帶レ白、久則淡白、皮薄肉白、鰭尾共軟

加禮比（カレヒ） 倭名類聚鈔　【漢名】比目魚 本草　【今名】カレ

【一名】加良衣比　本草和名曰、王餘魚。和名加良衣比。倭名鈔曰、王餘魚。俗云、加礼比。曾我物語卷第五曰、かれいはみなとにむかひかたたがひす

かため 伊勢　守貞陸記曰、女房ことば、かれい、かためとも

鰈（カレイ） 塵添壒囊鈔（ヂンテンアイナウセウ）曰、王餘魚同○正字通曰、鰈俗鰨字。字典曰、上林賦、註、鰨鰈魚也。似レ鮎有二四足一。集韻、達協切、音沓。東方比目魚名也

半

面魚

四條流庖丁書曰、膾ノ事、山吹ナマスト云ハ、半面魚膾ノ事也。カレイノ子ヲイリテ、アヘテ參ラスルナリ。山吹ノ如ナルト中傳

【集註】仙覺萬葉集注釋卷第五曰、或臨ニ洛浦ニ徒ニ漢ニ王魚ハ、王魚者王餘(ウレイ)魚也。安房國風土記曰、平群郡尤宜ニ鮑鰈鱣

止比乎(トビヲ) 倭名類聚鈔

【漢名】文鰩魚 本草

【今名】トビウヲ

證類本草曰、文鰩魚。無毒、婦人帶レ之令レ易レ產、亦可下臨レ時燒爲ニ黑末ニ酒下一錢匕上、出ニ南海ニ、大者長尺許、有レ翅與レ尾齊、一名飛魚、羣飛ニ水上ニ、海人候レ之當レ有ニ大風ニ。吳都賦云、文鰩夜飛而觸レ網是也

【一名】こひうほ 御散飯調進次第。倭名鈔曰、鰩。和名止比乎。新撰字鏡曰、鰩(トビイヲ)。止比乎。塵添壒囊抄曰、鰩。精進魚類物語曰、飛魚

【集註】御散飯調進次第日、御さはの供御くみ立様之事云々とひうを數二ツ、下ニこふ六寸ばかりに切て敷之。かしらの方さきへなる、二ツ重而置

【形狀】○大和本草曰、文鰩魚(トビウヲ)、鰭(ヒレ)長シテ能飛ブ、乾(ホシ)テ遠ニ寄ス

仁倍 倭名類聚鈔

【漢名】金鱗魚 閩書

【今名】ニベ

【今案】ニベトグチハ一類二種也。ニベハグチヨリ形狀窄ク、全身淡黃色ニシテ、黑點斜ニアリ。口唇紅ク、腹白色、頭腦中ノ石細長ニシテ、クチノ扁白碁子ノ如クナルニ異也。閩書曰、金鱗魚一名石首、浙人

魚刊本ナシ　首ノ下刊本魚アリ

謂ニ黄瓜ハ、亦名ニ黄魚ト。閩中臘月爲レ盛、而浙中盛ニ於夏月一。本草綱目曰、石首魚。其形如ニ白色ニ、而身弱骨細、鱗黄色如レ金、首有ニ白石二枚一、瑩潔如レ玉。觀レ此則石首ハ黄色ナルコ明ニメ、クチノ淡黒鱗ナルト異也。漳州府志曰、或謂漳中金鱗大而長非ニ呉越間石首可レ比、自此一種ト云ハ即ニベ此也

【一名】尓戸　新撰字鏡曰、鮸。子紅反、石首魚也。倭名抄曰、鮸。辨色立成云、仁倍、一云久智○本草綱目、鮸。性啖レ魚、其目陽視、故謂ニ之鮸魚一。異物志ニ以爲ニ石首一非也

【一名】久智　見上註

【形状】○大和本草曰、ニベハ四五尺六七尺アリ、赤色ナリ。鱗大ナリ。按ニベ大者鱗隨テ大、小ニメ一二尺許ノ者ハ鱗細也

石持
精進魚類物語

○伊之毛知（イシモチ）　倭名類聚鈔　【漢名】石首魚　【今名】イシモチ　【一名】

和伊之毛知、頭中有石如碁。

倭名鈔曰、字指云、鮸和名伊之毛知其頭中有レ石、故亦名ニ石首魚一也。本草類編曰、石首魚。按頭中石碁𩑛扁ナル者ハクチノ石也。クチハ大者四五尺ニ及ブ、鱗淡黒色ニメ黒點アリ。大者鱗粗ニメ石ナギノ如シ、小者白色淡黒ヲ帶光アリ。倭名鈔ニ久智ト云ハニベノ一名也。今グチ云ハイシモチノ小ナル者ヲ云。即シラグチ也。漳州府志ニ漳中小者種類亦多ト云リ

ひらた
精進魚類物語

【漢名】鰽魚　廣東通志　【今名】ヒラ

【形状】○本草啓蒙曰、ヒラ。海產、形鰶（コノシロ）魚ニ似大、渾身白色、鱗ハ梅花瓣ノ如シ、腹下ノ鱗ニ三角ニメ、鰶魚ノ如シ。大者ハ長サ二三尺、身ハ扁薄ニメ肉ニ細刺多シ、腹中ノ刺ハ箭鏃ノ狀アリ

乎古之 倭名類聚鈔　漢名　虎魚 日用雜字母　今名　ヲコゼ

一名　乎古白　新撰字鏡曰、魟。子紅反、似レ鱉、乎古白。雨航雜錄曰、魟魚。形圓似レ扇無レ鱗、色紫黑、口在二腹下一尾長二於身一如二狸鼠一、其最大曰鮫、其次曰錦魟、曰黃魟、曰斑魟、曰牛魟、曰虎魟。魟字或作鯕。文選所謂鱝魚也。尾端有レ刺甚毒。卽エイ也〇天文写本倭名鈔曰、唐韻云、鰧。魚名、似レ鰕而赤文者也。楊氏漢語抄云、乎古之〇字典ニ似鰕赤文ノ字出タリ。鰧魚、本草ニ出、和産未詳。正字通曰、鰧同䲢

形狀　〇大和本草曰、ヲコゼ、フグニ似テカドアリ、背ニハリアリ、色赤マダラナリ

金頭 精進魚類物語　漢名　角魚 廣東通志　今名　カナンド

嶺南雜記曰、角魚頭如二麦角一四起

形狀　〇大和本草曰、金頭、ヲコゼニ似タリ、長七八寸、頭ニカドアリ、色淡赤色、味亦淡美

以和之 倭名類聚鈔　漢名　鰛魚 閩書　今名　イワシ

閩書曰、鰛魚。似二馬鮫一而小、有レ鱗、大者僅三四寸

一名　伊和志　新撰字鏡曰、鰯。伊和志。倭名鈔曰、鰯。漢語抄云、鰯。以和之。今按、本文未詳　鰯魚 延喜

式卷第五曰、齋宮月料、鰯魚汁一斗五升

むらさき 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、いはし、むらさき、おほそとも、きぬかつき共

おほそ 見上注

きぬかつき 同上

鰯（イハシ） 塵添壒囊抄曰、節分夜ル打ニ大豆ヲ事云云鰯（イハシ）ヲ炙串（ヤクシ）ト名付テ、家々ノ門ニ指（サス）ベシ云云

集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、小鰯云云各六斤。周防國、小鰯七斤、大鰯鮨十五斤。備中國中男作物、大鰯。備後國、中男作物、大鰯、紀伊國、中男作物、大鰯。讃岐國、中男作物、大鰯。新猿樂記曰、伊豫手筥、又砥、又鰯、又簾。和泉國風土記曰、大鳥郡高濱鄕、出鰯。茅渟海出鰯。高師濱、出鰯䲔鱧等。四季物語曰、ついなの夜は云云いはしのはさみもの、ひゝらぎのほこは、なやらふ家には、もゝしきならでも有ことなれども、ことに大内には、かにもりのつかさ、例としてつかうまつれり。古今著聞集卷第十六曰、寶殿の別當なりける侍を召て、麥飯（むぎいひ）に鰯（いはし）あはせてにて、只今調進すべきよし仰られければ

附方 **白クサ治方** 頓医抄曰、初ハ白シ、次ニハアカシ、後ニハ黒クナル也。白キ時ハ鰯ヲヨク／＼焼テ、粉ニシテ付ヨ、鴉ノ羽ニテサラ／＼セヨ

○小鰯腊（イワシノキタヒ） 延喜式

今名 **ゴマメ** 令義解曰、腊謂全干（ホセル）物也。倭名鈔曰、腊。唐韻云、腒腊乾肉也。和名木多比。正字通曰、周禮腊人掌乾肉、凡田獸之脯腊、註曰、田獵所獲、或獸或禽、全體乾之。疏云、腊之言夕也、朝曝夕乃乾

一名

乾鰯 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調云云乾鰯各三十六斤

集註 延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物。若狹國、小鰯腊一石一斗。丹後國、小鰯腊十二籠

とる 群本ニ作ル

らこ 同ニ作ル

形狀 ○大和本草曰、鰮(イハシ)。小ナルニ塩ヲ不レ淹(ツケ)ホシタル淡乾(ナンカ)ヲゴマメト云

○比師古以和之(ヒンニイワシ) 倭名類聚鈔 今名 ヒシコ

一名 比之古以和之 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、鯷魚。漢語抄云、比師古以和之○字典曰、鯷ハ博雅、鮎也。戰國策、鯷冠、秫縫ハ註、大鮎以ニ其皮ヲ爲レ冠。卽ナマズ也。正字通、鯷字註曰、䱇鯷並同。字典曰、䱇ハ集韻、延知切、並音夷、鱁鮧鰾ニ藏魚腸ニ也。本草綱目、鱁鮧、注曰、唐韻云、塩藏魚也

比志古鰯 延喜式 鰯鯷 室町殿日記

集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。備中國、中男作物、比志古鰯。安藝國、中男作物、比志古鰯。周防國、中男作物、比志古鰯。室町殿日記曰、御臺所入用之事云々 鰯鯷一桶貮斗入、右登申ト可有御受取ト。以上

かこのうを 四季物語 韓名 青魚 東醫寶鑑 本草ノ青魚 和產未詳

集註 四季物語曰、しだ、ゆづりはといへども、さらしまめ、かどのうを、こゝろぶとの御まはりのしたにしかれて

形狀 ○大和本草曰、青魚(カドイハン)鰮ニ似テ大ナリ、長一尺餘 ○

かずのこ 朝倉亭御成記 今案 通雅曰、韋昭云、鮞魚未成也。事物異名錄曰、說文ニ鮞。是子之在レ胎者。正字通曰、鮞。魚子總名。韋昭曰、魚未成子在レ胎也。又呂覽魚之美者、

東海之鮞。蝦夷志曰、亦有ニ鯟(カト)魚一、味美在レ子、子亦タ滿ツ二腰部ニ一、取テ二其ノ子ヲ一乾レ之爲レ腊、呂覽所謂東海之鮞、葢謂レ是也。俗ニ用ニ鯟字一、所レ出未レ詳。朝鮮方俗以テ爲ニ青魚一者。正字通曰、鰊。德公切、音東、魚似レ鯉。字典ニ鯉作鰡

集註 朝倉亭御成記曰、かずのこ、からすみ、御汁、白鳥、十四献、かずのこ云々二献、かずの子、かいあはび

波里萬知(ハリマチ) 倭名類聚鈔

漢名 未詳

今名 ハマチ

一名 波理萬知 天文写本和名抄。倭名鈔曰、鮁魚。唐韻云、鮁魚名也。漢語抄云、波里萬知○正字通曰、鮁。比目魚、名ニ版魚一、俗改作レ鮁。カレイ也 ハマチ 塵添壒囊抄曰、鮁(ハマチ)○字典曰、鮁。集韻。蒲撥切、音跋、魚名、似レ鯉而赤

形狀 ○大和本草曰、鰤(ブリ)小ナルヲハマチト云

○鰤(ブリ) 尺素往來

漢名 海鰱 清俗

今名 ブリ 大和本草曰、鰤ノ字、昔ヨリ國俗ニブリトヨム、然モ出處未詳。按、正字通曰、鰤、舊註音師老魚名、本草綱目、作師

一名 ワラサ 安東郡莫當沙汰文曰、宮中奉納之時、安濃東西郡正權專當等、寄合テ直會被料肴魚以下之物等買レ之、大意日記事、被料、大魚一隻。若無ニ大魚一者ワラサ二隻計歟。代錢百四五十許歟○按ニ書言字考ニ、青箭魚ワラサト訓ズ、然レモ魚鑑ニ、海鰤(ブリ)秋ヨリ冬ニ至ル迄ノ魚ヲ、ワラサト云エバ、ブリノ一名也

○くる〱

雜記曰、くる〱とはぶりのわたの事之、と宗五一册抜書(ヌキ)ニあり。又蜷川親元記寛正二年

日記ナリ殴中日々記ノ事之書に、鱈の腸（ワタ）を、こず〳〵とて、正月用ひたる、不來といふといふは名稱あしきによりて、來々と書たり云々こず〳〵は、不來〳〵といふて、名のとなへあしきゆへ、來々と書たり。くる〳〵とよむなり。梨子トいふハ、無シトいふて、名の唱へあしきゆへ、ありのみトいふニ同意なり。くる〳〵は、ふりのわたトいふハ正説なるべし。たらのわたハ、きくわたトテ、花ニ似たり。吸物などにするなり。頭書親元か文明十三年ノ日々記ニ、來々ナドカキテ、肩ニたらト實書たり。鱈の腸ナリ云々タラクル〳〵ト云ナルベシ。節用集ニ、來々自能刕出之。昔ハ不來といふなり。今世ハ祝て來ルなりト見ユ。能登國より出し名物之

ゑそ 伊勢守貞陸記　【漢名】 狗母魚 日用襍字母　【今名】 エソ

【一名】 こんもく 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、ゑそ、こんもく、しらなみとも　しらなみ 見上註　【形状】 ○大和本草曰、エソ。頭扁ク、形圓ニメ、蛇ニ似タリ。長七八寸、或尺餘。色ハキスゴニ似テ、少黒シ

かます 伊勢守貞陸記　【漢名】 梭魚 閩書　【今名】 カマス

河間府志曰、鯪魚。如レ梭身長而靑。閩書曰、梭魚。似二鰷魚一稍大、如二織梭一豐肉脆骨　【一名】 魳（カマス） 壓添壒嚢抄。字典曰、魳。本草即鯸鮐也　くちほう 伊勢守貞

陸記曰、女房ことば、かます、くちほう

形狀　○大和本草曰、梭魚(カマス)。其形布ヲル梭(ヒ)ニ似タリ、大ナル者尺餘、狀長ク身マルク、アブラ多シ

まなかつほ　朝倉亭御成記

漢名　鯧魚　本草

今名　マナガツホ

本草綱目曰、鯧魚。註曰、藏器曰、鯧魚生ニ南海ニ、狀如レ鯽正圓無ニ硬骨一。時珍曰、閩浙廣南海中四五月出レ之。昌美也。以レ味名。廣人連テ其骨ヲ煮食

なかつうを　朝倉亭御成記曰、六獻、まんぢう、御そへ物、まなかつうを

眞鰹　大草家料理書曰、眞鰹汁ハ上也。但差味しやうが酢上々也。組樣口傳有、同煎皮は中なり

一名　魚味鰹　尺素往來　ま

集註　永祿朝倉亭御成記曰、四獻、御そへものまなかつほ。三好義長亭御成記曰、八獻、御そへ物、まなかつほ

食法　四條流庖丁書曰、イト膾ト云ハ、鮒膾ノ事也。山吹膾ト云ハ、王餘魚ナマス也。マナガツホハ鯵ズニテ可ニ參ラス、惣メ鯵出來ヌレバ、ナニ魚ニテモ鯵ズ良也

形狀　○大和本草曰、マナガツヲ其形方ナリ

きす　大草家料理書

漢名　鷄魚　時珍食物本草

今名　キスゴ

時珍食物本草曰、鼠頭魚、一名鷄魚、四五月有レ之、長四五寸、頭類レ鼠身圓、肉厚鱗細有ニ斑點一

形狀　○大和本草曰、キスゴ、大サ七八寸ニ至ル、猶大小アリ。其肉潔白性カロク好シ

與理度 延喜式 【漢名】 鱵魚 本草 本草綱目曰、鱵魚。大小形並同二鱠残一但喙尖有二一細黒骨如レ鍼為レ異耳 【今名】 サヨリ ラス

【一名】 波利乎 倭名類聚鈔曰、針魚。七巻食経云、針魚。口長四寸如レ針、故以名也。和名波利乎、一云與呂豆 與呂豆 見上註 針魚 續日本紀巻第三十三曰、光仁天皇宝亀五年十一月乙巳、授二大市ノ妾無位錦部ノ連針魚女外従五位下一 與理刀魚 延喜式。

新撰字鏡曰、縒。線千尓反、系也。系與留 與理等 延喜式 與理刀魚 同上 與呂都 本草和名曰、針魚。和名与呂都、一名波利乎 與冶魚

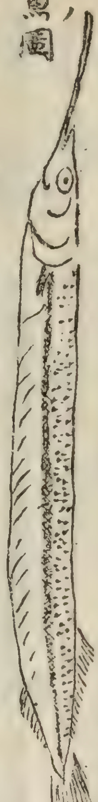
延喜式巻第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、與冶魚刺云云各二斤 さより 大草家料理書曰、生さより、同きすは、さしみにも吉、又あぶりても珍敷物なり。但焼様は醤油酒を入合て焼也。但さしみの時夏はたで酢上と也

【集註】 延喜式巻第二曰、大神社一座、與理刀魚三斗。同巻第二十四曰、主計上。中男作物、與理度腊二斤。東海道遠江國、中男作物、與理等魚腊。同巻第三十二曰、大膳上。雑給料、参議已上、與理刀魚五両二分。五位已上三十人、別、與理刀魚五両。宴會雑給。親王以下三位已上并四位参議ゝ人別、與理刀魚五両。四位五位并命婦。人別、與理刀魚二両二分。同巻第三十三曰、大膳下。九月九日節文人料。五位一人、云云與理刀魚各二両

【形状】 (鱵ハ形梭魚(カマス)ニ似テ小ク窄シ、尾岐ヲナス、背淡青色、背腹ノ間ニ、頭ヨリ尾上ニ至リ藍色ノスジアリ、頭尖リ、下觜長

ク出テ、鍼ノ如シ。長サ寸許、末赤シ。傳信録ニ、針魚頭戴ニ針形、亦名レ鱵ト云此也

〔今案〕備中玉島、備後因島ニテ、ラスヲ、ヨドロ、ト云。此古名ノ殘レル處也



鱵魚圖

久惠 延喜式

〔漢名〕未詳　〔今名〕クヱ

按、萬葉集第十四曰、可麻久良乃、美胡之能佐吉能、伊波久叡乃トミユ。此魚海底岩クヱニ生ズルニヨリ、久惠ノ名出歟

〔集註〕延喜式巻第二十四曰、主計上。凡諸國輸調。久惠鱐云云各三十三斤五兩。凡中男一人輸作物。久惠鱐云云各二斤。紀伊國。調云云自餘輸ニ云云久惠腊。阿波國、中男作物、久惠鱐。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料。久惠脯十三斤八兩。同卷第四十三曰、主膳監。月料。久惠脯十二斤十兩。厨吏類記曰、供御次第、六御盤、高盛菜料七坏、平盛菜料一坏云云、久惠脯鯖等、隨ニ本司所ロ添盛ニ進之

〔形狀〕クヱハ今紀州由良ノ內漁村ニテ冬月夜中ニ釣テ多ク市廛ニ出ス、形狀アクニ似テ、大ニメ褐黒色、口大ヌ鼻上凹、齒牙唇外ニ顯テ悪ムベシ、大者五六尺、小者一二尺、形狀ハ平常ノアクニ同メ、淡褐色ニメ褐色ノ條斑背ヨリ腹ニ至ル、尾岐ナシ

タチイヲ 塵添壒囊鈔　［漢名］帶魚 閩書　［今名］タチウヲ

閩書曰、帶魚。身薄而長、大者至二五六尺一、其形如レ帶鋭口尖尾。瀛舟筆談曰、定海普陀衢港等夏鐘冬鑑之利歲以百萬計、每至二四五月十一二月一、名曰漁洋、漁船數千來集。大約閩民居其六、浙民居其三、江蘇民居其一。五雜組曰、閩有二帶魚一、長丈餘、無レ鱗而腥、諸魚中最賤者ナリ、獻レ客ニ不レ以登レ俎、然中人之家用レ油ヲ沃煎亦甚馨潔、昔ア有二一監司一、因テ公事ニ過レテ午ヲ飾ル、餒ルコト甚シ、道傍ノ閭ニ香氣甚烈ナルヲ聞ク、問フ何物ソト、左右以二帶魚一對ヘ、立命シテ往テ民家ニ取二已ニ煎ル者一至レ宅啖レ之、大稱レ善ト、且怒二往者之不一レヲ市也。自レ是每飯必欲レ得レ之、去レ閩ヲ撤載、猶思レ之不レ置、人之嗜好無レ常如レ此、吳江顧道行先生亦嗜、閩所レ作帶魚鮓ヲ、遇閩人ニ輙索ム、而閩人賤ニ視此味一、常無二以應一スルコトレ之也

［一名］劒魚 尺素往來　魛タチイヲ 壒囊抄〇字典曰、魛今鮆魚、即エツ也　太刀魚 精進魚類物語

［形狀］〇大和本草曰、大刀魚タチ、形刀ニ似テ長クウスク、背青ク腹白シ、長キ者二三尺、其觜サヨリノ如ク、長クタ上下齊ヒトシク、觜ノ内鋸ノ如シ、味不レ好、骨多クアブラアリ、腥シ

ムツ 塵添壒囊鈔　［漢名］未詳

［一名］鯥ムツ 壒囊抄〇爾雅曰、鱀是鯥。註、鱀䱜之屬也。躰似レ鱏尾如二䱵魚一、大腹喙小鋭、而長齒羅生、上下相銜ム、鼻在二額上一、能作レ聲、少肉多二膏胎一生健、啖二細魚一、大者丈餘、江中多有レ之。和産未詳

【形状】○大和本草曰、ムツ、長七八寸、頭目共ニ大ナリ、尾無岐。石首魚ニ似テ、黒筋ノ紋アリ

こち（三好亭御成記）【漢名】牛尾魚（臺灣府志）　鯒（和泉國風土記曰、大鳥郡吹井浦出魴鯒鱧等）【集註】三好義長亭御成記曰、献立次第、

【一名】鯆（文祿四年御成記曰、与ノ御膳、鯆一作鯆。御相伴、与ノ膳、こち一作鯆）五こち。十五献、こち、くらげ。惣衆へ、參献立、こちの汁。朝倉亭御成記曰、十七献、こち。又曰、そき物、こち鳴

サハラ（頓医抄）【漢名】馬鮫魚（閩書）【今名】サハラ【集註】華夷鳥獸考曰、馬鮫魚、形似鯆其膚似レ鯧而黒斑最繁、魚品之下。閩書曰、馬鮫魚。青斑色無レ鱗有レ齒、又名二章鮌一、連江謂二之ヲ章胡一。閩人方言、山ニ食二鷓鴣鹿章一ヲ、海ニ食フ二馬鮫鯧一、蓋兼テ美レ之

鰆（サハラ）（塵添壒囊鈔）　鯖（サハラ）（頓医抄曰、鯖（サハラ））【形状】○大和本草曰、魚大ナレモ、腹小ニ狹シ　○からすみ（祇園會御見物御成記）【漢名】

鱭子（餘姚縣志）【一名】太古之（倭名類聚鈔曰、鱅。唐韻云、鱅。魚名也。漢語抄云、鱅魚子、太古之。字典曰、鱅。博雅、魹也。即エブク也）　鱭子（文祿

四年御成記。和泉國風土記曰、日根郡貢鯔〇正字通曰、鯔俗字

集註

文祿四年御成記曰、御一獻、鯔子。御相伴。三ノ膳、からすみ。包丁聞書曰、向乃菜は、五種の削物、燒鳥、からすみ、數の子などを、鼈甲又は土器に高立して盛之。三好義長亭御成記曰、たこ、くらげ、たい、にし、からすみ、ゑび。十七獻、からすみ

古名錄魚部卷第五十四　終

古名錄魚部卷第五十五目錄

海魚類下

通計二十五種

雑魚類

比佐魚(ヒサヲ)　阿波我良(アハガラ)
奈波佐波(ナハサハ)　石首魚
加太(カタ)　鮇　鰒
泥魚　あふらき
都久良(ツクラ)　柳魚
阿散知(アサヂ)　鎚
鱓　鰮魚
蜛蝫

通計十五種

ナガナラ群本ガラハに作　鮫雲州本鮎とす

目　文明写本下學集

白眼　延喜式卷第三曰、白眼鴾毛馬一疋。萬葉集卷第二曰、名具鮫魚天云云○源平盛衰記卷第四十曰、五十有餘トオボシキ山伏ノ、雨々ト泣有。山家曰、雨中鶯。うぐひすの春さめ〴〵と鳴ゐたる竹の雫や涙なるらん。義經記曰、さめ〴〵となきければ。砂石集曰、サメ〴〵トウチ泣テ。又曰、オサナキ者兩三人ナラビ居テ、サメ〴〵トナキケレバ。埤雅曰、鮫珠在レ皮。名物攷曰、靈異記云、鮫人從レ水出寓二人家一、積ヲ賣レ綃將二去ト一、從二主人一索二一器一、泣而成レ珠滿レ盤、以與二主人一故曰泉客慷慨以泣レ珠。記事珠曰、鮫人之淚圓者成二明珠一、長者成二玉筯一。集事淵海曰、事文類聚、鮫人水底居也。俗傳從二水中一出、曾寄二寓人家一、積日賣レ綃、綃者竹孚俞也。鮫人臨レ去從二主人一索レ器ヲ泣而出レ珠、滿レ盤二以與二主人一、南海之外有二鮫人一、水居如レ魚不レ廢二絹績一、其人能泣レ珠。朗詠集曰、滴似二タリ鮫人泣一ヒ珠

佐女乃宇於　本草類編曰、鮫魚。和佐女乃宇於。於乎誤

ツサキ　延喜式鮎皮傍訓

鯳　四條流庖丁書曰、鯳ノ事。皮ヲムクベシ、皮ナガナラ不レ可レ参、子細也

集註　延喜式卷第五曰、齋宮、月料、云云鮫楚割各七斤八兩。同卷第十七曰、內匠寮。御太刀一口料、鮫皮一條、長六寸、廣三寸五分。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。但馬國、鮫皮一百五十斤。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、云云鮫臘各三十三斤五兩。肥後國。中男作物、鮫楚割。同卷第四十一曰、彈正臺。凡白玉腰帶、聽三位以上及四位參議著用、玳瑁馬腦斑犀象牙沙魚皮紫檀、五位已上通用。同卷第四十三曰、主膳監。月料、鮫楚割卅斤。吾妻鏡卷第十六曰、正治二年九月二日、乙卯、快晴、羽林令レ歷二覽小壺海邊一給云云次海上糴レ船、献二盃酒一、而朝夷名三郎義秀、有二水練之聞一、以二此次一可レ顯二其藝一之由、有二御

命ハ義秀不レ能ニ辞申ハ、則自レ船下、浮ニ海上ハ往還數十、結句入ニ波底ハ暫不レ見、諸人成レ惟之處、提ニ生鮫三喉ハ浮ニ上于御船之前ハ、満座莫レ不レ感、包丁聞書曰 盛合せぬ品々。鯉にさめのうは。沈盛と云は、鮫魚の干物を削て、土器に盛て出す也。沈香に似たる故名とす。

武家調味故實曰、さめといふは魚也。礒にあり

【今案】延喜民部式、交易ノ鮫皮ハ、和達ノ鮫皮也。内匠寮、御太刀ニ用ル鮫皮、弾正臺ニ載ル沙魚皮ハ、舶來ノ鮫皮也。今續舶來ノ鮫皮種多シ、占城チャンパ、狂猫カスタ、聖多點サントメ、太泥タニ、暹羅シャム、交趾カウチ、ジャガタラ アマガハ 唐口 礁閣 其外品類アリ。蠻來ノ鮫皮ハ、河豚ヲ剝ダル形狀ニメ、和達ト大ニ異也

○本草啓蒙曰、又若州ノ人言フ、ヲナゴザメハ油多ク味美ナリ、皮ニ白沙アリ、淡乾シテ毎年禁中ニ貢スト。乾鮫ヲ貢スルコト、延喜式ニ見タリ。按ニ、主計式ニ諸國輸調鮫三十三斤五兩ト出タリ

【再案】延喜式卷第二十三曰、民部下。交易雜物、因幡國、鮐皮八百廿五斤。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、鮐ヰ皮ハチ云云各二斤。但馬國。中男作物 鮐皮。因幡國、中男作物、鮐皮。伯耆國、中男作物、鮐皮。同卷第二十九曰、内膳司。供御月料。鮐皮二十一斤十二兩。同卷第四十三曰、主膳監。月料、鮐皮十五斤十一兩ト載ハサメノ皮也。字鏡、鮐。佐女ト云ヲ以テ可證。然レモ品字箋ニ鮐河豚グ別名ト云リ。柳河東集曰、鮐背鶴髮、註鮐魚名也。鮐背ハ謂ニ背ニ有ニ鮐文ハ。紫桃軒、又綴曰、老人鮐背有レ文如レ鮐也。正字通曰、釋名云、鮐背老人氣衰皮膚消瘠、背若ニ鮐文ニ也。行厨集曰、鮐即河豚、老人氣衰皮膚消瘠、背若ニ鮐魚ハ故曰ニ鮐背ト

【形狀】○本朝食鑑曰、鮫訓ニ佐米ハ形類レ鱶フカニ而無レ鱗、黒色者レ沙、鰭近レ頭者如レ翅ノ、近レ尾者不レ然 背上有ニ鬣刺ハ、青目赤頬味雖レ甘不レ美、今所レ採之大者不レ過ニ丈許ハ、皮上黒沙如ニ小砂ハ、剝レ皮曝乾治ニ骨角ハ措ニ

堅木ハ故工商爭蓄レ之、漁人亦貨レ之

和爾（ワニ）　出雲國風土記　〔漢名〕鰐魚　類腋　〔今名〕ワニ

柳河東集註曰、按惡溪在潮州府城東、一名鱷溪有鱷魚、身黃色四足修尾狀如鼉、擧止趫疾、口森鋸齒、往々爲人害。正字通曰、鱷頭似レ虎四足似レ鼉、長二丈餘、喙三尺、長尾利齒、以レ尾取レ物如二象用一レ鼻、大爲二民害一、一名魚虎、一名怪魚。感應經云、河有怪魚、乃名爲鱷、其身已朽、其齒三作。南州志、斬其首乾之去其齒、旬日間更生、如此者三乃死

〔一名〕**和邇**　古事記曰、故欺テ二海和迩一云云即伏ニル最端一和迩捕レ我云云又曰、一尋之和迩白ク云云即載テ二其和迩之頸一送出云、其和迩將レ返之時、解二所レ佩之紐小刀一著テ二其頸一而返、故其一尋和迩者於レ今謂二佐比持ノ神一也。又曰、化二八尋和邇一而匍匐委蛇（ハラバヒモコヨフ）

和仁　倭名類聚鈔曰、鰐。音蕚、和名和仁　似レ鼈有二四足一、喙長三尺、甚利齒、虎及大鹿渡レ水、鰐擊レ之皆中斷。新猿樂記曰、傍ラ行ニ鰐脚（ワニアシ）。新撰字鏡曰、鱷。和尓、鰐鱷同、五各反、和尓。言塵集曰、鰐。わに。江家次第卷第十九曰、臨時競馬事云云繪尻鞘左右鰐魚

年常（ネト）　肥前國風土記曰、佐嘉郡。一云、郡西有レ川名曰二佐嘉川一云云又此川上有二石神一、名曰二世田姬一、海神年常魚一謂二鰐一逆レ流潛上到二此神所一、海底小魚多相從之。或人畏二其魚一者無レ殃、或人捕食者有レ死。凡此魚径二一三月一還而入レ海。按二年常ハ、ネトト訓ヘシ。萬葉集第十四ニ彌年爾波比多流（ミネニハヒタル）。同卷第一曰、山常（ヤマト）ト云

熊鰐　釋日本紀曰、或一

書化ニ爲熊鰐ト、熊鰐引ニ合兩字ニ訓ㇾ鰐ワニト、如ニ熊字ノ者是表ニ產生之平安ニ歟

【集註】

日本書紀曰、八尋鰐、一尋鰐。釋日本紀曰、私記問云、八尋者、大鰐也。雖ㇾ爲ニ一日行ニ時可ㇾ致ニ海宮之處ニ、速疾之歟、猶劣ニ于一尋鰐ニ、如何。大仰云、雖ㇾ爲ニ一尋小鰐ニ、强力速疾者歟。出雲國風土記曰、飛鳥淨御原宮御宇天皇御代、甲戌七月十三日、語臣猪麻呂之女子、遙件埼。邂逅遇和爾所賊不切。爾時父猪麻呂所賊女子斂埋濱上。大發聲憤、號天踊地、行吟居嘆、晝夜辛苦無避斂所。作是之間經歷數日。然後興慷慨志、麻呂、箭鋭鋒撰便處居即擡訴云、天神千五百萬、地祇千五百萬、並當國靜坐、三百九十九社及海若等、大神之和魂者靜而、荒魂者、皆悉依給猪麻呂之所乞。良有神靈坐者、吾所傷助給。以此知神靈之所神者、爾時有須臾而、和爾百餘靜圍繞一和爾徐率依來從於居下、不進不退、猶圍繞耳。爾時擧鋒而刄中央一和爾殺捕、已訖然後百餘和爾解散。殺割者女子之一脛屠出、仍和爾者殺割而挂串立路之垂也。駿河國風土記曰、伊穗原郡美影出鰐魚。田子浦出食塩鰐魚海苔等

【今案】

物理小識曰、南海記曰、鰐生子百數。爲鰐者十二餘、或爲黿鼉鼈。盧舟子曰、鰐頭似虎能上岸行。殺鰐而懸其首、其齒自生。鰐畏黃蠟。取珠者蠟塗體。述異記曰、魚虎化鮫。隋叔曰、鯊魚化鰐。今紀州牟婁郡太地ノ民家、門戸ノ上ニ魚頭骨ヲ懸、形狀虎頭ノ如ク寸許、白色末尖、本濶キ齒上下ニ並ビ生リ。土人曰、先年此ヲ殺メ其頭ヲ懸ル也ト。方言コレヲワニト云、即イラギザメ也。然ドモ四足ナシ。正字通ニ所謂鰐魚喙三尺有ニ四足ハト云者ニ非ズ

布可フカ 倭名類聚鈔

【漢名】 海鯊 正字通

【今名】 フカ

天文写本和名鈔曰、鯗魚。辨色立成云、鯗魚。居媛切、和名布可。今按、未ㇾ詳。塵添壒囊抄曰、鱶(フカ)○䲔魚。本草ニ出、和産未詳。正字通曰、鯗俗鯗字、舊註同。鱶。字典曰、鯗乾魚腊也。類篇或作䲛。本草綱目曰、石首魚。乾者名鯗魚。品字箋鯗字、註曰、魚之乾者、曰鯗。鯗養也。言于人有所頤養也。羅願曰、諸魚乾者、皆爲鯗、而石首獨美。其色獨白故呼之爲白鯗云、又曰鱶鯗本字

【集註】 出雲國風土記曰、秋鹿郡。凡北海所在雜物、鮐・鯊・佐波・烏賊・鰓魚。三好義長亭御成記曰、十二獻御そい物、ふかのさしみ。朝倉亭御成記曰、ふか御汁鯛 ○本朝食鑑曰、布加。

【形狀】 狀頭平圓、嘴鋭シ、眼大、口在ニ頷下一、而濶大。有ニ齒牙一而堅利ナリ。背有ニ三骨甲一、尾有ㇾ岐、鰭亦硬。無ㇾ鱗皮厚、外面灰白色、如ニ鮫之沙一、小者肉潔白、味稍美

○シラガ　四條流庖丁書

【漢名】

鯊翅　行厨集

【今名】 フカノヒレ

行厨集曰、鯊翅曰䱜翅、䱜鯊魚別名、又曰鮫鬐。楊州畫舫錄曰、海魚割其翼曰魚翅

【集註】 四條流庖丁書曰、諸魚ノ鰭ヲ立ル事、フカノサシミノ時、鰭立ム事可ㇾ成。尤此ヒレノ名ヲバ、シラガトモ申。此外ノ魚ノ鰭立ル事、當流ニ不ㇾ可ㇾ有。殊ニ鱸ノヒレ立事不ㇾ可ㇾ有ㇾ之。當世本トメ此ヒレヲ立ル不ㇾ可ㇾ然。鯉鯽以下ノヒレ一向ニ不ㇾ可ㇾ立

加西魚(カセウラ)　新撰字鏡

【漢名】 雙髻鯊　閩書

【今名】 カセブカ

年ナシ 評木
る 同
ノ下が
アリ

閩書曰、鱧鬐魦。頭如ニ木楞ニ又名ニ鱧鬐魟ー

一名 加是佐波 字鏡曰、鱕。加是佐波、魶。奴盍反、加西魚○字典曰、鱕。南越志、鱕ッ魚鼻有ニ横骨ー如レ鐇、海船逢レ之必斷。鱕鋸鰔。註、鱕鰭。有ニ横骨在ニ鼻前ー如ニ斤斧形ー。未詳○納魚。本草綱目ニ鯢魚ノ一名トス、サンセウウヲ也。字典曰、漢書註、魶。鯢魚也。正字通、鰊鯷竝同。字典曰、鯷。博雅、鮎也。戰國策、註、鯷大鮎。ナマズ也。

平家物語巻第三曰、老僧のはくはつたるが、まゆには霜をたれ、ひたひになみをたゝみ、かせづえのふたまたなるにすがつて出來給へり。源平盛衰記巻第四十四曰、白帶ニテ頭ヲカラゲ、楠ノキモノニ中ユイテ、杤杖ナド突テ、十餘人別ニ並居タリ。乞者ノ類入法師共也。倭名鈔行旅具曰、横首杖、唐韻云、拄。他主反、與撻同。漢語抄云、鹿、加世都惠。一云、鹿杖横首杖也。なくさめ草曰、としのよわひ六十年にちかゝらんと見ゆるおきな容の、かみひげしろく、いたくからめきたる、こまのしろき衣に、きなるぼうしひき入て、すへ二またなるかせ杖にかゝりつゝ、庭のとうろうのもとにたちてふしおがむ有。平治物語曰、爰ニ齢七十許ナル入道ノ、楠ノ直垂ニ文書フクロ頸ニ掛タルガ、平アシダハキ鹿杖ツキ

加世佐波 倭名類聚鈔曰、鱕。音番。漢語抄云、加世佐波

形狀 ○大和本草曰、カセブカ、其首横ニヒロシ、甚大ナルアリ。又曰、カセブカ、其横縱ニ比スレバ少短シ、横ノ兩端ニ目アリ、其形狀婦女ノ布ノ經緯ヲ卷トコロノカセト云器ニ似タリ。本草啓蒙曰、雙髻魦撞木ノ形ノ如ク、横首杖ノ頭ニ似タリ

かいらき 雲井の花

漢名 錦魴皮 東西洋考

太ノ上ニ群本刀アリ
獺ノ上ニ群本貫アリ

【一名】梅花皮 花營三代記曰、中間以下翟、金銀梅花皮等、腰刀可停止事　鮫カイラキ 塵添壒囊抄。字典曰、鮫。魚名。正字通曰、鮫俗字　【集註】太平記第四十曰、丑刻計ニ將軍已ニ參內アリ云云先帶刀十人左右ニ相番テ曳列、左ハ佐々木佐渡四郎左衛門尉時秀、鮫カイラギノ金作ノ太刀ヲ帶ク。齋藤三郎左衛門尉淸永鮫ノ太刀ヲ佩タリ。次ニ大內修理亮打チ鮫ニ金作ノ太刀ヲ帶ク。按ニ、雲井の花曰、丑刻ばかりに將軍參ぜらる云云まづ帶刀十人左右に行列云々佐々木佐渡二郎左衛門尉云々かいらぎの金作の太刀、齋藤三郎左衛門尉云々かいらぎ作の太刀、大內修理亮云々かいらぎづく打鮫りの太刀、大內七郎云々かいらぎ作の大刀、ト見ユ。此鮫ノ字ヲ、カイラギトスル證也。相國寺供養記曰、武田伊豆守源信在　梅花皮刀。小笠原兵庫助源長秀、梅花皮。左兵衛佐源俊氏、太刀梅花皮。土佐守高階師英、獺猢、刀太刀、梅花皮

【形狀】○雍州府志曰、又粒間交ニル花點狀ヲ者、謂ニ梅花鮫カヒラキト

布久フグ 本草和名　【漢名】河豚 本草　【今名】フグ

正字通曰、河鈍狀如ニ科斗ノ、大者尺餘、無レ鱗腮　背青白有ニ黃縷ノ、目能開闔、觸レ物即嗔腹脹如ニ氣毬ノ浮起、獺及大魚皆不ニ敢近ノ。輟耕錄曰、河豚魚類也、無鱗頰常怒氣滿レ腹、形殊不レ雅、然トモ味極佳ナリ。天文写本和名鈔曰、痮。玉篇云、脹音帳、字亦作レ痮、波良不久流 腹滿也。據レ此則布久ハ腹滿之義也。正字通、脹字註曰、知亮切、音帳、腹大也。又膨脹別作痮、義同。通雅曰、臚脹謂ニ腹鼓脹ノ也。說文曰、匏大腹瓠也。瓠ヲフクベト云モ、皆腹滿之

義也。精進魚類物語曰、腹のふとき事、ふくのごとし。雲溪友議曰、平曾貢ニ鯸鮧ヲ賦ニ言ク、此ノ魚觸ニ物而怒、鰓ハ身ヲ上リ波ニ、爲ニ鷗鳶ニ所レ獲。雨航雜錄曰、黃駒即鯸魚、俗所謂河豚也。一名鯸、一名嗔、一名鮠、一名鵰夷、一名鯸鮐。本草綱目作ニ鯸鮧一

【一名】布久閉 倭名類聚鈔曰、鯸鮐。和名布久、一云布久閉。本草和名曰、鯸。和名布久。 鮎 倭名鈔國郡部曰、武藏國久良郡鮎浦、布久良。爾雅註曰、江東通呼レ鮎爲レ鮧。ナマズ也

【集註】大草家料理書曰、ふく汁料理は差合有ル故取捨仕ル也。但しきみの木、又は古屋の煤堅嫌べし

【形狀】○大和本草曰、河豚冬月春初味美シトテ衆人多ク食フ。三月以後魚ヤセテ味アシ、

古都乎（コツヲ） 倭名類聚鈔

【漢名】鹿角魚 閩書

【今名】ハゲ

閩書曰、鹿角魚。海物異名記、苦角持戳在レ鼻、大者長五六寸許、其皮可ニ以テ角ヲ錯一ス

【一名】許都魚 延喜式 乞魚 同上。倭名類聚鈔曰、鮀魚。玉篇云、鮀居迄反、漢語抄云、古都乎。本朝式用乞魚字。〇正字通曰、鮀俗字。舊註音吉、斷魚、一曰魚游並非

木津魚 續日本紀 木津雄 類聚國史。按、續日本紀卷第三十七云、桓武天皇延曆二年春正月丁酉、紀朝臣木津魚、吉弥侯横刀等八人、夙夜在レ公、勤恪匪レ懈、於レ是有レ詔、並進ニ其爵ヲ授ニ從五位下紀朝臣木津魚從五位上ヲ。トミエテ、類聚國史ニ、賜ニ故右兵衞督從四位上紀朝臣木津雄ニ二一ヲ。トミユレバ、木津魚ハ古都乎

タル徵也〕木ヲ古ト云ル證、倭名鈔國郡部ニ、近江國高嶋郡木津、古津。日本書紀ニ葉木國、此云ニ播舉矩爾ト。釋日本紀述義ニ、山城國宇治郡許波多神社二座者、勘ニ風土記ヲ曰、宇治郡木幡社云云。源氏物語あげまき曰、こはたの山にむまはいかゞ侍べき。同浮舟曰、こはたやまはいとおそろしかなる山ぞかし云々、こはたの里に馬はあれど云々。仙覺萬葉集註釋卷第十曰、木といひ、こといふ、おなじき也

集註

延喜式卷第五曰、齋宮。月料、乞魚皮十五斤。同卷第二十四曰、主計上。中男一人輸作物。許都魚皮云云各二斤。山陽道。備前國、中男作物、許都魚皮。備中國、中男作物、許都魚皮。備後國、中男作物、許都魚皮。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、乞魚皮二十斤十三兩。同卷第四十三曰、主膳監。月料、乞魚皮十四斤一兩

今案

許都魚皮ハ鹿角魚皮也。ハゲハ今コツト呼処アリ。播州姫路ニテ、ゴハゲト云、筑前筵ノ濱、淡州都志浦ニテ、コウムキト云、紀州海士郡賀太浦ニテ、コウベハゲト云。尤品類多シ。今名ニヨリ、其品類ヲ分ツ、然レドモ此ニ出スコツ、ゴハゲ、コウムキ、コウベハゲノ四名、共ニ沖ハゲトテ、頭長ク圓キヲ云、今モ諸ノハゲ凡テ皮ヲ剝テ骨角木竹ヲ錯ニ用ユ



久知良 倭名類聚鈔　漢名 海鰌 閩書　今名 クヂラ

赤城志曰、海鰍形長十餘丈、皮黑如レ牛、揚レ鬐噴レ水ヲ至ニ半空ニ一、皆成ニ烟霧ヲ一。正字通、鰍俗鰌字

一名 久治良 古事記曰、久治良佐夜流云云　區旎羅 日本書紀

神武天皇曰、乃チ爲ニ御謠ヲ一之曰云云區旎羅佐夜離云云。釋日本紀曰、區旎羅、鯨也。本草和名曰、鯨。一名鯢、一名海鰌。和名久知良。倭名鈔曰、鯨鯢。唐韻云、大魚、雄曰レ鯨、雌曰レ鯢。淮南子曰、鯨鯢、魚之王也。和名久知良。柳河東集注曰、鯨海中大魚也。其大横海。呑舟穴處海底。出穴則水溢謂之鯨潮

海純魚 延壽類要古寫本曰、海純魚無毒、主ニ飛尸蠱毒瘴癘一、作レ脯食レ之

伊佐魚 萬葉集卷

はノ下「勇これいさな也」ナリ一

第十七日、伊佐魚取、比治奇乃奈太乎云云

不知魚

萬葉集巻第六曰、不知魚取、海片就キ而云云。同巻第十三曰、不知魚取、海ミ道荷出而云云。不知魚取、海之濱邊爾云云。鯨名取、海路丹出而云云。同巻第二曰、鯨魚取、海邊乎指而云云。鯨魚取、淡海乃海乎、奥放而云云。鯨魚取、海乎恐ミ云云。同巻第六曰、鯨魚取、濱邊乎淸三云云。同巻第十六曰、鯨魚取、海哉死爲流云云

勇魚

萬葉集巻第二曰、石見之海云云潟者雖無、勇魚取、海邊乎指而云云。同巻第三曰、越海之、角鹿乃濱從、大舟爾、眞梶貫下、勇魚取、海路爾出而云云。仙覺萬葉集註釋巻第二曰、鯨魚取、海辺乎指而、和多豆乃、此句、古點には、くぢらとる、あまべをさして、わたつみのと點す。そのころさらにあひかなはず。今按に、いさなとり、うみべをさして、にきたづの、と和すべし。いさなとり、といふは、捕魚之詞也。いさりと云がごとし。もしこれを、くぢらとるといはゞ鯨鯢は海中の大魚也。いかでか海人、たやすくこれをとるべきや。しかのみならず、近江天皇大殯之時、太后御詠云、鯨魚取、淡海の海乎云ゝ、近江の海に、いかでか鯨魚あるべきや。はかりしりぬ、假字なりと云ことを、いさなとりの詞、この集の中に十二ケ所ある也。假字、義讀、眞名、假名等をもちひたること、一様ならず。そのうちに、鯨魚取五所、鯨名取一所、勇魚取二所、不知魚取三所、伊佐魚取一所、合十二所也。彼鯨魚取、勇魚、不知魚取等、みなおなじく。これをくぢらとると和す。皆是あひかなはず。いづれもおなじくいさなとゝ也。その故は、勇字、これをいさと訓ず。姓の中に勇山、これを伊さやまと云がごとし。魚者是奈也云ゝ。鯨魚、これをいさなと和する事は、鯨魚者、洋中之大魚、其氣力最勇健也。しかれば、これをいさと和す、半義讀也。詞林采葉抄曰、鯨魚取、此訓クヂラトル、イサナトリ、兩

本勇魚トアリ

説アリ。釋日本紀曰、異舍雛等利。謂鯨取也。師說曰、古語異舍者鯨也、雛者魚也、等利者取也。言漁ニ取鯨魚ー鯨大魚也。倭名抄國郡部曰、越後國蒲原郡勇禮小久

集註 日本書紀實達天皇曰、海裏鯨魚大有レ進。隨ニ船與ニ樴櫂ー。難波等恐ニ魚吞レ船、不レ得レ入レ海。天皇聞之、識ニ其詭語ー。仙覺萬葉集註釋卷第二曰、壹岐國風土記云、鯨伏在ニ郡西ー。昔者鮨鰐追レ鯨走來隱伏、故云ニ鯨伏ー、鰐並鯨並化爲レ石、杳去一里、俗云爲ニ伊佐ー。常陸國風土記曰、行方郡。南有ニ鯨岡ー、上古之時、海鯨匍匐、而來所レ臥。三好亭御成記曰、獻立次第。かい、あはび、くじら、十四獻、まきするめ、くじら。朝倉亭御成記曰、御引物鯨。御隨身三上記曰、永正九年二月廿九日、鯨を可レ被レ下のよし、式部少輔殿より書狀如レ此。夜前者申來候、本國者候、仍鯨藥上候云々。四月廿九日、李部より書狀にて、鯨可レ被レ下由在レ之、忝由申候。卅日、李部を以、昨日の鯨の御禮、忝よし申上候。室町殿日記曰、肴物之覺、鯨一桶、右差登せ申候、御請取可レ被レ成候。文祿四年御成記曰、七ノ御膳、鯨汁

形狀 回國雜記曰、あふみ川、かさ嶋などうち過て、くぢらなみといへる濱を行けるに、折ふし鯨のしほをふきけるを見て○大和本草曰、日本ニテ海鰌其品六種アリ、其內大小アリ

○女久地良 新撰字鏡

漢名 鯢 唐韻

字鏡曰、鯢。土稽反、平女久地良。鐙。女久地良○古今註曰、鯨魚、其雌曰鯢○本草ノ鯢魚ハサンセウ魚也。本草綱目、鯢魚注云、鯢與ニ海中鯨ー同名異物

附方 小兒アカクサノ治方 頓医抄曰、アカクサニハ、鯨鯢ノ油ヲ、アカクサニヌルベシ、早藥ナリ、又可レ服

伊留加(イルカ) 新撰字鏡

〔漢名〕**海豚魚** 本草

〔今名〕**イルカ**

本草綱目曰、海豚、其形大如ニ數百斤猪ノ、形色靑黑如ニ鮎(ナマズ)魚ノ、有ニ兩乳ノ、有ニ雌雄ノ、類レ人、數百枚同行、一浮一沒、謂ニ之ヲ拜風ト、骨硬其肉肥不レ中レ食、其膏最多

〔一名〕**伊流可** 倭名鈔。

字鏡曰、鯆。伊留加〇鮪。和産未詳、

入鹿魚 古事記曰、毀(カキハナノ)鼻入鹿魚既ニ依ニ一ノ浦ニ云　云亦其入鹿魚之鼻血臭(クサシ)、故号ニ其浦ニ謂ニ血浦ト、今謂ニ都奴賀ト也

延壽類要曰、鱄(イルカ)〇鱄。和産未詳

海鹿 源平盛衰記卷第四十一曰、備前ノ内海ニテ、海鹿ト云魚ニ、馬ヲ誤タレタリケレ共、馬少モヒルマズシテ、佐介ヲ陸地ニ著テ、後馬ハ死ニケリ。同卷第四十三曰、此(コヽ)ニ海鹿(イルカ)ト云大魚二三百モアルヤラン、鹽フキ立テ食テ來ル、安倍ノ晴延ト云小博士ヲ召テ、イカナルゾト尋給フ、晴延占(ウラノ)文披ヒテ、此海鹿食返(クヒカヘシ)ハ源氏有疑、食通レハ御方ニ無憑ト申ケルニ、此魚一モ不食返、平家ノ船ノ下タヲツイクヾリ、ツイクヽリ食テ過ヌ。

鯑(イルカ) 塵添壒囊鈔、鯑鯑誤。字典曰、鯑。本草江豚別名。事物異名錄曰、大抵海豚江豚、因レ所レ處而分ツ、其實ハ一物也。三代實錄第二十三曰、貞觀十五年、夏四月廿一日、勅曰、未レ孚(マコト)ニ於豚魚ニ

尺素往來曰、海鹿(イルカ)

〔集註〕出雲國風土記曰、嶋根郡南入海所在入鹿和爾。平家物語卷第十一曰、又おきよりいるかといふうほ一二千はふて、平家の舟のかたへぞむかひける。大臣殿、小はかせはれのぶをめして、いるかは常(つね)におほけれ共、いまだかやうの事なし。きつとかんがへ申せ、と宣へば、此いるか、はみかへりりゆはゞ、源氏ほろびゆなんず。はみとをりりゆはゞ、みかたの御いくさあやうふおぼえゆ、と申もはてぬに、平家の舟の

したを、すぐにはふてぞとをりける。三好義長亭御成記曰、九献、ゑびいるか。包丁聞書曰、合せぬ品々鮭ニいるか

形状 ○大和本草曰、海豚長一間バカリ、色クロク、海鰌ノ如シ。背ハサヨリノ如ク、上下トモニ長クトガレリ。形マルシ。皮アツク、油多シ。漁人煎シテ油ヲトル。形豚ノ如シ、ヒレアリ、足ニ似タリ、尾ニ岐アリ、肉ハ赤クシテクジラノ赤肉ノ如シ。肉ニハ油多カラズ、味モクジラニ似タリ。鱗ナシ。シビヨリ形チイサシ。毒ナシ。赤水長崎行役日記曰、明和三年十月十一日、園木にて晝飯す。是より時津へ舟行七里、舟を雇ふ。六反帆にて、水主五人之。此處は海口より大村まで十里余の入海、迫門は僅に二丁斗にて、嶋原の早崎、阿波の鳴門ともに日本三所の迫門之とぞ。折節海豚魚をどりはねて面白し。長さ一間斗、色黒く海鰌のごとし

海豚圖



波無(ハム) 倭名類聚鈔　[漢名] **海鰻鱺** 本草綱目　[今名] **ハモ**

證類本草曰、鰻鱺魚、出海中者名海鰻、相類而大

[一名] **波牟**

本草和名曰、鱧魚。和名波牟。倭名鈔曰、鱧(ハム)。本草云、鱧魚。和名波無。尺素往來曰、鱧。塵添壒囊鈔曰、鱧(ハム)○鱧魚、和産未詳。本草啓蒙曰、鱒魚。古渡、風乾者長サ一尺許、烏魚(ボラ)ニ似リ、頭狗母魚(エソ)ノ頭ニ似テ長ク、口大ニシテ細齒多ク、目ノ上七ツノ小孔多シ、身狗母魚ヨリ短ク、鱗ナシ狗母魚ノ如ク脈條多シ、背ニ黑斑アリ、尾ハ圓ニシテ岐ナラズ

波无　本草類編曰、鱶魚。和波无。新撰字鏡曰、䱡。波无

なかいおなま　伊勢守貞陸記曰、女房ことば、はも、なかいおなま○新撰字鏡曰、喙。丁角反、食也。歠也。口也。久不、又波牟。㖡喫嚙嚙四形同、五結反、噬也。咬也。久良不。又波牟。喰。七移市移二反、受飲食也。波牟○庖丁聞書曰、こん切といふは、干鱧の事也。和交削物にも用

[集註] 日向國風土記曰、宮崎郡三浦郷出云云鱧。和泉國風土記曰、大鳥郡高師濱出鱣鱧等。吹井浦出鱧。御散飯調進次第曰、はむ十ほん。文祿四年御成記曰、御五鱧、二ノ御膳山桝鱧、御相伴五ノ膳小鱧。娶入記曰、きやうのぜん云々そきはむ。祇園會御成記曰、献立はむ

[形狀] ○本草啓蒙曰、海鰻鱺。形ハ鰻鱺ニ似テ大ナリ。觜尖長クシテ齒多シ

阿五 御散飯調進次第　[漢名] **華臍魚** 寧波府志　[今名] **アンゴ**

寧波府志曰、華臍魚、一名老婆魚、一名綬魚。蓋其腹背有レ帶如ニ帔子一生附ニ其上一、故名ニ綬魚一、其形如ニ科斗一、而大者如レ盤、又名ニ琵琶魚一。吳都賦注云、琵琶魚、無鱗而形似ニ琵琶一、冬ノ初出者俗多重レ之、至レ春則味降矣

一名 おむかう 精進魚類物語

集註 御料飯調進次第曰、中程なるいか三、あち三、小たい二ッ、はむ十ほん、此うちのうほたりけはねば、ゑそ、とびうほ、阿五などのやうなる物參、とびうを、あ五は五まいばかり參之

形状 〇本朝食鑑曰、鮟鱇。其狀平團ニシテ如レ盤、肉厚肚大、背黑腹白、眼鼻向レ上、口濶大而鬣鬐短弱、骨亦極軟、尾無レ岐而長、斯魚皮肉鬐骨腸臟皆可レ食、腸臟色黄、味亦最美。煮ハ膽則色赤黄、惟胃與レ頭不レ食。大和本草曰、國俗鮟鱇ト稱ス未レ見ニ出處一

衣比（エビ） 本草和名

漢名 鰕 正字通

今名 エビ

正字通曰、鰕。水蟲可レ食、溪澤江海皆有レ之、㶷須鉞鼻背ニ有ニ斷節一、尾有ニ硬鱗一、多足好躍、腸屬レ頭、子在ニ腹外一、其長者二三尺、須長數尺者曰龍鰕。山堂肆考曰、鰕多鬚善游好躍。本草綱目曰、鰕ハ音霞。俗作レ蝦。入レ湯則紅色如レ霞也〇宇津保物語曰、ちいさき子の、深き雪を分て、足手ゑびのやうにて、はしりくるを見るに

一名 蛉 延喜式卷第一曰、供ニ神今食一料。蛉鰭槽（ハタフネ）二隻。同卷第一曰、供ニ新嘗一料。蛉鰭槽二隻。同卷第五曰、齋宮。供ニ新嘗一料。蝦鰭槽二隻。供ニ新嘗一料云云供料蝦鰭槽（エビハツフネ）二口。同卷第三十一曰、宮內省。供ニ奉スル神事ニ諸司行列。次主水司水取連（モンドリ）一人。執ニ蝦鰭槽一。代始和抄曰、エビノハタフ子ト

云ハ御手洗ノ名之〇字典曰、蛉。其淹切、音鈐。蝦鰕䱊也。品字箋曰、蛉。蟹之二螯也。正字通曰、鯰同魿。海南有蝦子鯰、亦出物理小識舊註訓同魿。又魿字註曰、說文、鰲也。一曰、大魚爲レ鰲小魚爲レ魿。又鰲字註曰、鰲本字。魚醢レ之大臠者。說文、藏魚也。南方謂ニ之魿一、北方謂ニ之鰲一〇本草和名曰、鰕。和名衣比。麗添壒囊抄曰、鰕ヱビ

蝦エビ　新猿樂記曰、大領之腰支蝦漉コシハセヒスキ〇正字通曰、蝦。仲良切、音長。蝦鱦、虲蝑別名、見廣韻。即ゲジゞ也

䗁　三河國風土記　かゞみ物　伊勢守貞陸記曰、女房ことば、ゑひ、かがみ物。釋日本紀曰、假令謂テレ拜ヲ爲ニ乎加無一等之類、皆是可レ有ニ所由一也。言ロハ是乎禮加加无也。是可下折ニ屈身躰一而臭聞上也

〇海老　倭名類聚鈔　漢名　蝦魁　閩書　今名　イセヱビ　閩書曰、蝦。其大ナル者ヲ名ニ蝦魁一。嶺表錄異曰、前ノ兩脚大如シ人指ノ、長尺餘、上有テ芒ニ刺一、銛硬ニシテ手不レ可レ觸、腦殼微シ有レ錯、身弯環亦長尺餘、熟レ之紅色、一名蝦杯、一名龍蝦、宋志大者有ニ五色一。閩部疏曰、龍蝦遺ニ蹤中一、猶蠕動ス、長可ニ二尺一、其鬚四淹、長ニ半スス其身ニ、目睛凸出レ上隱テ起ニ角ノ、負レ介昂藏體似ニ小龍ニ尾後吐ニ紅子ニ色奪ニ榴花一ヲ

一名　大海老　類聚雜要抄。證類本草、蝦註、海中有ニ大者一、已出ニ拾遺條中一。續詞花集曰、人のおほゑびを尋たるに、なきほどにて、あるまゝに十九やるとて、大中臣能宣朝臣。世の人はうみのおきなといふめれどまだはたちにもたらずぞ有ける。倭名鈔曰、鰕。和名衣比。俗ニ用ニ海老二字一。江家次第十五曰、大嘗會云云水取連一人執ニ海老鰭槽ヲ次レ之云云。次八姫之中ニ人相分共舁ニ海老鰭槽一置ニ御前短帖一〇仙覺萬葉集注釋卷第二曰、私勘莊子七庚桑段云云云、元英註云、鯢四足之虫也云云、私云、海老鰕、海中ノ貝ノ類皆虫也。エ

ビハ魚ニアラズ、故ニ虫ト註スル歟。按ニ、鯢卽サンセウ魚也。本草綱目曰、鯢魚、大ナル者ヲ名レ鰕ト。爾雅云大者曰レ鰕異物志云有ニ魚之形一以レ足ヲ行フ如レ鰕ノ故ニ名ヅク鰕ト。海道記曰、海老はなみにおよぎ、愚老は汀にたゞよふ、ともに老て腰かゞまる。汝はしるや、生涯うかべるいのち、今いくほどと我はしらず。幻中の一瞬の身

集註

延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物。海老一升。出雲國風土記曰、秋鹿郡南入海、春則有鯔鰕。和泉國風土記曰、大鳥郡高渚鄕出鰕鰏。茅渟海出鰕鰏。吹井浦出鰕鰏。宣胤卿記曰、長享三年正月七日、甚春朝臣自リ伊勢又七貞俊許へ鯛一獻海老卄送之。卄日、息女歸棚一荷南種鯉二海老卄令持之。永正三年正月五日、頭辨狀到來云々將又海老數卄雖輕微折節見來之間推進候、比與之心事期參入言上存候。安東郡專當沙汰文曰、肴一種編魚一連若ハ海老二三具。類聚雜要曰、內大臣殿廂大饗、大海老乍丸引渡盛之。大草相傳之聞書曰、ゑびのこさうづみの事。足がしらのたてやう、ゑびのごとく盛たる、身の高さ三寸たるべし。上にゑびのこうをおひ、かやにて中をゆひ、花をさし用べし。ゑびの舟つみかい敗の事。藻を足の下にしき用る也。盛樣の事。魚頭の方にもるは、ゑびをくるま切にきりてまろく三寸、又は四寸にもる也。又ゑびのこうの上にもるは、長さ一寸に切、うすくたてにきりて、十二きれ用る也。惣じて海老のふなづみ、又こさうづみに別の色をもる事わろく候か。別の色は、にもなきものたゞしるによるべし。ゑびのこさうづみは、多はいたすまじく候。ふなづみをいたすべし。包丁聞書曰、海老に、舟盛ひけ盛、廻り盛と云、口傳有。つれ〲曰、一獻にうちあはび、二獻にゑび、三獻にかいもちゐにてやみぬ。文祿四年御成記曰、御能之時、樂屋二ノ膳、海老。婜入記曰、きやうのせんふなもりゑびなり

形狀

泰盤ノ傍註ハ原本ニハナシ　泥ノ上ニ白蝦ヲ脱セリ

砂石集卷第五曰、又東ニテ連歌シケルニ、アレ句ニ饌(ゼゼ)所ノ雜仕(ザウシ)モ赤裳(アカモ)ヲゾキル。ト云句ニ、大海老(オホエビ)ノカラムキヲケル中ニキテ。是ヲ感メトゞメテケリ〇本朝食鑑曰、伊勢鰕、鎌倉蝦者、海鰕之大也。眼紫黑ニメ而前有ニ黃處ニ突出ノ如ニ珫子ニ、口ニ有ニ四鬚ニ、其ノ兩鬚長ノ過ニク一二尺ニ、其ノ兩鬚如ニ長針ニ、根似ニテ針柄ニ而有ニ硬刺ニ、殼如ニ鋸沙ニ而尖リ、手足有ニ節如ニ蘆筍ニ、掌指如シレ毛ノ、肉上之殼有レ節、是近尾硬甲也。尾端如ニメ花萼ニ、倶紫色、煮トキハ則變スレ紅ニ。本朝自レ古稱ニ海老ニ、以テ爲ニ賀壽饗燕之嘉殽ニ也。正月元日、門戸立テ松竹ニ、上懸ニ煮紅ノ海老及ヒ柚柿之類ヲ、又蓬萊(泰盤)盤中盛ルニ煮紅海老ニ是亦祝壽之義也

〇小海老　安東郡沙汰文

[集註] 安東郡專當沙汰文曰、無ニ干魚ニ之時者小海老四五具用之

[漢名] 斑節蝦　閩書

[今名] クルマエビ

閩書曰、蝦有ニ赤蝦、黃蝦、沙蝦、水港蝦、斑節蝦、泥蝦、梅蝦、狗蝦、蘆蝦ニ

[形狀] 〇本朝食鑑曰、今有ニ車蝦ト云者ニ、大不レ過ニ六七寸ニ、殼厚而白。或有ニ斑節ナル者ニ、倶煮レ之則色變純紅也。環曲如ニ車輪ニ、故名。武江及相豆房總皆多。按殼厚而白ト云ハ、クルマエビノ一種、シラサエト呼モノ也。川エビニモ同名アリ

〇小蝦　新撰字鏡

[今名] カハエビ

證類本草曰、蝦謹。按小者生ス水田及溝渠中ニ〇新撰字鏡曰、蛹、衣比。鰕。豐粉反、小蝦衣比。爾雅曰、鰝鰕註、鰝魚、一名鰕〇蛹蟲ハアブラムシ也。漳州府志ニ出

[集註] 攝津國風土記曰、有馬郡貴鯉鮒鮎鯰。三河國風土記曰、八名郡服部川出ニ鮎鯰怪石等ニ

[形狀] 〇漳州府志曰、鰕ニ有ニ數種ニ、淀川之所ロレ產スル、其ノ形小ニメ而其ノ鬚至テ長シ、湯ニテ煮一沸スレハ則其ノ色如シレ朱ノ、兩脚屈蟠ノ如ニシ老翁之倚ルカ杖ニ、

土人稱ニ杖衝鰕ツヱツキエビ一。本朝食鑑曰、河湖川溪之鰕者、不レ過ニ一二三寸一、兩手長肥、稱ニ手長鰕一、其餘細小不レ過ニ一二寸一、味極甘美

【今案】鰕ハ河海ノエビノ總名也。本草綱目ニ、鰕ト出ルハ河エビヲ說テ、海蝦ハ別ニ本條ヲ出セリ。日本古書ニ蝦ト出ル者、多クハ海蝦ニテ伊勢エビ也

阿美アミ　倭名類聚鈔

【漢名】苗蝦　閩書

閩書曰、其絕小者名ニ苗蝦一、海物異名記ニ謂ニ之ヲ鬚蝦一、細ニシテ如ニ針芒一、聚ルヿ若ニ淖泥一、可ニ鹽而醬トレス之。漳州府志曰、海濱人醢以爲レス醬、淡紅色

【今名】アミ

【一名】阿彌　新撰字鏡曰、鰿。阿弥〇字典曰、鰯。魚子。倭名鈔曰、海糠魚。阿美。今按所出並未詳

【集註】新猿樂記曰、備前海糠。山家集曰、備前國に小島と申嶋にわたりたりけるに、あみと申物をとる所は、をの〳〵われ〳〵しめて、ながきさほに、ふくろをつけて、たてわたすなり。そのさほのたてはじめをば、一のさほとぞ名付たる。なかにとしたかきあま人のたて初るなり。たつるとて申なることばきゝ侍しこそ、なみだこぼれて申ばかりなく覺てよみける「たて初るあみとる浦の初さほはつみの中にもすぐれたる哉

【形狀】〇大和本草曰、苗蝦アミ。今按ニ、一寸許アル小エビナリ。此マヽニテ大ナラズ。備前、筑後ナドノ泥海ニ多シ。海邊ノ潮ノ入溝河ニアリ。按ニ、形狀蝦ニ似テ、頭扁ク、身淡黃色ニシテ、細黑砂點アリ、大者寸ニ過ズ

江比（エヒ）醫心方　**漢名**　海鷂魚 本草　**今名**　エイ

證類本草曰、海鷂魚。似レ鷂有ニ肉翅一能飛

一名　衣比 新撰字鏡○倭名類聚鈔曰、鱝魚。文字集略云、鱝音尋、一音淫、和名衣比 似レ鱣而靑、長鼻骨ナル者也○鱏。和名未詳

古米

倭名類聚鈔曰、詔陽魚。和名古米。貌似レ鱉無レ甲、口在ニ腹下一者也。本草、邵陽魚ハ、海鷂魚ノ一名也。按、本草和名曰、鱝魚甲、和名古女、一名衣比ト觀ユレバ、古女、衣比一物タル證トスペシ○鱝ウツボ也。爾雅翼曰、鱝似レ蛇無鱗體有ニ涎沫一

集註　四條流包丁書曰、エイノ事、皮ヲムキテ作ベシ。努々皮ナガラ參ラルヿ不レ可レ有。爲レ人ノニハ藥ニ非ト云 云惣而エイヲ人ノ參コト、サノミ久敷事ニ非。昔ハ人恐テ不レ喰也。其後ヨリ賞翫アリト申傳ヘタリ。然間エイヲバ、白水ニ作リ入テ毒ヲトルベシ。扨取上テ能シボリ搾テ可レ參、如レ此旨ニ搾候、喰ヌレバ、腹中ヲ調无上ナル藥ト申傳タリ。祇園會御成記曰、獻立三云ヽ御しるゑい、八こむ、はむ。ゑい。朝倉亭御成記曰、十六獻、からすみ、ゑい。十七獻、あゆのすし、こちゑい

形狀　字鏡曰、鰈。葉之反、編平魚、衣比○大和本草曰、海鷂魚、其尾ニ毒アリ、人ヲサセバ大ニ痛ミ腫テ死ス

伊加（イカ）倭名類聚鈔　**漢名**　烏賊魚 本草　**今名**　イカ

> 位ノ下「五兩」脫カ

證類本草曰、烏賊魚。其形一如ニ算袋ニ、兩帶極長、墨猶在レ腹也

[一名] 以加 本草和名曰、烏賊魚。和名以加。倭名鈔曰、烏賊。今按、烏賊並從レ魚作ニ鰞鰂ニ、鰂亦作レ鯽、見ニ玉篇ニ。和名伊加。新撰字鏡曰、鰞。哀都反、鱡。伊加。鰒。薄角反、伊加。鰷。伊加〇鰒ハアハビ也

いもじ 伊勢守貞陸記曰、女房ことば。いか、いもじ

[集註] 賦役令曰、若輸雜物諸烏賊三十斤。延喜式卷第一曰、不レ與ニ幣案上ニ祈年神四百卅三座云云、社三百七十五所云云、一人鰒二兩、五位又加烏賊云云各一兩。春日神四座祭。祭神料。烏賊云云各六斤。平岡神四座祭。祭神料。烏賊云云各四斤。解除料。烏賊云云各四斤。大忌祭一座。云云烏賊各八斤。風神祭二座。云云烏賊各七斤。同卷第三曰、鎭ニ御在所ニ祭。烏賊十八斤。同卷第五曰、齋宮。月料。烏賊云云各七斤八兩。正月三節料。烏賊云云各三斤。供ニ新嘗ニ料。烏賊云云各十兩。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡供ニ神御ニ雜物諸云云烏賊筥十二合、別納六斤。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。若狹國、烏賊三百斤。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調。烏賊十斤。凡中男一人輸作物。烏賊云云各二斤。若狹國、調、烏賊。丹後國、中男作物、烏賊。出雲國、調、烏賊二十斤。隱岐國、調、烏賊。筑前國、中男作物、烏賊。豐前國、調、烏賊、中男作物、烏賊。同卷第三十二曰、大膳上。六月神今食、云云五位已上一人、云云烏賊各一兩。大直神一座。座別烏賊三兩一分。大直神加ニ三兩二分ニ。雜給料。參議已上。人別烏賊二兩。五位已上三十人。別烏賊二兩。新嘗祭。小齋給食云云五位已上一人、烏賊十二兩。同小齋解齋給食云云、五位已上一人、烏賊十二兩。同會皇后宮小齋人、云云五位一人、烏賊十二兩。同宮神態直相給食云云、五位一人、烏賊一斤八兩。宴會雜給。親王以下三位已

銀ノ下「味甚淡美」トアリ略セルカ

上幷四位參議。人別烏賊一兩一分。四位五位幷命婦。人別烏賊云云各一兩。園韓神祭雜給料云云、烏賊各十六斤。平野夏祭雜給料、烏賊三十四斤二兩。多加ニ二十四斤一。春日祭雜給料、烏賊二十七斤。松尾祭雜給料、云云烏賊十六斤五兩。釋奠祭別供料、云云烏賊各四斤。同祭雜給料、云云烏賊、五位二人別二兩。同卷第三十三曰、大膳下。九月九日節文人料、五位一人烏賊(イカ)云云各一兩。侍從三十人、三位已上四位參議、烏賊一兩。妃。烏賊云云各七斤八兩、日四兩。夫人、烏賊云云各六斤、日三兩二分。勘解由使百度料、云云烏賊二兩。同卷第三十九曰、內膳司。新嘗祭供御料、烏賊十兩二分四銖。五月五日節、烏賊一斤五兩。七月七日節、烏賊云云各一斤五兩。九月九日節、烏賊一斤五兩。供御月料、云云烏賊各二十三斤四兩。同卷第四十三曰、主膳監。月料、云云烏賊各廿二斤八兩。日向國風土記曰、宮崎郡三浦鄕出烏賊。台記別記曰、長承四年二月八日、大納言殿令レ任ニ右大將一給御饗束儀云云次羹ニ汁雜羹一加ニ烏賊生蚫一。厨事類記曰、供御次第、六御盤云云、烏賊。文祿四年御成記曰、与ノ御膳、烏賊。御相伴、三ノ膳、生烏賊。御能之時樂屋、三ノ膳、いか。祇園會御成記曰、献立云云いか

【形狀】

〇本朝食鑑曰、烏賊魚。形如ニ小囊一、口在ニ腹下足上一、眼在ニ口上一、八足聚リ繞ル口之旁一、其八足交隱之中間有ニ白皮包一雙黑骨一、如ニ菱實之小一、或似ニ小鳥小鳶一、故俗號ニ鳶烏一、畧與ニ章魚一同、有ニ白鬚一、長サ過レ尺、全體俱着ニ淡黑薄皮一、皮上有レ斑、肉白如レ銀。背上有ニ一甲骨一、狀如ニ兒戲之小舟一、又似ニ若葉一、外如ニ鮫皮之白沙一內似レ刷ルニ燒塩之塊一、重重有レ紋、卽是海螵蛸也、烏賊腹有ニ黑汁一而如ニ墨淋一

〇伊加乃己宇(イカノコウ)　本草類編

【漢名】　海螵蛸　本草

【今名】　イカノコウ

集註 本草類編曰、烏賊魚。和伊加乃己宇、不拘時採之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。攝津國云云烏賊骨各四斤。播磨國云云、烏賊骨各十六斤。備前國云云、烏賊骨各十斤

附方 頓医抄曰、唄散胡藥、此藥烏賊甲ヲ能々日ニサラシテ、細ニシテ雄黄ノ粉ヲ加テ、等分ニ合テ、吉酒ヲ以テ、最前ニ可服。其後瘡之上ニ可付、水丁火丁共ニ此藥ヲ可用、秘スヘシ○白クサ治方、烏賊魚骨、灰ニ燒テ乳汁ニ合テカサニ付ヨ

○烏賊魚ノ腹中ニアル墨 頓医抄

漢名 鰂血 物理小識

今名 イカノスミ
イカノクロヘ

續博物志曰、南越志烏賊懷レ墨而知レ禮・江東人或取ニテ其墨ヲ一書契、以紿ク人物ヲ一、書迹如ニ淡墨ニ、逾年墨消空紙耳。物理小識曰、鰂血黒。本草綱目ニ腹中墨ト出ツ、

附方 頓医抄曰、婦人ノ血崩心痛トテ、月水下少及產后ニ血下リ過ニヨツテ心ヲ痛ヿ甚ヲ治ス、烏賊魚ノ腹中ニアル墨ヲ取聚テ、干乾メ少火ニテアフリコガシテ、カヘリ湯ニ酢ヲ少シ入テ、攪立テ一二錢可服、最上ノ藥也 尤可秘

○須留米 倭名類聚鈔

漢名 螟脯 寄園寄所寄

今名 スルメ 寄園寄所寄曰、烏賊魚暴乾俗呼ニ螟脯ト一

一名 須留米 天文写本和名抄 よこかみ 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、するめ、よこかみ、するゝ するゝ 見上ニ。閩書曰、柔魚。似ニ烏賊一而長、色紫、漳人晒乾食レ之、其味甘美。證類本草曰、其無レ骨者名ニ柔魚一。卽スルメイカ也○文禄四年御成記曰、卷鯣○字典曰、鯣。博雅、鯛也。玉篇、赤鱺也。爾雅註、青州呼ニ小鱺ニ爲レ鯢。疏、與レ鱧音義並

可支　天治本「所交」に作る

同 【集註】 娵入記曰、きやうのぜん云〻まきするめ、まきするめには、するめをまきて、なまにてゆいて、いつるなり。さてちとおかへてきるなり。祇園會御成記曰、六こん、まきするめ。三好義長亭御成記曰、三献、するめ、たこ、ひしほ、いり

太古(タコ) 新撰字鏡 【漢名】 章魚 本草 【今名】 タコ

本草綱目曰、章魚。形如烏賊而大、八足、身上有肉

【一名】 多古 本草和名曰、海蛸。所交反、貌似人躰而圓頭。海肌子。長丈餘、名海肌子、長尺餘、名海蛸子。小鮹魚。頭脚幷長一尺許者、和名多古。倭名類聚鈔曰、海蛸子。今按、蛸正作鮹、所交反、見唐韻。和名太古。俗用蛸字、所出未詳。字鏡曰、鮹可支反、平、太古。玉篇曰、鮹鯸之鼈

䖳 見上註。倭名鈔序曰、海蛸ヲ爲䖳。人車記曰、保元二年八月有任大臣事、干物二種、蒸鮑燒䖳云云、以差鮎燒物加䖳。康平記曰、次汁汁膾加小鳥燒物燒物加䖳〇按ニ、和名鈔ニ、海蛸ハ海螵蛸ノ誤ニシテ烏賊(イカ)ノ魚骨(コウ)也。正字通、蛸字註曰、又蕭韻音宵桑螵蛸蟷蜋子海螵蛸烏賊骨。爾雅翼曰、海中烏賊魚、背如樗蒲形亦有螵蛸之名〇䖳。正字通曰、䖳俗蚤字。字典曰、蚤。正韻、與爪通。禮曲禮不蚤鬋。註、蚤讀爲爪。疏、謂除手足爪也。或作䖳即ノミ也

たもじ

伊勢守貞陸記曰、女房ことば、たこ、たもじ〇釋日本紀曰、鮹旗(タコハタ)。私記曰、師說未詳其躰、師後說云、今現在此旗之頭如鮹故名ク

【集註】 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸

鮹雲州本鮨ニ改ム

召テ群本石ヲに作る

國輸調。乾鮹(ホシダコ)九斤十三兩、鮹腊四斤。凡中男一人輸作物。乾鮹云云各二斤。隱岐國。調、鮹(タコノ)腊。讚岐國。中男作物、乾鮹。伊豫國。中男作物、鮹。肥後國。調、乾鮹一百六十六斤十三兩。同卷第三十二曰、大膳上。御膳神八座、鮹(タコ)云云各六斤。園韓神祭雜給料、云云干鮹各十二斤。春日祭雜給料、鮹二十五斤。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、鮹(タコ)云云各二十三斤四兩。同卷第四十三曰、主膳監。月料、鮹云云各廿二斤八兩。類聚雜要抄曰、內大臣殿廂大饗、燒蛸、刊ν裏長切ニ八寸、ハ引渡盛ν之。生物八種。蛸、切長八寸、引渡盛ν之。人車記曰、仁安三年八月御所御裝束、第四、干物干鳥醋蒸蚫燒蛸。厨吏類記曰、供御次第、六御盤云云蛸。燒蛸、蛸ヲ召テヤキテ、ホシテ削テ供ν之。文祿四年御成記曰、御二獻、蛸。御五、卷小蛸魚。三ノ御膳、蛸。御相伴、二ノ膳、蛸。諸大夫衆ノ二ノ膳、たこ。御能之時樂屋。本膳、たこ。娵入記曰、きやうぜん云々たこ。祇園會御成記曰、三獻云々たこ。朝倉亭御成記曰、たこかはやき鯛にしさかひてはも集汁。四條流包丁書曰、タコキリモルベキ事。タコヲバ前ヘ置テ可ν出。扠飯ノ御回(メグリ)ナラバ、如何ニモ薄ク丸ク可ν切、御肴ニハ少厚ク長ク切ベシ。何ニモイボヲスキ皮ヲムキテ可ν切也

形狀　○本朝食鑑曰、多胡。狀似ニ烏賊ニ而大、八足多ニ疣子ニ、色白帶ニ微赤ニ、或赤皮者亦有、眼口在ニ腹下足上ニ、八腿交股之中間白皮中ニ有ν如ニ雙小鳥之骨子ニ、又如ニ菱實之小而黑色ナルガ一、或形一ハ如ν鴉、一ハ如ν鳶、其腹似ν袋肉薄

知比佐木太古(チヒサキタコ)　倭名類聚鈔

漢名　小八梢魚　東醫寶鑑

今名　コダコ

【一名】知比佐岐太古 天文写本和名抄○倭名鈔曰、小蛸魚。和名知比佐木太古。文錄四年御成記曰、卷小蛸魚 【形狀】○本草啓蒙曰、一種小タコハ十月比多ク京師ニ來ル。故ニ十夜ダコト云。東醫寶鑑ノ小八梢魚、俗名絡蹄ナリ

加比太古（カヒダコ） 倭名類聚鈔 【漢名】望潮魚 閩書 【今名】イヒダコ 【一名】貝鮹 延喜式卷第二十四

【集註】閩書曰、鐔魚。一名望潮魚、紫色腹圓、有レ腹無レ頭、頭在ニ腹下一、多足而長皆環レ口、上有ニ圓文一、星聯凸起ス、腹内有レ黃褐色如ニ卵黃一、有レ墨如ニ烏鰂墨一、有ニ白粒一如ニ大麥一、味皆美 延喜式○字典曰、鮹。海魚、形如ニ鞭鞘一。本草、鮹魚腹似ニ馬鞭一、尾有ニ兩岐一如ニ鞭鞘一、故名爲レ鮹。鮹魚和產未レ詳○倭名鈔曰、貝鮹。日本紀私記云、貝鮹。加比太古曰、主計上。凡中男一人輸作物、貝鮹（カイダコノ）鮨六斤八兩 【今案】伊勢雜記ニ、貝あはびと云は、あわびヲ云、貝の付たる也。據此說、則加比太古ハ貝ノ空殼ニ居ル飯タコ此也。本草啓蒙ニモ、イヒダコ紅螺殼（アカニシ）ニテトルト云 【形狀】○本朝食鑑曰、飯蛸（イヒダコ）。攝泉紀播等州海濱采レ之、狀似ニ章魚一而極小、一箇不レ過ニ二三寸一、腹内有レ如ニ白米飯一者上充滿、味佳、腹足俱ニ可レ食レ之

雜魚類　河海混記

比佐魚（ヒサヲ）　延喜式

［今案］大和本草ニ、ヒサノ魚。鯛ニ似テヒラク色黑シト云、即コロダヒ也。大和本草ノ圖、久鯛ト出ル此也。然モ延喜式ニ何斗ト云エバ非ニ此大魚ー

［集註］延喜式卷第一日、
大忌祭一座、比佐魚一斗五升。
風神祭二座、比佐魚一斗五升

阿波我良（アハガラ）　倭名類聚鈔

倭名鈔曰、梳齒魚。辨色立成云、梳齒魚。東人云ニ阿波我良ー
續脩臺灣府志曰、梳齒魚、黑色花點。齒如梳魚肚食立死

奈波佐波（ナハサバ）　倭名類聚鈔

倭名鈔曰、鯆魚。唐韻云、鯆。大魚名也。辨色立成云、奈波佐波○字典曰、鯆、或作ㇾ鯆。本草、江豚別名鯆魚。亦作ㇾ鱄。江豚、和產未ㇾ詳。江產ノイルカ也

石骨魚　伊賀國風土記

集註　伊賀國風土記曰、伊賀郡阿我川、出鮎石骨魚等

加太（カタ）　本草類編

本草類編曰、鰆魚、和加太

鮇　精進魚類物語

鰒　侍中群要

侍中群要曰、日次御贄、山城國鰒

泥魚　伊賀國風土記

【集註】伊賀國風土記曰、伊賀郡鳥箇原川、出泥魚、猪田川出泥魚

あふらき　精進魚類物語

都久良（ツクラ）　倭名類聚鈔

倭名鈔曰、鰢。唐韻云、鰢音馬、辨色立成云、都久良魚名也。正字通鰢。按此卽海鰕名

柳魚　精進魚類物語

阿散知（アサチ）　倭名類聚鈔

【一名】阿佐知　天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、鱖魚。唐韻云、鱖。魚名、大口細鱗、有斑文者也。漢語抄云、阿散知天文本作鱖。斑彩文　和産未詳

⿰魚追　精進魚類物語

鱘 精進魚類物語

按、鱘。正字通、徐盈切、音尋、鱘魚。和產無レ之

鰓魚 出雲國風土記

蜛蝫 出雲國風土記

【集註】出雲國風土記曰、嶋根郡、蜛蝫嶋、古老傳云、出雲郡杵築御崎、有蜛蝫、天羽々鷲持飛□來、止于此島、故曰、蜛蝫嶋 【今案】蜛蝫ヲタコト訓ズ不レ穩。正字通曰、蜛。九迂切、音居。蜛蝫狀如レ蠶可レ食。郭璞江賦、蜛蝫森衰以垂レ翹。註、森衰垂貌翹尾也。亦作レ鋸。舊本鋸與レ蜛同。南越志曰、蜛蝫一頭ニ尾有ニ數條ニ長二三尺、左右有レ脚、狀如レ蠶可レ食。品字箋曰、蜛蝫卽鋸鰭、其狀如蠶、一頭數尾、左右有足、可食。未詳

異魚類

雀魚 日本書紀　［漢名］魚虎 本草　［今名］ハリセンボン

證類本草曰、魚虎。背上刺著レ人如ニ蛇咬一、皮如レ蝟有刺、頭如レ虎也

［集註］日本書紀齊明天皇四年曰、出雲國言、於ニ北海濱一魚死而積、厚三尺許、其大如レ鮐、雀喙針鱗、々長數寸、俗曰、雀入ニ於海一化而爲魚、名曰ニ雀魚一

［形狀］○本草啓蒙曰、魚虎、ハリセンボン、形狀ハリフグニ似テ瘠長シ、背ハ黒ク、腹ハ色白シ、ソノ刺皆下ニ向テ生ズ、ハリフグノ刺ノ直生スルニ異ナリ、魚ノ長サ三寸許、或ハ五寸許、一種長サ一尺餘、褐色ニシテ首圓ニ猫ニ似リ、刺フトクシテ少シ、是レ眞ノ魚虎ナリ

泊魚 續日本紀

［集註］續日本紀卷第三十八曰、桓武天皇延暦四年春正月戊午、安房國言、以ニ今月十九日一ヲ、部內ノ海邊ニ漂ニ著大魚五百餘一、長各一丈五尺以下、一丈三尺以上、古老相傳ヘ云ク、謂ニ泊魚一ナリト

白魚 日本紀略

集註 日本記略曰、延暦十五年四月乙亥、右大舍人白鳥村主得白魚於井中献之、任肥前史生

大魚 續日本紀

集註 續日本紀卷第十五曰、聖武天皇天平十五年五月丙寅、備前國言、邑久郡新羅邑久浦漂著大魚五十二隻、長二丈三尺已下、一丈二尺已上、皮薄如紙、眼似朱、泣聲如鹿鳴、故老皆云、未嘗聞也

頸切無身魚 明月記

集註 明月記曰、寛喜二年四月十三日、又云、承久之比、關東之海上引網、鯺鰜頸切無身之頭不知數被引、人成奇之間、其後軍乘勝斬公卿已下頭之時、以之爲吉祥、而近日又引網、同魚無頭之身多被引、懲前叓怖此叓云云

大魚 吾妻鏡

二文ヲ直ヤリハ見
版二セウ古三ユ
寛三トルナ版ト

【集註】吾妻鏡卷第二十六日、貞應三年五月十三日、近國浦々大魚其名不ニ分明一多死ス、浮ニ波ノ上ニ、寄ニ于三浦崎六浦ノ前ヘ濱ニ之間充滿、鎌倉中人擧買(コゾツテカフソレヲ)レ其、定テ家家煎レ之、取ニ彼ノ油ヲ、異香滿ニ閭巷(リヨコウ)ニ、士女謂ニ之ヲ旱魃之兆(キザシ)ニ、無ニ先規ニ、非ニ直也事一云云

大魚 吾妻鏡

【集註】吾妻鏡卷第三十八日、寶治元年五月廿九日、三浦五郎左衛門尉參ニ左親衛御方ニ申云、去十一日、陸奧國津輕ノ海邊、大魚流寄、其形偏如ニ死人ニ、先日由比海水赤色事、若此魚死故歟。隨而同比、奧州海浦波濤、赤而如レ紅云云、此事則被レ尋ニ古老ニ之處、先規不レ快之由申レ之。所謂文治五年夏有ニ此魚ニ、同泰衡誅戮。建仁三年夏又流來。同秋左金吾有ニ御事一、建保元年四月出現、同五月義盛大軍、殆爲ニ世御大事ニ云云。同卷第三十九日、寶治二年十一月十五日、陸奧國留守所注申云、去九月十日津輕海邊、大魚死而浮寄、如ニ人狀ニ云云。此事先規ニ箇度也

異魚 百練抄

【集註】百練抄卷第四日、三條天皇、長和二年六月、美濃國異魚出來、進ニ其圖一

波之加美以乎(ハジカミイヲ) 本草和名　[漢名] 鯢魚 本草　[今名] サンセウウヲ

本草綱目曰、鯢魚。郭璞云、鯢魚似レ鮎四足、前脚似レ猴、後脚似レ狗、聲如二兒啼一、大者長八九尺　[一名] 椒魚 日本紀略　桝魚 文德實録　波之加美伊乎 倭名類聚鈔曰、鰻鱺魚。和名波之加美伊乎、鰻鱺魚ハウナギ也　波之加美宇於 本草類編　[形狀] ○大和本草曰、鯢魚(サンセウウヲ) 溪間ノ中ニ生ズ、四足アリ、水中ノミニアラズ、陸地ニテヨク歩動ク、能上レ樹山椒樹皮ヲ食フ、國俗コレヲ山椒魚ト云、大サ二三尺アリ、又小ナルハ五六寸アリ、其色コチニ似タリ　[今案] 倭名類聚鈔曰、鰻鱺魚。和名波之加美以乎。本草和名曰、鯷。和名牟奈岐。鰻鱺魚。和名波之加美以乎。ト二條ニ分テリ。鯷ハ即ウツボ也。日本記略曰、延暦十六年八月己巳、掖庭溝中獲レ魚、長尺六寸、形異二常魚一、或云椒魚、在二深山澤中一。文德實録第四曰、仁壽二年三月癸酉、近江國得レ魚、形似二獼猴一、異ト〆而献レ之、故老皆云、此桝魚也。昔時見レ有二此物一。觀レ此則椒魚ハ即ハジカミ魚ニ〆、サンセウウヲタル證也。輔仁本草ニモ、鯢魚、音語鷄反、有二四足一、和名波之加美以乎ト出セリ。日本靈異記ニ椒(ハジカミ)莊ノヿミエタリ。倭名鈔ニ、蜀椒。奈留波之加美ト云リ

人魚 扶桑略記

廣東通志曰、臨海異物志、人魚似レ人、長三尺、不レ可レ噉。按、人魚雄曰海和尙、雌曰海婦、縛髮牝牡皆人、惟背有二短鬣一微紅耳。間出二沙汭一、亦能惑レ人。舶行遇者必行レ法ヲ厭二禳之一。華夷鳥獸考曰、海人魚ハ東海ニ有レ之、大ナル者長サ五六尺、狀如レ人、眉目口鼻手爪頭皆爲二美麗ノ女子一、無レ不レ具足一、皮肉白キコト如レ玉、無レ鱗有二細毛一、五色輕軟、長サ一二寸、髮如二馬尾一、長サ五六尺、陰形與二丈夫女子一無レ異ル、臨海鰥寡多ク取ヲ得養二之ヲ於池沼一、交二合之一際與レ人無レ異、亦不レ傷レ人

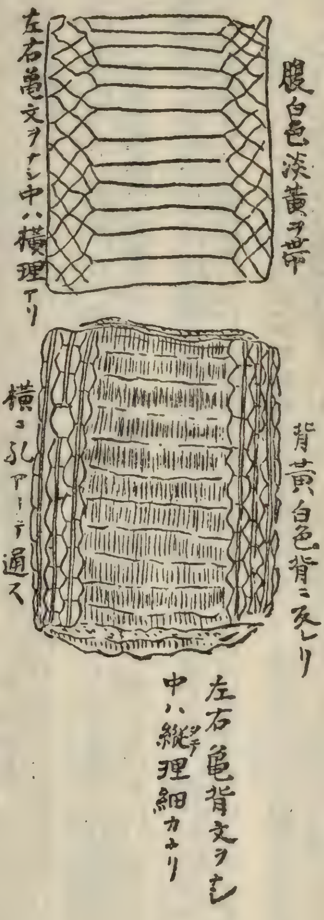
形狀

日本書紀曰、推古天皇二十七年夏四月己亥朔壬寅、近江國言、於二蒲生河一有レ物、其形如レ人。扶桑略記第四曰、推古天皇廿七年、近江國蒲生河有二人魚一、是禍瑞物也。太子傳曰、近江國司使啓曰、蒲生河有レ物、其形如レ人非レ人、如レ魚非レ魚、太子謂二左右一曰、禍始二于此一、夫人魚者非瑞物也。又日本推古二十七年紀曰、秋七月、攝津國有二漁父一、沈二罟於堀江一、有レ物入レ罟、其形如レ兒、非レ魚非レ人、不レ知レ所レ名。釋日本紀曰、人魚、一名鮫、魚身人面ナル者也。古今著聞集曰、伊勢國別保といふ所へ、前刑部少輔忠盛朝臣くだりたりけるに、浦人日ごとに網を引けるに、ある日大成魚を、かしらは人のやうにて有ながら、ははこまかにて、うをにたがはず。口さし出て、猿ににたりけり。身はよのつねの魚にて有けるを、三喉ひきいだしたりけるを、二人してになひたりけるが、尾なをつちにおほくひかれてげり。人のちかくよりければ、たかくおめくこゑ人のごとし。又なみだをながすも人にかはらず。おどろきあざみて、二喉をば忠盛朝臣のもとへもて行、一喉を浦人にかへしてければ、浦人みな切くらひてけり。され共あへてことなし。そのあぢはひことによかりけるとぞ。人魚といふなるは、これていの物なるにや

○人魚骨 坤輿外記曰、有二海女一上體如二女人一、下體爲二魚形一、其骨爲二念

珠ニ服レ之可レ止ニド血ニ、魚骨中上品各國貴重レ之。本草啓蒙曰、人魚骨、蠻名ヘイシムレル。蠻人將來ル者、贋物多シ

人魚骨圖



【集註】平治物語曰、去保元々年春ノ比、法皇叡山へ御幸ナル。山門ニハ大師修禪定ノ具足共アリ云云第十九ノ箱ハ、下野國宇佐宮ノ御殿ニ被レ納云云、不空絹索人骨ノ念珠モ、此箱ニ有トカヤ。按、人骨ノ念珠、卽人魚骨也

久都賀太（クノカタ）倭名類聚鈔

【漢名】鵈尾

【今名】シヤチ

品字箋曰、蚩水獸名、顔氏說畧、蚩尾銅、頭鐵、額牛角牛耳。廣博物志曰、蘇鶚演義、蚩者海獸也。漢武帝作栢梁殿、有上疏者云蚩尾水之精、能辟火災可置之堂殿、今人多作鴟字。集事淵海曰、事文類聚、蚩海獸也。漢武作栢梁殿、有蚩尾水之精也。能却火災、因置其象於上、今謂之鴟尾非也。緗素雜記曰、蚩尾顔之推亦作此鴟字劉孝孫事始作此蚩尾既是水獸作蚩尤定是也蚩尤銅頭鐵額牛角牛耳獸之形也。作鴟鳶字恐無意義。古老傳云、蚩耸尾出于頭上遂謂之蚩尾。顔氏家訓云、東宮舊事呼鴟尾爲祠尾從張敞不甚稽古隨宜記注逐鄕俗訛謬取吳呼蚩爲祠遂爲祠尾又俗間呼爲鴟吻見其吻如鴟鳶遂以此呼之自後蚩字有作此者、余案、倦游雜錄云、漢以宮殿多災術者言天上有魚尾星宜爲其象冠于屋以禳之今亦有自唐以來寺觀舊殿宇尙有爲飛魚形尾上指者不知何時易名爲鴟吻狀亦不類魚尾。又案陳書舊制三公黃閣廳事置鴟尾後主時蕭摩訶以功授侍中詔摩訶開閤門施行馬廳事寢堂並置鴟尾、又北史宇文愷傳云、自晉已前未有鴟尾用鴟字。宋子京詩云、久叨鴟尾三重閣兼撰新唐書皆用鴟字。又江南野錄云、初豪殿閣各有鴟吻自乾德之後天王使至則去之使还復用至是遂除此又用鴟吻竟未詳其旨。事物紀原曰、唐會要海中有魚虬尾似鴟激浪則降雨遂作其像於屋以厭火災云云



【一名】サチホコ　壒囊抄曰、鯱(サチホコ)。又曰鴟尾(クツカタ)。倭名鈔曰、鴟尾。唐令云、宮殿皆四阿施ニ鴟尾ー。辨色立成云、久都賀太。精進魚類物語曰、さちほこ。品字箋曰、鯱乾名一曰魚腊

【集註】三代實錄卷第四十四曰、元慶七年八月廿五日戊午、大極殿西鴟尾半折而落焉。扶桑略記廿九日、天喜五年四月十四日、大極殿鴟尾墮ㇾ地破損。百練抄第五曰、延久二年五月五日、大極殿鴟尾可ㇾ用ㇾ本

首宜下○按ニ、大和本草ニ、蚩尾ヲシヤチ鯨トス、誤也。シヤチ鯨ハ、鯨ノ一種也。大和本草曰、海魚ニシヤチホコアリ。此魚日本ニテハ伊勢海ニアリ、西州ニハマレ也。全體黒色也。或ネズミイロナリ。又黒トンバウト云。此魚性剛ニシテヨク海鰌(クジラ)ヲツキテ追フ、クジラ恐レテ逃グ、一切ノ魚ヲ食ス牙齒スルドナリ。大サ五七尺ヨリ三四間ニイタル、油多シ。皮ニ牡蠣生ズ、群游ス。按、牡蠣ト云ハクヂラガキ也。シホジリニ似テ白色稜アリ、質美也。廣東新語ニ、牡蠣蚌蠃積、其背嵯峨如レ山ト云リ

古名錄魚部卷第五十五　終

古名錄魚部卷第五十六目錄

河魚類

古比(コヒ) 鯉魚　　富那(フナ) 鯽魚
佐介(サケ) 松魚　　美(ミ) 白魚
波曾(ハソ)　　阿米魚(アメノウヲ) 鯇魚
安由(アユ) 香魚 ○阿由故(アユゴ)　　之呂乎(シロヲ) 鱠殘魚 ○ひを
伊具比(イグヒ)　　波江(ハエ) 鰷魚
麻須(マス) 鱒魚 ○腹赤(ハラカ)　　メイタヾキ
無奈木(ムナギ) 鰻鱺魚　　奈萬豆(ナマヅ) 鯰魚
加良加支(カラカキ) 黃顙魚　　土長(ドヂヤウ) 泥鰌
加末豆加(カマツカ) 吹沙　　伊師布之(イシブシ) 石伏魚

知知加布里　杜父魚　　　　宇留利古　鱎魚

通計二十三種

人ハ介ノ誤カ　失ハ夫カ

古名錄魚部卷第五十六

紀藩　源　伴存撰

河魚類

駿河國風土記曰、伊穗原郡高橋貢云云川魚等〇三代實錄卷第四十二曰、陽成天皇元慶六年六月三日甲戌、權僧正法印大和尚位遍照起ニ請ス七條ーヲ、頒ニ下ス所司ニ、云云其ノ七、應レキ禁ニス流レシ毒ヲ捕ルヿヲレ魚ヲ事、如レ聞、諸國ノ百姓、毎レ至ニテ夏節ニ剝ニキ取リ諸ノ毒木皮ーヲ、搗碎メ散ニ放ス河上ニ、在ニル其ノ下流ニ者、魚蟲大小、擧テレ種ヲ共ニ死ス。其元謀ヲ所ロレ要スル在レ魚ニ、至ニテ于蟲ニ人無レシ用ルヿ無メレ用ニルヿ於人ニ、而徒ニ死ス非ニス其ノ要ニ、共ニ委ニ泥沙ニ、人之不仁、淫殺至テレ此ニ失ニフ先皇永遺ニスヿヲ放生之仁ニ、後主蓋除ニ流毒之害ニ、伏メ望、自レ今以後、特ニ禁ゼヨ一時ノ之毒殺ニ、將レ救ニント群蟲之徒死ーヲ、勅メ、宜レ俾ヲ下ニ内外ニ遵行セ

古比（コヒ）　日本靈異記

漢名　鯉魚　本草　今名　コヒ

本草綱目曰、鯉鱗有ニ十字文理ー、故名レ鯉、雖ニ困死ー鱗不ニ反白ー。鯉爲ニ諸魚之長ー、形既ニ可レ愛。食物本草會纂曰、鯉魚。此魚能飛。書叙指南曰、鯉魚曰ニ魚中之王ート。正字通曰、鯉爲ニ魚王ー、無ニ大小ー脊旁鱗皆三十有六鱗

【一名】己伊　本草類編〇日本靈異記曰、鯉。古比。倭名類聚鈔曰、鯉。和名古比。新撰字鏡曰、鯉。良士反、上古比。新猿樂記曰、所好何物、鯉丸燒。塵添壒囊鈔曰、鯉鱠。正字通曰、鯉俗字。廣雅、黑鯉謂ニ之ヲ鯶一ト。按ニ鯉無ニ鯶名一、魚屬ニ有ニ鯶名一、故作レ鯶ニ非サレ鯉ニ也

コモジ　海人藻芥曰、鯉ハコモジ、如レ此異名ヲ被レ付。伊勢守貞陸記曰、女房ことば、こい、こもじ

里魚（コイ）　四條流庖丁書曰、物別料理ト申ハ、鯉ト心得タランガ尤可レ然也。里魚（コイ）ヨリ料理ハ始リタル也。蒲鉾ナドニモ鯉ニテ拵タルコソ、本說可レ成也

【集註】本草類編曰、鯉魚。和己伊。不拘時採之。亦骨燒。日本書紀卷第七曰、景行天皇四年、云云於レ是天皇欲レ令ニ弟媛至一而居ニ于泳宮一。鯉魚浮レ池朝夕臨視而戲遊。時弟媛欲レ見ニ其鯉魚遊一而密來臨レ池、天皇則留而通之。日本靈異記曰、其日夕煮レ鯉葬疑明日辰時起居ニ朝床一彼鯉含レ口取レ酒將レ飲、自レ口黑血返吐傾臥。延喜式卷第二十四曰、主計上。美濃國、中男作物、鯉。侍中群要曰、御厨子所ノ例云、延喜十一年十二月廿日官符云、定ニ六箇國日次御贄ヲ一、山城國、鴾鳩鶉鴨小鳥鯉鮒鰻。伊勢國風土記曰、員辨郡雲宇途川、出鮎鮒鯉鮠。美濃國風土記曰、渥美郡長池鄉、出鯉鮒。常陸國風土記曰、香島郡。郡家北、沼尾池、鮒鯉多住。郡南廿里、以東松山之中、有ニ一大沼一、謂ニ寒田一、可ニ四五丁一、鯉鮒住之。山背國風土記曰、久世郡槇菴鯉鮒鮎鯇鮖等。菟道郡宇治川貢鯉。和泉國風土記曰、大鳥郡出見川、出鯉。攝津國風土記曰、有馬郡貢鯉。伊賀國風土記曰、阿辨郡服部川出鮎鯉鮒等。參河國風土記曰、形原郡石座河、出鯉鮒鮎。武藏國風土記曰、荏原郡益師池、貢鯉鮒。駿河國風土記曰、烏渡郡弁志田池、謂御鯉鮒鮮魚鯉御寄膳部。大澤、牛鯉鮒。深沢、出鯉鰻魚。當國造之用。安弁郡白沢貢鯉鮒。大沢池　出鯉鮒。益頭郡、

歟　群本写本トモニ也ナリ

葛問池、貢鯉鮒。類聚雜要抄曰、御齒固用途料、山城國狹（サ）山江御厨、鯉。聟娶御前物。四進、生物五坏、鯉鯛鮨鳥鴇。挃屋大饗、饗膳鯉鱠。内大臣殿廂大饗、生物八種、鯉、九寸許ノヲ、木ノ尻ヲ短尾ニ切天作レ丸引渡盛レ之。鱒鮨鯛鯉定歟。所ゝ垸飯。瀧口本所、鯉一喉、雉一枝。厨事類記曰、粟津所進鯉一種長日又柏木。生物、鱠。鯉ハ、先シタニ搔敷ノ竇（或云敷竇）ツクリカサ子テモル。次打鮑歟。引實上ニウナモト（三枚或五枚）モリテ供レ之。雅輔装束抄曰、たちつくりのあく（幄）といふことあり。えんちかく三げんのあくをうちて、ちらじのしりかくるほどなるをたてたり。それはしりをかけて、こい（鯉）をきりて、御さかなにまいらするなり。明月記曰、建仁三年十二月十日、宇治之間事云ゝ其南棚中置結物珍物大鯉遣事具等。續古事談曰、殿上ノ一種物ハ、ツ子ノ事ナレドモ、ヒサシクタエタルニ、崇德院ノスヱツカタ、頭中將公能朝臣ハ、絕タルヲツギ、廢レタルヲ興シテ、神無月ノツゴモリ比ニ、殿上ノ一種物アリケリ云云。信乃守親隆、大鯉ヲイダセリ。包丁ノ座ニヲキテ、御厨子所ノ頭久長ヲ召テ、トカセムトスルニ、ソノ事ニタヱズトテキラ𠆢。榮花物語衣の珠曰、べんのきみ、かしこきいみじきこひのさぶらひつる、きこしめさせばや、と申給へば、精進ちかくなるとて、人のいをくふ、いとほいなきことなり、との給はすれば、いとくちおしくてやみ給ひぬ。四季物語曰、よどこいの、浪のうきねもいひしらぬ寐覺やすかるべし。古今著聞集卷第九曰、此番は無双の手きゝにて侍にけり。渡ア にてしかるべき客人の來りける時、鮒はせをしけるには箭をたばさみて、おどる鯉を一つもはづさず射けり。同卷第十八曰、ある殿上人鯉を彼卿のまへにをきてげり。又曰、一條二位の入道能保、右衛門のかみにて侍ける盃酌まうけて𠆢。設られける盃酌すこんありて、ゆきたかめしいだされて、緣に候して鯉き

りたり。左府ゆきたかにしめし給けるは、鯉調備するやうをば存知たり共、食やうをばしらじ。くふて見せんものし給ひけり。まことにやう有げにてめでたかりけり。砂石集曰、江州ノ湖ニ大ナル鯉ヲ浦人トリテ、殺サントシケルヲ、山僧直ヲトラセテ、湖ヘ入ニケリ。耳底記曰、幽齋鯉乃庖丁あり、樂あるによりて、手品あるなりとのたまふ。大內問答曰、御成申沙汰之時云々鯉一、是も臺にすへてをかれ候。殿中申次記曰、正月十四日、鯉一。春日社參記曰、御舟の前にて網引などして、おほきなる鯉をとりて、まいらせぬる。宇治拾遺曰、こと〴〵く大鯉つくらんやうに。塵添壒囊鈔曰、日本ニテモ馬醫師ヲ伯樂ト云也。灌頂煎ジユハリノ樣鯉(コイ)ヲ少ニ切ッテ鰹(カツヲ)一節人參一分粉ニスベシ云云。吾妻鏡第二曰、治承五年正月一日、千葉介常胤獻ニ垸飯ヿ、相ニ具三尺鯉魚ヿ。同第四十三曰、建長五年正月三日、豫メ被レ置ニ菓子瓶子鯉ヿ。賀レ刄調ニ辨刀ヿ。感身學正記曰、弘安四年四月廿五日、於平等院別院丈六堂八百四人授菩薩戒、此時云云生鯉三十隻放之。山家集曰、うぢ(宇治)がはをくだりける船の、かなつきと申ものをもて、こいのくだるをつきけるをみて。宇治川のはやせおちまふれう船のかつきにちかふこいのむらまけ。二水記曰、大永六年五月廿七日、主上今日始御魚食之云々。下官鯉二喉拜領、尤祝着也。宣胤卿記曰、永正三年八月一日、頭弁太力鯉三遂之道。文祿四年御成記曰、御五鯉、三ノ御膳鯉ノ汁、御相伴、三ノ膳、鯉ノ汁。娵入記曰、しき三こんと丶のへの事、よめ入にはこいをもちひず、たいをもちふなり。なをくてん有。大草相傳聞書曰、鯉をたゞのさしみにする事なし、いかだより外には有まじく候。鯉のころもにと云りうりあり

形狀

塵添壒囊抄曰、鯉鱗事。鯉ノイロコハ、大小ニヨリテ不同アル歟。又定數アル歟。鯉ノソハ腹ノ中ノ通ニハ、頭ノ下ヨリ尾ニ

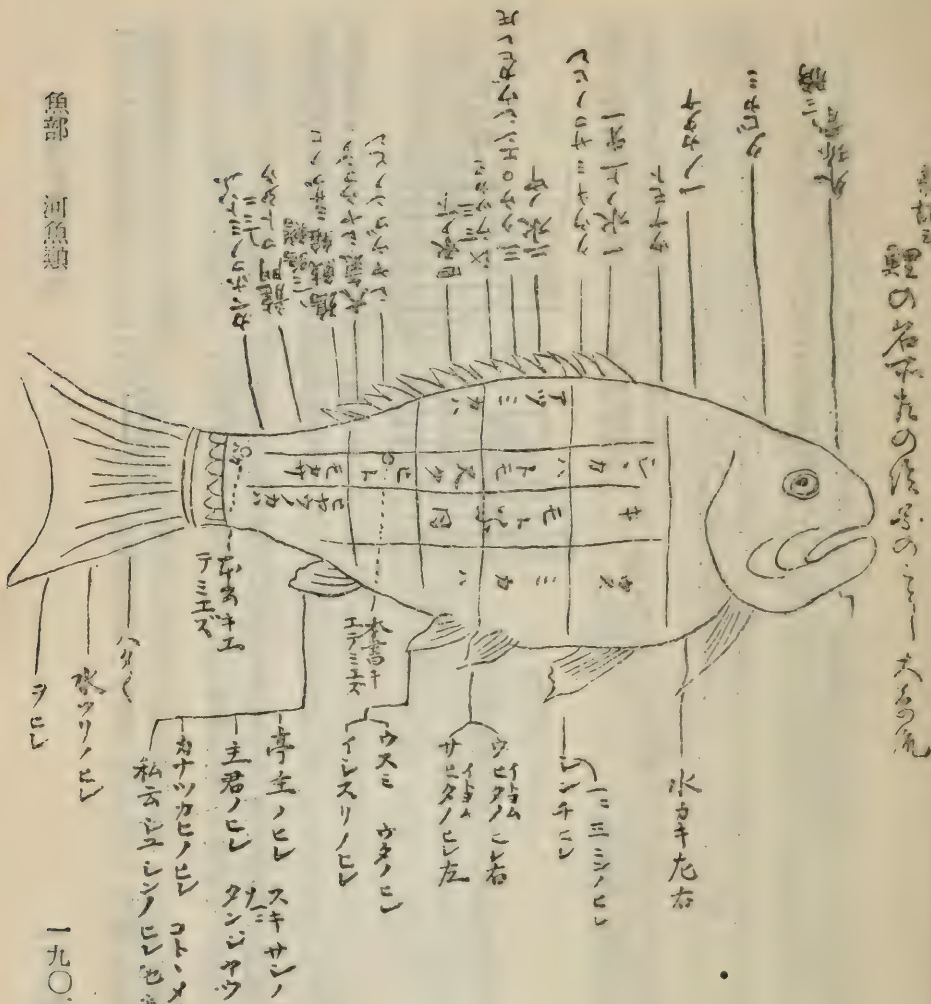
至マデ、不レ依ニ大小ニ、イロコ卅六アルベシ。古詩ニ見タリ。大小雖レ異ト鱗之數等ト云リ。つれ〴〵曰、鯉のあつものくひたる日は、鬢そゝげずとなん、にかはにもつくる物なれば、ねばりたる物にこそ。鯉ばかりこそ、御前にてきらるゝ物なれば、やんごとなき魚なれ。宣胤卿記曰、永正三年正月三日、伊勢又七鯉一丈二尺余也云云遂之。四條流庖丁書曰、鯉ノ尺大小之事、大中小、目ヨリ下ヲ寸ノ定ト云云

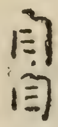
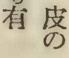
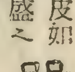
【附方】

水腫ヲ治ス　頓醫抄曰、七寸鯉三喉ヲ濁酒ニ切入テ、能々煮テ皆食ツクセ、汁肉共ニ可食、鯉ナクバ鯛鰺(アヂ)ナドモ可用、小便下リ腹ヘルベシ

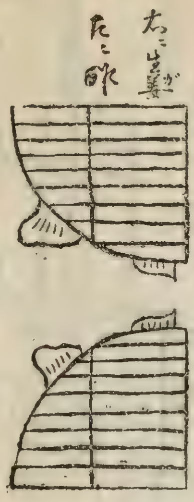
【今案】

伊勢雜記曰、雉鯉は古は賞翫の物なるゆへ、庖丁家に鳥の庖丁（鳥とは雉ヲいふなり）魚の庖丁（魚トハ鯉ヲいふ）とて、庖丁の式法あり。されば雉にも鯉にも名所あり。後代鶴の庖丁といふ事あり。古は鶴を賞翫とせず、ゆへに古は鶴の庖丁といふ事なし。雉鯉などのごとく、式正の事はなきなり。又曰、庖人の家にて、鯉の名所の事、うなもとは、頭の方より第一の背のひれ之。うひだとは、後の方、第四の右のひれ之。さひだとは、腹の方、第四の左のひれ之。すきさしのひれとは、腹の方、第五のひれ之。ことゞめのひれとも云。婚礼の祝には、ことゞめのひれをば、式三獻の時にも用ざる事、庖丁人の故實之。子をとゞむる事は忌む之。土ずりのみトハ、腹の下肥たる所の肉をいふ。すんすりのみとも云、土ずりといふは、水底にゐる時、土をする所なり。すんずりは、すなずりと云事之。うすみとは、腹の方内のうすき所をいふ。あつみとは、背の方、肉のあつき所ヲ云。四條流庖丁書曰、魚ノヒレ可レ參交。鯉ノヒレニハ、杉サシノヒレヲ第一賞翫ニ申傳、此ヒレニ名余多有事ナレド、尊者ノヒレ、杉サシノヒレ、ト名付タルヲ當流ノ秘事トセリ



一鯉の三角皮の刺躬といふは尾先の內之方をすきて盛之  如此重皮といふは皆躬也。皮の事にてはなし。四ッ重にも有  重皮如此盛之  四ッ重如此之

四條流献方聞書に見たり。一鯉の內躬の刺躬といふは、薄躬の事之。鯉壹ッを砂摺のひれを添て內躬盛之。砂摺のひれを石摺のひれとも申。是を右板のひれともいふ之。鯉をおろし、薄躬の方を中より二ッに切、太頭の方は竪ニ五ッに切、尾の方を竪に四ッに切之。鯉色を男女一盛る之



頭の方

左右の躬如此切て二人の內躬にするなり

右同書に見たり

食物本草會纂曰、御膳八珍中赤列ニス鯉尾ヲ一、但此魚脊上兩筋及黒血有レ毒不レ可レ食

○きんぎよ 大草聞書 大草相傳之聞書曰、きんぎよとは口のきなる鯉の事ニて候 集註

大草相傳聞書曰、きんぎよのつゝみ紙は、横八寸竪九寸斗。きんぎよ。それをよく〳〵うろこわたをとりひほかして、上に刀めを十もんじに付、本のごとく押あはせつゝみ用也。きんぎよさす花は、かきつばた、山ぶきたるべし。しぜん鯉なき時は、鮒のうろこわたをとり、腹の中に葛つぶ(粒)けし(芥)とうふんにあはせ、酒にてもみ合、鯉の腹にいれ、わらにてうほをまき、すたて酒塩を付あぶり用なり。刀めの付やう前おなじ。き

んぎょの包紙は、うちくもり鳥のこ御判紙たるべし

〇紅鯉 扶桑略記。正字通曰、鯉爲魚王、有赤白黄三種。羅願曰、今人但謂赤鯉、古種類至多、崔豹言兗州人謂赤鯉爲赤驥、青鯉爲青馬、黒鯉爲黒駒、白鯉爲白騏、黄鯉爲黄騅、以其能飛越江湖故也。見聞錄曰、日池内紅鯉發刺。江陰縣志曰、南朝魚子英於芙蓉湖捕魚得赤鯉持歸以穀養一年化爲龍。博異志曰、有赤鯉魚長可三尺躍入呂師舟中。漳州府志曰、又有紅鯉、差大古所謂赤鯉者也。紅色稍減不復龔金

【集註】本朝文粹曰、池亭記云、其外松嶋白沙汀、紅鯉白鷺小橋小舟平生所好盡在其中。玉造曰、鱠ハ非ニ頳鯉之腴ニ不レ嘗

富那 延喜式 【漢名】鯽魚 本草 【今名】フナ

證類本草曰、鯽魚。蜀本云、形亦似レ鯉色黒、而體促肚大而脊隆所在池澤皆有レ之。臍字苑云、鰿鯽鰿音積、二字通用也

【一名】布奈 本草和名曰、鯽魚、和名布奈。倭名類聚鈔曰、鮒。本草云、鯽魚上音卽 一名鮒魚上音附、和名布奈

延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調云云富那交鮨各四十六斤〇正字通曰、鰿、鯽ノ本字、魚背隆起如レ劍、故从レ脊。說文又作レ鱛

浮鱶 日本書紀曰、言ニ鯽魚 女ヲ此ヲ云ニ浮鱶謎ト。玉造曰、鮒鮒之魚。正字通曰、鮒俗鯛字

不奈 新撰字鏡曰、鮒鰟同、方音、赤尾魚。不奈、又堅魚鮃、布奈、鮃、不奈。正字通曰、鮃字俗、鮒鮃字之譌。鮒ハ同レ鯽、タナゴ也

山ふき 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、ふな、山ぶき

フモジ 海人藻芥曰、鮒ハ、フモジ。如此異名ヲ被付

束鮒 萬葉集卷第四曰、高安王裹鮒贈娘子歌一首。奥幣往、邊去伊麻夜、

牧自筆原稿本も塵添本も牧なり。活字本は枚に改む

爲妹、吾漁有、藻臥束鮒。仙覺萬葉集註釋卷第四曰、もふしつかふなとは、水の中に、あかもといふ藻のしたにふす鮒也。つかと云心は、あつまると云なり。又もふしつかふなとて、只ちいさき魚をいふともいへり。言塵集曰、藻ふしつかふなとは、藻にふしたるふなと云ゝ手一束ばかりにちいさきふな之。又曰、つかふなとは、鮒の名之。藻に臥たる一束ばかりの小鮒なり。藻塩草曰、魚にも、束鮒と云は、一にきると云之と云。袖中抄曰、弓にも、とつかといふは、ひとつなれといへり。いをにも束鮒といふは、一にぎりといふなり。塵添壒囊鈔曰、錦木事云云、強テ立副程ニ、千束ヲ限トメ、眞ノ志アリトテ云云、千束ニ成レバ、必ズ可レ合様ニ、聞ル歌侍レバ、千束カ限歟。錦木ハ千束ニ成ヌ今コソハ人ニシラレヌネヤノ中見メ云云、亦一牧立ル不ヲ、爭カツカトハ云ント云義侍共、束鮒ト云ハ、一拳アルヲ云ト申セバ、數ノ木ヲ結合セズ共、一拳アラン枚木ヲモ一束ト可レ云。觀此則本草啓蒙ニ、萬葉集ニモブシト云テ、鯽ノ名トスルハ非也

江鮒　本朝無題詩曰、秋日江州館下即事云云、土貢嘉珍水市魚州民獻江鮒故云。新猿樂記曰、近江鮒。賦役令曰、若諭雜物者近江鮒五斗。四條流庖丁書曰、江州ノ鮒ヲ、獻立ニ、丸ニト書タラバ、魚ノ尾サキヲモオスベカラズ。少モ刀寄タラバ、丸ニトハ不レ可レ云

かた田鮒　言塵集曰、鮒。かた田鮒、名所六新いともかしこしかたゞふなつゝみやきなる中の玉づさ。天武天皇御時、鮒のつゝみ燒と云物に、まぎらはしく小文を入られたりけると云ゝ、大伴の王子の時之

生成　殿中申次記曰、二月朔日、永正十三二十七、或日不定、生成ナマナリ、鮒ノ事之小三十例年進上之〇雜記曰、蜷川新左衛門尉親元が文明十二年日々記、鮒生成一折云ゝ。年中恒例記、三月生成一折、佐々木越中守進上之日不定。とあり。又伊勢守書

札之條ニ、爲當年之祝儀、生成廿出來と祝喜入候也。謹言。三月十一日。惣持房に御こくこ七献めのあいに参候ありて、たこ、なまなりとあり。諸用當用抄の內、佐々木方へ御成之規式、御くこ七献めのあいに參ル也。なまなり、このわた、なます、かうの物云云

〔集註〕伊勢國風土記曰、員弁郡雲宇途鄉宇途川、出鮒云云等。櫻谷鄉野間池、出鮒。安濃郡云云、鮒其產上之上也。美濃夜川云云鮒等。文德實錄卷第六曰、齊衡元年十一月癸巳、左近衛府獻ニ生鯽魚一、詔放ニ御池ノ中ニ一。三代實錄卷第四十八曰、光孝天皇仁和元年十一月十日庚寅、左近衛左衛門左兵衛等ノ府所レ送釈奠祭胙、其一、應レ送ニ進鮮胙ニ事云云。其二云云而今諸衛所レ進代レ胙物、或乾魚、或果子、所レ送非レ一。猥ニ任ニ人意ニ、宜レ令下ニ六府ヲ送中鮒鯉鮮潔者上也。侍中群要曰、寬平九年七月四日、始定ニ四衛府小鮒日次ノ御贄左兵衛子辰申　右兵衛丑巳戌　右衛門卯未亥者。延喜式卷第五曰、齋宮。凡諸國送納調庸云云、醬鮒三石、近江。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、醬鮒鮨鮒各三十二斤。凡中男一人輸作物、鮒鮨云云醬鮒各八斤。近江國、中男作物、醬鮒。美濃國、中男作物、鮒鮨。筑前國、調、醬鮒一百二十八斤、鮨鮒二百八斤。中男作物、鮨鮒 醬(ヒシホ)鮒。筑後國、中男作物、醬鮒、鮨鮒。同卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢御贄。近江、鮒。同卷第三十九曰、內膳司。六月神今食料、云云醬鮒各二升。新嘗祭供御料、云云醬鮒各二升。右夜料。云云醬鮒各二升。右豐樂(トヨノアカリ)料。云云醬鮒云云各二升云云。漬醬鮒鮨鮒各十石、味塩鮒三石四斗、近江國筑摩厨所レ進。年料。近江國 鮒。美濃國、鮨鮒隔月三缶。太宰府鮒鮨一百七十八斤五缶。同卷第四十七曰、左兵衛府、凡鮮鮒 御贄ハ隔ニテ三日ヲ一進、左子辰申、右酉巳丑。常陸國風土記曰、其河稱ニ無梶河一、此則茨城行方二郡之堺河。鯉鮒之類、不レ可ニ悉記一。山背國風土記曰、兎道郡宇治川、

貢鮒。出雲國風土記曰、嶋根郡水草川、有鮒。秋鹿郡佐太川、有鮒。惠曇池、有鴛鴦鳧鴨鮒。出雲郡西門江、有鮒。大方江有鮒。和泉國風土記曰、大鳥郡出見川、出鮒。日根郡賀美鄉、貢鮎鮒。攝津國風土記曰、有馬郡、貢鮒鮎鮀。伊賀國風土記曰、伊賀郡高師川、多出鮎鮒等。晴崎川、出鮎鮒等。阿辨郡栢川、出鮎鮒。陸奧國風土記曰、宮城郡貢鮒鮎等。駿河國風土記曰、廬河郡葦名川、出鮎鮒等。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、鮨鮒百缶。宣胤卿記曰、長享三年正月十七日、又鼠女十五歲來、柳二荷、鮒一折、海鼠一折、圓鏡等持參。厨事類記曰、四府所進鮒一種。葛野河云々。云冬季進鮒、生物鱠鯉ナキ時、鮒ヲモル。源氏物語藤のうら葉曰、ひんがしの池に舟どもうけて、みづし所のうがひのおさ、院のうがひをめしならべて、うをおろさせ給へり。ちいさきふなどもくひたり。土左日記曰、かゝるほどに、ひとの家の、いけと名あるところより、こひはなくて、ふなよりはじめて、かはのもうみのも、ことものども、ながびつにになひつゞけておこせたり。砂石集曰、古物語ニアリ、江州ノ湖ヲ行ニ、鮒ノ船ニ飛入タル事有ケルニ、一說ニ、山法師、一說ニハ寺法師、昔ヨリ未定也。此フナヲ取テ、說法シケルハ、汝放マジケレバ不可生、タトヒ生共不可久、生アル者ハ必死ス、汝ガ身ハ我ガ腹ニ入ハ、我心ハ汝ガ身ニ入レリ、入我々入ノ故ニ、我ガ行業汝ガ行業ト成テ必可出離ス、然ハ汝ヲ食テ、汝ガ菩提ヲ訪フベシ、トテ打殺シテケリ。マコトニ慈悲和光ノ心ニテ有ケルニヤ、又只ホシサニコロシケルニヤ、ヲボツカナシ。殿中申次記曰、正月廿三日、鮒一折。二月朔日、鮒廿。例年進上之。赤染衛門集曰、おもひかけたる人の、ふなをおこせて。さまかへて世をこゝろみんあすか川緣路にえつるふな人ぞこれ。返し。あすか川ふちこそせにはなるときけ戀さへふなになりにけるかな。明衡往來曰、波臣、宛然

之群本之に作る

錄ハ鑑カ

子丙穴之味一。注、丙穴者嘉魚所生名也。波臣者鮒也。今宇治川獻鮒魚、其味同丙穴之魚也。文祿四年御成記曰、御七鮒。庖丁聞書曰、鮒の包やき拵樣。六七寸斗のふなの腹の中へ、結昆布、串柿、芥子、榧栗を入燒之。此肴は常に調進する事なし

形狀 ○大和本草曰、近江鮒ハ肩高ク味尤美シ

附錄 屎鮒（クソブナ） 萬葉集曰、詠香塔厠屎鮒奴一歌、香塗流塔爾莫依、川隅乃屎鮒喫有、痛女奴。○讀東新語曰、又多ク以テ屎ヲ爲テ兒女ノ乳名ト、賤ハ之ヲ所ニ以ナリ貴レ之ヲ。男ヲ曰ニ屎哥ト、女ヲ曰ニ屎妹ト

佐介（サケ） 倭名類聚鈔

韓名 松魚 東醫寶鑑

今名 サケ

東醫寶鑑曰、松魚性平味甘、無毒、味極珍、肉肥色赤而鮮明如ニ松節一、故爲ニ松魚一、生ニス東北江海中一

一名 左介 新撰字鏡曰、鮭。左介。鮏。古携反、佐介。本草和名曰、鮭。柳青反、一名年魚、春生而年中死、故以名之、和名佐介。正字通曰、鮏。思今切、音星。說文魚臭也。徐鉉曰、今俗作鮏。字典曰、鮭。山海經註、今名ニ鯸鮐一爲ニ鮭魚一。炮炙論、鮭魚、今謂ニ之河豚一。即フグ也。倭名鈔曰鮏。折青反、和名佐介。今按、俗用鮭字非也。鮭音圭、鯸鮧魚一名也。令義解曰、鮭。謂ニ雜乾魚一也

年魚 倭名類聚鈔魚鳥類曰、年魚者鮭魚也。按、年魚ハ與ニ香魚（アユ）一同名異物也。香魚（アユ）ヲ年魚ト云ル說、萬葉集ニ出タリ。都記云中年号損聞八月五日、先被定伊勢豐受大神宮祢宜新申自正月至五月所供神膳年魚代閑意事。左大弁殿語如讀本國解幷神主解狀無別定詞、若練習之所致歟、予定申云、如廣經朝臣陳申者件深長茅原田依本爲

助ノ下、西野氏校訂本ハ川字ヲ補ヘリ

公田任前司公盛朝臣例歟、彼地子宛件鮎代之由言上之。觀レハ此則年魚ハ爲ニ香魚ニ甚明矣

⿰魚聿 神鳳抄曰、信濃國麻績御厨、上分⿰魚聿百五十尺、同兒一桶云云⿰魚聿三十隻、同兒一桶○按、延喜式第五、齋宮。諸國送納調庸。楚割鮭一百二十隻已上信濃。内膳式ニ、年料信濃國楚割鮭一荷九籠、々別六隻、例貢十月進之。觀此則⿰魚聿ハ鮭ノ字ノ誤ニテ、サケナルコ明ニシテ、其兒一桶ト云ハ、即ハラヽゴ也

あか

おなま 伊勢守貞陸記曰、女房ことば、さけ魚ノ名あかおなま

からく 同上、からさけ、からく

助 常陸國風土記曰、久慈郡助川云云、至ニ國宰久米大夫之時ニ、爲ニ河取レ鮭、改名レ助。俗語謂ニ鮭祖ニ爲ニ須介ー

【集註】延喜式卷第一日、鳴雷神祭一座、鮭五隻。春日神四座祭、散祭料、鮭二隻。大宮賣神四座祭、鮭八隻。平岡神四座祭、祭神料、生鮭一隻。大忌祭一座、鮭八隻。風神祭二座、鮭七隻。四面御門祭、鮭十六隻。御川水祭、鮭五隻。霹靂神祭三座、鮭三隻。六月祭、十二月御贖祭、鮭八隻。准レ此　同卷第二日、御巫奉レ齋神祭、鮭八隻。座摩巫奉レ齋神祭、鮭五隻。生嶋巫奉齋神ノ祭、鮭二隻。每月晦日御贖、鮭二隻。同卷第三日、八十嶋神祭、鮭九十隻。東宮八十嶋祭、鮭十隻。遣蕃國使時祭、鮭廿隻。同卷第五日、齋宮。正月三節料、鮭三隻。同卷第七日、踐祚大甞祭。凡供ニ神御ニ雜物云云、鮭筥二合、別納十隻。同卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、鮭二十隻。凡中男一人輸作物、楚割鮭二斤八兩、鮭二隻、小三隻、信濃國、中男作物、鮭楚割。越中國、中男作物、鮭鮨。越後國、調、鮭。同卷第三十一日、宮內省。諸國例貢御贄。信濃、楚割鮭。若狹、生鮭。丹後、生鮭。但馬、生鮭。同卷第三十二日、大膳上。大直神一座、座別鮭一隻。雜給料、參議已上、人別鮭二分隻之一。五位已上三十八、別鮭二分隻之

二本三雲

一。宴會雜給、親王以下三位已上并四位參議、人別鮭二分隻之一。四位五位并命婦、人別鮭六分隻之一。國栖笛工、人別鮭六分隻之一。平野夏祭雜給料、鮭四十一隻、多加ニ二十隻ヲ。春日祭雜給料、鮭六十四隻半。松尾神祭雜給料、鮭八隻半。釋奠祭別供料、鮭二十隻。同卷第三十三曰、大膳下。九月九日節文人料、五位一人、鮭五分隻之二。妃、鮭十五隻、日二分之一。夫人、鮭十隻、日三分之一。三位已上四位參議、鮭六分隻之一。采女四十七人料、鮭半隻。同卷第三十九曰、內膳司。五月五日節、鮭一隻。供御月料、鮭四十五隻。年料、信濃國、楚割鮭、其荷數者云云、楚割鮭一荷納ニ九籠ニ、籠別六隻、例貢十月進レ之。若狹國、生鮭三擔十三隻三度。越前國、生鮭三擔十二隻三度。越後國、楚割鮭八籠八十隻、丹波國、生鮭三捧六隻二度、丹後國、生鮭三捧十二隻三度。但馬國、生鮭三擔十二隻三度。因幡國、生鮭三捧十二隻三度。同卷第四十二曰、左京職。凡踐祚大嘗大祓所須、鮭九隻。同卷第四十三曰、主膳監、月料鮭廿二隻半。宇治拾遺物語卷第一曰、越後國より鮭を馬におほせて、廿駄はかり粟田口より京へをひ入けり云と鮭を二つひきぬきてふところへ引入てんけり云とこしにさけを二ッはらにそへてさしたり。吾妻鏡卷第十曰、建久元年十月十三日、於ニ遠江國菊河宿ニ、佐々木三郎盛綱、相副小刀於鮭楚割ニ、居ニ折敷ニ、以ニ子息小童ニ、送ニ進御宿ニ。申云。只今削レ之令レ食之處、氣味頗絶妙、早可ニ聞食ニ歟云云、殊御自愛、彼折敷被レ染ニ御自筆ニ曰、まちえたる人のなさけもすはやりのわりなく見ゆる心ざしかな。同卷第十四曰、建久五年二月十四日、佐々木三郎盛綱進ニ生鮭二ニ。越後國所領土產云云、殊御自愛云云、一者被レ施ニ于只今祗候ノ輩ニ云云。陸奧國風土記曰、宮城郡貢鮭。加賀國風土記曰、加賀郡貢鮭。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會鮭百尺。殿中申次記曰、十月三日、鮭二尺、大草三郎左衛

鮭本朝食鑑木版本ハ鮏ノ字ヲ用ヰタリ

門尉。廿七日、鮭十尺。例年進上之、細川右馬頭。つれ〴〵曰、四条大納言隆親卿からざけといふ物を供御に參らせられたりけるを、かくあやしき物まいるやうあらじと人の申けるを聞て、大納言、鮭といふ魚、參らぬ事にてあらんにこそあれ、さけのしらぼし何條事かあらん、鮎のしらぼしは參らぬかは、と申されけり。文祿四年御成記曰、御能之時樂屋、三ノ膳、鮭燒もの。厨吏類記曰、供御次第、六御盤、鮭。又曰、干物削物、楚割鮭ヲ塩ツケズシテホシテ、削テ供之。新猿樂記曰、越後鮭

[形狀] ○本朝食鑑曰、鮭狀似鱒鯇而大圓肥、鱗細青質赤章、腹淡白、肉赤色有細刺、脂多ク味甚厚美ナリ。人人最モ珍賞之ヲ。其肉色色者、味淺次之。頭枕骨甚軟○鯇アメノウヲ也

○苺子 倭名類聚鈔 [今名] ハラヽゴ [一名] 鮭子 延喜式 鮭兒 延喜式卷第三十九曰、內膳司。年料、越前國、鮭兒。越後國、鮭兒。倭名鈔曰、佐介。其子似苺赤光。今按、苺子、即覆盆也。見唐韻 はららこ 天文二年卯月六角殿へ御成次第曰、五獻、けづり物、はららご

[集註] 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、內子鮭一隻。信濃國、中男作物、鮭楚割、氷頭、背腸、鮭子。越中國、中男作物、鮭子。越後國、中男作物、鮭ノ內子、拼子

[形狀] ○大和本草曰、サケノ鮞ヲ國俗ハラヽゴト云、南天燭ノ子ノゴトシ。本朝食鑑曰、鮭子、有二胞、胞中不知幾千粒、大サ如南燭子、上有一紅點、其ノ明透ナルモ亦如瑪瑙珠子、其味殊美ナリ、呼テ曰鮞ト、復稱筋子ト、別有謂白子ト者、如素羅襲、此亦味好シ、俗稱魚子未タ長セ者、然恐是魚雄之臕乎、其他腸膽俱可食耳

○氷頭 延喜式 [一名] 比

豆 倭名鈔魚鳥類曰、氷頭附背腸 本朝式云、年魚氷頭背腸、年魚者鮭魚也。氷頭者比豆也、背腸者美奈和太也。或說云、謂レ背爲ニ背訛一也

【集註】 延喜式卷第二十四曰、主計上。信濃國、中男作物、鮭楚割、氷頭、背腸云云。越中國、中男作物、鮭氷頭。越後國、中男作物、鮭內子、并子氷頭云云。同卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢御贄。越前、氷頭背腸。同卷第三十九曰、內膳司。年料。越前國、鮭兒、氷頭云云。越後國、鮭兒、氷頭云云。丹後國、氷頭一壺。備前國、氷頭十缶二度。廚事類記曰、生物鮎鮭、皮ヲスキテ、ツクリカサ子テモルベシ。上ニ氷頭三枚五枚コレヲモリテ供之

【形狀】 ○本朝食鑑曰、鮭、頭枕骨甚軟ニシテ如ニ瑪瑙一ノ、呼ニ稱ス氷頭一ト、而味モ亦佳也剝レ皮ヲ去レ鱗ヲ而炙ノ食ソトキハ則其香美、入ニ湯中ニ亦不レ羶サカラ也

○美奈和太 倭名類聚鈔

【一名】 美奈加和太 天文写本和名鈔○倭名鈔藏府類曰、三膲。和名美乃和太 背腸 延喜式

【集註】 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、云云鮭背腸各一斤八兩。信濃國、中男作物、背腸。越中國、中男作物、鮭背腸。越後國、中男作物、鮭內子、并子氷頭背腸。同卷第三十九曰、內膳司。年料、越前國、鮭兒氷頭背腸。越後國、鮭兒氷頭背腸。丹後國、背腸一壺

美 倭名類聚鈔

【漢名】 白魚 本草

【今名】 ニゴヒ

證類本草曰、白魚。大者六七尺、色白頭昂生ニ江湖中一。本草綱目、白魚集解曰、鮊形窄腹扁、鱗細、頭尾俱向レ上、肉中有ニ細刺一

【一名】 美鯉 精進魚類物語。倭名鈔曰、鰀。文字集

略云、鰉。鯉屬也。漢語抄云、美○山海經、鰉魚未詳　〔形狀〕○本草啓蒙曰、白魚（ニゴヒ）琵琶湖ニテ早春トル、形狀鯉魚ニ似テ體圓シ、色白クメ鯉魚ノ黄色金光ナルニ異ナリ、鰭ハ黄赤色ヲ帶、大ナル者二尺ニ過ギズ

波曾（ハソ）倭名類聚鈔　〔漢名〕未詳　〔今名〕ハス

〔一名〕しらはす　精進魚類物語。倭名鈔曰、鰣。漢語抄云、波曾○鰣ハ水産ノヒラコノシロ也　〔形狀〕○大和本草曰、琵琶湖ニ多シ、長七八寸、細鱗白色尾鬣赤、夏時出連行。伴存云、ハスハアユニ似テ身ウスク、口ノ辺リニ砂ノ如キイボ多シ、鮫（サメ）ノ如シ

阿米魚（アメノウヲ）延喜式　〔漢名〕鯇魚　本草　〔今名〕アメノウヲ

本草綱目曰、鯇魚。釋名時珍曰、鯇又音混、郭璞作レ鯶、其性舒緩ナリ、故ニ曰レ鯇、曰レ鰀、俗ニ名ニ草魚ト、因ニ其食ニレ草也。江閩畜レ魚者、以レ草飼レ之焉。集解、藏器曰、鯇生ニ江湖中ニ、似レ鯉。時珍曰、鯇◦郭璞云、鯶其子似レ鱒而大是矣。其形長、身圓肉厚而鬆、狀類ニ青魚ニ、有ニ青鯇白鯇二色ニ。白者味勝　〔一名〕阿米　倭名類聚鈔曰、鯇。和名阿米。楊氏漢語抄云、水䱉。一云江鮭、今案本文未レ詳　雨ノ

魚 尺素往來 水鮭 摩洨壒嚢鈔曰、水鮭江鮭同鯇同 江鮭 見上 集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物。云云阿米魚各六斤。近江國中男作物、阿米魚ノ鮨。同卷第三十一日、宮內省。諸國例貢御贄。近江、阿米魚。同卷第三十九日、內膳司年料。近江國、阿米魚。殿中申次記曰、八月朔日、禁裏樣ヘ參。初鯇一折、例年進上之、佐々木阿郎三郎

形狀 ○本朝食鑑曰、鯇。江州琵琶湖多采レ之、形似ニ鱒鮭ニ而長身、厚肉、肉色不レ赤、鱗モ亦不レ小、有ニ青白二種一、白色者爲レ美ナリト、然モ不レ及ニ鮭鱒一。本草啓蒙曰、鯇魚アメノウヲ、形狀ハ松魚及鱒魚ニ似テ、脊上尾ニ近クメ黑甲アリ、鱗細ナラズ、大ナル者ハ長サ二尺ニ至ル、ソノ肉色白シ、又色淡紅ナル者アリ、ソノ子大サ梧桐子ノ如ク、色黃赤ニメ透明ナリ

安由 倭名類聚鈔 漢名 香魚 雨航雜錄 今名 アイ 一名 鮎 八幡愚童訓曰、武內言ク、余

甌江逸志曰、香魚ハ鱗細ニシテ不レ腥、春初生月長一寸、至テ冬月ニ長尺餘、則赴ニ潮際ニ生レ子、生スレハ已ニ輒チ槁ス、唯雁山溪澗有レ之、他ニ無レ有也。一名記月魚

現ニ一ノ驗ヲサセ給ヘト申、詞畢ラヌ先ニ、放レ光照ニ十方ニ言ク、一ノ針ヲ入レヨ海ニ、三尺鮎食付テ可レ上ト云云、任ニ神託ニ針ヲ入レハ海、三尺ノ鮎ニ食付テ上ル。藻塩草曰、鮎。まつらの鮎、神功皇后始て釣給也。此事は異國退治の時、まづまつらの海にて、つりばりをくだし給ひて、異國たいぢあるべくは、則魚をつりえんとて、直に釣をくだし給に、則つり給ぬ。その魚これ鮎之と云々、占てにつり給しこ。玉造曰、膜沸ニ東河之鮎一(

按、萬葉集卷第十三曰、隱來之、長谷川之、上瀨爾、鵜矣八頭漬、下瀨爾、鵜矣八頭漬、上瀨之、年魚矣令咋、下瀨之、鮎矣令咋、麗妹爾、鮎遠惜、投左乃云云。同卷第十九曰潜鸕歌、云云流辟田乃河ノ瀨爾、年魚兒狹走リ云云。反歌。毎年爾、鮎之走婆、左伎多河云云。此ヲ鮎ヲアユトスル也。倭名鈔曰鮎。和名安由。楊氏漢語抄云、銀口魚。又云、細鱗魚。西宮記曰、禁河夏供鮎正月供御神樂內膳供御例云、正月元日、朝供奉屠蘇御膳事、押鮎一盤、切盛、置頭二串、煮塩鮎一盤、同切置頭。延喜式卷第三十九曰、內膳司。諸節供御料、云云煮塩鮎。右從元日至于三日供之。年料。美作國、鮨鮎。三代實錄卷第十三曰、淸和天皇貞觀八年六月廿八日、辛丑、是月、天下大旱、民多飢饉。東堀河多鮎魚、京師人捕啖之。厨事類記曰、葛野河所進鮎一種。砂石集曰、山川ニ罷リテ、大ナル鮎ヲ三十バカリ取テ歸テ、少々ハ煮テクヒ候。殘リハスシニメヲキ候○鮎ハナマズ也。古昔アユトス、非也。農圃六書曰、鮎魚、鮧魚也。大首方口、背青黑無鱗多涎。通雅曰、鮎季兼切、口方無鱗、江東謂之鮧

銀口魚 倭名鈔

阿由 萬葉集卷第五曰、麻都良河波、可波能世比可利、阿由都流等云云。麻都良奈流、多麻之麻河波爾、阿由都流等云云。母能須蘇奴例豆、阿由都流良武。同卷第十九曰、鸕河立チ、取左牟安由能、之我婆多婆云云。本草和名曰、鮧魚。和名阿由○鮧魚ハナマズ也

阿喩 日本書紀天智天皇童謠曰、美曳之弩能、曳之弩能阿喩、阿喩擧曾播云云。釋日本紀曰、阿喩云云吉野鮎鮎也。言吉野河多鮎也

年魚 日本書紀景行天皇曰、尾張國年魚市郡熱田社。萬葉集卷第十三曰、小沼田之、年魚道水乎、間無曾云云。同卷第三曰、櫻田部、鶴鳴渡、年魚市方。同卷第六曰、帥大伴卿遙思芳野離宮作歌一首。隼人乃、湍門乃磐母、年魚走芳野之瀧爾、尚

不及家里。同卷第七曰、年魚市方、塩干二家良思、知多乃浦爾云云。○倭名類聚抄曰、尾張國愛智、阿伊知。古事記曰、遠津年魚目目微比賣。又曰、到坐筑紫末羅之玉島里而、御食其河邊之時、當四月之上旬、尒坐其河中之礒、拔取御裳之糸、以飯粒爲餌、釣其河之年魚、故四月上旬之時、女人拔裳糸以粒爲餌釣年魚、至于今不絕也

細鱗魚 日本書紀神功皇后夏四月壬寅朔甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉島里小河之側、於是、皇后勾針爲鉤、取粒爲餌、抽取裳糸爲緡、登河中石上、而投鉤祈之曰、朕西欲求財國、若有成事者河魚飲鉤。因以擧竿乃獲細鱗魚。時皇后曰、希見物也。故時人號其處曰梅豆羅國。今謂松浦訛焉。是以其國女人、每當四月上旬、以鉤投河中、捕年魚、於今不絕、唯男夫雖釣以不能獲魚。按、麗江名勝志曰、金沙江之三面環麗江府、古名麗水、出細鱗魚、大者三尺許、肥甘異於常魚。觀此則細鱗魚亦非和名、然香魚及三尺者無之。龍沙紀略曰、遮鱗魚類白魚而首銳无骨味若鱸、一名赭鱗、一名細鱗、歲貢百尾、九月棲江濱、捕而言之、蓋細鱗亦非香魚可證。古說ニ赭鱗サケトス

王魚 詞林采葉抄曰、云云今ノ松浦之。今世ニモ此河ノ鮎ヲ男ノツルニハツラレズト申、王魚トイヘル名是之

かつらあゆ 職人盡歌合曰、いをうり。かつらあゆとりてうるかとやみまたば月のあたひはなくなりぬべし

○阿由故 萬葉集

一名 年魚小 萬葉集卷第三曰、春去奴禮婆云云河湍爾波、年魚小狹走。同卷第五曰、波流佐禮婆、和伎覇能佐刀能、加波度爾波、阿由故佐婆斯留云云。堀河院次郎百首曰、うぶねおほくくたす時しもたき川にやなくつれして鮎子さはしる

小鮎 江家次第曰、二孟旬云云氷

魚替、夏以小鮎替之。扶桑略記廿七、大内記慶滋保胤作池亭記、其文曰云云夏天納涼之客、已无漁小鮎之涯

和可由 萬葉集卷第五曰、麻都良能可波流、麻都良能可波能、可波奈美能云云。麻都良河波、多麻斯麻能有良爾、和可由都流云云。和可由都能、和可由都流云云。

小年魚 類聚國史曰、弘仁五年二月乙巳勅玉、水陸之利、公私所倶、捕之不時物無繁育、如今百姓好捕小年魚、雖所獲多、於物無用、宜仰山城大和河內攝津近江等諸國令加禁斷、唯四月以後不在禁限。山家集曰、しらなはにこあゆひかれてくだるせにまちまふけたるこめのしきあみ

【集註】日本書紀曰 應神天皇十九年冬十月戊戌朔、幸吉野宮、時國樔人來朝云云其土毛者、栗菌及年魚之類焉。賦役令曰、若輸雜物者、煑塩年魚四斗。延喜式卷第五曰、齋宮。凡諸國送納調庸、云云煑塩年魚二石、鮨年魚一石、伊勢。同卷第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物、火乾年魚、押年魚、煑乾年魚、各二斤。漬鹽年魚、煑鹽年魚各七斤。伊勢國、中男作物、煑鹽年魚。尾張國、中男作物、煑鹽年魚。駿河國、中男作物、火乾年魚、煑鹽年魚。近江國、中男作物、煑鹽年魚。美濃國、中男作物、煑鹽年魚。鮨年魚。但馬國、中男作物、煑鹽年魚。因幡國、中男作物、火乾年魚。伯耆國、中男作物、煑乾年魚。播磨國、中男作物 煑鹽年魚。備前國、中男作物、押年魚、煑鹽年魚。備中國、中男作物、押年魚、煑鹽年魚。周防國、中男作物、煑鹽年魚。紀伊國、中男作物、押年魚、煑鹽年魚。阿波國、中男作物、鮨年魚、煑鹽年魚。伊豫國、中男作物、煑鹽年魚。土左國、中男作物、煑鹽年魚。筑前國、中男作物、押年魚、鹽漬年魚。筑後國、中男作物、押年魚、煑鹽年魚、鮨年魚、漬鹽年魚。肥後國、中男作物、押年魚、煑鹽年魚、鮨年魚、漬鹽年

魚。豐前國、中男作物、漬鹽年魚、鮨年魚。豐後國、中男作物、押年魚、鮨年魚、煮鹽年魚。同卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢御贄。但馬、鮨年魚。美作、鮨年魚。同卷第三十九曰、內膳司。六月神今食料、煮塩年魚云云各二升。新嘗祭供御料、煮塩年魚云云各二升。右夜料。煮塩年魚云云各二升云云、右豐樂料。云云煮塩年魚各二升。九月九日節、押年魚云云各八兩。供御月料、云云押年魚各十六斤八兩。年料、伊賀國、鮨年魚二擔四壺、塩漬年魚二擔入二折櫃一。伊勢國、鮨年魚二擔四壺二度。近江國、煮塩年魚二石。美濃國、火干ノ年魚一擔八籠、鮨年魚四擔八壺。丹波國、鮨年魚二擔四壺、塩漬年魚二擔入二折櫃一。播磨國、鮨年魚二擔四壺。備中國、煮塩年魚八缶。紀伊國、鮨年魚二擔四壺。土佐國、押年魚一千隻、煮塩年魚五缶。太宰府、鮨年魚二百二十三斤六缶、煮塩年魚二十缶云云已上參作。源氏物語とこなつ曰、にし河よりたてまつれるあゆ。侍中群要曰、山城國宇治、御網代、每日進二鮎魚一、埴河供御所每日進二鮎魚一。伊勢國風土記曰、安濃郡美濃夜川出年魚。豐後國風土記曰、日田郡石井鄉中有河、名曰阿蘇川、其源出肥後國阿蘇郡小國之峯、流到此郡、即球珠川合爲一、川名曰日田川、年魚多在。出雲國風土記曰、意宇郡筑陽川有年魚、玉作川有年魚、來待川有年魚、出雲郡意保美川、有二年魚少少一、仁多郡灰火小川有二年魚一。飯石郡三屋川、有二年魚一。須佐川、有年魚。盤鉏川、有二年魚一。大原郡須我小川、有二年魚少少一。和泉國風土記曰、大鳥郡出見川出年魚。伊賀國風土記曰、伊賀郡鳥篩原川出鮎。鳥野川出鮎。駿河國風土記曰、益頭郡物部川出鮎。類聚雜要抄曰、御齒固用途料、伊勢鮑川御厨白干鮎、煮塩鮎。人車記曰、仁安三年八月十日、今日任大臣節會也。次居鮎燒物。明月記曰、嘉祿三年四月七日、於吉祥院前河有取鮎人、近邊神人等、四至之內殺生禁制之由制之云々。蜻蛉日記曰、いさ

とハら
ノ誤カ

千、群
本子
後藤本
于に作
る
おせく

ゝかまどろめば、ふなばたをごほ〳〵とうちたくをとに、われをしもおどろかすとんやうにぞさむる。あけて見れば、よるのあゆいとおほかり。笠掛記曰、一とせ於二紫野馬場一、諏訪の笠縣興行には、あゆを十六、稍の穗につらぬきて、松の枝にかけて、土にさしたりし也。袖中抄曰、万葉抄云、くすひとゝは、よし野川のおくに、くす人と云ゑびすの、おほやけにもしられたてまつらで、かくれてありけるを、神功皇后又淸見原ノ天皇などのおはしましけるに、見つけられまいらせて、あゆといふ魚や、又若菜などをまいらせたりけるに、それをめしたりけるをみて、よろこびて、口をたゝきて、ふえをふきける之。さればわかなつむとはいへる之。さて今にいたるまで節會には、そのくす人ふえたくみはまいりて、御菜をまいらするなり。正月節會にかならずまいりて、わかなまいらする之。續古事談曰、大入道殿(兼家公)、攝政ニヲハシケル時、法住寺ノヲトヾヨリハシメテ、ヲホク上達部、一種物ヲグシテマイリアツマリ給ケリ。カ子テチギアリケルナルベシ、小一条大將(濟時姉小路祖)ハ、銀ノ鮨鮎ノ桶ニ、アユヲヲリビツニ入テイレラレタリ。四條流庖丁書曰、鮎ヲ串ニ可レ差事ハ、春ヨリ七月中旬迄ハ、頭ヲ上ヘナシテサスベシ。其後ハ頭ヲ下ヘ成テ可レ差也」上リ鮎ノ時ハ、頭ヲ下ヘシテ可レ差也

形狀

常陸國風土記曰、久慈郡、所レ有淸河。多取二年魚一。大如レ腕之。駿河國風土記曰、止駄郡餘野川、又出二怪石一、年魚、以レ尺箏レ之、充二內膳司之千之廚用一。宇治拾遺物語卷第七曰、今はむかし、三條中納言といふ人ありけり云々又すしあゆのおせくゝにひろらかなるが、しりかしらばかりをして、卅ばかりありたり云々次にあゆを二きりばかりに食切て、五六ばかりやすらかにまいりぬ ノ本 朝食鑑曰、阿由(アユ)。狀似二竹葉一而細長、頭尖嘴白、背靑腹白、鱗極細小、鰭端尾端有二微赤色一、肉薄潔白不レ腥、味

州刊本松ニ作ル　習、群本醫トアレド誤植ナラン。古寫本鑑トアルニヨルベシ　ヽに今昔物語ニハおほくにニ作ル

極甘美。子如ニ芥子(カラシ)ー甚多。三四月如ニ柳葉ー、五六月大者四五寸、七八月大者八九寸、或盈レ尺。其子滿レ腹

○鮎兒(コノアユ)　類聚雜要抄　[今名]　アユノアハコ

[一名]　鮎鰤　駿河國風土記曰、伊熟原郡浦田河貢鮎鰤、安弁郡中河內貢鮎鰤○字典曰、鰤。說文魚子也。正字通曰、鰤。魚子總名。類聚雜要抄曰、平大饗目錄、雜坏物、海月、鯛

習、鮎兒、鰷　[集註]　人車記曰、保元二年八月有任大臣事、先一折敷雜坏物四種、海月蜷鮎子鮑云々。延喜內膳式曰、太宰府、內子(コモリ)鮨年魚三十六斤一缶

之呂乎(シロヲ)　倭名類聚鈔　[漢名]　鱠殘魚　本草　[今名]　シロウヲ

本草綱目、鱠殘魚。註曰、鱠殘出ニ蘇州浙江ー、大者長四五寸、身圓如レ筋、潔白如レ銀無レ鱗、若ニ已ニ鱠之魚ー、但目有ニ兩黑點ー爾、彼人尤重、小者曝乾以貨ニ四方ー。小知錄曰、鱠殘出ニ太湖ー、如ニ銀魚ー而大

白魚　[一名]　シラヲ

尺素往來○唐ニテ白魚ト云ハ、ニゴヒト衣魚(シミ)ト也。倭名鈔曰、鮊魚。文字集略云、鮊。魚薄身白色也。漢語抄云、之呂乎　塵添壒囊抄曰、鮊(シラヲ)○字典曰　鮊　博雅、鮊鱎也。鱎字註曰、白魚、別名。ニコヒ也。正字通曰、鱎。魚色白頭功大者長六七尺。杜詩ノ白小ハ麪條魚ニメ、シラウヲ也。鱠殘魚ノシロウヲト別也○駿河國風土記曰、益頭郡島田驛貢鮎鮊諸鮓。正字通曰、鮊。晋白、鱎別名。又錦、本艸、鱎一名白魚、卽ニゴヒヲ云。本草啓蒙ニ、正字通ノ鮊ヲ鰣魚ノ一名トス非也

[集註]　出雲國風土記曰。嶋根郡、朝酌促戸渡云云、或製白魚於鳥袴捕云云、自茲以東、至大井

濱之間、南北二濱、並捕白魚水松也。凡南入海所レ在白魚、海鼠、鰝鰕、海松等之類至多

【形状】○本草啓蒙曰、鱠殘魚(シラウヲ)、長サ二三寸、潤サ二三分、身扁ク觜尖リテ、香魚(アユ)ノ形ニ似テ長シ、鱗ナク、全ク白色ニメ、タヾ目ニ黒睛アルノミ、生ナル時ハ微青色ヲ帶。按ニ、シラ魚ハ觜圓クシテ不尖、水中ニアル者淡黄透徹メ背ニ淺黒細點アリ、死メ後白色涎沫アリ

○ひを　源氏物語　即白小也

【一名】氷魚　萬葉集卷第十六曰、氷魚(ヒヲ)曾懸有(リカレル)。倭名類聚鈔曰、鮊。考聲切韻云、鮊。白小魚名也。似二鮊魚一長一二寸者也。今案、俗云氷魚是也。初學記冬事ノ對ニ、雖レ有(モ)二氷魚(ト)一霜鶴之文一、而尋二其義一非也。物理小識曰、白小有二數種一、南通州以二白小一疊成メ如レ片長寸者皆爲二銀魚一、北方寶坻大數寸。時珍食物本草曰、銀魚生(ス)二江湖中一、色白如レ銀、身無レ骨長一二三寸、圓細如二燈心一者、乃爲二眞也。味極鮮好可(シ)下以供二上客一佐(ル)中樽酌(ヲ)上、土人曝而貨(ル)二之四方一、尤爲二珍美一。但不レ可レ失(ツ)二風露水(ヲ)一、恐(ハ)致二變壞一也

【集註】延喜式卷第三十一曰、宮内省。諸國例貢御贄。山城、氷魚。近江、氷魚。同卷第三十九曰、内膳司。年料。山城國、氷魚。近江國、氷魚。山城國近江國氷魚網代(アジロ)各一處、其氷魚始二九月一迄二十二月三十日一貢之。源氏物語あげまき曰、あじろのひをも心よせたてまつりて、色いろの木の葉にかきまぜて、もてあかふをしも人などはいとをかしきことにおもへれば。仙覺萬葉集註釋卷第十六曰、水魚(ひを)をとらんには、宇治川へこそゆくべきに云々。侍中群要曰、諸使事、地黃煎氷魚使藏人所上﨟瀧口。宇治拾遺物語卷第五曰、是もいまはむかし、ある僧人のもとへいきけり。酒などすゝめけるに、氷魚はじめていできたりければ、あるじめづらしく思て、もてなしけり。あるじようのことありて、うちへ入て、またいでたり

けるに、この氷魚の、ことの外にすくなくなりたりければ、あるじいかにとおもへども、いふべきやうもなかりければ、物がたりしゐたりけるほどに、この僧のはなより、氷魚のひとつふといでたりければ、あるじあやしう覺て、そのはなより、ひをの出たるは、いかなることにか、ととひければ、とりもあへず、此比の氷魚は、目はなよりふり候なるぞといひたりければ、人みなはとわらひけり。花鳥餘情曰、今案、近江の田上の網代にもれたる氷魚を、山城國宇治にてとるといへり。一說あじろとは網代守人のみにあらず、宇治に網代と云所あり、そこを栖にして網代をつかさどる也。壒嚢抄曰、重陽節會事、九月九日也。此日群臣氷魚ヲ賜ル事アリ。凡ソハ、十月ノ旬ニ、氷魚ヲ賜ル事トナン。思ひのまゝの日記曰、十月一日は旬の儀、四月におなじ、けふはひをといふ魚を、公卿にたまふ。かくなどいとおもしろし。洞院家記曰、宗治二年十月廿二日乙未、今日上皇御二逗留一リ宇治一也云云、御舟被レ下二網代一御二覽氷魚一。北山抄曰、九月九日節會事。或給氷魚、其儀如何。延喜十三年九月九日云云、于時從御所、右少將藤俊蔭、給氷魚一高坏。又曰十月給氷魚、其儀、采女二取氷魚指塩進來坐貫首人西頂下座給之置之盤上復座目出居令召內豎內豎二人參上取氷魚等次第持到各以匙一度搔取指塩渡上。江家次第曰、二孟旬儀。十月給氷魚。給二氷魚一儀、番奏之後、未レ奏二內案一之前給二氷魚一、其儀陪膳ノ采女、隨二天氣一執テ供二御膳之氷魚一、來二於王卿之座一、貫首者跪テ傳取テ置二大盤一、著二本座一、令レ召二內豎一引下テ每人以レ匕ヲ一度搔取濟ナリ。頭書云、後朱雀院御時、給二氷魚一、行事故經成卿爲二五位藏人一數日安煩遂自二御膳宿一持二來件氷魚差鹽等一給二公卿一云云、四條記預盛二片垸一供レ之、今案、御厨子所御膳可レ有二件氷魚一歟

形狀

氷魚ハ古貢獻セシ山城近江ノ網代今絕果タリ、今近江湖水ニテ

十二月寒中ニ取リ京師ニ此ヲ出ス、白色透明一寸許甚美也。小尾分レ、尾ノ上ト腹ニ細黑点アリ、口尖リ殆ト香魚子（アユコ）ニ似テ小也。其眼黑色、其色香魚子ノウルミタル者ニ異也。其味ハ香魚子ニ勝レタリ。此即古ニ云ニ氷魚ニ也

江州湖氷魚圖



按ニ氷魚ハ九月十月ニ出ルヿ諸書ニ見エタリ

伊具比（イグヒ）　出雲國風土記

［漢名］未詳　［今名］ウグヒ

［一名］伊久伊　出雲國風土記曰、意宇郡伯太川有年魚、伊久伊

ウグヒノ魚　源平盛衰記。言塵集曰、顯仲。篝火の光もまがふ玉藻にはうぐひの魚もかくれざりけり。私云、うぐひとは魚の名也。又鵜のくひたる魚也。此歌は鵜食ときこえたり

［集註］出雲國風土記曰、意宇郡、飯梨川、有ニ年魚伊具比ハ、意宇川、有ニ年魚伊具比。出雲郡出雲川、有ニ伊具

心をまなき本ノマヽ

比飾鮓等之類一。神戸川有ニ年魚鮭鰖須伊具比。延喜式卷第三十九曰、内膳司。旬料。大和國吉野御厨云云但云云并伊具比魚煮凝等隨レ得而進。源平盛衰記卷第廿五曰、吉野國栖トハ舞人也。國栖ハ人ノ姓也。淨見原ノ天皇、大伴王子ニ襲レテ、吉野ノ奧ニ籠リ、岩屋ノ中ニ忍御座ケルニ、國栖ノ翁栗ノ御料ニウグヒト云魚ヲ具シテ供御ニ備ヘ奉ル。朕帝位ニ上ラバ、翁ト供御トヲ召ント被ニ思召ニケルニヨリ、大伴ノ王子ヲ誅シ、位ニ即テ、召レシヨリ以來、元日ノ御祝ニハ國栖ノ翁參テ、桐竹ニ鳳凰ノ裝束ヲ給テ舞フトカヤ。豊ノアカリノ五節ニモ、此翁參テ御料ニウグヒノ魚ヲ持參シ、御祝ニ進ル ○大和本

〔形狀〕草曰、ウグヒ色赤シ、長五六寸ニ不過、ウグヒハイダニ似テ窄シ、腹白色微紅ヲ帶、背淡青黑色、鬣黃色ニ赤ヲ帶、細鱗骨多シ

波江（ハエ） 倭名類聚鈔 〔漢名〕鰷魚 本草 〔今名〕ヤナキバヱ

本草綱目曰、鰷生ニ江湖中一小魚也。長サ僅ニ數寸、形狹而扁、狀如ニ柳葉、鱗細ニシテ而整潔、白可レ愛ス。性好ニ群游ス 〔一名〕鰚 倭名鈔曰、鮠。漢語抄云、波江。又用ニ鰚字ハ、所レ出未レ詳。本草ノ鮠魚及ビ正字通ニ鮠、似ニ鮎而大、白色背有ニ肉鬐ト云者ハ、モダマ也。通雅ニ鮎又名鮠ト云ハ、ナマズ也。品字箋ニ鮠、一名河豘、即フグ也。藻塩草曰、鰷。冬河のきしの下ゆく水ぬるみはえある世にもあひにけるかな。〔ふしつけしおどろが下にすむはえの心をまなき身をいかにせん 䱇（ハエ） 類聚雜要抄曰、伊勢䱇（ハエ）川御厨○字典曰、䱇。與レ鮀同。爾雅、鯊鮀註、今吹沙、即スナフキ也 鱦 文祿四年御成記曰、三

ノ御膳鯔、御相伴ニハ膳鯔。名物攷曰、家語云、魚之大者名爲ニ鰣鰭一、小者名レ鯔。正字曰、鯔。時正切、音盛。爾雅、鯔小魚。註、今江東亦呼ニ魚子未レ成者一爲レ鯔。臺灣縣志曰、鯔魚、色靑体圓、而短。味極腥、小者甘脆

【集註】十訓抄曰、自葛川邊に臨て、衣にたまだすきして、魚をうかゞひて、ちいさき鱸を一二取て持たりけり。山背國風土記曰、久世郡横斎鮠、互掠鄉幷池沼産鯉鮒鮎鮠云云等、東道郡宇治川貢鯉鮒鮖鮠等。大和國風土記曰、宇陀郡阿陀川出鮎鮠等。伊勢國風土記曰、員辨郡雲宇途川出鮠。參河國風土記曰、形原郡石座河出鮠。武藏國風土記曰、荏原河貢鮎鮠。加賀國風土記曰、加賀郡貢鯉鮒鮎鮠。山家集曰、こはへつどふぬまの入江のものしたは人つけをかぬふしにぞ有ける

【形狀】○本朝食鑑曰、波惠(ハエ)、狀似ニアユ一而白色、背淡黑、略帶ニ靑色一。性好群集、浮ニ游于水上一。味甘淡、稍美而不レ腥。波惠(ハヌ)嗜レ蠅、故漁人用ニ馬尾或鯨鬚一、摸シテ成シ蠅頭一、着ニ長縷一釣レ之。本草啓蒙曰、一種ヤナギハエアリ。形相似テ狹ク、脇ニ一黑條アリ。集解ニ說クトコロ此魚ニヨク的セリ

【正誤】大和本草ニ、倭俗鰒ノ字ヲハエトヨム。萬葉集ニ書ケリ。本草啓蒙ニモ、ハヱヲ萬葉集ニ鰒ト出ルヨシ記セルハ倶ニ杜撰也。萬葉集中ニ鰒ノ字ヲハヱト訓タル事ナシ。萬葉集第六ニ、鰒珠(アハビタマ)、第七ニ鰒玉(アハビタマ)、第十一ニ鰒貝之(アハビノカヒノ)ト覯タリ。令、延喜式、倭名鈔ニ鰒ヲアハビニ用ヒタリ。然ドモ鰒ハナガレコ也。字典曰、鰒。廣志、鰒無レ鱗有レ殼、一面附レ石細孔雜雜、或七或九

○白鮠　精進魚類物語

【漢名】白鰷

【今名】シロバヱ　品字箋

品字箋曰、白條。形狹而長。楊州畫舫錄曰、淮南魚鱗甲天下云云。果鱗白鰷柔積麂封

【一名】シラハヘ

赤ノ下、箋注本ハ目字ノ脫トス

塵添壒囊鈔曰、鰯(シラハヘ)。○正字通曰、鱊。說文、魚名狀似レ鰕無レ足、長寸大如二釵股一出二遼東一

集註 精進魚類物語曰、いかなるはやりおのしら鮠などもたやすくとをるべきやうもなし

形狀 ○大和本草曰、白ハエアリ、大ナリ

○もろこ 精進魚類物語

形狀 ○大和本草曰、モロコハエニ似テ頭小キニ、腹少ヒロク形マルシ、西州ニテアブラメト云、又アブラハエト云

○をいかは 精進魚類物語

漢名 鬪魚 花鏡

華夷鳥獸考曰、鬪魚。大如指長二三寸、身有花文、紅綠相間、尾鮮紅有黃點、善鬪、兒輩多盆蓄之、每鬪相持不舍久之勝負乃決、負者躍而遊顏色萎黯、勝者洋洋自得顏色充如也、物之好勝一至此哉

形狀 ○本草啓蒙曰、オヒカハアリ、長サ六七寸、體扁ク薄クメ腹下ノ鰭最長シ、腹ニ紅ト綠トノ細道横ニ連リテ美ハシ

麻須(マス) 出雲國風土記

漢名 鱒魚 本草

今名 マス

本草綱目曰、鱒魚。狀似レ鯶而小、赤脈貫レ瞳、身圓而長鱗細二於鯶一、靑質赤章

一名 萬須 倭名鈔曰、鱒、七卷食經云、鱒。一名赤魚、似レ鯶赤目者也。和名萬須

末須 本草和名曰、鱒魚。一名赤目魚、一名赤目鱒。和名末須

万須 新撰字鏡曰、鱒。徂本反、上万須。䱙万須。三代實錄卷第六曰、貞觀四年九月廿三日己丑、阿波國板野郡人從五位下行明法博士粟凢直鱒

麻呂云云等、賜ニ姓栗宿祢一。玉造曰、翠鱒之曰。拾芥抄曰、宮咩祭文。維永承△年云云、鱒ノ酬益益々。續日本紀第廿二曰、天平寶字三年六月、詔、伊夜益須益尓。三代實錄第三十八曰、元慶四年十二月四日、策命。但攝政之職波今毋弥益々毋勤奉仕禮止

【集註】延喜式卷第三十一曰、宮内省。諸國例貢御贄。近江、鱒。同卷第三十九曰、内膳司。年料。近江國、鱒。山城國風土記曰、久世郡畦田川出鮎鱒等。出雲國風土記曰、出雲郡出雲川有年魚鮭麻須。仁多郡室原川有年魚麻須魴鱧等類。阿伊川有年魚麻須。海潮川有麻須之。餘畧　陸奥國風土記曰、宮城郡貢鱒。加賀國風土記曰、加賀郡貢鱒。小濱川貢鮑鮭鮎鯇等。備美饗加茂簗川貢鮑鮭等。類聚雜要抄曰、母屋大饗、饗膳鱒立盛。祇園會御成記曰、さかなます。朝倉亭御成記曰、やきもの鱒。人車記曰、仁安三年八月御ツハ御裝束、第五生物鯉雉鱒鯛

【形狀】本朝食鑑曰、鱒狀類レ鮭ニ而鱗細カナリ於鮭ヨリ、赤脉貫脣青質赤章、肉赤ク多レ刺、膏脂美ニナリ於鮭ヨリモ

○腹赤　三代實錄　【一名】赤腹魚　文德實錄　腹赤魚　三代實錄　波良可　天文写本和名鈔　波良可

倭名類聚鈔曰、鰚魚。辨色立成云、鮐魚、波良可。音宣。今按所レ出未レ詳。本朝式用ニ腹赤二字一。新撰字鏡曰、鰚。波良加。類聚名義集曰、鰚。音宣、ハラカ未詳。鮐魚同。塵添壒囊抄曰、腹赤魚トテ、筑紫ヨリ奉也。昔ハ節會ナンドニ、擁テ供シケルニヤ。腹赤ノ食樣トテ、食サシタルヲ皆取渡シテ食給ケルトナン。景行天皇ノ御時、肥後國毛宇土ノ郡長濱ニテ此魚ヲ釣リ奉ヲ云云

鯑　源平盛衰記卷第七曰、筑紫ヨリ鯑ノ使ノ上ルコソ、行程十五日トハ聞エシカ。同卷第二十五曰、鯑奏トハ魚也。天智天皇ノイマダ位ニ即給ハザリケル時、君ハ乞食ノ

年中行事歌合ノ文ハ群本ト多少ノ異同アリ

出御座スト申ケレバ、我ハ帝位ニツキテ、乞食スベキニアラズ、備ヘル相文推ニ通輿ニ御位以前ニ此間ヲ來サントテ、西國御修行アリ、筑後國江嶋小佐嶋ト云フ所ヲ通ラセ給ケルニ、疲ニ臨ミ給ヒタレ共、供御進スル者ナカリケリ。網ヲ引海人ニ、魚ヲメサレテ、御疲ヲ休メサセ給ヒ、我位ニツキナバ、必供御ニメサレント被思召、其名ヲ御尋アリケレバ、鰚ト奏シ申ケリ。帝位ニツカセ給テ、思召出ツ、被召テ、供御ニ備ケリ。其ヨリシテ此魚ハ祝ノタメシニ備フト申

〔今案〕公事根元曰、はらかとは鰚の事也。年中行事歌合曰、つくしよりはらかの魚とてたてまつるなり。むかしは節會の御膳などにもやがて供し奉るにや。はらかのくひやうとて、くひさしたるをみなとりわたしてくひけり。いとおもきらはしきやうに侍り。景行天皇の御とき、肥後の國守土のこほりちはまにて、この魚をつりてたてまつりけるを、としごとの節會にくうすべきよしさだめをかれたる也。元日にさだめられたれどもぢさんなれば七日にもたてまつるとぞ。はらかとは鱒の魚の事也。厨事類記ニ、鱒ハ鮭ノコト也ト云、鱒肉赤クメ松魚ニ似タルヲ以テ也。故ニ貞陸記ニ、松魚ヲアカオマナト云リ。内侍所神具圖、進物所、御菜杯腹赤ノ平盛ニ肉色ヲ赤クスルトキハ、腹赤ハマスタルノ證也〇ちかや草多田義俊曰、並河五一郎大和志吉野の条に、鱒を腹赤ノ奏の故事とす、腹赤は肥後より献して、吉野よりは献せず。通說鱒なりとあれども、師遠の年中行事によれば、鱒よりは大魚にして尓倍といふ魚ならん、と新井翁も論じをかれたり。山家集ニ、つくしにはらかと申いをのつりを十月一日におろすえ。しはすにひきあけて京へはのぼせ侍る。そのつりの繩、はるかにとをくひきわたして、とをる船のその繩にあたりぬるをばかこちかゝりて、かうけがましく申て、むつかしく侍るえ。その心

噌ハ贈トアルベキカ

をよめる「はらかつるおほわたさきのうけ緒に心かけつゝ過んとぞおもふ。トミユ。然レバハラカハ冬月ニ釣ル尒倍此也。釋日本紀曰、肥後國風土記曰、玉名郡長渚ノ濱在郡西 昔者大足彦天皇景行誅ニ球磨噌唹ヲ還駕之時、泊ニ御船於濱ニ云云、又御船ノ左右遊魚多之。棹人吉備國朝勝見以ノ鉤釣之、多有所獲。即獻ニ天皇ニ。勅シテ曰、所獻之魚此爲ニ何魚ト。朝勝見奏シテ申。未解ニ其名ヲ、止似ニ鱒魚ニ耳。歷ニ御覽ニ曰、俗見ニ多物ニ即云ニ尒倍佐尒ト。今所獻魚甚此多有リ。可謂ニ尒陪魚ト。今謂ニ尒陪魚ト其緣也。尒陪ハ即石首魚ノ大者也

集註

文德實錄卷第六曰、齊衡元年春正月丁亥、太宰府貢ニ腹赤魚ヲ、承前元日貢之、延至ニ今日ニ縒之、故書。三代實錄卷第二曰、清和天皇貞觀元年己卯春正月戊午朔、太宰府腹赤魚等、付ニ內侍ニ奏。同卷第四曰、貞觀二年春正月壬子朔、奏ニ腹赤魚ヲ。同卷第五曰、貞觀三年正月丙子朔、奏ニ腹赤魚ヲ。同卷第七曰、貞觀五年春正月甲子朔、腹赤魚等、所司緩怠不奏ニ於庭ニ、附ニ內侍ニ奏。同卷第八曰、貞觀六年春正月戊子朔、腹赤御贄等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第十曰、貞觀七年春正月癸未朔、腹赤御贄等、所司付ニ內侍ニ奉進。同卷第十二曰、貞觀八年丙戌春正月戊寅朔、腹赤御贄等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第十四曰、貞觀九年丁亥春正月壬寅朔、腹赤魚等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第十五曰、貞觀十年戊子春正月丙申朔、腹赤魚、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第十七曰、貞觀十二年庚寅春正月甲寅朔、腹赤魚等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第二十三曰、陽成天皇元慶二年戊戌春正月丁酉朔、腹赤魚等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第三十五曰、元慶三年春正月辛卯朔、奏ニ腹赤列ニ常儀ニ。同卷第三十七曰、元慶四年春正月乙卯朔、腹赤魚等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第四十三曰、元慶七年春正月戊辰朔、腹赤魚等、所司付ニ內侍ニ奏。同卷第五十曰、光孝天皇仁和三年春正月乙亥朔、廢朝、雨

也。是日、腹赤御贄等、所司付二内侍所一奏。若二雨濕一不レ奏二於庭一。延喜式卷第十三曰、大舍人寮、凡元日讌部水部等取二氷樣、腹赤御贄一退出。同卷第三十一曰、宮内省。太宰府進ル所ノ腹赤ノ御贄一隻、長若干尺、進二入申給登申。同卷第三十九曰、内膳司一年料。腹赤魚、筑後肥後兩國所レ進也。其數隨レ得。已上別貢。但腹赤魚收二司家一。百練抄卷第十曰、後鳥羽院元曆元年正月一日辛卯、節會不レ進二腹赤贄一、依二西國賊亂一也。北山抄曰、大饗事云云 差二腹赤牛鳥蘇甘栗九獻後一云云 正月元日宴會、宮内省候二氷樣腹赤御贄一云云、後宮内輔率二僚下一、奏二氷樣腹赤御贄一、若腹赤不來者、唯奏二氷樣一、腹赤七日奏レ之。愚昧記曰、文治九年正月七云云、大將狀云、而腹赤奏、元日不參之時、七日奏云、若八卯日之時有卯杖奏件奏ヰ相加之時惣奏請可奏ト可稱歟。今年腹赤卯杖ヰ奏不相加之所只御弓奏許奏了。江家次第卷第一曰、正月云云女藏人傳二陪膳一云云、或説無二腹赤一者二腹赤一。宮内省云云腹赤奏、若違レテ期不レ參、七日奏レ之、元日御曆腹赤氷樣等奏ニ付内侍所一、故行成大納言抄云、七日有二腹赤一之時、先何ヲカ奏センヤ哉、供御爲レヤ先者腹赤可レ在レ先、七日節會宮内省腹赤奏、元日違二期一不レ參時也。官曹事類曰、供腹赤魚事始、自昔大足彥天皇御歟。肥後國風土記、於長渚濱神人釣之不知其名因似鱒魚鯀須。後醍醐天皇年中行事曰、元日七曜御曆腹赤の奏など内侍所に付べきよし奏す。四季物語曰、くずたちがく、はら赤の奏など、みな神〳〵しきためしなるべし

形狀

江家次第曰、元日宴會、其前立ニ朱ノ臺盤五脚ヲ、辨ニ備饗饌一云云其南北ハ以ニ土器ニ居ニ腹赤切并鹽箸等ニ。同卷第二十日、執レ智ヲ事云云二臺ニハ追テ居ニ乾物五盃、生物五杯ヲ、是腹赤切也

メイタヾキ 塵添壒囊鈔　［今名］ **メダカ**

［一名］ **鰭** 壒囊鈔〇正字通曰、鰭俗鰭字。鰭即鱓、鱓魚ハ本草ノ鱒魚ニメ和産ナシ　**目戴** 精進魚類物語

［形狀］ 〇大和本草曰、目高、長五六分至二一寸一、首大ニ目高ク出タリ、池溏小溝ニ多シ、水上ニ浮游ス、不堪食

無奈木 倭名類聚鈔　［漢名］ **鰻鱺魚** 本草　［今名］ **ウナギ**

本草綱目曰、鰻鱺魚、其狀如レ蛇、背有二肉鬣一連レ尾、無レ鱗有レ舌、腹白。大者長數尺、脂膏最多

［一名］ **武奈伎** 萬葉集卷第十六曰、石麻呂爾、吾物申ス、夏痩爾、吉跡云物曾、武奈伎取食。瘦々母、生有者將在乎、波多也波多、武奈伎乎漁取跡、河爾流ル勿。言塵集曰、うなぎは夏やせのくすりと云々

宇奈支 本草類編曰、鱓魚。宇奈支。倭名鈔曰、鱣魚。和名無奈木。塵添壒囊抄曰、鰌〇鱣和産ナシ〇鱓魚ウツボ也〇鰌トヂヤウ也

牟奈岐 本草和名曰、䱇。和名牟奈岐〇字典曰、䱇同鱓。ウツボ也

牟奈支 新撰字鏡曰、〓。蒲娛反、鯕。牟奈支〇字典曰、〓。説文、〓魚名出二東萊一〇字典曰、鯕。玉篇、〓鯕。廣韻、鯿魚也。本草ニ鯿魚ハ魴魚ノ一名也、即ヲシキウヲ也

うちまる 朝倉亭御成記曰、献立次第六、うちまる、御汁くじら。包丁聞書曰、宇

豆ハ天治本須ニ作ルニヨルベシ
鮖那波本ハ片、箋注本ハ鮓ニ作ル

治丸といふは、うなぎのすし也

【集註】和泉國風土記曰、日根郡有池貢鮒鰻。駿河國風土記曰、鳥渡郡一色川、有鮎鰻之利。鳥沢、貢鯉鮒鰻。會星沢、出鰻鯉鮒之魚。伊標原郡產鯉鮒鮎鰻。益頭郡高瀬池、出鯉鮒鰻魚。赤見川、出鮎鰻。塵添壒嚢抄曰、或蛇ノウナキニ成トモ、ヤマノイモノウナギニ成トモ云事アリ。物ノ變化ハ定無キニヤ、其ニ取テハ少モ便リ有リテ、似ヨリタル姿ニハ今少シ成易也。大草家料理書曰、うなき鱠は、醤油を薄くして魚にかけて、少し火狁いて、切て右同加減にする也。又は湯を暑かにして拭てもあぐる也。是は中也。鱠は口傳有也

奈萬豆（ナマツ） 倭名類聚鈔 【漢名】鮧魚 本草 【今名】ナマズ

本草綱目曰、鮧魚。釋名、鮎魚、魚額平夷低偃、其涎粘滑、鮧魚也、鰋偃也、鮎粘也、鮎乃無鱗之魚、大首偃額、大口大腹、鮠身鱧尾、有レ齒有レ胃有レ鬚、生ニ流水一者色青白、生ニ止水一者色青黄、大者亦至ニ三四十斤一

【一名】奈万豆 新撰字鏡曰、鯰。息延反、平、生肉也。鮮字同。奈万豆。鰱、鯏。下奈万豆。鯰、奈万豆。鮎上同。天文写本和名鈔曰、鯰。和名奈萬豆。楊氏漢語抄用ニ鮎字一、所レ出未レ詳。三代實錄巻第三十九曰、陽成天皇元慶五年夏四月壬寅云云、出羽國元慶二年夷虜所ニ燒盜一云云 鯰尾鎗一百八竿云云。中右記曰、劔様云云鯰尾二柄、長二尺四寸、柄本三寸、一柄長二尺、柄本四寸、以上二柄無銘文

【集註】竹生島緣起曰、爰海龍變ニ大鯰一云云爰件大鯰擧レ首開レ口、咋ニ其大蛇之頭一

【形狀】宇治拾遺物語巻第十三曰、三尺ばかりなる鯰の、ふた〳〵として庭にはひ出たり云云魚大

にてうちとられねば、草かり鎌といふものを
もちて、あぎとをかききりて物につゝませて

加良加支(カラカキ) 新撰字鏡 【漢名】黄顙魚 本草 【今名】ギヾ 【一名】加良加古 倭名類聚鈔曰、鯛魚。和名加良加古。

本草綱目曰、黄顙魚。無鱗魚也。身尾倶似ニ小鮎一、腹下黄、背上青黄、腮下有ニ二横骨一、兩鬚有レ胃、羣游ヲ作レ聲如ニ軋軋一、性最モ難レ死

似ニ鯷魚一而頬ニ著ル鉤ヲ者也。字鏡曰、鯫、土垢反、一曰人姓、漢有ニ鯫生一、加良加支 ○字典曰、鯫。說文、白魚也。ミゴイ也 ○字典曰、鮐。與之切、音飴。廣韻鯸鮐魚也。正字通、河豚別名フグ也

【形狀】○大和本草曰、䱂絲魚(ギヾ)處々山中溪河ニアリ。アギトノ下ノ兩傍ニヒレアリ、甚(ハナハダ)刺ナリ、三處共ニ人ノ手ヲフルレバ人ヲサシテ痛ム。ナマヅニ似テ小ナリ。黄褐色ナリ。處々斑文アルモアリ。長三四寸、或ハ五六寸、

䱂絲魚ハ黄顙魚ノ一名也

土長(ドチヤウ) 塵添壒囊鈔 【漢名】泥鰌 本草 【今名】ドヂヤウ 【一名】鯲(トヂヤウ) 塵添壒囊鈔曰、鯲(ドヂヤウ) 土長同 【集註】伊勢

本草綱目曰、泥鰌生ニ湖池一最小、長三四寸、沉ニ於泥中一、狀微似レ鱓而小、銳首肉身青黒色、無鱗以レ涎自染 滑疾ク難レ握

國風土記曰、負辨郡野間池、出鰻鯉鮒鰡。大草家料理書曰、鰡の料理は、能々ごみを出せ、其上ぬかにてみがき、ぬめりのなき程にして、にごり酒にて能煮ゆ也。其上ニ如レ常にこゑ入、みそをこくして煮也

形狀 ○本朝食鑑曰、登知也宇、狀似ニ小鰻一而微細、銳首圓身、蒼黑色

加末豆加（カマツカ） 倭名類聚鈔　漢名 吹鯊 閩書　今名 スナフキ

閩書曰、吹鯊、別是山谿小魚也。大如レ指狹圓而長身有ニ黑點一、背張レ口吹レ沙、其味美○倭名抄曰、鮇。玉篇云、鮇。小魚名也。漢語抄云、加末豆加○字典曰、鮇。正字通、嘉魚也。イハナ也

形狀 ○大和本草曰、カマツカ、京師ニテカマツカト云、又賀茂ニテ河キスゴ、或ハカナクジリト云、カモ川ニ多シ。其形ハゼ又キスゴニ似タリ。頭方ニシテカドアリ、色モ味モハゼニ似タリ、長六七寸、地ニツキテ上ニヲヨガズ、或沙中ニカクル

伊師布之（イシフフ） 倭名類聚鈔　漢名 石伏魚 福州府志　今名 ゴリ

閩書曰、石伏魚、伏ニ於溪石上一、舊與化縣有レ之

一名 石臥 尺素往來○倭名鈔曰、鮖。和名伊師布之、性伏ニ沈在石間一者也。藻塩草曰、鰻。たれはかはあみのめ見せですくふべきふ

ちにしづめるいしぶしのみを。言塵集曰、石ぶし〇鰍魚、未詳、本草ニ出

かぢか　庖丁聞書曰、越川汁といふは、かぢかといふ魚を、竹の子白瓜など入調也。夏の汁の賞翫え。多も奉る事も有。略してはへをする事も有。越川鱠といふは、かぢかと云魚を、背越にして燒、かしらをちらし上に盛也

集註　源氏物語とこなつ曰、近きかはのいしぶしやうの物、おまへにてうじまいらす

形狀　〇大和本草曰、ゴリ腹下ニマルキヒレアリ、其ヒレノ平ナル所アリテ、石ニ付ク、是眞ノゴリナリ。但背ノ文黑白マジレリ、又名イシブシ、賀茂川ニ多シ。僕往年賀州劔村ニ至ル、頃ハ六月土用也。土人名物也トテゴリ汁以醬油爲之菊酒ヲ出セリ、其ゴリ一寸許、ウロコナク滑カナリ、頭小指ノ頭ヨリ小ク、尾ニテ窄シ。色黑ク腹微シ藍ヲ帶、腹ニマルキ鰭アリ、味美也

知知加布里（チチカブリ） 倭名類聚鈔

漢名　杜父魚 本草

今名　イカリイヲ

本草綱目曰、杜父魚、生ニ溪澗中ニ、長二三寸、狀如ニ吹沙ニ而短、其尾岐、大頭濶口、其色黃黑有レ斑、脊上有ニ鬐刺ニ、螫レ人

一名　知々夫　新撰字鏡曰、鮰。知々夫、鮧。知々夫、魦。知々夫。天文写本倭名鈔曰、鱅。和名知知加布里、似ニ鮠魚ニ而有ニ黑點ニ者也〇字典同鮰、說文、一曰鱶也。本草、鱧魚。和產未詳〇鮧ナマズ也〇鱅。本草ニ出、和產未詳〇本草啓蒙ニ、杜父魚ヲカジカトス、古書ニ載ルカジカニ非ズ

形狀　〇本草啓蒙曰、杜父魚。流水湖澤ミナ有リ、常ニ水底沙上ニ居リテ浮游セズ。長サ五六寸、形鰕虎魚ニ似テ肥大ナリ。大頭濶口ニシテ扁ク、細鱗アリ、色淡黃黑ニメ黑

斑アリ

宇留里古(ウルリコ) 倭名類聚鈔　漢名 鱊魚 本草　今名 イサヽ

按、正字通ニ、鱊魚、一名春魚、自二巖中一随二水流一出、狀魚苗。綱目ニモ春月自二岩穴中一随二水流一出、狀似二初化魚苗一。ト云者ハ淡水ノ産鱊魚也。傳信録、毛魚細小、七八月於海中排陣出他月則否ト云ハ、北戸録ノ鵜毛鯅ニメ、海産ノ鱊魚、今云シススゴ此也

一名 宇流利古 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、細魚。漢語抄云、細魚宇留里古　いさこ 言塵集曰、いさこ少魚

うるりこ 精進魚類物語　いさなこ 同上　集註 伊賀國風土記曰、伊賀郡射手川出細魚、長田川出細魚、垂園川出細魚　形狀

○大和本草曰、鱊魚(イサヾ)小魚ナリ、春ハ多ク川ニ上ル、細魚也。川ノ浅キ處ヲノボル故一名サノホリト云、形ハゼニ似タリ。猗覺寮雜記曰、魚無レ不三逆レ水而上二、雖二至細之鱗一遇二大水一亦捨而上、力不レ勝則稍随レ水而下、力定復上

古名録魚部巻第五十六　終

古名錄介部卷第五十七目錄

正字通曰、蟲有二外殼一曰二介蟲一

蚌蛤類

波萬久理 蛤　於富
伊太夜加比 半邊蚶　謝古 車渠
木佐 蚶　なてしこ貝
梅花貝　さくらかひ
忘貝　伊加比 淡菜
烏貝 沙箭　むらさき貝
すたれ貝　しほふくかひ
萬天 竹蟶　加木 蠣 礒蠣 ○カキカラ灰 古賀灰

浪間かしは

通計十九種

古名錄介部卷第五十七

紀藩　源　伴存撰

蚌蛤類

廣東新語曰、凡狹而長者皆曰蚌。廣而圓者皆曰蛤。萬葉集卷第十八曰、奈美多底波、奈呉能宇良末爾、余流可比乃。同第十五曰、伊敝豆刀爾、可比乎比里布等、於伎敝欲里、與世久流奈美爾、許呂毛豆奴禮奴。吉野詣記曰、かくてすみよしにまうでけり云々爰のさまをみれば、しほはる〴〵とひて、男女貝ひろふとて出たり。豊臣勝俊朝臣九州のみちの記曰、其はまにかりゐて、手ずさみなどちいさくうつくしき貝どものおほくあるを、ひろひもちて、やう〳〵もとの船にかへり云々。筑紫道記曰、又貝のからの浪にしたがふをみれば、うちよせられて海にはなるゝと愁なし、ひかれて海に歸るもよろこびなり

波萬久理（ハマグリ）倭名類聚鈔　漢名 蛤 本草　今名 ハマグリ

閩書曰、蛤。有斑文。一名花蛤。時珍食物本草曰、文蛤出萊州海中。其形一頭小、一頭大、殼有花斑的便是

一名 波末久利 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、蚌蛤。和名波萬久

利。按、蚌ハトブカヒ也。本草和名ニ蚌ヲ多加比ト云是也。塵添壒囊抄曰、蛤ハマグリ也。續古事談曰、頭中將ノ一種物ハ、ハマグリヲコニ入テ、ウスヤウヲタテ、、紅葉ヲムスビテ、カザシタリ。ハマグリノ中ニタキ物ヲイレタリケリ

雑ノ下蟲名ノ二字アルベキカ

宇牟岐乃加比 本草和名　**宇無木乃加比** 倭名鈔曰、海蛤。倭名宇無木乃加比　**宇牟支** 新撰字鏡曰、蚶、宇牟支。蚸、宇牟支。蜯、宇牟支

伊牟支 同上。蠍、伊牟支○蚶、アカヾヒ也○蚸、字典曰、蚩同レ涉涉雞○蜯。正字通曰、蜯。蚌字重文

おはま 伊勢守貞陸記曰、はまぐり、おはま

今案 倭名鈔ニ蚌蛤、和名波萬久理。海蛤、和名宇無木乃加比ト出レ𪜈、本草和名ニ蚌蛤、和名多加比。海蛤、和名宇牟岐乃加比。本草類編ニ、海蛤。波末久利ト云。觀此、則波末久利、宇無木一物タルコト明也。多加比ハ即蚌也

集註 本草類編曰、海蛤。和波末久利乃波之良、不拘時採之。日本書紀曰、景行天皇五十三年冬十月、至ニ上總國一、從ニ海路一渡ニ淡水門一、是時聞ニ覺賀鳥之聲一、欲レ見ニ其鳥形一、尋而出ニ海中一、仍得ニ白蛤一。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。尾張國、云云海蛤（ハマクリ）各一斗。常陸國風土記曰、行方郡板來村、其海蛤多生。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所捕雜物、蛤貝。釋日本紀曰、丹後國風土記曰、與謝郡云云自レ此東海ヲ云ニ與謝ノ海ト、西海云ニ阿蘇ノ海ト、是二面ノ海雜魚貝ニ善佳シ。但蛤ニハ乏少也。散木集曰、しりたる人の、ものをこせたる中に、はまぐりにしけといふもの又いかかさめみるとむくさの物を送りて侍けるを。山家集曰、伊勢のふたみのうらに、さるやうなるめのわらはどものあつまりて、わざとのことゝおぼしく、はまぐりをとりあつめけるを、いふかひなきあま人こそ

あらめ、うたてきことなり。と申ければ、かひあはせに京よりひとの申させ給ひたれば、えりつゝとるなり。と申けるに。今ぞしるふたみのうらのはまぐりをかひあはせとておほふなりけり宣胤卿記曰、長享三年八月九日、今日自中山黃門貝哥事所望書樣事一条前亞相返事如此、但貝左右ニ各一首書之、贈答哥書之間、贈ヲ右ニ、答ヲ左ニ所書也。古今戀哥書之、＼貝裏哥事＼左右＼一首を＼わけ候て御書候ほど＼右の出貝ニ上句を可書候歟。以前承候し忘却候御床敷と存候此間歡樂致候一条殿實久宣胤腹書云其分ニ先年御尋候し時申つる歟自領事申候哉續古事談曰、頭中將ノ一種物ハ、ハマグリヲコニ入テ、ウスヤウヲタテ、紅葉ヲムスビカザシタリ、ハマグリノ中ニ、タキ物ヲイレタリ。瀧口コレヲトリテ、殿上ロニテス丶ム。主殿司ツタヘトリテ大盤ニヲク。頭中將トリテ、人々ニクバラレケリ。人々トリテケウジアヘリ。文祿四年御成記曰、六ノ御膳、蛤。三好義長亭御成記曰、十七獻、はまぐり。明衡往來曰、可被求送柑子橘梨子枝柹鯉雉生鮭蛤蚫。山家集曰、くしにさしたる物をあきなひけるを、なにぞととひければはまぐりをほして侍なりと申けるを聞て、おなじくはかきをぞさしてほしもすべきはまくりよりはなもたよりあり

形狀　室町殿日記曰、伊勢國司より御進上ありけり云々、御進上には三寸七分の大蛤五十云々

於富 倭名類聚鈔

今名　マハマグリ

一名　於宇乃加比 本草類編　於不 新撰字鏡曰、蝤於不。蛤於不　白貝 言塵集 ○倭名鈔曰、白貝。辨色立成云、於富。本朝式文用ニ白貝二字ニ

【集註】 賦役令曰、若輸雜物白貝葅三斗。常陸國風土記曰、行方郡板來村、其海白貝多生。板來南海有洲、可三四里許、春時香島行方二郡男女、盡來拾津白貝雜味之貝物矣。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所捕雜物白貝。令集解曰、白貝葅三斗。穴云、白貝葅者、取其實而作之也。類聚雜要抄曰、母屋大饗、饗膳白貝

【今案】 本草類編ニ於宇乃加比ト云、即朝鮮ハマグリニメ、今碁石ニ製スル介也。

此今（ママ）今諸國ニアリ、蛤ヨリ大ニメ横ニ長ク、唇厚ク、殼白色也

伊太夜加比（イタヤガヒ） 倭名類聚鈔 渇俗云半邊蚶 【今名】 ホタテガヒ

【一名】 伊太耶加伊 天文写本和名抄○倭名鈔曰、文蛤。伊太夜加比。按、文蛤ハハマグリ也 ほたて貝 文祿四年御成記 伊太也加伊 本草類編 みる屋貝 酒氏装束抄曰、海部は大なみに、みる屋貝などおりたる文なり。江家次第卷第八曰、七月相撲召仰云云、若シ舞ニ青海波ノ時、二人着ニ麹塵ノ袍ニ云云、海浮牟背。類聚雜要抄曰、甘塚銀鏤外居草墓内海浮（イソ）ノ貝。合記別記曰、久安二年三月廿七日、知足院禪閤七十賀云云、其ノ前右ノ邊ニ置ニ蒔繪ノ御硯筥一合ヲ、海敷蓬萊主殿頭隆能而繪様

【集註】 本草類編曰、伊太也加伊、无時採之。文祿四年御成記曰、六ノ御膳、鯛屋臺貝尽盛云々ほたて貝

【形狀】 ○大和本草曰、ホタテガイ方二三寸アリ。其殼ノ文瓦屋ノ如ニシテ溝アリ、貧民殼ヲ用テ柄ヲ加ヘ勺子トス、

故ニ勺子貝ト云。肉ノ味不レ美。其フタハ扇ノ形ノ如ク平直ナリ。海中ヲオヨク時、其フタヲ立テユク、舟ノ帆ノ如シ、故ニホタテ貝ト云

謝古（シヤコ） 倭名類聚鈔　［漢名］ **車渠** 本草

本草綱目曰、車渠、大蛤也。大者長二三尺、濶尺許、厚二三寸、殼外溝壟如二蚶殼一、而深大皆縱文如二瓦溝一無二横文一也。殼內白皙如レ玉、亦可二甚貴一〇倭名抄曰、硨磲、俗音謝古

［形狀］ 〇琉球ノ產、大ニメ厚シ。紀州南海ニ產スルハ小也。形扇ヲ開タル如シ、兩殼合メ蛤ノ如シ、五ツノ大ナル溝道タテニアリ。白質

木佐（キサ） 倭名類聚鈔　［漢名］ **魁蛤** 本草　［今名］ **アカヾヒ**

閩書曰、蚶。殼中有レ肉、紫色而滿レ腹、以二其味甘一故從レ甘。嶺表錄異曰、南人名二空慈子一、唐盧鈞尚書作二鎮嶺南一、改爲二瓦屋子一、以三其殼大有二稜如一レ瓦然也

［一名］ **あかゞひ** 三好義長亭御成記曰、獻上次第、六あかゞひ、十獻御そい物あかゞひ

あかゝ井 朝倉亭御成記曰、九献あかゝ井

岐佐 天文写本和名鈔〇倭名鈔曰、蚶。和名木佐

枳佐加比 出雲國風土記、枳佐加比比賣命

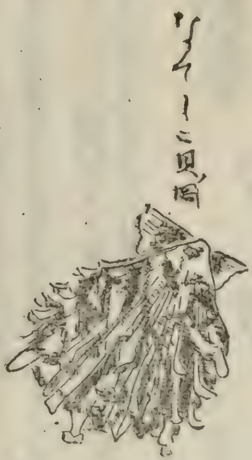
支佐加比 出雲國風土記曰、支佐加比比賣社

［形狀］ 〇大和本草曰、蚶。アカヾヒ也。其殼瓦屋ニ似タリ。其肉

ニ血アリ。蛤類ノ内ニテ味尤美ナリ

なてしこ貝 藻塩草

形狀 ○ナデシコ貝ハ半邊蚶ニ似テ薄ク、扁クメ小也。殼瓦甍ノ如クタテスヂアリ。處々ニ扁キ刺アリテ、瞿麥花瓣ニ似タリ。兩殼相等シクメ、下殼ハ唇ニ至ル。條端ニ扁刺アリ、殼色紅白褐茶淡紅、或ハ白質褐斑紫斑紅質白斑數色アリ。光艶ナル者上也



梅花貝 散木集

今名 ムメノハナガヒ

藻塩草曰、離鳴云々梅の花貝。餝抄曰、心葉云々金枝付梅花貝。世俗淺深秘抄曰、大甞會辰日云々心葉以梅花貝造之、莖鯵金須一方尓三許ッ、可有。言塵集曰、梅花貝

集註 散木集曰、しりたる人のもとより梅花貝といふ物やあるとたづねたりければつかはすとてよめる。春風になどやおりけんみちのくのまがきが嶋の梅の花貝

形状 ○梅花貝ハ、形状梅花瓣ノ如ク、白色含介也。大サ二三分、殼内深クメ薄シ。浦錦曰、梅花介、蛤ノ類白クツヤナシ、橫ニ細ク筋立也

梅花貝圖



さくらかひ 公任卿集

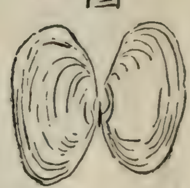
一名 櫻貝 言塵集

集註 藻塩草曰、伊勢海、櫻がひ、伊勢浦櫻貝、難波海つの國櫻がひ。山家集曰、風吹ば花咲波の出るたびに櫻貝よるみしまえのうら。回國雜記曰、櫻井の濱といへる所にて、櫻貝をひろふとて、春はさぞ花おもしろく櫻井の濱にぞ拾ふおなじ名の貝

形状 四條大納言公任卿家集曰、夜ひとよたうとき事きゝあかして、あか月がたにみれば、

よるちりける花の、やりみづの波によせられて、すはうがひのさまなるは、さくらかひとは是をやなどいひて「水にうかぶ櫻のかひの色みれば波の花とぞいふべかりける○サクラ介ハ紀州吹上濱ニ多シ、大サ五六分、兩殼薄ク紅色、碎ケヤスシ、

扁長ニシテ、櫻花瓣ニ似タリ



忘貝 萬葉集　今名 サヽラガヒ

一名 和須禮我比 萬葉集卷第十五曰、安伎左良婆、和我布爾波豆牟、和須禮我比、與世伎豆於家禮、於伎都之良奈美。和我袖波、多毛登等保里豆、奴禮奴等母、故非和須禮我比、等良受波由可自。藻塩草曰、伊勢海忘がひ、伊勢浦忘がひ、若浦紀伊忘貝、飽浦紀伊忘貝、伊勢濱忘かひ、有礒海越中射水郡忘れ貝、松山の松がうら風吹よせばひろひてしのべ戀わすれ貝

集註 萬葉集卷第一曰、大伴乃、美津能濱爾有、忘貝、家爾有妹乎、忘而念哉。同卷第六曰、坂上郎女海路見ニ濱ノ貝ヲ作歌一首。吾背子爾、戀ル者苦シ、暇有ラ者、拾ヒ而將去、戀忘貝。同卷第七曰、暇有者、拾爾將往、住吉之、岸ニ因

云、戀忘貝。手ニ取之、插ニ忘跡、礒人之日師、戀忘貝、言ニ師有來。同卷第十一日、木國之、飽等濱之、忘貝、我者不忘、年者雖經。同第十二日、海處女、潜キ取云、忘ツ貝。若乃浦爾、袖左倍沾レ而、忘貝、拾ヘ跡妹者、不所忘爾。土左日記曰、このとまりのはまには、くさ〴〵のうるはしきかひ、いしなどおほかり云々よするなみうちもよせなんわがこふるひとわすれがひおりてひろはん。わすれがひひろひしもせじしらたまをこふるをだにもかたみとおもはん

形狀

○ワスレ介ハ紀州海士郡吹上松汀浦ノ砂海ニ多シ、土俗サヽラ介ト云、蛤ニ似テ圓扁、殼厚ク口脣小齒アリ、殼淡白ニシテ縱ニ紫褐條斑及細橫斑アリ。介品曰、左々羅貝、一名シヤ〳〵ラ貝ト云フ。關東海中及ビ阿波ノ海ニ多ク産ス、狀扁ニシテ淺ク、圓大ナル者ハ二寸ニ過ギズ、質潔ニシテ堅ク光アリ。外黑褐色、紋脈文蛤ニ似タリ、內面淨瑩ニシテ紫暈アリ、內ノ四邊鋸刻アリ、相合シテコレヲ摩レバ聲ヲ成シテ編木ノ如シ、故ニ名ク　無寃錄曰、面ハ前也、背之不ニル面向一モ亦謂ニ之ヲ面一ト

ワスレ介ノ圖



石ノ下八斗脱カ

若狹國ノ貝ノ下保夜交鮨アリ

伊豫國ノ貝ノ下鮨アリ

伊加比（イガヒ） 倭名類聚鈔

漢名 淡菜 本草

今名 イガヒ

證類本草曰、淡菜。陳藏器曰、東海夫人生ニ南海ニ、似ニ珠母ニ一頭尖、中ニ銜ニ少毛ニ、海人亦名ニ淡菜ニ。新注云。此名ニ殼菜ニ大甘美、南人好食

一名 𧏛貝 古事記曰、遣ニ𧏛貝比賣蛤貝比賣命ニ作レ活 爾𧏛貝比賣岐佐宜集而蛤貝比賣待承テ。新撰字鏡曰、⿰虫進即双反 蛾也。伊加比〇蛾、⿰虫進ケガヒ也。倭名鈔曰、貽貝。爾雅注云、貽貝、一名黑貝、貽音怡、和名伊加比。按、貽貝ハタカラ介也。本草啓蒙ニ延喜式ヲ引テ、イガヒニ貽貝ノ字ヲ出スハ非也。日本古書皆誤テ淡菜ニ貽貝ノ字ヲ用、貽貝ハ黑色ノ貝子也。爾雅云、貝云云玄貝ハ貽貝、註ニ黑色ノ貝也。疏ニ黑色之貝名ニ貽貝ニ

い〻貝 朝倉亭御成記曰、獻立次第 六い〻貝

集註

賦役令曰、若輸雜物者、貽貝後折六斗、貽貝鮓二斗。令集解曰、貽貝後折六斗、穴云、貽ノ後折者穿ニ其貝ノ尻ヲ而附テ貝ヒ奈加良ヲ作レ之也。延喜式卷第五曰、齋宮。月料云云貽貝鮨各一斗五升。諸國送納調庸云云、貽貝鮨一石。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、貽貝云云各四十六斤、貽貝鮨三斗。凡中男一人輸作物、貽貝鮨四斤十兩。參河國、調、貽貝鮨三斛六斗。若狹國、調貽貝。伊豫國、中男作物、貽貝云云。同卷第四十三曰、主膳監。月料。貽貝鮨云云各二斗二升五合。出雲國風土記曰、秋鹿郡、凡北海所在雜物螺貽貝蚌甲蠃石華蕀子

形狀

〇本朝食鑑曰、伊乃加比、殼類レ蚌肉微赤似ニ蚶肉ニ。本草啓蒙曰、淡菜其形一頭ハ狹ク、一頭ハ濶ク、蚌（ドブガヒ）ニ似タリ。長サ三四寸、外ノ色黑シ、肉ハ色紅ニメ蚶肉ノ如シ、口ニ少シ黑毛アリ

淡菜（イカヒノ）圖



烏貝（カラスガヒ） 言塵集

|漢名| 沙箭 閩書

閩書曰、又有下一種形似二淡菜一而小上名二沙箭一

|集註| 山家集曰、なみよするしらの濱のからす貝ひろひやすくもおもほゆる哉

|形狀| ○カラス介ハ、淡菜ニ同ノ小也。本草啓蒙曰、小ニメ色黒者カラスガヒト呼、一名ウミガラス

烏貝圖



むらさき貝 藻塩草

【集註】藻塩草曰、薩潟、伊勢、紫のかひあるうらのふちかたはたみのかゝるぞ花と見えける 【形狀】○大和本草、紫貝、筑紫ノ海ノ深處ニアリ、色紫也。肉多クシテ殼ノ内ニミテリ、味甚ヨシ。ヨコニ細ナルスヂ多シ。按ニ、紫介ハ蚌ニ類〆大者ニ四寸、幅ハ濶ノ窄トアリ。紫ニ〆外茶褐色ノ薄皮アリ、皮ヲ去ハ紫色也

紫介ノ圖



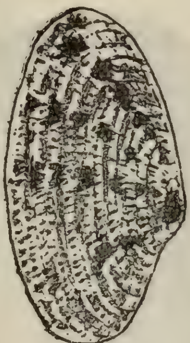
すたれ貝 藻塩草

一名 簾貝 言塵集 箔貝 山家集

集註 藻塩草曰、吹上濱、紀州、すだれ貝。山家集曰、なみかゝる吹上の濱の箔貝風もておろす磯にひろはん

形狀 ○スダレ介ハ紀州吹上濱ニ多シ、形狀蛤ノ如ク細長、橫ニ高キ理アリ。黃白色ニメ、褐黑ノ縱條ノ斑四ヶ所アリ、橫理ノ間褐色簾ヲ編ルニ似タル斑アリ、殼ハ蛤ノ如ク厚シ

スダレ介圖



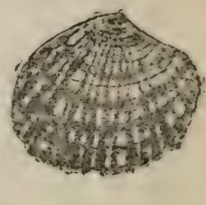
しほふくかひ 藻塩草

今名 シホフキガヒ

集註 藻塩草曰、しほ貝。しほかひ、ひろめなど云り。しほがひとは、しほにまじる貝也。しほふくかひと云貝もあれど、それは別の物也。歌をしりあつむる事にとれるなるべしと云々

形狀 ○大和本草曰、鹽吹貝、殼色淡黑色、肉淡紅、味不美。又云、潮吹貝、シホフキガヒ、其文理高低有ニ條理一如ニ葛籠一。介品曰、塩吹貝、蜆ニ似テ大背(セナカ)隆起(コンモリトタカク)ス、形圓シ、口邊細齒アリ、裏四邊淡紫ナリ、殼面黃ナリ

潮吹貝圖



蜆ニ似テ圓大
タテスヂ横スヂ起ル

萬天 倭名類聚抄 本草和名曰、馬刀。和名末天乃加比。倭名鈔曰、馬蛤。唐韻云、蟶音檉、辨色立成云、萬天蚌屬也。本草云、馬刀、一名馬蛤和名同上

今名 マテ

一名 末天乃加比

万天 新撰字鏡曰、蟶。正音丁万天

万氏 字鏡曰、蟶、万氏。按ニ馬カハサヽノハ介也

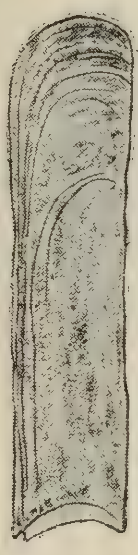
集註 本草類編曰、馬刀、和末天乃加良、不拘時採之。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、馬刀七斤。備前國、云云馬刀各三斤。伊勢紀行曰、うら〳〵と過侍るに、あまどものしはざさま〴〵也、汐干にまてと云ものさしとるを見て。いせの海のあまのまてかきましばし都のつとに我も拾ん

形狀 藻塩草曰、あまのまてかたにてすると、八雲御說なり。ひまたき事によめり。しほひがたにあま人のまてと云貝をさしとるを云と云り。又云までをとるには、まてかりといふかねのさきのほそきを、二またにつくりて、竹をつかにほそくしてすけて持て、まつくわにて、すなごのうへをひけば、までのあなよりしるをはきいだせば、そこにまてかりをさし入て、ひきいだしとり〳〵する也。と云り。春秋冬

本朝食鑑ニハマテニ蟶ノ字ヲアツ

とるゝ。夏はまてよこさまになりてあれば、とられぬなり。まて、おほやうあなにたてざまにあるゝ。されば、きはめていとまなくうるさき事にてあれば、まてかたとはよめるにや云々 袖中抄ニモ出ル ○本草啓蒙曰、マテハ兩殼相合テ小竹管ノ如シ、長サ三四寸、大ナル者六七寸ニ至ル、兩頭空通シ、青黑微黃赤色、又淡紫斑アル者アリ、一頭ニ巾アリテ殼外ニ出ヅ。本朝食鑑曰、萬天、漁人采レ之、先探ニ求于海涯細沙上一、必有ニ小穴一、靜ニ歩ミ呑ンテレ聲ヲ到ニ穴處一、用ニ白鹽一撮一潜ニ窺ヘハレ之、萬天出ニツ穴ノ口一ニ如モシ聽ケハ一人聲ヲ而深入ル、有テレ頃復出ニ穴外一、以レ箒掃レ之、若レ斯終日得ニ數十箇一、或堀レ砂亦得レ之

マテノ圖



加木（カキ）

倭名類聚鈔　漢名 蠣 本草　今名 カキ

正字通曰、蠣。生海池澤中、初附石上傀礧、相連如房曰蠣房、如拳四面、漸長有一二丈者、一房內有肉、一塊大小隨房、大房如馬蹄、小房如人指面、每潮來諸房皆開、小蟲入則合之、以充腹、海人取者、鑿房以火逼開挑取其肉謂之蠣黃。五雜組曰、蠣負レ石作レ房、纍々トシテ若レ山、所謂蠔也。不ニ惟味佳ナルノミナラ一亦有ニ益於人一、其殼堪ニ燒作一レ灰、殊勝ニ石灰一

一名 加支 新撰字鏡曰、蠣、加支。蚒、加支。蝻、加

蠣刀子 年料蠣刀子七十七枚。枚 剝蠣料 云レ蠣料ト云ミ年 アリ伊勢國料ハ蠣ト 礒蠣 アリ 裡刊経

支

可支 字鏡曰、蛸、可支

乎加岐乃加比 本草和名曰、牡蠣。和名乎加岐乃加比。延喜式卷第三十七曰、典藥寮。諸國進年料雜藥。伊勢國、牡蠣一斗九升。閩書曰、道家方以左顧者是雄、故名牡蠣、右顧則蠣耳。廣東新語曰、大者亦曰牡蠣、蠣無牝牡、以其大故名曰牡也

加岐 天文写本和名鈔〇和名鈔曰、蠣、和名加木

何支 日本靈異記曰、蠣。何支

加岐賀比 古事記曰、阿比泥能波麻能、加岐賀比尒、阿斯布麻須那、阿加斯氐杼富禮

玄蠣 出雲國風土記曰、神門水海有玄蠣

集註 本草類編曰、牡蠣。和加支乃加良。十一月採之。延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調云云、蠣腊各十六斤十兩。肥後國、中男作物、蠣腊。同卷第三十一日、諸國例貢御贄。伊勢、蠣。同卷第三十九曰、內膳司。年料、伊勢國、蠣刀子七十七枚云云剝蠣料。日本靈異記曰、養繩之家口、副贊釣人入海裡釣之、繩集一作着蠣十具而上、誂釣主曰、此蠣欲贖、釣人至不免、叮寧至心教化之言能人作寺何其不脫、乃脫之言宛十具直欲米五斗、如乞而贖助請。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所捕雜物、螺蠣。駿河國風土記曰、烏渡郡產牡蠣。伊穗原郡美髮產牡蠣。類聚雜要抄曰、五節殿上饗居物次第、進物蠣生蚫云云。文祿四年御成記曰、六ノ御膳蠣

〇**かきのから** 續詞花集 牡蠣也

藥製 頓醫抄曰、牡蠣大ナルヲ、先童子ノ小便ニ浸テ、四十九日ヲキテ、五日ニ一度ヅヽ小便ヲカヘヨ。四十九日スギテ、硫黃ヲ一兩末ノ酢ヲトキテカキ、之カラニ能々スリテ、上ヲ瓦ニ重包テ、紙ナガラ酢ニ浸シテヌラシトヲシ、上ニ土ヲヌリ包テ、日ニホシカタクメテ、灰五斤ヲ以テ能々燒テヲキテ云云 〇

集　同　唯ヒ
蠣　同　蠊
下　同
入至　同
主
寧　同　々
其　同　甚
助　同　勘
請ノ下
法師ア
リ

カキノカラ灰 頓醫抄 【漢名】 古賁粉 廣東新語 【今名】 カキガラノハヒ 廣東通志曰、蠔カキ、其殼亦可ニ燒灰ニメ塗レ壁。閩書曰、牡蠣、異物志、名ニ古賁ト。廣東新語曰、檳榔。注或古賁粉盛之）

【集註】 明月記曰、近代檜扇塗、雲母ジタニカキノカラヲヌル書繪

【附方】

海六散 頓醫抄曰、海六散、此藥ハカキガラヲ灰ニ燒タルヲ、細末メ瘡ノ汁ノ出サル難治ヲ瘡ニ付レバ、其惡血ノ膿汁ヲ外ヘスイダスコ勝タリ。又方癰疔等ノ根幷毒氣ヲスイ出サントスルニ、マヲノ根ヲナマシクテカフナガラ細ニ刻テ末シテ、此海六散ヲ少分入其メ瘡ノ上ニ可付、何度モ付カヘヨ、膿汁惡毒ヲ出スコ第一也

○礒礪 延喜式 恐ハ殼ヲ連ル者ナランカ

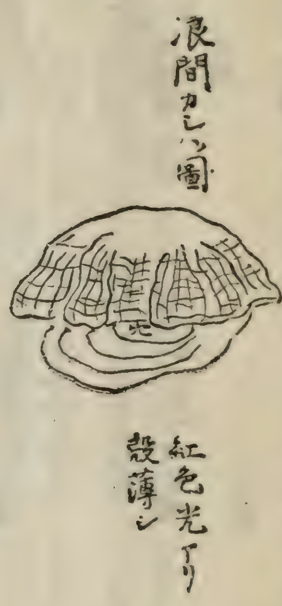
【集註】 延喜式卷第三十一日、宮內省、諸國例貢御贄、伊勢蠣、礒蠣。同卷第三十九日、內膳司、年料、伊勢國、蠣、礒蠣

浪間かしは 藻塩草

【形狀】 **岩とかき** 藻塩草曰、浪間かしは、岩とかきと云かひ之。なにはめがなみまかしはをとるほどに日もくれ袖に月ぞやどれる

【形狀】 ○本草啓蒙曰、ナミマガシハ、形圓ニメ小ク寸ニ盈タズ、甚薄クメ皺アリ、蓋ハ平ニメ一孔アリ、ソノ淡赤色ナルヲアサヒガヒト云、淡黃或白色ナルヲユフヒガヒト云。按ニ、ナミマガシハ、形狀蠣カキノ如クニメ、殼滑ニメ薄ク皺文アリ、海

石ニ著上ハ偃ニメ下ハ平也、平ナル處石ニ着、啓蒙ニ蓋ハ平ニメ一孔アリト云ハ、石ニ着タル處ノ離レタル跡ニメ穴ニ非ズ、大者寸餘ニ及フ



古名錄介部卷第五十七　終

古名錄介部卷第五十八目錄

螺類

豆比　海蠃　　之太々、美　相思
佐々江　拳螺　　保良加比　吹螺
阿木　香螺　○阿岐乃布多　甲香
於保阿岐　藜螺　○仁之　　於保尓之　紅螺
之良尓之　　久呂尓之
加美奈　寄居蟲　　うらうつ貝
鸚鵡盃　鸚鵡螺　　ふな貝　馬蹄螺
つへた　光螺

通計十六種

紀藩　源　伴存撰

螺類

○螺鈿ノ事、本朝諸書ニ散見ス、按陔餘叢考云、螺塡。髹漆ノ器用ニテ蚌蛤ノ殼ヲ鑲嵌シ、象ニ人物花草ニ、謂ニ之ヲ螺塡ト、呂藍衍カ言鯖ニ謂ク、牂牁蠻國其ノ王ヲ號ス鬼王ト、其ノ別帥曰フ羅殿ト、在リ貴州界內ニ、世用テ其ノ蚌ヲ飾ル器ヲ謂フ之ヲ羅殿ト、此說非也。今貴州水西一帶卽チ羅甸鬼國、余嘗テ宦ス其ノ地ニ皆崇山峻嶺、並ニ無レ河、安ソ得レン有ルコトヲ蚌蛤之屬ニ、此ノ器多ク出レ自ニ廣東ニ、沿海一帶、按ニ方勺カ泊宅編謂螺塡ノ器本ト出ニ倭國ニ、而藍衍訛テ爲ニ羅殿ニ、而附ニ會之ヲ誤矣、周密載ス幸張府記ニ、宋ノ高宗幸ニス張循王ノ府ニ、王所ノ進スル有ニ螺鈿ノ盒十具ニ、又癸辛雜識ニ記ス賈似道ニ作ニ螺鈿卓面屏風十副圖ニ、賈相當國盛事如ニ鄂渚ニ、守城磯奏捷之類、賈相乃チ大ニ喜則螺塡當シレ作ル螺鈿ニ爲レ是○正字通曰、髹以ニ赤色ノ桼ヲ飾レ物、師古曰、桼桼レ物謂ニ之ヲ髹ト

豆比（ツビ）　倭名類聚鈔

漢名　海嬴　本草　螺ノ惣名也

一名　都比　天文写本和名鈔曰、楊氏漢語抄云、海嬴。都比。本草和名曰、甲嬴子、和名都比。續日本紀卷第八曰、養老五年春正月甲戌、詔曰、從六位下螺江臣夜氣女云云各絁六疋、絲六絇、布十

端、鍬十口。倭名鈔曰、甲蠃子、今按、蠃卽螺字也。

晉羅、楊氏漢語抄、海蠃、豆比。字鏡曰、螂。豆比

海豆比 新撰字鏡曰、蛔。姑含反、蠃大者、海豆比

津比 字鏡曰、蝸。牛俱反、津比。偶字典ニ靑蚨トス

宇美川不 本草類編曰、海螺。和宇美川不

つみ 山家集曰、ひゞ、しぶかはと申方へまかりて、四國のかたへ渡らんとしけるに、かぜあしくてほどへけり。しぶかはのうらたと申所に、おさなきものどものあまた物をひろふなりと申けるを聞て。おりたちてうらたに拾ふあまのこはつみよりつみをならふ之けり

集註 賦役令曰、若輸雜物者、甲蠃六斗。延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、云云甲蠃各六斗。若狹國、調、甲蠃。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所捕雜物甲蠃蓼螺子。秋鹿郡、凡北海所在雜物甲蠃。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、丹波國甲蠃二四

之太々美（シタヽミ） 倭名類聚鈔

漢名 **相思螺** 通雅

今名 **カラクモ**

一名 海槎餘錄曰、相思子生二海中一、如二螺之狀一、而中實類レ石焉、大比至粒、好事者藏二置篋笥一、積歲不レ壞、亦不二轉動一、若置二醋一盂一、試投二其中一、遂二移動盤旋一不レ已。通雅曰、卽君子相思螺相感一也

之多儴瀰 日本書紀神武天皇御歌曰、伽牟伽筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍廼、之多(細螺)儴瀰能、阿誤豫、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智弖之夜莽務。于智弖之夜莽務 ○萬葉集

卷第三曰、若子乃、伊匍匐多毛登保里云々。日本書紀曰、匍匐頭邊匍匐脚邊。古事記曰、匍匐御枕方匍匐御足方。又曰、匍匐廻其地之那豆岐田云々爲歌曰云々波比母登富呂布、登許呂豆良。又曰、介匍匐進赴

之多太瀰 見上註

之多々美 本草和名

海細螺 賦役令曰、若輪雜物者、海細螺一石

細螺 萬葉集

志多陀美 古事記曰、伊勢能宇美能、意斐志介、波比母登富呂布、志多陀美能、伊波比母登富浬云々

したゝ見 藻塩草曰、つくゑの嶋のしたゞ見をいひちにもてき云々

小贏子 類聚雜要抄曰、母屋大饗饗膳云々小贏子云々小贏云々

〔正誤〕本草啓蒙ニ、扁螺ヲシタヾミトス、非也。本草綱目白及集解ニ其根又如ニ扁螺ニ旋紋アリ扁螺ハ大和本草ニチシヤコト云大和本草曰、チシヤコ小螺ナリ。殼薄シ。亦白ノ紋アリ。海ニアリ、形扁シ、蝸牛ニ似テ小ナリ。殼ニ斑文アリ、有レ紅有レ白。小兒其カラヲツラヌキアツメテ玩トス海邊砂地ニ産メ巖石ニ不レ附。古事記ニ伊勢能宇美能、意斐志介・波比母登富呂布、志多陀美能。日本書紀ニ、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍屢、之多儺瀰能ト云ニ不ニ符合。按ニ、本草和名云、小贏子ハ貌チ似ニ甲贏ニ而細小、口ニ有ニ白玉之蓋一、和名之多々美。觀レハ此ヲ則之多多美ハ爲ニ相思螺ニ甚タ明ニシテ而其ノ有ニ白玉之蓋ト云ハ相思子也扁螺ハ甲香ノ如キ薄キ蓋ニシテ與ニ此文ニ大ニ異也〔集註〕

延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭。阿波國所レ獻、細螺云々等廾二十坩、已上那賀潛女十人所レ作。萬葉集卷第十六曰、所聞多禰乃、机之島能、小螺乎、伊拾持來而、石以、都追伎破夫利、早川爾、洗濯、辛塩爾、古胡登毛美、

高杯爾盛、机爾立而、母爾奉都也、目豆兒乃負、父爾獻都也、身女兒乃負。台記別記曰、康治元年十一月、大嘗會、丹波國細螺三疋。朝倉亭御成記曰、二獻したゞみ、まきするめ。山家集曰、あま人のいそしく歸るひしきものは小にしはまぐりがうなしたゞみ

形狀　〇介品曰、相思子、一名郎君子、俗ニガンガラ、又酢貝ト云フ。殼拳螺ニ似テ至テ小ク、女拳螺ニ似タリ。其靨也、碟ニ酢ヲ入レ、此靨ヲ兩箇投メ相對スレバ旋轉メ一處ニ合フ。碟ノ邊ハ高シ、酢ニテ收斂メ底ノカタヘ轉シ下ル也。本草啓蒙曰、即君子形紅螺ニ似テ至テ小ク、七八分以下、ソノ尾平ニメ尖ラズ、殼ニ微緇アリテ、朶雲ノ狀ノ如シ、灰白色ニメ光リアリ、或五色彩斑ナルモアリ、靨ハ拳螺靨ニ似テ極テ小ク二三分、堅ク石ノ如シ、外面ハ隆起メ淡白色、或微靑色、内面ハ平ニメ微褐也

佐左江　倭名類聚鈔

漢名　拳螺　寧波府志　　今名　サヾヒ

華夷鳥獸考曰、有レ曰ニ拳螺一

今案　賦役令、延喜式等ノ書ニ、螺ト載ル者ハ拳螺ニメ、細螺ト出ル者ハ、シタヾミ也。梁塵愚案抄曰、延喜式に螺をさゝゑといへり。さゝいの事なるべし。藻塩草ニモ、延喜式に螺をさゝいといへり、トミエタリ

一名　佐太江　天文写本和名抄〇倭名鈔曰、榮螺子。和名佐左江

さたをか　催馬樂曰、みさかなになによけん、あはびさたをか、かせよけん。催馬樂秘傳抄曰、さたをか、さゝい、さゞえといふ貝なるべし

さゝえ　見上註

さたかい　催馬樂秘傳抄曰、延喜式に螺を、さ

たかいとよめり

さたゐ 梁塵愚案抄。山家集曰、うしほどのせとにあまのいでいりて、さたえと申ものをとりて、船にいれ／＼しけるを見て、さだえすむせとの岩つぼもとめ出ていそぎしあまの氣色なる哉

さたへ 藻塩草曰、螺をさゝへと云、さゞいと云かひ也

さゝい 見上註。朝倉亭御成記曰、御引物さゝい。塵添壒囊抄曰、榮螺子(サザイ)。類聚雜要抄曰、母屋大饗饗膳榮螺子。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所捕雜物蛇榮螺。文祿四年御成記曰、御二献榮螺。朝倉亭御成記曰、御引物さゝい

さゝひ 三好義長亭御成記曰、十四献さゝひ

さゝゐ 朝倉亭御成記曰、献立次第五さゝゐ

集註 賦役令曰、若輸雜物者、螺三十二斤。延喜式卷第五曰、齋宮。供二新嘗一料、云云螺各十兩。同卷第七曰、踐祚大嘗祭云云紀伊國所ㇾ獻云云生螺各六籠、螺貝燒鹽十顆、並令下賀多潜女十人量ㇾ程採備上。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、乾螺十斤十兩。同卷第三十九曰、內膳司。新嘗祭供御料、云云螺各十三兩一分二銖。正月三節、螺四斤三兩。五月五日節、云云螺各十三兩。七月七日節、云云螺各一斤五兩。九月九日節、云云螺各十三兩。諸國貢進御贄。旬料、志摩國 御厨鮮鰒螺起二九月一盡二明年三月一、月別上下旬各二擔。同卷第四十三曰、主膳監。月料 螺卅斤。令義解曰、若輸雜物者、螺三十二斤。謂蚌屬也

形狀 ○大和本草曰、榮螺(サヽエ)殼ニ角多キアリ、無角アリ、鎌倉ノ海ニ左旋(マキ)ノ榮螺アリ、下ノ牟邊ノミアリテ小ナリ、メグリニ角アリ、イヅレモ左ノ方ニ旋ル。介品曰、拳螺。俗ニサヾイト云フ、二種アリ、一ハ尋常ノ者、一ハ蓋(フタ)ニ毛無シ、佐渡ニテメクラサヾイト云フ。按ニ、蓋ニ毛無シト云ハ、蓋ニ鮫皮(サメ)ノ如キ者ナキヲ云

保良加比（ホラリヒ） 本草類編

【漢名】吹螺 三才圖會

【今名】ホラノカヒ

雲南通志曰、貝蠡大者可容數升、南蠻吹以節樂、今之梵樂用吹和銅鈸、釋氏所謂法螺、赤土國吹螺以迎隨便是也。梁武之樂有蠡子伎倚歌梵貝

【一名】ほら貝 言塵集○東寺塔供養記曰、次緇衆廿口、皆著甲袈裟、為先下臘打鉢吹螺之儀加例

寶螺 三代實錄　法螺 百練抄

【集註】三代實錄卷第五曰、清和天皇貞觀三年三月十四日戊子、於東大寺設無遮大會、供養毘盧舍那大佛、先是詔從四位下行文章博士兼播磨權守菅原是善作呪願文曰、云云宗螺獸如吼、法鼓雷如鳴。宇治拾遺物語曰、斧ほら貝腰につけ。百練抄卷第十四曰、四條院文曆二年十一月一日丙寅、今日所々山伏等數百人群集法成寺邊、群參攝政家、有訴訟事。是大和國住人父遺財相論寄付金峯山之故云云、曉夕吹法螺、衆庶驚耳目、尤奇恠事也。同卷第七曰、近衛天皇久安六年八月五日、興福寺衆徒蜂起云云、入洛、吹法螺、其聲充滿洛中。建武元年東寺塔供養記曰、次樂人發音螺吹同發聲云云、次僧侶着座螺、次鐃持退還。後宇多院御灌頂記曰、螺吹十人。人車記曰、久安五年十一月十一日、今日被行故姫宮周闋御法事云云、次螺二人。仁平二年七月九日、加茂下御社神宮寺中云云、供養之。吹法螺打鐃。精進魚類物語曰、山臥の腰に付たる法螺貝の友を促すばかりなり

【形狀】○本草啓蒙曰、ホラガヒ、ソノ長サ二尺餘ナル者、中山ヨリ來ル。本朝食鑑曰、寶螺（ホラカヒ）。海中之大螄也。狀類海螄而殼白、有紫黃虎斑、大者一二尺 小者四五寸許、殼尾圓旋盤屈、比婦人之髻、或三四旋、五六旋、隨其大小

殼尾旋リ留テ作ス小尖頭ヲ、其肉淡赤色、味短。乾枯而後破ニ尖尾ヲ作レ口吹レ之

阿木（アキ） 倭名類聚鈔 〔漢名〕 **香螺** 本草 〔今名〕 **ヘナダリ**

圖書曰、香螺、亦曰ニ流螺ト、大サ如シ甌ノ、長數寸、其甲獨燒ケハ則臭シ、雜ヘテ衆香ニ燒ハ之便チ益芳香、本艸ニ謂ニ之甲香ト。華夷鳥獸考曰、掩白而香者曰ニ香螺ト。廣東新語曰、有ニ流贏ト大サ如ニ小拳ノ一名甲香贏

〔一名〕

阿岐 天文写本和名鈔〇和名鈔曰、大辛螺。和名阿木。本草和名曰、大辛螺。和名阿岐

安支 本草類編曰、甲香。和安支乃不太。又云、仁之之乃不太。日本秘事、和之宇止女乃不太

仁之

宇止女 見上註 **へなたり** 徒然草

〔形狀〕

徒然曰、甲香は、ほら貝のやうなるが、ちいさくて、口のほどのほそながにして出たる貝のふたなり。武藏國金沢といふうらにありしを、所の者はへなたりと申侍るとぞいひし。證類本草曰、南州異物志曰、甲香ハ大ナル者如レ甌、面前一邊直ニ搓長數寸、圍殼岨峿有レ刺、其掩雜ニ衆香ニ燒レ之、使ニ益香ニ、獨燒則臭、一名流螺、諸螺之中流最厚味是也、其蓋大如ニ小拳ニ、青黄色、長四五寸、人亦噉ニ其肉ヲ

掩本草綱目ニ引ケルハ靨

證類本草圖

泉州甲香



○阿岐乃布多 本草和名 [漢名] 甲香 本草綱目曰、香螺厴可レ雜二甲香一 [一名] 安支乃不太 本草類編。本草和名曰、甲香、和名阿岐乃布多

[集註] 類聚雜要抄曰、香ノ唐櫃一双云云甲香一斤

[製法] 類聚雜要抄曰、甲香。漬二美酒一、經二一宿一取出、削二去內外ノ膚一ヲ、更ニ煎ジ、甘葛煎ヲ塗二甲香一、摻リレ火令二色黃一。但於二甘葛煎一、以二微火一煎之、上白有レ皮之時用レ之、一劑六合、甘葛煎用二堅美摻甲一之、必用二微火一、以二鐵臼一舂篩之、摻甲宜レシ蜜、無レハ蜜用二甘葛煎一不レ宜

[形狀] ○本草啓蒙曰、香螺、形藻螺ニ似テ五六寸、小ナル者ハ二三寸、頭ニ禿疣多シ、赤黑色、又淡白色ナルモアリ、厴ノ形馬蹄ノ如クニシテ厚ク、褐色ニシテ紋理アリ。藥舖ニバイノ厴ヲ代ヘ貨スル者ハ次ナリ。大和本草曰、甲貝ニシニ似テ長シ、大ナリ。食シテ味美シ

○ばい 朝倉亭御成記 [漢名] 黃螺 清俗名 閩書曰、黃螺、殼硬色黃、其味珍( )證類本草曰、圖經曰、甲香。須レ用二台州ノ小ナル者ノ佳ナル一。本草綱目曰、頌曰、又有二小甲香一、狀若二螺子一、取二其蔕一ヲ修合成也。大和本草曰、有二小甲香一トアルハ今ノバイト云モノナルベシ、是ハ小螺ナリ。大サ橘子ノ如ニシテ少長シ

[集註] 朝倉亭御成記曰、御三、いか、くらげ、白鳥、あわび、からすみ、ばい貝金こい

[形狀] ○本草啓蒙曰、ハイハ小甲香ナリ。清俗ハ玉螺、黃螺、油螺ト云。形ハ田螺ニ似テ、長ク厚ク、黑色微褐、ソノ肉頭黑ク、中白ク尾ハ盤曲シテ蒼膓アリ

於保阿岐（オホアキ） 本草和名

一名　辛螺　賦役令。庭訓往來　義鈔曰、辛螺　鉡　四條流庖丁書　爾志　新撰字鏡曰、鉡。尓志

今名　ナガニシ

今案　古書ニにしト云ハ長ニシ也。本草和名曰、辛螺子、貌似二甲螺一而口ニ有レ蓋、蓋似二甲香一、和名於保阿岐トミユレバ於保阿岐ノ甲香螺類ニ似タル螺トスベシ。倭名鈔及本草和名ニ、大辛螺ヲ阿岐トス。本草和名ニ、甲香。阿岐乃布多ト訓ユレバ、阿岐ハ香螺タルヿ明也。又倭名鈔ニ、小辛螺ヲ仁之ト云ハ、出雲國風土記ニ[illegible]螺有。蓼螺子、ト云者ニメ即寸ニ滿タヌ者ニシニメ、長ニシヲ指ニ尓之ト云ルニ非ズ、下ニ詳ニス

集註　賦役令曰、若輸雜物者、辛螺頭打六斗。常陸國風土記曰、行方郡板來村、其海辛螺多生。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、丹波國、辛螺百貝。古今著聞集卷第二十曰、宮内卿・なりみつ卿のもとに、盃酌の事ありけるに、すびつの邊に、にしをおほく取置たりけるに云々、にしはまぐりは、まさしくいきたるをくひ侍れば。文祿四年御成記曰、二ノ御膳、辛螺、御相伴二ノ膳、辛螺、諸大夫二ノ膳、にし。娵入記曰、きやうのぜん、にしつはめくちをさす。祇園會御成記曰、献立云々にし。大草相傳之聞書曰、にしのつぼいりの事。下にひばを鋪、其上にゆかい敷を敷、其上にしをもる也。高さ三寸たるべし。其上にふたをおひけり。にしのつくりやうは、わきいかつうを取て、まがりを切はなし、竪にうすくつくりよし。にしの料理は、けしかつをよくすりて、能酒にてすりたてゝ、能こして、たでを少くはへ、にしをよきかげんにゝあはせ、ある時は、すこしこせうのこをひねりか

蜷ノ傍訓本ノマヽ

けて、かきあへもる也。四條流庖丁書曰、蜷(ニヒ)ヲ折ニ積ベキ事、蜷ノ蓋ノ方ヲ下ニナシテツムベシ。返ヽ人拵テ參スル樣ニハ不レ可レ積。生タル皃ノ如ニ積ベシ

形状

散木集曰、あるあまの、くちあしとて、ぬのゝくはれぬに、にしといふものこそ、思ひ出らるれ、といひけるを聞て、もとめてくはせけるに、からみといへる所は、からしとてくはざりければよめる。よしとおもふ心のねがふにしなればからみ成ともまいらざらめや〇本草啓蒙曰、ニシ、ナガニシ形王螺(バイ)ヨリ大ニタ、ソノ流更ニ長シ。外ニ短黒褐毛アリ、肉ハ紅螺ニ似テ味美ナリ、腸ハ至テ辛辣、厴ハ王螺厴(フタ)ノ如シ。藥肆ニ采テ甲香トス

長ニシノ圖



○仁之（ニシ） 倭名類聚鈔 【漢名】 蓼螺 閩中海錯疏 【今名】 イハニシ 漳州府志曰、通志ニ、蓼螺、大サ如ニ拇指一、有レ刺、味辛ク如レ蓼

【一名】 爾之 天文写本和名鈔。倭名鈔曰、小辛螺、和名仁之。楊氏漢語抄云、蓼螺子 小にし 山家集 【集註】 出雲國風土記曰、意宇郡蜈蚣嶋、有蓼螺子。嶋根郡、凡北海所捕雜物蓼螺子

【形狀】 ○介品曰、蓼螺。伊豫佐渡ニ多シ、形拳螺（サザイ）ニ似テ、味辣メ食ハレズ。故ニ苦螺（ニカニシ）ト云。本草啓蒙曰、蓼螺、一種、形小ク流短ク、白クシテ粗、黒疣相連ナル者ヲイワニシト云、一名カラニシ

於保爾之（オホニシ） 本草和名 【漢名】 紅螺 閩書 【今名】 アカニシ

閩書曰、紅螺ハ、肉可レ醬。本草綱目曰、紅螺色微紅○本草和名曰、口廣大辛螺。和名於保尓之

【形狀】 園太暦曰、御隨身秦久文、狩衣不知其色、面黃香、裏紅後聞辛螺色狩衣云〻 隨分色之由自構之由聞之、然而其躰不甘心。頓醫抄曰、荒痢ノトヾメガタキヲ治、極テ色ノ紅梅ノ如クナル、ニシノカラヲ灰ニ燒テ細末メスユニカキタテ、一服ニ一錢充服スベシ、二三服ニハカナラズトヾマルナリ。如此ノ秘藥也○大和本草曰、赤螺。大ニテ短シ、肉赤シ、味美ナリ。介品曰、紅螺、俗ニ赤螺（アカニシ）ト云、大小二種アリ

紅螺圖



外白色紫褐細斑

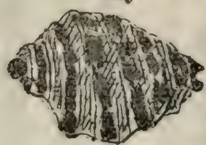
之良爾之（シラニシ） 本草和名 今名 クモホラ

本草和名曰、白小辛螺、和名之良介之 今案 之良介之ハ、本草和名ニ、白小辛螺ト云エバ、岩ニシノ白色ナル者也

久呂爾之（クロニシ） 本草和名 今名 テツホラ

本草和名曰、黒小辛螺、和名久呂介之 今案 久呂介之ハ、本草和名ニ、黒小辛螺ト云エバ、テツホラ也。鐵ホラハ岩ニシノ一種也。形状岩ニシニ似テ、黒色白斑アリ

久呂介之ノ圖



形状圓長ノ兩種アリ

加美奈（カミナ） 倭名類聚鈔 漢名 寄居蟲 本草 今名 ガウナ

證類本草曰、寄居蟲、陶云、海邊大有レ似ニ蝸牛ニ、火ニテ炙レバ殼ヲ便走出、食レ之益ニ顏色ニ。按寄居ハ在ニ殼間ニ而非レ螺ニ也。候ニ螺蛤開ニ、當自出食螺蛤欲レ合已還ニ殼中ニ、亦名ニ寄生ニ、無ニ別功用ニ、海族多被ニ其寄ニ、又南海一種、似ニ

蜘蛛ニ入ニ螺殼中ニ、負レ殼而走、一名辟、亦呼ニ寄居ー。閩部疏曰、寄居有ニ四足兩螯ニ、又似ニタリ蟹類ー。小知錄曰、如ニメ螺ノ而有レ脚、形似ニ蜘蛛ー者寄生

一名 がうな 方丈記○倭名鈔曰、寄居子。和名加美奈、俗假ニ用蟹蜷ニ字ー。本草和名曰、寄居。和名加美奈。正字通曰、寄居。小蟹名

蟹蜷 延喜式

居寄子 台記別記曰、康治元年十一月、大嘗會、丹波國、寄居子二四

集註 延喜式卷第三十九曰、內膳司。年料、尾張國、蟹蜷二擔四壺。類聚雜要抄曰、母屋大饗、饗膳差圖、蟹蜷。朝倉亭御成記曰、五献、かうな

形狀 方丈記曰、(寄居虫ト書形ハいなごに似たり)がうなはちいさきかいをこのむ、これよく身をしるによりてなり○大和本草曰、寄居蟲(ガウナ)、海邊斥地ニ多シ、小螺ノカラニ入テ寄居ス、故ニ俗ニヤドカリト云。首ハ蜘蛛ニ似テ、身ハ蝦(エビ)ノ如シ。カラヲ負テユク、海人是ヲ取集メテシホカラニス

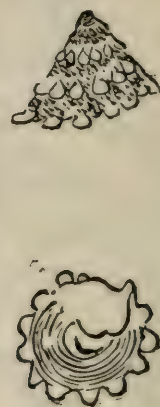
うらうつ貝 藻塩草

今名 ウラウズ

集註 藻塩草曰、うらうつ貝。夫木集 たつさはぐあしのもとはをかき分てうらうつがひをひろひつるか那

形狀 ○ウラウズ介ハ黃螺(ヘイ)ノ半ヨリ切タル如シ。流レ平ニメ渦文アリ、殼ニ斑アリ、凡テ白色也。又紅色、或他色モアリ

ウラウズノ圖



鸚鵡盃 柿本影供記

廣東新語曰、有ニリ鸚鵡杯一、本ト海蠃殼也。出ニ瓊州三亞港青欄海中一、前屈メ而朱ク、如ニ鸚鵡ノ嘴一、然尾旋尖ノ處作ニ數層一、一穴相貫キ、甚詰曲ニシテ可ニシ以藏レ酒、其色紅白青紫相間レリ、生ニテ取ル者鮮明。異物志云、扶南ニ有ニ大蠃一如レ甌、其ノ體蜿蜒委曲盛レ酒在レ中、自注至ニ傾覆一終ニ不レ盡、以テ伺誤相罰爲樂〇塵添壒囊抄曰、或說ニハ海中ニ貝アリ、鸚鵡ノ形ニ似タリ、是レヲ取テ背(セナカ)ウガチ破リテ盃ニ用フ、能泛カ故ニト云云、或ハ似タル貝ヲ用ト

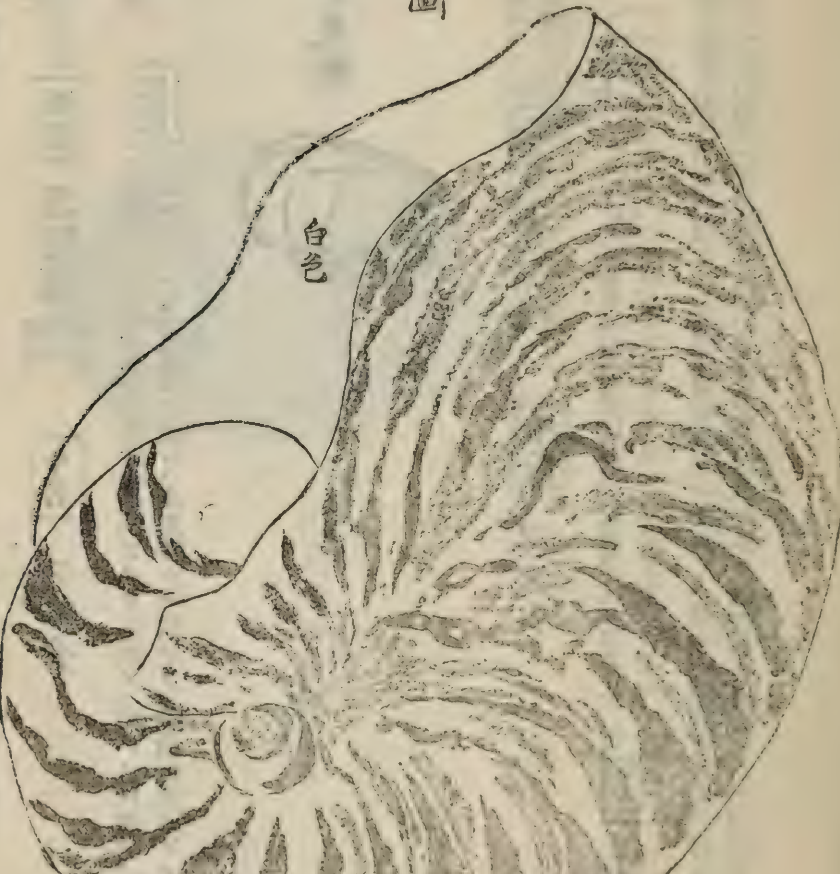
【一名】鸚戔 本朝無題詩。扶桑畧記廿九日、命ニ佳會之鸚盞一 鸚鵡盞 本朝麗藻

【集註】柿本影供記曰、次柿本初獻、侍人等持ニ鸚鵡盃幷小銚子等一、祗ニ候簀子敷一云云、加州依ニ慕藺之義一、執ニ鸚鵡盃一授ニ進人丸前一。泉州依ニ深嗜ニ此道一、執ニ小銚子酒一、入ニ鸚鵡盃一置ニ机上一云云、鸚鵡盃珍重之由、人々談レ之。本朝麗藻曰、翠羽簾前鸚鵡盞。注、往年人々參ニ會齋院一之日、相公簾中出レ盞、忽作ニ佳句一。永承六年侍臣詩合曰、扇處纔浮鸚鵡盞。本朝無題詩曰、鸚盞三杯等後春。古今著聞集卷第五曰、元永元年六月十日、修理太夫顯季卿、六条東洞院亭にて柿下大夫人丸供をおこなひけり云々初

獻侍人等鸚鵡の盃、小銚子をもちて云々

【形狀】○介品曰、鸚鵡螺。和ニ又鸚鵡貝ト云フ、形蛸船貝ニ似タリ。本草啓蒙曰、鸚鵡螺、形圓ニメ扁ク、高サ三寸許、濶サ七八寸許、尾平ニメ尖ナク、大抵扁螺ノ形ニ類ス、色白クメ紫黑色ノ斑紋アリ、ソノ口濶クメ階ナシ、深サ三寸許ニメ底アリ、平ニメ一ノ小孔アリ、コレヲ折破レバ又底アリ、末ニ至ルマデ凡數十底、皆一孔アリ、アフム介ハ殼厚ク、圓扁ニメタコフネノ形狀ヲナス、其內ヲ破レハ綠色光澤アリテ美也

鸚鵡螺圖



朝倉ハ前田ノ誤ナリ

ふな貝 藻塩草

【漢名】馬蹄螺 福州府志　【今名】フネ介

閩書曰、馬蹄螺以テ形似タルヲ名　【形狀】○船介小ナル者多シ、大者寸許、ツメタニ似テ、流レノロ潤ク、末ニテ張リ、卷尾ハ小ニメ、其內船ノ如シ、亦馬蹄ニモ似タリ、殼白色黑斑アリ、內白色也

船貝ノ圖



つへた 三好亭御成記

【漢名】光螺 閩書　【今名】ツメタ

閩書曰、光螺暈紫斑　【一名】つめた

朝倉亭御成記曰、御前、御配膳云々むし麥、御そへもの、つめた五ッ金銀ノしべ　【集註】三好義長亭御成記曰、献立次第、二献のしつへた鯛。室町殿日記曰、或とき秀吉公御斷に人々を召て、樣々の雜談ども有りける處に、ある大名方、螺牛鼠膓つべた三種上申されければ、太閤御覽有て、いかに幽齋是につけて、一句有まじきかと仰られ

ければ、畏ゆとて、かきくらしふる白雪のつべたさをこのわためしてあたゝめそすべ。と申しかば、秀吉公ゑみさせ給ひて、早速に出さるゝ事神妙に社覺ゆれ、と仰られて、大きに興じ玉ひける

形狀

○大和本草曰、ツベタ海邊ニアリ、其肉カタシ、味不レ美、其形蝸牛ニ似タリ、フタハソリテウスシ、ツメタハ、玉ガヒ、又ヘソガヒ紀州ト云、大サ扁柑ノ如ク微長、殼厚ク滑澤ニシテ褐色、又白色モアリ、海沙ノ内ニテハ、其內外ニ出四分ニ開テ螺殼ハ上ノ中ニアリ、水ヲ出セバ殼內ニ其肉ヲ納ム、靨ハ茶褐色ニシテ薄ク透明、雙葉細辛葉ヲ半ニ切リタルニ似タリ

つめたノ圖



大ナル者二寸餘ニ及フ

古名錄介部卷第五十八　終

古名錄介部卷第五十九目錄

雜介類

宇萬乃久保加比（ウマノクボガヒ） 紫貝　　夜久貝 貝子

夜久乃斑貝（ヤクノマダラカヒ） 紅斑ノ貝子

阿波比 石決明

○長蚫　○短蚫　○開蚫

○うちあはひ　○御取鰒

○着耳鰒　○躭羅鰒　○鳥子鰒　○都都伎鰒

○放耳鰒　○細割鰒　○羽割鰒　○出鰒

○權出鰒　○葛貫鰒　○火燒鰒　○蔭鰒

○薄鰒　○腐耳鰒　○甘鮨鰒　○鮨鰒

○纒貫鰒　○嶋鰒　○鰒腸漬　○鞭鰒

○東鰒　○隱岐鰒　○佐渡鰒　○阿波鰒

○筑紫鰒　○長門鰒　○出雲鰒　○安房鰒

○布鰒　○醬鰒　○蒸鰒　○夏鰒

○味噌鰒　○玉貫　○海松纏鰒　○乾鰒

宇仁（ウニ）　海膽　○加世　保夜（ホヤ）　石勃卒

勢（セ）　石蜐

通計四十八種

古名錄介部卷第五十九

紀藩　源　伴存撰

雜介類

宇萬乃久保加比（ウマノクボカヒ） 倭名類聚鈔　漢名　**紫貝** 本草

證類本草曰、紫貝。唐本注云、形似ㇾ貝圓、大二三寸、紫斑而骨白。圖經曰、今紫貝則以ㇾ紫爲ㇾ質、黑爲ㇾ文。衍義曰、紫貝大二三寸、背上深紫有ㇾ點、但黑。正字通曰、今紫貝紫爲ㇾ質、黑爲ㇾ文點、一名

宇麻乃久保加伊 天文写本和名抄曰、紫貝、深紫有點、但黑、和名宇麻乃久保加伊。倭名鈔曰、紫貝、和名宇萬乃久保加比　**こやす貝** 藻塩草、こやすかひの事、竹取物語ニアリ　**子安貝** 言塵集　**べゝカイ** 頓醫抄曰、瞙目ヲ治ス。ヤウカイヲ白灰ニヤキテ、べゝカイトモイフ、人ノ手足ノ間、何ニテモ甲ヲ灰ニヤキテ、右此二種ヲ等分ニ細末ゞ、灯心ニテマケノ生タル方へ可入、効アリ。按熊野ニテ女陰ヲべゝト云　**ヤウカイ** 見上　**ソヽ貝** 慶長十七年、麻嶋眼科書曰、貝子燒水飛ス、ヤウ貝モ、コヤス

貝モ、ソ、貝モ、何ノ日ニモ吉

夜久貝（ヤクカヒ） 新撰字鏡　〔漢名〕 貝子 本草　〔今名〕 タカラガヒ

桂海虞衡志曰、貝子、海傍皆有レ之、大者如レ拳、上有二紫斑一、小者指面大白如レ玉。正字通曰、一說貝中皆帶二黃白色一、而有二黑紫點一、玄貝者多二黑文一、餘貾者黃色、而微白、餘泉者白色而微黃、肰皆有二紫黑點一、舊謂黃質而白文、白質而黃文誤也

〔今案〕 古ニ夜久貝ト云ハ、今ノ青螺ニ非ズ、桃蕪藥葉ニ、襲、冬ハ浮線綾の文のあや、白粉張にして、やく貝にてみがく、トミユレバ、夜久貝ハ貝子（タカラガヒ）也。證類本草ニ、書家亦或使レ研レ物ト云リ。釋日本紀曰、私記曰、云云出美貝、今俗謂二之夜句貝一

〔一名〕 牟末乃都保加比 本草和名曰、貝子。和名牟末乃都保加比　夜久螺 江家次第　夜句貝 釋日本紀　无末乃久保加伊 本草類編　〔集註〕 新猿樂記曰、本朝物夜久貝　〔形狀〕 本草類編曰、貝子。和无末乃久保加伊、又云、須和宇加伊、論云、紫色是也。无時採之

夜久乃斑貝（ヤクノマダラガヒ） 倭名類聚鈔　〔今名〕 アカフノタカラガヒ

賀ノ下茂臨時祭アルベキカ

相貝經曰、素質紅章曰ニ珠貝ト、皭貝赤帶通脊是也。愚貝使ニシレ人ヲ善ク忘レ、赤熾ニシテ內殼有ニ赤絡一是也

一名　須和宇加伊（スワウ）本草類編　紅螺 本朝文粹　錦貝

倭名類聚鈔曰、錦貝。夜久乃斑貝。俗說ニ西海ニ有ニ夜久島一、彼島所レ出也。言塵集曰、錦貝。やくかいの事之。雜言奉和曰、相逢向齒約窮秋、勸引紅螺酒似流。本朝無題詩曰、手引紅螺雖酌竹云云　本朝文粹曰言江以當于紅螺之聲忽、暮玄鶴之駕將レ歸。天文写本和名鈔曰、錦貝。夜久乃斑貝。今按所レ謂爲レ盃之紅螺是也。按ニ唐ニテ紅螺ト云者アリ。本草綱目曰、紅螺ハ色微紅。閩書曰、紅螺、肉可レ醬。西京雜記曰、香螺卮、出ニ南海一、一名丹螺、即アカニシ也。小知錄ニ、嶺表有ニ紅螺鸚鵡螺一、好事ノ者以テ爲ニ酒器一ト云ハ廣東新語廣注ニ、純赤如丹砂ト云者ニシテ一種ノ者也

集註

家次第曰、石淸水臨時祭云云　盞ニ螺盃銅盞一。螺盃銅盞、近代不レ行。頭書曰、螺ハ延喜三十一賀五獻後夜久螺觴進使左中將等公賴右中將信衡次銅觴進倍從。後醍醐天皇年中行事曰、前二日ばかりに試樂の事云々まことにや二こんはてゝ、螺盃銅盞と云物、かざしのだい藏人もちて參て、長橋のひがしにおく、今の世はらはいまではめし出ず、庭の座あらため、庭はらひて、亦出させ給ふ。北山抄曰、賀茂臨時祭事云云次以螺盃銅盞賜一巡使等起座

形狀

〇貝子ニ紅質ニシテ白キ星文アルアリ、淡紅質ニシテ紅星點アルモアリ、又如ニ赤電黑雲一モアリ、又全躰紅色ナルモアリ

正誤

本草啓蒙ニ、和名鈔ノヤクノマダラカヒヲ紫貝ノ一名トス、非也。正字通ニ、紫貝、紫ヲ爲レ質ト黑爲ニス文點一ト云、本草類編曰、貝子、須和宇加伊。倭名鈔曰、蘇枋、俗音須方。天文写本和名鈔曰、錦貝。夜久乃斑貝。今按所レ謂爲レ盃之紅螺是也。觀レバ此ヲ則夜久乃斑貝ハ、紅斑ノ貝子タル事

可ノ下辨本不レ疑。可レ試ニ長生久視之術ニ也トアリ

明白也

阿アハ波比ビ 倭名類聚鈔 【漢名】石決明 本草 【今名】アハビ

按ニ萬葉集、延喜式、令、倭名鈔ニ、アハビニ鰒ノ字ヲ用ルハ唐本草ニ據者也。證類本草曰、石決明、陶隱居云、是鰒魚甲附レ石生、大者如レ手、明耀五色、內亦含レ珠。唐本注云、此物是鰒魚甲也。附レ石生、狀如レ蛤、惟一片無レ對、七孔者良、今注謂是紫貝及鰒魚甲並誤矣。圖經曰、石決明生ニ南海ニ、或以爲ニ鰒魚甲ニ、鰒魚主產所レ食者、一邊著レ石光明可レ愛、自是一種與ニ決明ニ相近耳。決明殼大如レ手、小者三兩指、海人亦噉ニ其肉ニ。本草綱目曰、石決明。形長如ニ小蚌ニ而扁、外皮甚粗細孔雜雜タリ、內則光耀、背側一行有レ孔、如ニ穿成者ニ、生ニ於石崖之上ニ、海人泅レテ水乘ニ其不意ニ、卽易レ得レ之、否則緊粘難レ脫也。惟鰒魚是一種二類、故功用相同。通雅曰、石決明、九孔螺也。舊說肉爲ニ鰒魚ニ非矣（）蝦夷志曰、石上鰒魚石決明所在皆有、乃沒レ水而捕レ之、鰒魚石決明一類兩種、其形小大亦自不レ問、或以不ニ決明ニ爲ニ鰒魚ニ疑非也（）石決明ハアハビ也、鰒魚ハナガレコ也、閩書ニモ石決明、附レ石生、惟一殼無レ對、大者如レ手、小者如ニ兩三指ニ、旁有ニ數十孔ニ、鰒魚似ニ登萊ニ而小ト云リ

【一名】安和比乃加伊 本草新編曰、石決明、和安和比乃加伊、不レ拘レ時採レ之。武藏國風土記曰、荏原ノ郡貢ニス石決明鮨名苔之類ヲ。明衡往來曰、石決明麻子散右其方如何可注給也、藥驗可誠長久條之術也

鮑 北山抄。日本書紀ニ、蝮字ヲ用。正字通曰、蝮蝮蛇卽ハビ

也。新撰字鏡曰、蝒。即由反、平虫阿波比。蚫、阿波比。蛤、阿波比。蝠、阿波比。蜩、阿波比〇蛤。正字通曰、蛤、俗蛤字、舊註毛蟲。字典、蛤字註曰、爾雅釋蟲蛤毛蠹

安波妣 萬葉集卷第十八日、安波妣多赈、伊保知毛我母、云云。安波比多赈母我云云。同卷第七曰、鰒玉。同卷第六曰、鰒珠

婀波寐 日本書紀武烈天皇紀

阿和美 本草類編曰、鮀魚甲、和阿和美、日本和安和比、是多謬也。見本草注之長一二丈龜也、又名鼉是鮀魚也〇證類本草曰、鮀魚甲、陶隱居云、蛇即今鼉甲也。陳藏器、按長一丈者能吐レ氣成レ霧致レ雨、力至猛能攻二陷江岸一、性嗜レ睡、但目閉形如レ龍、大長者自嚙二其尾一、極難レ死、聲甚可レ畏、人於二穴中一掘レ之、百人掘亦須二百人牽一、一人掘亦須二一人一、不レ然終不レ出、和産未詳

安和比 見上註

鰒貝 萬葉集卷第十一曰、伊勢乃白水郎之、朝魚夕菜爾、潜云、鰒ノ貝之、獨念荷指天。倭名鈔曰、鰒。蒲角反、与レ雹同。今案ニ一音伏、見二本草音義一

磯貝 萬葉集卷第十一曰、水泳、玉爾接有、磯貝之、獨戀耳、年者經管。仙覺萬葉集註釋卷第十一曰、いそかひの、かたこひのみにとは、あはびのかひによそへて、こひの心をよめるなり。ことにいしにつきたるかひなれば、いそがひといふ。たまにまじれるとは、あはびは、いしにつきたれば、たまにまじれるといふ、石は玉のたぐひなり云々又あはびはたまをふくみて、もちたれば、よそへよめるなり。言塵集曰、磯貝

九穴ノ蚫貝 源平盛衰記卷第三曰、彼花山法皇ノ御行ノ間ニ云云　九穴ノ蚫貝一ツヲ奉ル、法皇此供養ヲメサレテ、末代行者ノ爲ニトテ云云蚫ヲバ一ノ瀧壺ニ被二放置一タリト云、白河院御幸ノ時、彼蚫ヲ爲レ被レ見海人ヲ召テ瀧壺ニ入ラレタリケレバ、貝ノ大サハ傘バカリトゾ奏申ケル

大一ハ六ノ誤ナラム

蚫ノ貝 源平盛衰記卷第卅九曰、蚫ノ貝ノ風情ノ **安於比** 本草類編曰、鮑魚。和安於比 **あふひ** 大草相傳之聞書 **あま貝** 言塵集○山海名產圖會曰、鰒。五畿內の俗是をアマ貝といふは、海人の取ものなればなるべし **貝蚫** 類聚雜要抄曰、母屋大饗、繫膳、貝蚫。祇園會御成記曰、献立三すしかいあはび、九献かいあはび。飯尾亭御成記曰云云、貝蚫一折○伊勢貞丈雜記曰、貝あはびと云はなまあわびをいふ、貝の付たる也 **生蚫** 台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、丹波國生蚫五十貝○明月記曰、安貞元年十一月十日云云蚫羹ハアツモノト被催。江家次第曰、腹赤奏云云次供蚫御羹アツモノ。三字引合可讀 後醍醐天皇年中行事曰、元日節會云云おほよそ御膳の種々、その名はあれども、そのすがたいづれともわきがたし。內膳など皆いまだたづねとはず、てんせい、ひつら、かつこ、けいしんなどやうのもの也。こんとむ、さくべいはめぢかき物なれば、さだめて人もおぼつかなからじ云云次あつものを供す、あはびのあつものなり、たゞあつものといふ。北山抄曰、四月朔旦旬事、次供蚫御羹。台記別記曰、康治元大嘗會、次供蚫羹、御飯等了

集註 賦役令曰、若輸雜物者、鰒十八斤。日本書紀允恭天皇曰、爰更集處々之白水郞、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、勝於諸海人、是腰繫繩入海底、差頃之出曰、於海底有大蝮、其處光也、諸人皆曰、嶋神所請之珠、殆有是蝮腹乎、亦入探之、爰男狹磯抱大蝮而泛出之、乃息絶以死浪上。延喜式卷第一曰、四時祭上。祈年祭神、云云座別鰒云云各五兩。鳴雷神祭一座、鰒云云各二斤。春日神四座祭、祭神料、鰒云云各大一斤。散祭料、鰒云云各六斤。同卷第二曰、四時祭下。九

鰒ノ上鮨字アルベキカ

料ノ上句字脫カ

月祭、御巫（ミカンコノ）奉レ齋神祭、鰒云云各十二斤。同卷第三曰、臨時祭。霹靂神祭、鰒十斤。同卷第四曰、伊勢太神宮。九月神嘗祭、鰒十二斤。同卷第五曰、齋宮。凡諸國送納調庸。雜鰒三百四十四斤。同卷第三十九曰、內膳司。年料、太宰府、鰒一百八斤三缶。諸國貢進御贄、料。云云加進、志摩國御厨鮮鰒鱠之署常陸國風土記曰、久慈郡、所レ稱ニ高市ニ云云其東南臨ニ海濱ニ石決明云云甚多。出雲國風土記曰、出雲郡、凡北海所在雜物、但鮑出雲郡尤優、所レ捕之所、謂御埼海子是也。台記別記曰、康治元年十一月大嘗會、蚫百斤。厨事類記曰、龔御膳云云近年日別蚫二連添之。山家集曰、沖たるいはにつきてあまどものあはびとりけるところにて「岩のねにかたおもむきに波うきてあはびをかづくあまのむらきみ。今昔物語曰、能登國の奥に鬼寢屋といふ嶋あり、其嶋には河原の石のやうに鮑おほくあれば、其邊に光嶋といふ浦もあり、其浦にすむ海人は、鬼寢屋にわたりて、鮑を取て國司に年貢にしける云々、光浦の海人、鬼寢屋に渡りて歸りぬれば、鮑一万を國司に奉りける。四五十八一度にわたりし間、其鮑のおほさを思ひやるべし、しかるに藤原通宗朝臣能登守の任おはる年、光浦の海人どもの、鬼寢屋に渡り歸て、國司に鮑弁へけるを、しゐてせめければ、海人共わびて、越後國に歸渡ければ、光浦に人なくなりて、鬼寢屋にわたりて鮑取こと絕にけり、一度にせめておほく取むとしける程に、後には一ツをだにえとらずやみにけりとなん。文祿四年御成記曰、三ノ御膳、貝鮑。大草相傳聞書曰、あふびまつばもりの事。かいの內にひばを敷、其上にゆかい敷を鋪、其上に下もりをして、其上にあふびをたたみ、高さ五寸にもる也。盛樣は次第に上をほそくもる也。あふびつくりやうの事。とのふくれを取てかつらをのせ、左右のみゝをすこしきりてのけ、竪にうすくつくり、長さ三寸又よこ貳分がほどゝ苦し

からず、りうりはすに能酒をかけて用る也。四條流庖丁書曰、生蚫テウズル樣、取上タル始ハエグキ味有也。然間フツウニ切テ、塩ヲ打テ、能モミテ、扨水ニテスヽギテ、アエテモ煮テモ可レ參、オリ 〔形狀〕 經國集卷第十四日、辨談、五言、石決明詞一首、擬高麗。七孔本無レ對、能令二人決一レ明、胎珠光未レ顯、誰識重二連城一。常陸國風土記曰、多珂郡濱有鰒魚大如八尺 ○長蚫 肥前國風土記曰

鰒 〔今名〕 ノシ 〔一名〕 ノシ 宣胤卿記曰、永正三年正月十六日、自伊勢國御厨一荷、合鮑ノシ二百本、荒卷二到來、十一月廿八日江州蒲生入道[illegible]一荷、兩種ノシ二百本、荒卷三、宗規傳之扇一本遣之

伸蚫（ノシ） 殿中申次記曰、七月朔日、伸蚫千本、天野五荷、恒例

熨斗蚫 殿中申次記曰、三月朔日、熨斗蚫千本。祇園執行日記曰、獻立、御さかなよこむ、のし、たこ、うけいり○丹鉛總錄曰、說文、熨持レ火ヲ申レス繒ヲ也。一曰、火斗、柳文所謂鈷鉧也

〔集註〕 延喜式卷第二十四日、主計上、凡諸國輸調、長鰒云云安房國、調、長鰒七十二斤。伊豫國、調、長鰒三十六斤。肥前國、調、長鰒二十四斤。吾妻鏡卷第十二日、建久三年十二月廿日、前右大將家政所、進上相摸國吉田御庄御年貢送リ文事、云云例進長鮑千百五十帖。寬正七年飯尾宅御成記曰、當日折二合、まんぢう、のし蚫、折二尺五寸よはう。宣胤卿記曰、永正三年正月三日、伊勢又七鮑三百本、炭一荷送之、歲暮佳例儀置也。四條流庖丁書曰、引渡シノ事、ノシアワビヲ五寸ニテケヅル也、口傳、等ヲ十二タツベシ、閏月ニハ十三可レ立、ノシアワビ重ル樣口傳

〔形狀〕 ○本朝食鑑曰、造二長鰒一法、采二生鰒一去二腸殼一、以二小刀一從二耳端一環メクリ切テ、至二中肉一成レス條、次第切盡シ、條條洗ヒ淨メ、曝二

乾、待ニ生乾ニ而引舒令レ長、復暴乾作ニ明白條ニ、此謂ニ長鰒ニ。短鰒亦略同。山海名產圖會曰、制ニ長蚫ニ、先貝の大小に隨ひ剝へき數葉を量り、橫より數〱に剝かけ置て、薄き刄にて薄〱と剝口より廻し切る、豐後豐島鷹に敷き並らべて乾が故に、各筵目を帶たり、本末あるは束ぬるが爲なり

○短蚫 肥前國風土記　一名 短鰒 延喜式

集註 肥前國風土記曰、奉レ造ニ御贄ニ恒貢ニ御膳ニ。卽長蚫、鞭蚫、短蚫、陰炮、羽割蚫等之様、獻ニ於御所ニ。延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、云云短鰒各六斤。凡中男一人輸作物、短鰒云云各一斤。相摸國、中男作物、短鰒。隱岐國、調、短鰒。阿波國、中男作物、短鰒。伊豫國、調、短鰒三百三十斤。中男作物、短鰒。筑前國、調、短鰒。肥前國、調、短鰒五百三十四斤。豐後國、調、短鰒七十二斤。同卷第三十九曰、內膳司。年料、太宰府、短鰒五百十八斤十二褁

形狀 ○本草啓蒙曰、筑前ニテ大决明ヲ竪ニ薄ク切テ乾シタルヲ出ス、長七八寸アリテ、火刀ノ形ニ似タリ、ヒウチノシト云、肥後ヨリハ全肉ヲ橫ニ薄ク切リ乾タルヲ出ス、煎餅ノ形ノ如シ、大サ四寸許

○開蚫 台記

集註 台記別記曰、康治元年十一月、大嘗會、近江丹波國司解申進上多米都物㪅、云云丹波國、開蚫百帖

○うちあはひ 大內問答

集註 大內問答曰、うちあはび十二ほん、うちあはびを引わたしと云なり。閭は十三けづりかけ、長サ七寸五分、ほうき方をのけて細方左へ成べし

○御取鰒 延喜式

集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、御取鰒云云各四斤。隱岐國、調、御取鰒。阿波國、調、御取鰒二百斤。筑前國、調、御取鰒二百六十斤。

肥前國、調、御取鰒三百六十四斤。豐後國、調、御取鰒六十二斤。同卷第三十九日、内膳司。年料。太宰府、御取鰒四百五十九斤五裹

○着耳鰒 延喜式 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、云云着耳鰒各四斤。安房國、調、着耳鰒八十斤

○鮑羅鰒 延喜式。日本書紀曰、鮑羅人。按鮑羅ハ國名 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、鮑羅鰒六斤。肥後國、調、鮑羅鰒三十九斤。豐後國、調、鮑羅鰒十八斤

○烏子鰒 延喜式 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、烏子鰒云云各二斤。安房國、調、烏子鰒云云各二十斤

○都都伎鰒 延喜式 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、云云都都伎鰒各二斤。安房國、調、云云都都伎鰒各二十斤

○放耳鰒 延喜式 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、放云云耳鰒三斤五兩。安房國、調、放耳鰒六十六斤四兩

○細割鰒 延喜式 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、細割鰒、云云各六斤。阿波國、調、細割鰒三百三十三斤

○羽割鰒 延喜式 【一名】羽割鮑 肥前國風土記 【集註】延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、羽割鰒云云各六斤。筑前國、調、羽割鰒六斤。肥前國、調、羽割鰒二十四斤。豐後國、調、羽割鰒十二斤。同卷第三十九日、内膳司。年料。太宰府、羽割鰒三十九斤一裹 【今案】本朝食鑑曰、羽割者割二開一片一、連二續一片一而披レ之、則如レ振二蝶之羽一也。此說蝶翅ヲ以テ羽割トス非也。羽ハ翼羽也。倭

自餘云ミハ鰒ナリ

名鈔曰、羽。唐韻云、羽鳥翅也。和名波。字典曰、羽。書ノ禹貢、齒革羽毛、傳ニ、羽ハ鳥羽。前漢百官志ニ、期門羽林、註、師古曰、羽林亦宿衛之官言ヒ其如ク羽之疾ク如キ林之多キ也。一說、羽以爲ニ王者ノ羽翼ト也。江家次第卷第四曰、除目。大間、如ク葉子妻重ノ帖レ之、長一尺四寸許不ニ參差セ。羽葉通用スル證アリ。江家次第卷第十一曰、齋王群行、云云齋王ノ座南、御座ノ東小罳ニ向テ鋪ク羽薦一枚ヲ、壁ノ邊ニ敷ク葉薦一枚ヲ。即此也。平家物語卷第十一曰、たてをめんとりばにつきならべ。觀レハ此ヲ則羽割ハ切テ鳥羽ノ如ク重ネナシタル者也

○串鰒 延喜式　一名 串貫 延喜式卷第三十二曰、大膳上。釋奠祭別供料、串貫ス羽割云云各六斤

集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、串鰒云云各六斤

形狀 ○本草啓蒙曰、乾决明ハ奧州松前ヨリ出ルモノ、一尺餘ノ小竹ヲ用テ、肉五枚ヲ貫キ、木皮ヲ以テ十竹ヲツナギタルヲ一連トシ、歲晚ノ節物トス。クシガヒト云。本朝食鑑曰、以テ竹木ヲ削テ串子ヲ、貫キ生鰒ヲ、去リ甲腸ヲ而乾者、今通稱シテ串鰒ト焉。伊勢貞丈雜記曰、蜷川新左衛門、文明十三年日記、五月廿五日、貴殿より御進上雲雀廿折、丸蚫十串とアリ。蚫ノ丸ノマヽ串ニサシテほしたる也

○橫串鰒 延喜式　集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、橫串鰒云云各六斤。阿波國、調、橫串鰒三十九斤

○葛貫鰒 延喜式　集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、葛貫鰒云云各六斤。筑前國、調、葛貫鰒百八斤。豐後國、調、葛貫鰒十二斤

○火燒鰒 延喜式　集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、火燒鰒云云各六斤。筑前國、調、火燒鰒、云云自餘輸ニ火燒

薄鰒ハ自餘云々ノ所ニノミアリ

鰒一。同卷第三十九日、內膳司。年料、太宰府、火燒鰒三百三十五斤四褁。已上調物

○蔭鰒 延喜式 〔一名〕陰蚫 肥前國風土記 〔集註〕延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調。蔭鰒云々各六斤。筑前國、調、蔭鰒一百三十五斤。豐後國、調、蔭鰒三十斤。同卷第三十二日、大膳上。釋奠祭別供料、蔭鰒云々各四斤。同卷第三十九日、內膳司。年料、太宰府、蔭鰒八十六斤三褁

○薄鰒 延喜式 〔集註〕延喜式卷第五日、齋宮。供二新嘗一料、薄鰒云々各二斤。同卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、云々薄鰒各六斤。凡中男一人輸作物、云々薄鰒各一斤。石見國、中男作物、薄鰒。長門國、中男作物、薄鰒。筑前國、調、薄鰒、云々自餘輸二云々薄鰒一。肥前國、調、薄鰒。庸輸二薄鰒一。豐後國、調、云々自餘輸二薄鰒一。庸、輸二薄鰒一。日向國、調、薄鰒。壹岐國、調、薄鰒。同卷第三十二日、大膳上。釋奠祭別供料、薄鰒五斤。同卷第三十三日、大膳下。勘解由使百度料、五位一人、薄鰒一兩三分。六位已下一人、薄鰒一兩。同卷第三十九日、內膳司。六月神今食料。薄鰒六斤十兩。新嘗祭供御料、薄鰒十三斤五兩一分二銖。供御月料。薄鰒十一斤四兩。年料。薄鰒八百五十五斤十五褁。同卷第四十三日、主膳監。月料、薄鰒八斤七兩

〔形狀〕○本朝食鑑曰、薄者、生時薄切而曝乾也

○腐耳鰒 延喜式 〔一名〕耳腐鰒 延喜式卷第三十九日、內膳司。年料、太宰府、耳腐鰒九十八斤三缶、已上中男作物

〔集註〕延喜式卷第二十四日、主計上。凡諸國輸調、腐耳鰒十四斤。筑前國、調、腐耳鰒一百八十二斤、中男作物、腐耳鰒

○甘鮨鰒 延喜式 〔集註〕

淡路ハ阿波ノ誤ナリ

云云ノ下右豐樂料トアルベシ

延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸、調、甘鮨鰒二十八斤

○鮨鰒 延喜式 【一名】 鰒鮨 延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭。淡路國所レ進鰒鮨十五坩

【集註】 延喜式卷第五曰、齋宮。供二新嘗一料。鮨鰒二升。凡諸國送納調庸、云云鮨鰒二石。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、鮨鰒云云各四十六斤。阿波國、中男作物、鮨鰒。筑前國、調、鮨鰒。中男作物、鮨鰒。肥前國、中男作物、鮨鰒。同卷第三十九曰、內膳司。六月神今食料、鮨鰒云云各二升。新嘗祭供御料、鮨鰒云云各二升。右夜料。鮨鰒云云各二升云云

○纑貫鰒 延喜式 【集註】 延喜式卷第三十二曰、大膳上。宴會雜給、親王以下三位已上并四位參議。人別云云纑貫鰒各二兩二分。四位五位并命婦。人別纑貫鰒一兩。園韓神祭雜給料、纑貫鰒云云各十四斤。平野夏祭雜給料、纑貫鰒六十一斤八兩。多加二三十三斤八兩一。春日祭雜給料、纑貫鰒二十八斤

【形狀】 ○本草啓蒙曰、又肉ゴトニ小孔ヲ穿チ、纑ニテ貫キ懸ケ乾ス者ヲマルアハビト云、按卽纑貫鰒也

○嶋鰒 延喜式 【集註】 延喜式卷第三十二曰、大膳上。御膳八座、嶋鰒云云各六斤

○鰒腸漬 延喜式 【一名】 腸漬鰒 同上 【集註】 延喜式卷第五曰、齋宮。月料、腸漬鰒云云各一斗五升。凡諸國送納調庸、云云腸漬鰒七斗、相撲。同卷第二十四曰、主計上。阿波國、中男作物、鰒腸漬。筑前國、中男作物、腸漬鰒。肥前國、中男作物、腸漬鰒。同卷第三十九曰、內膳司。供御月料、腸漬鰒二斗三升二合五勺。年料、土佐國腸漬小鰒四缶、缶別納二三斗一、每年交易進上。太宰府、腸漬鰒二百九十六斤九缶。同卷第四十三曰、主膳監。月料腸漬鰒云云各二斗二升五合

東鮑二兩二分トアリ

○鞭鰒 延喜式 [集註] 延喜式卷第二十四曰、主計上。筑前國、調、鞭鮑二十四斤

○東鰒 延喜式 [一名] 東鮑 延喜式卷第三十二曰、大膳上。新嘗祭、皇后宮小齋給、六位已下一人、東鮑六兩

[集註] 延喜式卷第五曰、齋宮。月料。東鰒二十四斤六兩。供ニ新嘗ノ料、東鰒二斤十兩。凡諸國送納調庸、云云東鰒三百斤。同卷第六曰、齋院司。忌火竈神祭料、東鰒云云各一斤。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡供ニ神御ニ雜物、云云ニ東鰒ニ筥五合。別納ニ十斤ト。同卷第三十二曰、大膳上。御膳神八座、東鰒十二斤。六月神今食、小齋給云云五位已上一人東鰒二兩云云六位已下一人云云東鰒二兩云云。大直神一座、座別東鰒十二兩。雜給料、參議已上、人別東鰒一兩二分、五位已上三十人、人別東鰒一兩二分。六位已下二百六十八人。人別東鰒一兩。新嘗祭ニ小齋給云云五位已上一人、東鰒七兩。六位已下一人、東鰒七兩。同小齋侍齋給云云五位已上一人東鰒二兩三分。六位已下一人東鰒二兩三分。同會皇后宮小齋人四十二人、五位一人東鰒二兩三分。同宮神態直相給食四十七人、五位一人、東鰒二兩三分、六位已下一人、東鰒二兩三分。宴會雜給、親王以下三位已上幷四位參議。人別東鰒二兩、四位五位幷命婦、人別東鰒云云各一兩。大歌立歌、人別東鰒一兩。園韓神祭雜給料、東鰒云云各十六斤。平野夏祭雜給料、東鰒六十斤十二兩、冬加ニ四十三斤十四兩ト。賀茂神祭齋院陪從等人給食料、東鰒云云各五斤四兩。同齋院司別當已下四人食料、東鰒云云各十二兩。春日祭雜給料、東鰒三十七斤。松尾神祭雜給料、東鰒十斤。鎭魂祭別供料、東鰒十斤。同卷第三十三曰、大膳下。九月節文人料、五位一人東鰒云云各一兩、親王已下月料、東鰒九斤六兩、日五兩。賀茂齋内親王月料、東鰒三十斤。妃、東鰒九斤六

云云ハ衍カ

四兩二分ハ五位已上ニテ參議已上ハ五兩ナリ

妃ノ上賀茂齋院雜給料ヲ脫セルカ

兩、日五兩。夫人、東鰒八斤、日四兩三分。三位已上四位參議、東鰒二兩、五位已上減二一兩一。同卷第三十九日、內膳司。六月神今食料、東鰒七斤五兩。新嘗祭供御料、東鰒六斤十兩二分四銖、右夜料。東鰒一斤十兩二分四銖、右解齋料。東鰒六斤十兩二分四銖、右豐樂料。云云正月三節、東鰒八斤四兩。五月五日節、東鰒一斤十兩。七月七日節、東鰒一斤十兩。九月九日節、東鰒一斤十二兩。供御月料、東鰒四十五斤。同卷第四十日、造酒司。四座、竈神、座別東鰒六兩。同卷第四十三日、主膳監。月料、東鰒卅六斤九兩

○隱岐鰒 延喜式 【一名】隱岐鮑 延喜大膳式曰、皇后宮神能直相給、五位一人、隱岐鮑四兩。新猿樂記曰、隱岐鮑

【集註】延喜式卷第五曰、齋宮。供二新嘗一料、云云隱岐鰒各二斤。同卷第七曰、踐祚大嘗祭。凡供二神御一雜物、云云隱岐鰒筥十六合、別納二十二斤一。同卷第三十二日、大膳上。雜給料、參議已上、人別隱岐鰒四兩二分。新嘗祭、小齋解齋給、五位已上一人隱岐鰒二兩。宴會雜給、親王以下三位已上并四位參議、隱岐鰒二兩一分。四位五位并命婦、隱岐鰒云云各一兩。園韓神祭雜給料、隱岐鰒云云各十六斤。平野夏祭雜給料、隱岐鰒二十一斤、冬加二十三斤一。賀茂神祭齋院陪從等人給食料、隱岐鰒云云各五斤四兩。同祭齋院司別當已下四人食料、隱岐鰒云云各十二兩。春日祭雜給料、隱岐鰒云云三十七斤。釋奠祭別供料、隱岐鰒十八斤。同卷第三十三日、大膳下。九月節文人料、五位一人、隱岐鰒云云各一兩。妃、隱岐鰒云云各七斤八兩、日四兩。夫人隱岐鰒云云各六斤、日三兩二分。三位已上四位參議、隱岐鰒云云各一兩。同卷第三十九日、內膳司。新嘗祭供御料、隱岐鰒二斤五兩一分二銖。正月三節、隱岐鰒十一斤一兩。五月五日節、云云隱岐鰒各二斤五兩。七月七日節、隱岐鰒二斤五兩。九月九

布鰒ハ布ト鰒ト二物ナランカ調庸幷輸レ布

日節、隱岐鰒二斤五兩。供御月料、隱岐鰒四十五斤。同卷第四十三日、主膳監。月料、隱岐鰒卄五斤五兩

【形狀】〇本草啓蒙曰、隱州、佐州、雲州ノクシガヒ、及ビマルアハビヲ上トス。其形最大ニシテ他州ノ產ヨリ優レリ

〇佐度鰒 延喜式 【一名】佐渡鰒 同上

【集註】延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭、凡供二神御一雜物云云佐渡鰒筥四合、別納二十斤一。同卷第三十二曰、大膳上。園韓神祭雜給料、佐度鰒云云各十四斤。平野夏祭雜給料、佐渡鰒十四斤、多加二十四斤十五兩一

〇阿波鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十二曰、大膳上。釋奠祭別供料、阿波鰒云云各六斤。同卷第三十九曰、內膳司。五月五日節、阿波鰒云云各二斤五兩

〇筑紫鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十二曰、釋奠祭別供料、筑紫鰒二斤

〇長門鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十九曰、內膳司。五月五日節、長門鰒云云各二斤五兩

〇出雲鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十九曰、內膳司。五月五日節、出雲鰒云云各二斤五兩

〇安房雜鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十九曰、內膳司。供御月料、安房雜鰒二十三斤四兩

〇布鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第二十四曰、主計上。佐渡國、中男作物、布鰒

〇醬鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十九曰、內膳司。供御月料、醬鰒二十一斤。同卷第四十三曰、主膳監。月料、醬鰒卄條

〇蒸鰒 延喜式

【集註】延喜式卷第三十九曰、內膳司。諸國貢進御贄。旬料、

トアリ又布鰒他ニ所見ナシ
玉ハ串ノ誤カ但本朝食鑑ニモ玉鰒ヲ出シテ其製法ヲ書ケリ
腸ハ膓カ

味漬膓清蒸鰒玉貫御取夏鰒等月別惣五擔。厨吏類記曰、蒸蚫、蚫ヲ蒸テホシテ、ケヅリテ供之

○夏鰒 延喜式　○味漬 延喜式　○玉貫 延喜式

○海松纒鰒 延喜式

[集註] 延喜式卷第五曰、齋宮。供ニ新嘗ニ料、海松纒鰒一升

○乾鰒 萬葉集

[一名] 丸鰒 延喜式

延喜式卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、丸鰒云云各六斤。安房國調云云自餘輸云云丸鰒

[集註] 萬葉集卷第三曰、或娘子等賜ニ裹乾鰒ニ戲請ニ通觀僧之呪願ニ時、通觀作歌一首。海若之、奧爾持行而、雖放、宇禮牟曾此之、將死還生

[形狀] ○伊勢貞丈雜記曰、丸あわびと云は、丸のまゝのあわびえ。是はほしあわびまるといふなり。本朝食鑑曰、丸者去ニ甲腸ニ不レ切不レ割、全體而乾、則乾枯ノ如ニ大丸子ニ也

宇仁 倭名類聚鈔

[漢名] 海膽 嶺南雜記

[今名] ウニ

廣東新語曰、海膽生島嶼石上、殼圓有栗珠上有刺纍々相連

[一名] 宇爾 本草和名曰、靈蠃子。貌似レ橘而圓、其甲紫色、生ニ芒角ニ。和名宇尓。類聚雜要抄曰、母屋大饗、饗膳、靈蠃

甲棘蠃 令　棘甲蠃 延喜式　石經子 出雲國風土記曰、嶋根郡。凡北海所レ捕、雜物、棘甲蠃、字或作ニ石經子ニ

[集註] 賦役令曰、若輸雜物

學刊本ニハナシ

者、甲蠃六斗。延喜式卷第七曰、踐祚大嘗祭。阿波國所レ獻、蕀甲蠃云云等井二十坩。同卷第二十四曰、主計上。凡諸國輸調、云云蕀甲蠃各六斗。常陸國風土記曰、久慈郡、所レ稱ニ高市一云云其東南臨ニ海濱一。蕀甲蠃、魚貝等類甚多。出雲國風土記曰、出雲郡氣多嶋有ニ鮑螺子蕀甲蠃一

形狀　○本朝食鑑曰、宇仁。殼如ニ橘子一、外多ニ角刺一而紫灰色、或帶レ黑、下有ニ小口一、其腸有ニ赤黃者一爲ニ上品一、是大村五嶋平戶之產也。有ニ紫黃者一、味亦殊ニシテ他ニ而佳ナリ。是薩摩之嶋津ノ產也。有ニ黃白者一、味ヒ次ニ前之二州一。大和本草曰、海膽ウニ、今按海島處々ニ有レ之、殼カラマロク刺アリテ栗ノイカノ如ク色黑シ、筑紫ノ海人、其カラヲカセト云

○加世

倭名類聚鈔　倭名鈔曰、石陰子、本草云、石陰子漢語抄云、甲蠃、加世是物生ニ海中一陰精、故以名レ之。本草和名曰、石陰子、和名加世

今案　伊勢雜記曰、かせといふは海膽ノ事也。海膽はうにトいふ物也。うには、かぶと貝といふ貝の肉を塩からにこしらふる也。うには奧州越前肥前などより出るなり。奧州の詞にては、かせひしといふ、かせひしほの畧語也。類聚雜要抄ニ、母屋大饗饗膳差圖ニ靈蠃子ウニ石陰カセト觀ユルハ、ウニハ其殼名ニシテ、其肉ヲ加世ト云ル者ニタ、ウニノカセト云ル者也

保夜ホヤ

倭名類聚鈔　漢名　石勃卒　雨航雜錄　今名　ホヤ

雨航雜錄曰、石勃卒ハ形チ短圓三寸、長サ四寸、身赤ク腹泡急、其形勃卒、故名。一名來魚、或曰石㕊、入レ水所レ化
○倭名鈔曰、漢語抄云、老海鼠、保夜、俗用ニ此保夜二字一ヲ。平家物語曰、丸ほやすつたる金ふくりんのくらを

ひて。藤谷殿集曰、ほ屋のすゝきふく穗やの軒ばの一かたになびかは神のしるしともみん

集註 延喜式卷第二十四曰、主計上。若狹國、調、保夜交鮨。同卷第三十九曰、內膳司。年料、參河國保夜一斛。類聚雜要抄曰、平大饗目錄、上客料理所、窪坏物、海月、保夜。母屋大饗、饗膳、老海鼠。厨事類記曰、窪器物醬類也。老海鼠ハ或保夜ツクリカサネテモルベシト云云或說方ニツクリテモル、或老海鼠醬云云无老海鼠之時ハ蚫醬鮨蚫ヲモチイル。人車記曰、仁安三年八月御所御裝束、第六窪坏保夜海月調醬牟々木麥。台記別記曰、長承四年二月賴長任大將云云次居饗膳云云梨棗干鳥蒸蚫雉腊保夜海月飯筥酢等也。土左日記曰、なにのあしかげにことつけて、ほやのつまのいずしすしあはびをぞ、こゝろにもあらぬはぎにあげてみせける。朝倉亭御成記曰、九獻あかゞ并ほや。四條流庖丁書曰、ホヤ汁ニハリグリヲ入事ハ、ホヤノ毒ヲ生栗ニテ、可レ消タメニ、ハリグリニメ入也

形狀 ○大和本草曰、ホヤ海參(ナマコ)ニ似テ色赤黑色、形圓シ、多アリ、夏稀ナリ、堅硬ノ物也、非ニ佳味ニ、ホヤハ奧州仙臺ニ出、形狀圓長厚殼黃白色、亦淡紅色ニメ疙瘩アルモノアリ、海水ニ浸シタルハ軟ニ、風乾スルモノ堅硬、肉ハ淡黃色、或ハ淡赤色也、海中巖石ニ着生ス。按ニ庭訓往來ニ梅干ヲホヤト云、此物霜梅(ムメボシ)ノ形ニ似タリ

勢(セ)　倭名類聚鈔

漢名 石蜐　本草綱目　**今名** シイ　カメノテ

閩書曰、石蚨、福曰ニ龜脚ニ、日ニ黃蠩ニ、泉ニ曰ニ仙人掌ニ、莆ニ曰ニ佛爪ニ、江淹石蚨賦題、又名ニ紫囊ニ、春而發レ華ヲ、故ニ江賦有ニ石蚨應レ節ニ而揚レ葩ヲ之語ニ、今按春而發レ華ハ春月內吐ノ花レ外ニ、秋冬則否ラス。本草綱目曰、石蜐生ニ東南

竜刊本䖝ニ改ム

淡路ハ阿波ノ誤ナリ

造ハ獻トアルベキナリ

海中石上ニ、形如ニ龜脚ニ亦有ニ瓜狀ニ殻如ニ蟹螯ニ其色紫可レ食

【一名】 **世伊** 天文写本和名抄○倭名鈔曰、䖝蹄子、貌似ニ犬蹄ニ而附レ石生者也。兼名苑注云、石花〈花或作レ華〉二三月皆紫舒レ花、附レ石而生、故以名レ之。和名勢。出雲國風土記曰、嶋根郡、凡北海所レ捕雜物、石華、字或大脚也。於脚者勢也

世衣 本草和名曰、䖝蹄子、貌似ニ犬蹄ニ附レ石生也。和名世衣。萬葉集巻第三曰、石花海跡、名付而有毛云云。同巻第十二曰、馬聲蜂音石花蜘蟵荒鹿。仙覺萬葉集注釋巻第三曰、石花の海と申すはかの八乃海の其一也

【集註】 延喜式巻第七曰、踐祚大嘗祭、淡路國所造云云石華等井二十坩。已上那智潛女十八所レ作。出雲國風土記曰、秋鹿郡、凡北海所在雜物石華、出雲郡等ニ嶋有石花。合記別記曰、康治元年十一月大嘗會丹波國石花ニ定

【形狀】 ○大和本草曰、石蜐、和名カメノテト云、筑紫ニテシイトヽ云、殻トモニ煮テ、肉ヲ可レ食。貝ノ類色紫ナリ、長一寸四五分、独大ナルモノアリ、半ヨリ上ハ龜脚ノ皮ノ如ク、半ヨリ下ハ爪ノ如ク、ウラ表各二三片相合テサキハ尖ル、海岩ニ生ジ垂レテ不ニ移動ー

古名錄介部巻第五十九 終

古名錄介部卷第六十目錄

水産類

大田加比（オホタガヒ） 蚌　多加比（タカヒ） 蚌一種
長田加比 馬刀　之々美加比（シジミカヒ） 蜆
美奈（ミナ） 蝸蠃　ものあらかひ 鬼蛳
太都比（タツヒ） 田螺

通計七種

諸介類

打背貝　うばかい
見なし貝　すゝめ貝
みやこ貝　小蛸貝（スルメカイ）

袖貝　ふくろ貝
蘇芳貝　鬼かい
鎧貝　ちくさの貝
錦貝　きすかひ
かたつ貝　ほそかひ
しほかひ　萬與和
比良夫貝　色貝
粒貝　小ゝ
蠃子　われから
通計二十三種
附錄蜃二種

古名錄介部卷第六十

紀藩　源　伴存撰

水產類

大田加比（オホタガヒ） 新撰字鏡　[漢名] 蚌 本草　[今名] ドブガヒ

本草綱目曰、蚌與レ蛤同レ類而異ニレス形ヲ、長者通曰レ蚌、圓者通曰レ蛤、故蚌從レヒ手ニ、蛤從レフ合ニ、皆象ルレ形ニ也。後世混シ稱ニ蛤蚌ト一者非也。蚌類甚繁、今處々江湖ノ中有レ之、洞庭漢沔獨多、大者長七寸、狀如ニ牡蠣輩ノ一、小者三四寸、狀如ニ石決明輩ノ一、其肉可レ食、其殼可レ爲レ粉○字鏡曰、蚌。大田加比○正字通曰、蚌、俗字。字典曰、蚌。集韻、劣戌切、音律、蟲名。類篇、从レ蚌省

[形狀] ○大和本草曰、蚌、カラスガヒ、ドブガヒ、江州ノ方言ナリ。琵琶湖ニアリ、長七八寸アリ、他州ニモ池塘ニ處々ニアリ、海ニハナシ、食スベシ。本草啓蒙曰、蚌、ドブガヒ、湖中ノ產ハ大ニシテ或ハ一尺ニ過グ、形狀狹長ニシテ一頭廣シ、殼外ノ薄皮色黑シ、故ニカラスガヒト云、其肉ハ色白ク味佳ナリ

○蜌ノ一種也　今名　ミソカヒ

多加比　本草類編

一名　みそ貝　藻塩草

集註　本草類編曰、蜌。和多加比、无時採之。散木集曰、むかひの江にわらはのあそびたはぶるゝを尋ぬれば、みそがひといふ物ひろふなりといふを聞てよめる〔江のよどにみそがひひろふうなひ子がたはぶれにてもとふ人ぞなき

形状　○大和本草曰、ミソガイ、トブ貝ニ似テ小ナリ。泥ミゾニ生ズ、海ニハナシ。色黒キ故ニ味貝トモ名。本草啓蒙曰、蜌、又水田溝渠中ニ生ス、形小二三寸、或三四寸ナルモノヲミゾガヒト云

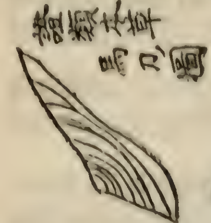
長田加比　新撰字鏡

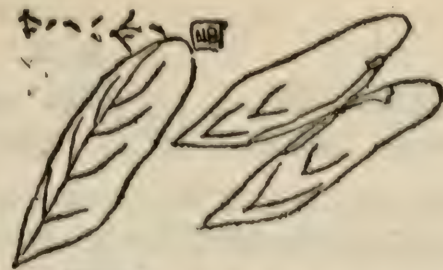
漢名　馬刀　本草

今名　サヽノハガヒ

證類本草曰、圖經曰、馬刀生江湖池澤及東海、今處々有之、蜯蜌亦謂之蜌、蜌與蟶同之類也、長三四寸、闊五六分、以來頭小鋭多、在江漢間、人名爲單姥、亦食其肉、大類蚌○字鏡曰、蜌。蒲礼反、蚌也。長田加比○字典曰、蚌、蜯也。篇海蜯、蠻、又蠻字註曰、博雅、蜯蠻蚌也。正字通曰、爾雅翼曰、大曰蜧、小曰蠻

形状　○本草啓蒙曰、馬刀キヤラガヒ、サヽノハガヒ、ナガマヒ、江州湖水中ニ生ス、形狀蚌ニ似テ狹細ナリ、一頭ハ尖リテ小刀ノ狀ノ如シ、一頭ハ濶サ五分許、長サ二三寸、殼外黑色、裏面ハ蚌ノ色ニ同ジ





之々美加比 倭名類聚鈔　[漢名] 蜆 本草　[今名] シヾミ

證類本草曰、蜆。陳藏器、小ニシテ於蛤ヨリ黒色、生ニ水泥中ニ。八閩通志曰、蜆殻黄黒色而小、俗呼爲ス蜆ト。出ニ江中ニ。 [一名] 四時美 萬葉集巻第六曰、住吉乃、粉濱之四時美、開藻不見、隱耳哉、戀度南

之自彌 新撰字鏡曰、蜆、小蛤。之自彌。倭名鈔曰、蜆貝。和名之々美加比　之々美加伊 天文写本和名鈔。伊勢國風土記曰、桑名郡蜆濱去永山一里許

[形狀] ○大和本草曰、蜆、諸州ノ通ズル處、或湖水淡水ニモアリ。介品曰、蜆黄黒ノ二色アリ、泥水中ノ者ハ黒ク、清水中ノ者ハ黄也

美奈 倭名類聚鈔　[漢名] 蝸蠃 本草　[今名] ニナ

本草綱目曰、蝸螺。處處湖溪有之、江夏溪沔尤多、大如指頭、而殼厚於田螺、惟食泥水。

〔一名〕美那 天文写本和名鈔〇倭名抄曰、河貝子。和名美奈、俗用蜷字非也。音拳、連蜷、出田螺說也。續日本紀卷第廿六曰、稱德天皇天平神護元年十一月戊午朔、上野國甘樂郡人中衛物部蜷淵等五人、賜姓物部公。人事記曰、保元二年八月有任大臣事、饗物二種、蜷月蚫雉塩茶ヒ等之。類聚雜要抄曰、六大臣殿饗大饗、陪坏有四坏。老海鼠、海月、寄蜷、細螺、已上四種常說之。五節殿上饗云々、追物、蜷、晶字箋曰、蜷、連蜷蟲形屈曲貌。字彙曰、蜷、蜷局、蟲行詰屈也。屈原離騷、蜷局顧而不行、註、蜷局詰屈不行貌。揚雄甘泉賦、或蟺蜷而蠖伏、東區合、註、連蜷長曲貌。臨安名勝志曰、石有蜷、東草木連蜷

南 萬葉集卷第九曰、讀弓削皇子歌一首、御食向、南淵山之、巖者、落波太列可、削遺有。日本書紀卷第二十二曰、推古天皇十四年五月、勅鞍作鳥曰、云云因以給近江國坂田郡水田二十町焉。鳥以此田、為天皇作金剛寺、是今謂南淵坂田尼寺。續日本紀卷第三十七曰、光仁天皇延曆二年三月丙申、藤原朝臣田麻呂薨云云、天平十二年、坐兄廣嗣事、流於隱伎、十四年宥之、歸京、居南淵山中、不預時事。

河貝子 類聚雜要抄曰、陪坏云云河貝子、蜷五升入角六角定

見名 萬葉集卷第十曰、見名淵山者、今日ゝ鴨

彌奈 新撰字鏡曰、螄蛙、二字弥奈

爾奈 字鏡曰、蜷、尒奈

三名 萬葉集卷第十六曰、三名之綿、蚊黑爲髪子云云。同卷第三曰、美奈乃和多、迦具漏伎可美爾云云。同卷第十五曰、美奈能和多、可具呂伎可美爾云云。同卷第十三曰、蜷腸、香黑髪丹云云。仙覺萬葉集註釋卷第三曰、蜷をみなと云がごとし。雅亮裝束抄曰、うへのさぶりにななすびて、ひ

らでがい（貝）をおしたり云ゝ。をみのこと云ゝあげまきになを（蜷）むすびさげて云ゝ

彌那　萬葉集卷第七曰、彌那ノ綿、香黒髮ニ云云　【集註】延喜式卷第三十九曰、内膳司。旬料、云云但蜷并云云隨レ得加進　【形狀】徒然曰、みなむすびといふは、糸を結びかさねたるが、蜷（みな）といふ貝に似たればいふ、とあるやんごとなき人仰られき、になといふはあやまりなり　○大和本草曰、河貝子、河螺ナリ、山谷溪水溝渠ノ内、或大木ノ傍ニ付テ有レ之、形長ク頭口大ニ末小ナリ。本草啓蒙曰、蝸蠃（ニナ）、長サ一寸許、一頭ハ尖リ一頭ハ漸ク濶ク、四分許ニ乄筆頭ノ形ノ如シ、殼ハ田螺ヨリ厚シ、薄黶アリ、全ク黒色ナリ、ソノ肉ハ小蝸牛（デヽムシ）ノ如シ、ニナハ殼黒色ニ、其尻全キモノ少シ

はちすばの後撰集異本はすなはのトアリ

ものあらかひ　【漢名】鬼蛳（農政全書）

【一名】物あらかひ　藻塩草曰、物あらがひヿはちすばのうへはつれなきうらにこそものあらがひはつくといふなれ。奥儀抄曰、はすなはゝかづらのやうにて、うみのおもてにうきておひたるもの之。それがうらに、ちいさきかいどものつきたる之　【形狀】○介品曰、藻ノアラ貝、水中ノ藻（モ）ニアル小貝也。形甚ダセ、貝ニ似テ、極メテ小ク青黑文アリ。本草啓蒙曰、綠桑蠃、モノアラガヒ、一種水中ニ生ズルモノハ、形相似テ長シ、六七分ニ至ル、殼色淡黄ナリ、又一種水中ニ生ズル者ハ、形稍濶シ、頭ニ大眉アリ、形漸ク大ニ、八九分ニ至ルモノヲナシガヒト云、皆モノアラガヒト云

フ。按ニ古歌ニ詠ズルモノアラ介ハ水中ニ產スルモノニ〆綠桑羸ニ非ズ

モノアラ介ノ圖



殼ウスク碎ケ易シ
淡茶色

太都比（タツヒ）　倭名類聚鈔　［漢名］　田螺　邵武府志　［今名］　タニシ　［一名］　太川不　本草類編

證類本草曰、田中螺、陶隱居云、生ニ水田中及濱岸側ニ形圓大如ニ梨橘ニ者、人亦煮食ㇾ之。按、蜀本圖經云、生ニ水田中ニ大如ニ桃李狀ニ類ニ蝸牛ニ而尖長、靑黃色曰、太川不、夏月採之。倭名鈔曰、田中螺、和名太都比

［形狀］　○本草啓蒙曰、田羸（タニシ）、水田池澤泥中ニ生ズ、形黃螺（バイ）ニ似テ短シ、一頭ハ濶サ一寸許、一頭ハ漸ク狹ク尖リ、長サ一寸餘、殼薄ク蒼黑色、肉ハ黑頭白身

かノ下まじはりけんと云ミアリ脫カ略カ

諸介類

打背貝 萬葉集

一名 **うつせ貝** 言塵集曰、うつせ貝。貝合の歌に、俊賴朝臣、西行上人など多詠之。又曰、打背貝ハ空背貝之。藻塩草曰、いほ崎、うつせ貝、伊勢海、うつせがひ、有磯海、うつせ貝、住吉浦、うつせ貝、古ぬ見濱、うつせ貝、伊勢浦、うつ勢貝、浦嶋、うつせ貝、須佐入江、うつせがひ

空背貝 見上

空貝 藻塩草曰、飽浦、紀州、忘貝、空貝。萬葉集卷第十一曰、住ノ吉之、濱爾緣ル云、打背貝、實無言以、余レ將戀八方。八雲御抄曰、うつせ見もなきや、いづれのうらのうつせにかまじはりけん云〻

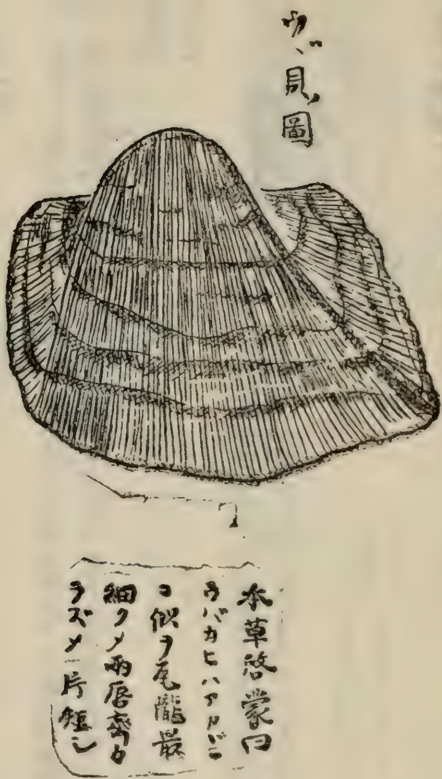
集註 俊賴髓腦抄曰、うつせ貝のむなしきことを我身によそへ。藻塩草曰、波のたつ三嶋の浦のうつせがひむなしきからに我やなりなんへうかりけるみのふのうらのうつ勢がひむなしき名のみ立はきゝきや。筑紫道記曰、此浦をとへば簑亭の浦といふ、ふるくもうつせ貝をよめれば。都のつと曰、又しほがまの浦にて、うつせ貝などやうのものをひろひあつめて侍しを、この人にとりいだしてみせ侍しかば云〻

形狀 藻塩草曰、身もなき也。いづれのうらのうつせにか、みるめにまじるうつせがひとも云り。奥儀抄曰、うつせ貝などいふも、みもなきかいと。仙覺萬葉集註釋卷第一曰、又うつせがひといふも、ひとへにむなしきかひといふとのみこゝろうべからず、うつくしき

かひとも心うべき也

うばかい　精進魚類物語

【集註】精進魚類物語曰、とし老たればばうばかいの女貝こそせいしけれ



見なし貝 藻塩草

今案 今身ナシ貝ト稱ル者ハ、古書ニ出ル見なし貝ニ非ズ。介品曰、身無貝、子安貝ニ似テ厚シ、但薄ナシ。浦錦曰、みなし介、螺類、上(うへ)長く下(しも)にてつまりたるやうな介なり。色あい色々あれども、地白く黄赤きかた有が多し

浦錦所出
みなし貝圖



すゝめ貝 藻塩草

一名 雀貝 言塵集

集註 山家集曰、波よする竹の泊りのすゞめ貝うれしきよにもあひにけるかな

今案 今雀介ト云者アリ。浦錦曰、雀介、石に取付あり、肉なきは砂中にあり、うす白きも文惣かき色にこきも一種かたち雀に似たり、多くある介なり。此介ハ海畿ニ附テ生ズ片介ニシテ指頭ノ如ク頭尖リ、殼外ニ堅ニ條アリテ凸凹也

雀介圖

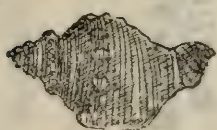


みやこ貝　藻塩草

集註　夫木集曰、ともすればこひしきかたの名におへる都貝をぞまづ拾ひぬる

今案　今ミヤコ介ト云モノアリ。浦錦曰、都介、螺類ほらに似たり、うすかきの地に、こく筋有、少いぼ〳〵有。此説今柳ノ糸ト云ル小螺也。其色こく條(スジ)ノ斑(フ)ナキモノヲ都介ト云、最其色栗殻色、又一種都介アリ、質美ニメ光澤アリ、白地褐斑形狀レンジヤク貝ニ似タリ

都貝圖



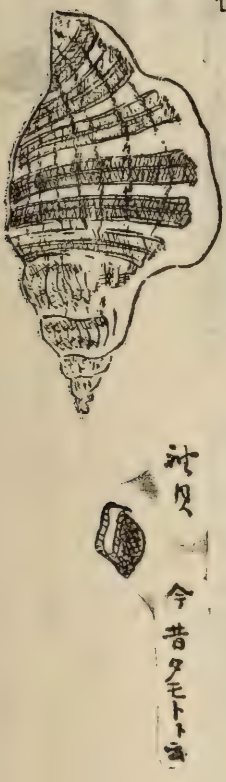
小蛸貝（スルメカイ）　塵添壒囊鈔　未詳

袖貝　藻塩草

【集註】山家集曰、波あらふ衣のうらの袖貝をみぎはに風のたゝみをく哉

【今案】浦錦曰、袖貝。螺類、小き介にて、地白くこいかきのあみのやうなるもやう有、そで貝ゝ即今ムカシタモトト云此也又一種、和歌にて云ものは別なり、螺にして口の方袖のごとく長く出しを云、此介今モ袖介ト云、紀州吹上濱ニ多シ、黄螺（バイ）ニ似テ、尾細ク流レ扁ク長ク横ニ出ル、淡茶色ニメ褐斑アリテ白斑ノヨコスジアリ、裏面白色也。又一種袖介アリ、琉球ノ産也

袖貝圖



明月記刊本風流、風

ふとくろ貝 藻塩草

一名 ふところ貝 言塵集曰、ふところ貝、おほふえ。藻塩草曰、ふとくろ貝。ふとくろは心得ず、ふところ蜆。ふところかひと云は、おほいかいの事也と云々。仍私に云、くとこと同事也。しからば只ふとくろもたかふべからさる也

集註 八雲御抄曰、貝梅花櫻わすれあまかたしふところいたやほら見なしいそしほ屋くうつせあはひすわういろこやす



蘇芳貝 錺抄

一名 すわうかひ 明月記曰、建永二年四月十六日、加茂祭、近衛使右少將實嗣朝臣、車以下催馬楽、風流之車、伊勢海、すわうかひ付、金銅相交 ますおの

流車トアリ。又伊勢海、金銅、相交、すわうかひ付トアリ

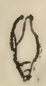
貝 藻塩草曰、ますおの貝、又ますおの小貝とも

[集註] 觴抄曰。心葉。平治或秘記云、心葉、梅枝ニ寸許之。金枝付ニ梅花貝ニ。今來以ニ續飯ニ爲レ藥。或銀枝付レ貝若蘇芳貝破

[形狀] 讃岐入道顯綱集曰、すわうの色なるかひのちいさきを、是なんわすれがひといふは、まことか、見知たりや、と人のみせたれば、これやさは人わすれがひおぼつかなえこそしらなみ磯にとはゞや

[今案] 浦錦曰、眞蘇枋介、螺類、大なる米粒のごとし、色あかし、蘇木にて染るやうなるがゆへ名付しと見えたり。すべて小介にて、大なるはなし。此說ハ紅梅ト云ル小螺也。大サ米粒ノ如ク紅色色ニ淺深アリ

すゞ貝圖



紅色

鬼かひ 精進魚類物語

[集註] 精進魚類物語曰、その名を聞もおそろしきは鬼かいの

鎧貝 精進魚類物語

【集註】精進魚類物語曰、おどしかけたる鎧貝、總角かけてぞやさしかりける

【形狀】○ヨロヒ介ハ蛤ノ形ニシテマルク、殼上横ニ高ク條理起リ、縱ニ細キ絲條アリテ、織リタル如シ。多クハ白色也。又緋斑ノ者アリ

ちくさの貝 藻塩草

【集註】夫木集曰、君が代のためしと見ゆる長濱に千くさの貝の數もつきせじ

【今案】古名ハ介ノ名ニ非ズ、今チクサト云ル介アリ、コシダカニ似テ細小四五分、殼紅色ノ細斑アリ、又斑色種々ニ變ズルモアリ

ちくさ貝圖



錦貝 言塵集

散木集曰、しりたる人のものをこせたる中に、はまぐり、にしきといふもの云々

【今案】今錦介ト云者ハナデシコ介ニ同シテヒレノ如キ者ナク、其色五色間色アリ、又磯錦アリ

錦介圖



深紅色

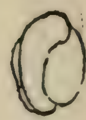
きすかひ　藻塩草

藻塩草曰、きすかくかひ、かひの名也。かくとは、すなごをかきのけて取を云也。よさの海のしほひのかたのすなごをかけば、きすかひありと云〻藏玉にあり

かたつ貝　海道記

集註　海道記曰、たのめつる人はなぎさのかたつ貝あはぬにつけて身をうらみつゝ

今案　浦錦曰、かたつ介、カタヅ介ハ形狀指頭ノ如ク雛卵（タマゴナリ）様ニシテ、殼薄ク白色碎ケヤスシ、流レ一方ニ濶ク出、一方ニ圓ク小ニシテ流レノ内ニアリ


カタツ介ノ圖

ほそかい 義經記

【集註】義經記曰、みは一尺二寸有けるてぼこの、ひるまきしろくしたるを、ほそがいをめぬきにしたるを持て參る

しほ貝

藻塩草曰、伊勢浦、しほ貝。言塵集曰、塩貝と詠は塩干也。又曰、しほがいとは塩貝と云

萬與和 倭名類聚鈔

倭名鈔曰、石炎螺。萬與和。楊氏說同

比良夫貝 古事記

【集註】古事記曰、猨田毘古ノ神坐ニス阿邪訶ニ時ニ爲レ漁而、於ニ比良夫貝ニ其手見レテ咋合ニ而沈ニ溺海鹽ニ

色貝 言塵集

【一名】いろ 八雲御抄 【集註】回國雜記曰、上總國千種の濱といへる所にて、色貝をひろひて。野路ゞく千くさの濱のうつせ貝海さへ秋の色に出けり。夫木集曰、汐みてば磯間になびく色貝のうきみしづみみ戀わたるかな

粒貝 參河國風土記

【集註】參河國風土記曰、寳飯郡貢海河之雜魚、粒貝等。駿河國風土記曰、烏渡郡如美島有鮮鱗粒貝之利。伊穂原郡美髮出長短粒貝

小貝

【集註】山家集曰、風たえて波をおさむる浦〳〵に小貝をむれてひろふえけり。なにはかたしほひにむれて出たゝむしらすのさきの小貝ひろいに

⿰馬芡子 出雲國風土記

[集註] 出雲國風土記曰、秋鹿郡凡北海所在雜物、甲蠃石華⿰馬芡子

われから 枕草紙

[集註] 狹衣曰、いでや今はきこえじ、藻にすむ虫なればとて思ひみだれたまへるけしき。八雲御抄曰、もにすむ虫われから也

大和本草ワレカラノ圖



[今案] 古書ニ載ルワレカラハ[illegible]別ニ充ルモノアリトモ

聞エズ、後人臆度ヲ以テ種〻ノ說ヲナセリ。大和本草曰、ワレカラ、藻ニツキテ殼ノ一片ナル小螺ナリ、分粒ワレカラノ意ナルベシ、フタナキ故ナリ。又曰、ワレカラ海中ノ藻ニスム小貝ナリ。色淡黑、大キサ三四分ニ不レ過、其殼カラワレヤスシ。ミゾカイ、ヰガイナドニ似テ小ナリ。此藻ハナゴヤト云淡靑色、カハケバ紫色ナリ。日ニ曝セバ白色可レ食、性不レ好。或曰、松菜ト云藻ニモ此貝アリ、松藻ハ長ク莖大也

附錄　海市　今名　キツネノモリ　南野堂筆記曰、世ニ傳フ登州ノ海市望レ之、爲ニ城郭ニ爲ニ舍宇ヲ爲ニ人物諸幻ヲ云、是レ蜃氣ノ所レ結。廣東名勝志曰、新安縣西北八十里大ニ步ニ海中ニ有ニ媚珠池、又八十里有ニ合蘭洲、與ニ龍穴洲ニ相比、穴凡兩、有レ龍出ニ沒ス其ノ間ニ、春晴レハ蜃氣結テ爲ニ樓臺城堞人物車馬往來之狀ヲ。秋燈叢話曰、余鄉海市惟登郡蓬萊閣爲レ最、每春夏之交、淸風徐ニ來リ水波不レ興、人輒見レ之。東坡守ニ登州、値ニ歲晚ニ以不ルヲレ見爲レ恨ト、禱ニ於神ニ乃チ見ル、誠未レ有レ之奇也。嘗聞父老云、市之現也、變態不レ一。或城垣隱起シ、雉堞崔嵬綿亘袤延儼然都會、或倏爲ニ市鎭之形ニ萬瓦鱗次千門洞啓摩肩擊轂諸紛〻トシテ如レ織、又或爲ニ大叢林ニ浮屠聳峙殿閣崢嶸トシテ莫不宏傑、嶢峨玲瓏トシテ耀レ目、又或峰巒矗立、夏木千章異卉珍禽宛トシテ如ニ圖畫ニ、若レ遠若レ近乍離乍合、或移時而更一境、或轉瞬而變、其狀靈幻萬物莫測所自順治初有ニ登鎭某ニ宴客閣上酬酢方酣突有ニ艨艟ニ無レ數遍列ニ旌旗ニ蔽レ海、而來舟中人皆戎裝荷レ戟、狀貌偉異、有レ類ニ天神ニ某驚爲ニ海寇至ニ卽撤席命軍士戒嚴正紛曉間忽人舟俱渺、惟見海色天光相與滉瀁而已

集註　吾妻鏡卷第四十一曰、建長三年三月十四日、去ヌル比、信濃國諏方社頭湖ニ大ナル嶋幷唐船等出現、片時之間如ニシ消ツ而失ヌ云云、此事無ニ先規ニ之由、社家驚申云云　○蜃　常陸國風土記

手蜃刊本採レ蜃ニ食レ之作ル

即蚌也

集註 常陸國風土記曰、那賀郡、平津驛家、西一二里有レ岡、名曰ニ大櫛一。上古有レ人、躰極長大、身居ニ丘壟之上一、手蜃。其所レ食貝、積聚成レ岡、時人取ニ大朽之義一今謂ニ大櫛之岡一

今案 常陸國那賀郡ハ海ニ遠キ地也。然レバ則風土記ニ手蜃ト云ハ、海蛤類ヲ指ニ非ズ。正字通曰、周禮地官掌レ蜃ヲ、共ニ壐ニ壙之蜃ヲ、註ニ未レ施レ槨前ニ施ニ蜃灰ヲ棺ト禦ニ溼ヲ也。左傳、宋文公卒、始厚葬用ニ蜃灰一。又周禮祭祀鬯人、掌ニ四方山川一用ニ蜃器一。謂ハ以ニ蜃灰一飾レ之ヲ令ムレ白カラ者、鄭ニ謂レ之ヲ叉灰ト、以レ文刺レ泥中一ヲ、搏收得蜃而名叉埪氏涅之以レ蜃謂、薄、粉レ之令ムレ白カラ也。皆蚌蛤屬。本草綱目、蚌、集解曰、其ノ殼可レ爲レ粉、湖沔人皆印成レ錠市レ之、謂ニ之ヲ蚌粉一、亦曰ニ蛤粉一、古人謂ニ之蜃灰一、以飾ニ墻壁一ヲ、闉ニ墓壙一。觀レ此則風土記ノ蜃ハ即淡水ノ蚌(ドブガヒ)也。正字通曰、如ニ蛤蜊螺螄之類一必蜃屬

古名錄介部卷第六十 終

古名錄介部卷第六十一目錄

龜蟹類

通計二十一種

古名錄介部卷第六十一

紀藩 源 伴存撰

龜蟹類

加米（カメ） 倭名類聚鈔

漢名 水龜 本草

今名 イシガメ

正字通曰、龜蛇首外骨內肉腸屬ニ于首一廣肩大腰息以レ耳。本草綱目曰、水龜、今人惟取ニ水中ノ常龜一入レ藥、故今總標ニ水龜一

一名 何梅 日本書紀曰、孝德天皇二年云云、難波海龜（ヒ）其北何梅。

萬葉集卷第十二

加女 新撰字鏡曰、䶊。加女○字典曰、鼅。廣韻、陟離切。集韻、珍離切並音知。玉篇、

曰、吾社湯龜（ワガコトカメ）

本作レ鼅、俗作レ蜘。又鼄、字詁曰、說文鼅鼄也。楊氏方言曰レ關而東、趙魏之郊謂ニ之鼅鼄一俗作レ蛛、即クモ也○釋日本紀曰、太占私記曰、問、是何ノ占ッ哉。答、是トッ之謂也。上古之時、未レ用ニ龜甲一ヲ。トトキハ以ニ鹿ノ肩骨一ヲ而用也。謂ニ之ヲフトマ尓一。龜兆傳曰、凡述ハ龜事ヲ一、云云取ニ天ノ香山白眞名鹿一ヲ、一說云、白眞男鹿 吾將（マサニ）仕奉ン、我カ之肩骨ノ肉ヲ拔々出、天成レトヲ以問レ之、問給ノ之時、已ニ致ニ大偽ヲ一、太詔戸（フトノリトノ）命進啓ク、又按ニ、持神ノ女住ニ天香山一ニ也。龜津比女ノ命、今稱ニ天津詔戸太詔戸ノ命一 白眞鹿ハ者、可レ知ニ上國ノ之事ヲ一、何ソ知ニ地下ノ之事一ヲ、吾ハ者能ク知ル上

國地下天神地祇ハ、況ヤ復タ人情ノ憤悒シヤ。但手足容貌不レ同ニ群神ト云云、吾八十骨甲乾ニ曝日ニ、以レ竿ヲ打ニ小斧天之千別ニ千別テ、甲ノ上甲ノ尻眞澄ノ鏡取作之、以ニ天刀ニ堀ニ町判ニ掃フ之穴躰似レ町。先師ノ説云、太占ヲ讀ニ太町ハ據ニ甲ノ穴躰ニ者也。大問云、此ノ卜ハ龜卜カ歟。先師ノ説云、此ノ時ノ卜ハ者、鹿卜也。龜卜ハ者、皇孫天降之時、太詔戸ノ命進テ而述ニ龜誓ニ之後出來者也。但シ異朝モ始ハ鹿卜ノ之由有ニ所見ニ者也。令義解曰、卜者灼龜也。兆者灼龜縱横之文也。凡灼龜占吉凶者、是卜部之執業。又曰、凡卜者必先墨ヲモテ書レ龜、然ノ後灼レ之、兆順食レ墨、是爲ニ卜食ト。又曰、灼レ龜曰レ卜、視レ地曰レ相。代始和抄曰、卜食トハ、占ヲスルニ龜ノ甲ヲ焼テ、其ヒヾキ目ニ墨ヲ付ルコトアリ。其墨響目ニニジミ入コト、龜ノ物ヲ食入ガゴトクナレバ卜食ト云也。萬葉集卷第十六曰、卜部座、龜毛莫燒曾云云。塵添壒囊抄曰、龜甲ノウラニハ、カメノコウヲアカヾチニテヤキテ、ソノヒワレタル文ニツキテ吉凶ヲシルト云云。奥儀抄曰、公家には龜甲の御卜といふ事あり。卜部の氏のものゝ、はわかのきにてかめのかふをやきてうらなふ之。證類本草曰、按、蜀本圖經云、江河湖水龜也、湖州江州交州者、皆骨白而厚色分明並堪レ卜〇海南日抄曰、古龜卜之法不レ傳、攷ニ諸經註疏ハ大抵以レ荊發レ火、灼ニ其內ニ而文見ニ于外ニ此本國語先以レ墨畫レ龜、求ニ其吉兆ハ既灼而視ニ其ノ色ト與レ氣、若龜從レ墨而大柝稱爲レ兆、廣從レ墨裂ニ其旁ハ小細ニ出ヲ稱爲ニ兆璺ニ本周禮疏如書言卜澗瀍是必圖瀍澗洛水之形于龜之腹板而龜之坼如墨所指則吉也周禮義疏據史記則首有ニ俯仰ニ足有ニ肣開ニ而兆亦因レ之以異ニ其形ニ有似ニ雨下ニ者爲レ雨、如ニ雨止ニ者爲レ霽、氣之蒙暗爲ニ蒙氣之絡ハ驛不屬爲レ驛、氣之相交者爲レ克本孔傳朱子曰、土兆大橫木兆直金兆從右邪上火兆從左邪上水兆曲此卽五行之兆象也。毎兆皆有繇詞如ニ易之爻詞ハ畧見ニ于左傳史記中ハ其書已不レ存矣。柳河東集曰、命于龜占命

也

祔ニ于先君ニ食トレ墨、註食者以墨書龜、然後灼之兆順食墨則爲吉也。正字通曰、兆同兆灼レ龜坼也。周禮、大卜、掌ニ三兆之法、一玉兆、二瓦兆、三原兆。註、灼レ龜而占之象也。玉兆璺璺如玉屬陽、瓦兆暴烈如瓦屬陰、原兆拆裂如原田陰陽雜也。又卜師掌開龜之四兆、一方兆二功兆三義兆四弓兆。註卜師佐大卜者開龜者開龜之下體去其外甲存其下甲中有橫直之文者 以卜也下甲中有直文者所以分左右陰陽也 橫有五文以分十二位者象五行也 去其上下不可以爲兆可開鑿而燋以爲兆者 上下各四也 故曰四兆 一說方者卜其行事之方功者卜其可成之功義者卜其當爲之事弓者取其張弛之象又吉也卜者以求吉爲主故以兆言吉〇釋日本紀曰、持神女見上註

龜神相通ズル事、日本書紀曰、備後國司獲ニ白雉ヲ龜石郡ニ。倭名鈔國郡部曰、備後國神石、加女志。萬葉集卷第十四、東歌曰、和伎毛古爾、安我古非思奈婆、曾和敝可毛、可米(神官本作未)爾於保世牟、已許呂思良受氏。圓珠菴雜記曰、龜カメ、神靈あるものなれば、かみといふ心か。めとみと通ず

【集註】日本書紀曰、垂仁天皇三十四年春三月乙丑朔丙寅、天皇於茲執レ矛祈之曰、必遇ニ其佳人ニ、道路見レ瑞、比レ至ニ于行宮ニ、大龜出ニ河中ニ、天皇擧レ矛刺レ龜、忽化ニ爲白石ト。延喜式卷第一曰、卜庭神祭二座。卜ニ御體ヲ、龜甲一枚。同卷第三曰、凡年中ニ所レ用龜甲ハ、惣テ五十枚ヲ爲セ限。紀伊國中男作物十七枚、阿波國中男作物十三枚、交易六枚、土佐國中男作物十枚、交易四枚。但齋內親王遷ニ入トキ野宮ニ用料龜甲十三枚、臨時ニ申ニ辨官ニ、仰ニ所ノ出國ニ、送ニ納此ノ宮ニ、每月充テヨレ之。同卷第五曰、齋宮。月料、龜甲一枚。六處堺川ノ供ニ奉御禊ヲ云云卜龜甲一枚、並主神司請受領祭レ之。野宮主神司所レ請月料。龜甲一枚云云、龜甲云云者神祇官所レ行。凡諸國送納調庸、云云龜甲十二枚、赤麞。同卷第二十三曰、民部下。交易雜物。阿波國、龜甲六枚。土佐國、龜甲四枚。同卷

賊イ本財　倉イ本會

第二十四曰、主計上。凡中男一人輸作物。鼈甲一枚。紀伊國、中男作物、鼈甲十七枚。阿波國、中男作物、鼈甲十三枚。土佐國、中男作物、鼈甲十枚。百練抄第十曰、後鳥羽院元曆一年七月廿日丙午、御躰御卜奏也。式日無ニ鼈甲一之間延引。文治三年六月廿三日壬辰、御卜奏也。式日依レ無ニ鼈甲一延引。古今著聞集卷第二曰、承平元年の夏の比、貞崇法師東寺の坊にて經を讀けるに、大なる龜いで來りて見へけり。同卷第十六曰、龜を一つもとめて、首を引出て三四寸ほどに切てけり……

【形狀】漢塩草曰、あやめをもわかぬとなり、あやめとは鍋ぬい物をはじめて、龜のこう、貝のからまで、紋なき物はすくなし

【附方】婦人之陰ノヌケ出タルヲ治　頓醫抄曰、龜頭灰ニ燒テ、水ニ和シテ付也　○白龜　續日本紀

【集註】續日本紀卷第一曰、文武天皇四年八月乙卯、長門國獻ニ白龜一。同卷第九曰、聖武天皇神龜三年春正月辛巳、大倭國獻ニ白龜一。同卷第十八曰、孝謙天皇天平勝寶四年春正月己卯朔、太宰府獻ニ白龜一。同卷第十九曰、天平勝寶五年十一月己亥、尾張國獻ニ白龜一。同卷第卅一曰、光仁天皇寶龜元年冬十月己丑朔、詔曰、今年八月五日、肥後國葦北郡人、日奉部廣主賣獻ニ白龜一。又同月十七日、同國益城郡人山稻主獻ニ白龜一。同卷第三十二曰、寶龜三年冬十月戊午、肥後國葦北郡人家部嶋吉、八代郡高分部福那理、各獻ニ白龜一。同卷第卅三曰、寶龜六年九月丙午、河內國進ニ白龜一。文德實錄卷第八曰、嘉祥三年秋七月庚辰、備前國獻ニ白龜一。八月丙辰、公卿抗レ表曰、伏見、美作國介從五位下藤原朝臣貞道等奏稱、所レ管英多郡大領外從八位上賊田祖繼呂、於ニ部下川倉郡英多河石上一獲ニ白龜一枚一、又備前國守從四位下藤原朝臣輔成等奏稱、所レ管磐梨郡少領外從八位上石生別公長

大夫、イ本大村ニ作ル
物ハ刊本者トアリ
火ノ下
今生
得ニ其
正ハ自ニ
金方ニ

眞、於二石下石生郷東神河一獲二白龜一枚一云云。九月壬午、是日、右京大夫言、於二攝津國豐島郡上一獲二白龜二一兩眼赤。同卷白龜一獻レ之。三代實錄卷第四十四曰、陽成天皇元慶七年八月十七日庚戌、但馬國獻二白龜一兩眼赤、同卷第四十九曰、光孝天皇仁和二年冬十月二日丁未、是日、大宰府獲二白龜一獻レ之。同卷第五十曰、仁和三年秋七月六日丁丑、是日、綾綺殿内之間、獲二白龜二一、放二神泉苑一。

祥瑞 續日本紀卷第九曰、元正天皇養老七年冬十月癸卯、左京人无位紀朝臣家獻二白龜一長一寸半、廣一寸、兩眼並赤。乙卯、詔曰、今年九月七日、得二左京人紀家所レ獻白龜一云云。同卷第十六曰、聖武天皇天平十八年、河内國古市、右京人尾張王、於二河内國古市郡古市郷深田池一獲二白龜一長一寸九分、闊八分、兩目並赤。同十八年三月己未、勅曰、右京人尾張王獲二白龜一頭一、長□□、闊□□、形像異常。日本後紀卷第九曰、稱德天皇神護景雲二年秋七月壬午、日向國獻二白龜一。九月辛巳勅、又同月十一日、得二肥後國葦北郡人刑部廣瀨女所レ獻白龜一、日向國宮埼郡人大伴人益所レ獻二白龜赤眼一云云、並付二所司一。同卷第十三曰、光仁天皇寶龜八年夏四月乙卯、近江國獻二白龜赤眼一云云。續日本後紀卷第十八曰、仁明天皇嘉祥元年六月庚子、太宰府獻二白龜一。六月庚寅、是日、上表言、伏見二太宰大貳從四位上紀朝臣表一、稱、豐後國大分郡擬少領伴公家主、於二同郡寒川石上一、獲二白龜一枚一云云、實惟盛德之所レ致、彩同二雪色一云云、瑞以之、金生而遊二於火一、候而入貢。未レ有下色將レ方叶、時与レ正符一。文德實錄卷第一曰、嘉祥三年六月丁巳、美作國獻二綠龜一、雪白可レ愛。三代實錄卷第二十九曰、清和天皇貞觀十八年秋七月廿六日辛丑、太宰府言、肥後國獲二白龜一一、長五寸、闊四寸五分。九月九日癸未、太宰府言、肥後國獲二白龜一一、於レ是公卿抗レ表慶賀、言、臣

而來、遊ㇾ餘、不ㇾ懋ㇾ時、在ニ火アリ

聞云云、伏見ルニ、參議太宰權帥從三位在原朝臣行平奏、管肥後國合志郡(カハシノ)擬大領日下部辰吉、於ニ所部正六位上奈我神社ノ河ノ邊一ニ、獲ニ白龜一ヲ、云云

○赤龜 日本書紀

廣東新語曰、有ニ紅白二龜一、在ニ文昌北石井中一、旱禱之、紅出則雨、白出則否、亦神靈也

集註 日本書紀卷第二十九曰、天武天皇白鳳十年九月辛丑、周芳國貢ニ赤龜一、乃放ニ嶋宮池一

○靈龜 日本書紀

形狀 日本書紀曰、天智天皇九年六月、邑中獲ㇾ龜、背書ニ申字一、上黃下玄、長六寸許。續日本紀卷第六曰、元明天皇靈龜元年八月丁丑、左京人大初位下高田首久比麻呂獻ニ靈龜一、長七寸、闊六寸、左ノ眼白、右眼赤、頸著ニ三台一、脊ニ負ニ七星一、前脚ハ並ニ有ニ離卦一、後脚ハ並ニ有ニ一爻一、腹下赤白兩點、相ニ次八字一。同卷第十曰、聖武天皇天平元年六月己卯、左京職ヨリ獻ニ龜長五寸三分、闊四寸五分一ナルヲ、其背ニ有レテ文云、天王貴平ニシテ知ニ百年一。八月癸亥、詔曰、京職ノ大夫從三位藤原朝臣麻呂等伊負ㇾ圖龜一頭ヲ獻止奏賜不云云、是以改ニ神龜六年一爲ニ天平元年一

伊之加米(イシガメ)　倭名類聚鈔

漢名 秦龜 本草

今名 ヤマガメ

證類本草曰、秦龜。陶隱居云、此即山中龜不ㇾ入ㇾ水者、形大小無ㇾ定。本經逢原曰、其色黃出ニ山中一者爲ニ秦龜一

一名 石加女 新撰字鏡曰、𪚨辟音、石加女。倭名鈔曰、秦龜。和名伊之加米

伊之加女 本草類編

以之加女 本草和名曰、秦龜。陶景注云、此山中龜不入水、和名以之加女

集註 本草類編曰、秦龜、和伊之加

瑞下諸隨事：退リニベ
群、、怪ト此從キ
以本各其施太ア方フカ

女、二月八月採之 形狀 〇本草啓蒙曰、秦龜。ヤマガメ、山谷或ハ野間中ニ生ジ、形大ニシテ黃色、臭氣アリ

毛生(おひ)たる龜 古今著聞集 漢名 綠毛龜 本草 今名 ミノガメ

廣東新語曰、毛龜出韶州、大如錢、以水養之、其毛披放色碧綠、置之几案可辟蠅。黃輿記曰、綠毛龜、大者十錢、小者五錢、最小者貴能辟飛塵、置壁間數年不死。山堂肆考曰、蘄州志、本州西河井產綠毛龜、大者重十錢、小者重五錢、甲上有綠毛茸生、出水則斂、入水則披拂如海苔然

一名 毛龜 通名。百練抄第七曰、近衛天皇久安四年閏六月四日、宇治大相國覽ニ毛龜於法皇一

集註 古中外抄曰、久安四年閏六月四日、仰鎭西毛龜明日一定可御覽歟、如此瑞一定相叶歟。中云、乱世有瑞、是天之教告也。聖代有怪、是天之示纖、右隨之事、施聖德之時、瑞必叶、怪而退云云

形狀 今著聞集卷第二十曰、久安の比、毛生(おひ)たる龜を西國の人知足院殿へ參らせたりけり、ながさ一寸にをよべり。瑞龜とぞさたありける。うぢ左府見させ給ひける時は、かぶりなをしにてぞおはしましける 〇本草啓蒙曰、綠毛龜、本邦ニモ三五寸許ノ大サナルハ池澤水中常龜ト俱ニ群遊ス、形ハ水龜ニ異ナラズ、只甲ニ黃斑アリテ、三寸許ノ長サノ細綠毛多ク生ジ、水中ヲ行ク寸ハ甲後ニ靡キテ尾ノ如シ

古加米(コガメ) 倭名類聚鈔 漢名 攝龜 本草

爾雅曰、攝龜。註小龜也。腹甲曲折解能自張閉ス。好ンテ食フレ蛇ヲ。江東呼テ爲ニ陵龜ト。證類本草曰、陶隱居云、又有ニ鴦龜ニ、小狹長尾、乃言療ニ蛇毒ニ、以ニ其食レ蛇故也。唐本注、鴦龜、腹折見レ蛇則呷而食之、荊楚之間謂之呷蛇龜也○倭名鈔曰、攝龜。和名古加米

正誤 本草啓蒙ニ、攝龜。延喜式ニハ、コノ品山城ヨリ貢スルコヲ載レタリ、ト云ハ杜撰也。延喜式中ニ、山城ヨリ攝龜ヲ貢スル事ヲ不レ載。延喜式卷第三十七ニ、諸國進ニ年料ニ雜藥、山城國鼈甲一枚トミエ、鼈甲ハ第三卷、第二十三卷、第二十四卷ニ載タリ。按ニリ攝龜ハ不貢也○又本草啓蒙ニ、攝龜コガメ和名抄ヘビクラヒガメ上同ト出ス。ヘビクラヒガメノ名和名抄ニ不レ出、倭名類聚鈔曰、攝龜。爾雅注曰、攝龜、一名陵龜和名古加米小龜也　天文写本亦相同

宇美加米（ウミカメ） 倭名類聚抄

漢名 蠵龜本草　**今名** ウミガメ

證類本草曰、陳藏器云、按蠵龜生ニ海水中ニ、南人多養用レ之、似レ龜生ニ海邊ニ、有ニ甲ニ文ニ、堪ニ爲ニ物飾ニ。本草綱目曰、蠵龜。臨海水土記云、其形如ニ龜鼈身ニ、其甲黄點有レ光、廣七八寸、長二三尺、彼人以亂ニ瑇瑁ニ。肉味如レ黿可レ食、卵大如ニ鴨卵ニ、正圓、生食美ナリ於鳥卵ニ

一名 宇美加女 本草類編○本草和名曰、鼂甲。和名宇美加女。證類本草曰、圖經曰、鼂甲。水中神龜也　早龜 本草類編曰、鼂甲。和字美加女、无時採之陰干。古事

集註 八幡愚童訓曰、海中ヨリ誰カ皇后ヘ參淆シアル、御船セントノ玉ヘバ、早龜ト云龜近寄云云。客園客所寄曰、客中間集龜千年ニシテ解ス人語ヲ

郭曰、其龜甲中丈釣。釋日本紀曰、本朝神仙傳云、浦嶋子者、丹後國水江浦人也、昔釣得大龜
云云。日本靈異記曰、禪師弘濟者百濟國人也云云、還到難波之津、時邊人賣大龜四口、禪師勸人買而
放之、即借人舟、將童子二人、共乘度海、日晩夜深、舟人起欲、到備前骨嶋之邊、時取童子等、擲入海
中、然後告禪師曰、速入海、師雖教化、賊猶不許、於茲發願而入海中、浦邊其龜負而去。疑
是放龜報恩乎。吾妻鏡卷四、元曆二年四月廿一日、梶原平三景時飛脚、自鎮西參着云云、就廷尉不義
事。其詞云云、次去々年、長門國合戰之時、大龜一出來、拾浮海上、後昇陸、仍海人推之、參河守
御前持參、以六人力纔持之程也。于時可放其甲之由、一同之處、先之有夢之告、參河守
殿加制禁、剥付緬テ被放遣畢。於龜平氏最後、件龜再浮出海上、漁船畢、以緬知之。十訓抄曰、
山陰中納言筑紫へ下給ける道に、繼母のころさんとしける龜を買て放ちけり。其後若君の二つばかりなる
を具し給へるを、繼母めのとに心合て、取はづしたるあやまちのやうにて海におとし入つ。中納言あさま
しと思程に、放ちつる龜、其ちごを甲にのせて、舟はたに寄たりければ、とりあげてげり。撰集抄卷第三曰、
過にし比、紀伊國ゆらのみさきをすぎ侍しに云云、只今此浦にて殊に大なる龜のつられて侍つるを殺さん
とし侍つるに、龜左右の眼より、紅の涙をながして、歎くかたちのみへ侍りつれば、あまりに悲くて、ゆるし
て本の所にはなたんとし侍つる、此つれの釣人、刀にて目をつきて侍つれば、くるめきまよゐつるが

形狀 ○本草啓蒙曰、蠵龜。ウミカメ、海中ニ産ス、大龜ナリ、小者二三尺、大者丈餘、四足ハ皆鰭ニシテ爪
アリ、前足ハ長ク、後足ハ短ク指ナシ、此物性酒ヲ嗜ム、舟人此ニ遇ヘバ酒ヲ飲マシム、甲ハ水龜ト

瑁箋注本ハ瑁ニ作ル
出一本生

同ク、六角ノ文十三アリ、甲ノ色黑シ、或ハ黃色ノ斑アリテ玳瑁ノ如ナルアリ、用テ玳瑁ノ僞物トス、然レ氏甲薄クメ黑多黃少シ、又白甲ニメ黃斑ナル者アリ、稀ナリ

○五色龜 釋日本紀

〔集註〕釋日本紀曰、丹後國風土記曰、長谷朝倉宮御宇天皇御世、嶼子獨リ乘ニ小船ニ汎ニ出海中ニ爲レ釣、經ニ三日三夜ヲ不レ得ニ一魚ヲ、乃得ニ五色ノ龜ヲ、心ニ思ニ奇異ト也、置ニ于船中ニ云云

○むしかめ 催馬樂 〔漢名〕龜筒 格古要論 〔今案〕催馬樂秘傳抄曰、むしかめのどうはさいをいるゝ筒之。虫のくひたるかたをほりたる也。格古要論曰、龜筒亦出ニ南蕃海中ニ、其色似ニ玳瑁ニ而無ニ斑紋ニ、此也、據レハ此ニ則むしかめは無斑ノ蠵龜是也、本草綱目ニ蠵龜、皮ヲ名ク龜筒ハ、其甲黃點有レ光、以亂ニ瑇瑁ニトヱリ 〔集註〕催馬樂曰、せんはんさんたの木ゆしのきのはんむしかめのとうさいかくのとう

玳瑁

〔一名〕加女 本草類編曰、瑇瑁、和加女 毒冒 倭名類聚鈔曰、瑇瑁。代昧二音、又毒冒。今按以爲ニ帶具ニ。曹憲曰、瑇瑁如レ龜出ニ大海ニ、者如ニ籧篨ニ、背上有レ鱗、鱗大如レ扇、有ニ文章ニ、將ニレ作ントレ器ト、則煮ニ其鱗ヲ如ニ桑皮ノ、任レ意用レ之。玉造曰、家ニハ裝ニ瑇瑁ヲ。廣東新語曰、玳瑁產ニ廉瓊州ニ、自脊分得ト四版以厚而黃多有物形者爲貴品。懷瑞賦云、其物也非黿非鼉非蝪非蠵鼊皮鷳喙六甲千葩紺采斑駮若雲若

鼊。桂海志曰、蠵背形似龜而澁、背甲十三片、黑白斑文相錯鱗差以成二一背一、其邊裙闌闕齧如二鋸齒一、無レ足而有二四鬣一、前ノ兩鬣長ノ狀チ如レ楫、後ノ兩鬣極メテ短、其上皆有二鱗甲一、以二四鬣一擢レ水而行、海人養ニ以二鹽水一ヲ、飼ニ以二小鱗一

集註 三代實錄卷第三十一曰、陽成天皇元慶元年六月廿五日、渤海國ノ使楊中遠自二出雲國一還ニ於本蕃一ニ、王啓幷ニ信物不レ受而還レス之ヲ。大使中遠欲下ス以二珍翫玳瑁ノ酒盃等一ヲ奉上モ獻二天子一、皆不レ受レ之。通事園池正春日朝臣宅成言ス。昔シ往二大唐一、多ク觀二珍寶一、未レ有二若レ此之奇恠一。日本記略曰、大同四年、聽下ス五位已上通ニ用スルコヲ白木笏上ヲ。其白玉玳瑁等ノ腰帶者、亦依二延曆十五年正月、十八年正月兩度ノ格一ニ、自餘禁制スルコ、一ニ如二常例一ノ

形狀 三代實錄卷第十七曰、淸和天皇貞觀十二年二月廿九日辛亥、佐渡ノ國獻二奇龜一ヲ、其ノ爲レ形也、鳥嘴赤甲黑質也〇本草啓蒙曰、玳瑁ノ形狀ハ、蠵龜ニ異ナラズ、只首鳥ニ似テ嘴アリ、ソノ甲十三片鱗次シテ、蠵龜ノ只一片ニメ、六角文アリテ、水龜ノ甲ノ如ナルニ異ナリ

於保賀米（オホガメ） 倭名類聚鈔 **漢名** 黿 本草 **一名** 江加女 新撰字鏡曰、黿。魚遠反、波良加、又江加女 波

錄異記曰、黿、其狀如鼈、腹下赤者爲黿、白者爲鼈。本草綱目曰、黿如鼈而大、背有二腽腪一、靑黃色大頭黃頸

良加 見上〇倭名鈔曰、黿畾、和名於保賀米

加波加米(カハガメ) 倭名類聚鈔 **漢名** 鼈 本草 **今名** スポン

本草綱目曰、鼈甲虫也。水居陸生、穹脊連レ脇、與レ龜同レ類、四緣ニ有ニ肉裙一

加和加女 本草類編 **河加女** 新撰字鏡曰、鼈鱉同、補滅蒲結二反、河加女〇物理小識曰、大腹ニ无レ雄、龜鱉類也 **一名** **加波加女** 本草和名曰、鼈甲、和名加波加女。倭名鈔曰、鼈、或作鱉、和名加波加米 **集注** 本草類編曰、鱉甲、和加和加女。不拘

吃採之。延喜式卷第三十一曰、宮內省。諸國例貢、御贄。大和、干鼈。同卷第三十七曰、典藥寮。臘月御藥、鼈甲四兩。諸國進年料雜藥。山城國、鼈甲一枚。攝津國、鼈甲四枚。職制律曰、凡造ニ御膳一誤犯ニ食禁一者、典膳徒二年、注謂造ニ御膳一者、皆依ニ食經一、々有ニ禁忌一、不レ得ニ輙造一、若乾脯不レ得レ入ニ黍米中一、莧菜不レ得レ和ニ鼈肉一之類、有レ所レ犯者、典膳徒三年 爾雅曰、鼈中以莧菜有爛浸地 大內家壁書曰、鷹餌鼈禁制事。傍ニ鷹餌一不レ可レ用ニ鼈龜幷蛇一也。既而ニ氷上山住ニ者、鷹飼之處、不レ寄ニ其隣一之族、忽ニ禮罰不レ可レ遁也。於ニ自今以後一、堅固可レ加ニ制止一也。鳥屋飼已下之時、以ニ禽獸斗一不ニ飼得一者、鷹不レ可ニ所持一也。若猶背ニ此禁制一、有下求ニ鼈龜一之族上者、至レ侍者、可レ被レ收ニ公恩給地一、無ニ所帶一者、則可レ被ニ追放一也。至ニ凡下之輩一者、隨ニ見出聞出一、即時於ニ其場一、或留ニ置其身一、或隨ニ事之躰一、可ニ討擲一之由所レ被ニ仰出一也。仍修書如レ件。長享元年九月日

藥製 福田方曰、鱉甲醋ニ煮テ、裙(シクリワ)ヲ去テ、炙反覆メ黃色ニ浬(モロク)ナルマデ炙テ、研シテ使へ。又醋ニ浸メ炙干ス 云々。數ケ度ヌリテ干テ末シ安キ之。頓医抄曰、鼈甲、手ノヒロサバカリニテ一

ツカラ〳〵トアブリテ、ウラヲヨク〳〵コソゲ、コニセヨ。又曰、齒中ユニテヒタシ、アラヒステ、〳〵スニヒタシテアブリカワカセ。又曰、蟹甲、上ノ綿ノゴトクナルモノヲコソゲステ、硼砂一兩、醋一升小杯ニスリトキテ、ヌリテハアブリ〳〵ミテンナルホドヌリホシテ、アブリカハカセ

〇白蟹 續日本紀 [illegible]曰、白蟹[illegible]、人[illegible]珍之、有[illegible]

寶 [illegible] 續日本紀卷第一曰、文武天皇元年九月丙申、近江國獻白[illegible]

蟹 本草 今名 カニ 訓名抄

加仁 倭名抄 蟹類

一名 加爾 本草和名曰、蟹、和名加仁、倭名抄曰、蟹[illegible]

爾雅翼曰、蟹八跪而二螯、八足折而容俯、故謂之蟹、[illegible]螯[illegible]向[illegible]、故謂之[illegible]、从[illegible]、[illegible]以[illegible]天文寄太和名抄、亦作[illegible]。古語拾遺曰、齋[illegible]之[illegible]、[illegible]、[illegible]、天[illegible]人命、[illegible]〻辨、捕蟹、仍掌鋪設、遂以爲職、號曰蟹守。今俗謂之掃守者、彼詞之轉也。萬葉集卷第十六曰、酒[illegible]名云云。同卷第七曰、荒磯超、浪[illegible]恐、然作蟹

迦邇 古事記曰、許能迦邇夜、伊豆久能迦邇、毛毛豆多布、都奴賀能迦邇、[illegible]、伊豆久邇伊多流云云。玉篇曰、蟹 螯 蟹[illegible]。字典曰、大戰韻、蟹二螯八足。晉書畢卓傳、左手持酒杯、右手持蟹螯

加無 倭名抄國郡部曰、山城國相樂郡蟹幡、加無波多〇籌海圖編倭國事略曰、蟹泥

集註 本草綱目、[illegible]。和加仁、

不拘時採之。日本靈異記曰、贖ニ蟹蝦命一放生現報蟹所レ助緣第十二、大概同上。蟹蝦緣故畧之。砂石集曰、アル澤ノ邊ニ大中小ノ三ノカニ有ケリ。蛇ヲハサミケルニ、蛇木ニノボル、ヤガテツヾキテ、大ナルト中ナルガ木ニハヒノボリテ、ハサマントスルニ、蛇口ヨリ白キ水ヲハキカク、蟹是ニシヾケテ、ハヒオリテ、力モナキテイナリ。小キ蟹、フキノ葉ヲハサミキリテ、ウチカヅキ木ニノボル。蛇又白キ水ヲハキカクレドモ、葉ニカヽリテ、カニヽハカカラズ。其時葉ヲウチステヽ、ハヒヨリテ、ヒシ〳〵トハサム。蛇タヘズメ、木ヨリオツ。二ノカニ力ライデキテ、サシアハセテ、ハサミ殺シツ。サテ大ナルカニ、蛇ヲ三ツニハサミキリテ、頭ノ方ヲバ我分ニシ、中ヲバ中ノカニノマヘニ置、尾ノ方ヲバ小蟹ノマヘニヲク、小カニアハヲカミテフシ〳〵トメウチジサリテクハズ。我コソ奉公シタト云心ニヤト見ヘケリ。其時大ガニ、我ガ分ノ頭ノ方ヲ小カニノ前ニヲキ、尾ノ方ヲ我分ニスル時、小ガニ食メケリ。又曰、或人ノ女ナサケ深ク慈悲アリテ、ヨロヅノ渚ノアハレミケルニ、ヤリ水ノ中ニ、小キ蟹ノ有ケルヲ、常ニヤシナヒケリ。年ヒサシク、食物ヲアタヘケルホドニ云々。爰ニ山ノ方ヨリ蟹大小イクラトイフ數モシラズハヒ來テ、此蛇ヲ皆ハサミ殺メ云々。古今著聞集卷第二十曰、夜半ばかりに至りて、百千のかにあつまりて、此蛇をさん〳〵にはさみ切て、かには見へず云々。駿河國風土記曰、鳥渡郡和泉。有ニ好井一其底二尺余、旱水不レ枯、洪水不レ增、常有ニ小蟹一數頭住ニ井底一取レ之不レ當レ手、其水味如ニ甘露一。安弁郡白沢、貢ニ蟹蝦等一。文祿四年御成記曰、五ノ御膳、蟹

【今案】延喜式卷第四曰、伊勢太神宮。修餝神宮調度。蟹目釘六隻、長各一寸、頭徑一分半。蟹目釘三百四十四隻、長一寸五分、頭徑一分半。餘畧之、凡テ頭ハ一分半也　類聚雜要抄曰、鉢口徑三寸八分、深二寸三分、銀廿

二兩、已上輪二口、鉄一口、間各二分、如ニ加ノ日呂久呂ニ加良久利天廻レ之、凡八所也。加ノ日ハ卽解日ノ畧也。類聚雜要抄曰、沺坏牙象菱日弘一寸六分、內手前ノ長三寸自角定

稻春蟹（イネツキガニ） 倭名類聚鈔

漢名 招潮 雨航雜錄

雨航雜錄曰、招潮殼白潮來出レ穴舉レ鰲ヲ迎レ之。本草綱目曰、似ニ蟛蜞ニ而生ニ海中ニ潮至出レ穴ヲ而望者望潮也。可レ食

今名 コメツキガニ

一名 いなつきかに 梁塵愚案抄。萬葉集卷第十四曰、伊禰都氣波、可加流安我手乎云云。倭名鈔曰、蟛蜞、海邊稻春蟹之類也

形狀

梁塵愚案抄曰、あし原田のいなつきかにのやをのれさへよめをえずとてや さゝげてはさげやさゝげかひなげをするや。海道記曰、貞應二年卯月八日、萱津を立て、鳴海の浦に來ぬ云々猶此干潟を行ば、小蟹どもをのが穴〱より出で遊きあそぶ。人馬のあしにあはてゝ、横にをどり平さまに走りて、我あな〱へ迯入をみれば、足の下にふまれて死べきは、外なる穴へ走りて命いき、外に恐なきは、足の下なる穴へ走來てふまれて死ぬ。憐べし、煩惱は家の犬のみにあらず、愛着は濱の蟹ふかき事を、是ヽ見てはかなくおもふ我々、かしこしやいなや、生死の家に着する心は、かにゝもまさりてはかなき物か○本草啓蒙曰、望潮ハタウチガニ、コメツキカニ、形小ニシテ、體厚ク、淺黑色ニシテ斑點アリ、常ニ潮ニ向フテ兩螯ヲ上下シテ、潮ヲ招キ、田ヲ擊チ、米ヲ春ノ態ナリ

葦原蟹（アシハラガニ） 倭名類聚鈔　【漢名】蟛蜞　【今名】水カニ

【一名】葦河爾 萬葉集　葦蟹 仙覺萬葉集註釋。倭名鈔曰、兼名苑云、蟛蜞。形似レ蟹而小也。揚氏漢語抄云、葦原蟹〇蟛蜞、未詳

【集註】萬葉集卷第十六曰、忍照八、難波乃小江爾、廬作リ、難麻理弖居ク、葦河爾乎、王召跡、何爲牟爾、吾乎召良米夜、足引乃、此片山乃、毛武爾禮乎、五百枝波伎垂、天光夜、日乃異爾干、佐比豆留夜、辛碓爾舂、庭立、碓子爾舂、忍照八、難波乃小江乃、始垂乎、辛久垂來弖、陶人乃、所作瓶乎、今日往、明日取持來、吾目良爾、塩漆給、時賞毛、時賞毛。右歌一首爲レ蟹述レ痛作之也。三代實錄卷第三十五曰、陽成天皇元慶三年春正月三日癸巳、僧正法印大和尚位眞雅卒云云。眞雅自二清和太上天皇初誕之時一、奉二常侍一、在二左右一、日夜侍奉。天皇長見二親近一、奏請停二山野之禁一、斷遊獵之事一、永禁二漁獵一、但聽レ得云云。葦原以爲レ鮮、奉二御膳一、諸節從レ之。齋長官相如、今漬盛、詣河所得蟹食汁漬備供、以封。因謂二河州之所得一也

【今案】仙覺萬葉集註釋曰、蘆蟹とは濱邊に人馬などのをとを聞て、はしりちる白きかに也。葦原蟹ハ葦ノ生ズル水底ニアリテ、陸ニ不出、形狀メクサリ蟹ニ似テ、小ニシテ其爪色白ク毛ナシ、此蟹ハ古蟹醢トナス。蟹ニシテ江中ニ化テ蟛越トナルコ、寄園寄所寄ニ載タリ

以之加仁（イシガニ） 倭名類聚鈔　【漢名】石蟹 本草綱目　【今名】ヤマガニ

本草綱目曰、生₂溪澗石穴中₁、小而殼堅、赤者石蟹也

一名 **伊之加爾** 天文写本和名鈔○倭名鈔曰、石蟹。兼名苑注云、石蟹。生₂海際石下₁、故以名ㇾ之。和名以之加仁

伊波加爾 倭名鈔國郡部曰、備中國哲多郡石蟹、伊波加爾

形狀 ○本草啓蒙曰、石蟹ハヤマガニ、山谷石間及ビ溪澗中ニ多シ、形チ蟛蜞ニ似テ甲赤色微黒蹝赤色小ナル者ハ寸ニ盈タズ、大ナル者ハ二寸許

加散女（ガザメ） 倭名類聚鈔

漢名 **蝤蛑** 本草

今名 **ガザメ**

證類本草曰、最大後足濶者爲₂蝤蛑₁、嶺南ノ人謂₂之撥棹子₁、以₂テ後脚形如ㇾ棹也。一名蝤蝥、潮退殼一退一長、其大者如ㇾ升、小者如₂盞楪₁、兩螯無ㇾ毛、所₂以ナリ異₁ナル於蟹₁、其力至彊能與ㇾ虎闘、往往虎不ㇾ能ㇾ勝ツ

一名 **加佐女** 本草和名曰、擁劍和名加佐女。新撰字鏡曰、蟚。加佐女○閩書曰、蠘。蟹譜亦曰₂横江₁。五雜組曰、又有₂一種₁、殼兩端鋭而螯長シテ不ㇾ螫俗ニ名曰₂蠘蟹₁。證類本草曰、闊殼而多黄者名蠘、生₂南海中₁、其螯最鋭ニシテ斷ツコト物ヲ如シ₂芟刈スルガ₁焉。本草綱目作ㇾ蠘、卽アヲバサミ也。大和本草曰、手ノ長サ三尺有ㇾ節、ハサミノ長四寸、北國ニアリ、シマガニト云、手甚大也。本草啓蒙曰、蠘（アヲハサミ）海中ノ産、ソノ甲闊カニシテ頂尖リ刺多シ、螯脚細クシテ長ク刺多シ、二種アリ、イバラガニト呼ブモノハ、形大ニシテ刺多ク、ソノ刺尖レリ、ヅワイト呼ブモノハ、形小ニシテ刺少ク、ソノ刺尖ラズシテ芃ノ如シ

加佐米 天文

写本和名鈔○倭名鈔曰、擁劒和名加散女。按擁劒ハテンボガニ也。證類本草曰、一螯大、一螯小者、名ニ擁劒。又名桀歩、常以大螯鬪小螯食レ物、一名執火、以ニ其螯赤故也

かざ　伊勢守貞陸記曰、

かざめ
かざ

集註

家中竹馬記曰、貝かさめなどは魚の子位に准と云々。延喜式卷第三十一日、宮內省。諸國例貢御贄、攝津擁劒。同卷第三十九日、內膳司、年料、攝津國擁劒云云。類聚雜要抄曰、仁和寺殿競馬行幸御膳、并御遊御酒肴事、次御酒肴二種、擁劒生鮑。三好義長亭御成記曰、こさしくゝいかさめ。朝倉亭御成記曰、御五ひばりがざめ。大草相傳聞書曰、かざみのせいがうづみのごとく、はさみあしを前に二ツたてゝ、其外のあしをもおりにたてゝ、其中にかい數にはひばたるべし。其上に身を高さ五寸ばかりにもり、其上にこうをかぶせべし。うづらの羽ぶしもり、しぎのつほいり、かざみのこうもり、ゑびの舟つみいかた、其外の手の物は、金銀にみかき用る也。その物のいろにて出す事わろし。ゑびかざみの料理の事、まづゆでゝ身をとり能酒とすたでを等分に合てひたしてもる也。台記別記曰、長承四年二月八日、大納言殿令任右大將給御裝束、次居次將汁物汁膾加鮒燒物擁劒云云。四條流庖丁書曰、カザメノ事、可レ盛カタチ、流々餘多有哉、雖レ然當流ノコハ各別也。是ニ龜足ナクメハ、假初ニモ御前ヘ不レ可レ參。甲ニ盛ベシ。若カザメノ甲ナクバ、土器ニ可レ盛也。當世折敷ニ取双テ參スル、不レ可レ然事也

形狀

○大和本草曰、カザメ長五六寸、甲ノ左右ニ各刺一ツアリ、前ノ兩足大ナリ、左右ニ小足各三、其後ニ水カキ各一アリ。本草啓蒙曰、蝤蛑ハガザミ、ソノ甲橫ニ濶ク、長サ五七寸、後ノ一足各末薄ク濶クメ飯鍫ノ如シ。甲ハ赤色黑ニメ白點アリ

海我爾（ウミガニ） 新撰字鏡 　漢名　蠘 閩書　今名　アヲバサミ

字鏡曰、螯。上字海我尓。字典曰、螯蟹螯　赤かに 精進魚類物語

古名錄介部卷第六十一　終

日本古典全集之內

古名錄 五

編纂者 正宗敦夫

東京市豐島區長崎東町三丁目一六一

發行者 合資會社 日本古典全集刊行會 代表社員 長嶋東一

東京市豐島區長崎東町三丁目一五八

印刷者 不二製版印刷所 高瀬淸吉

東京市豐島區長崎東町三丁目一六一

發行所 合資會社 日本古典全集刊行會 （振替東京七三〇三二）

昭和十年十二月廿日印刷
昭和十年十二月廿五日發行

【非賣品】